麗しの秋津洲　大和の国

若松秀俊

麗しの秋津洲（うるわしあきつしま）

大和の国

時空を超えて

若松秀俊

麗しの秋津洲

大和の国

時空を超えて

若松 秀俊

目次

まえがき 4
第一章王家の祠 4
序　章 4
石の祠 5
百済と大和 7
大和の王家 9
渡 来 11
血と権力 13
敗 北 15
再興の努力 17
新天地 20
唐の圧力 22
扶餘の血 24
血の執念 26
万葉集 30
節会相撲 32
みことのり 33
開眼供養 36
みちのく 38
蝦夷征伐 40
陰謀と叛乱 42
歌 垣 44
初 恋 45
天覧相撲 50
天皇の都 52
曲水の宴 53
父と子 56
皇位と血統 58
宗 教 60
後宮の愛 63
樟 葉 68
血の命脈 69
兄と弟 71
出　陣 72
神仏の加護 75
交野ケ原 77
終　章 78
第二章大海の都邑 79
序　章 79
血　筋 82
新世界 85
黎明期 87
陰　謀 90

王　族 93
松ヶ枝 96
敗　戦 97
変　貌 99
相　剋 102
暗　躍 104
正当化 109
想像の跡 112
治　世 115
政治体制 117
大　王 118
血の絡み 120
苦　悩 123
終　章 130
第三章 祀らた昔日 130
序　章 130
高麗川 131
ゆかりの地 133
諸々の遺跡 135
高麗の縁 137
麗しき血脈 138
朝鮮半島の曙 139
諸国の攻防 142
歴史の編纂 146
倭王の記録 147
隠された意図 149
国際環境 151
諸国の主張 152
渡来文化 155
神々への介入 156
神仏と王家 160
定着と同化 163
高句麗の史実 167
高麗の家系 169
薄れる血筋 171
渡来と楽人 174
渡来の足跡 175
昔日への思い 179
終　章 180
あとがき 181
参照文献 183

まえがき

かつてタイ王国を旅行したとき、河辺に築いた高床式の住居と舟を使った水上生活を見た。その後、幾度となく、アジアの国々の博物館でポリネシア居住民の半裸の下着姿とその特徴的な生活様式を見た。また、同時に本邦に今も見られる神代の伝説に通じる古い神社の姿を思わせるような建造物もたくさん眼にした。

これらは遙か遠い昔に稲作技術と共に南方から本邦に辿り着いた、日本の原型を作り上げた人々との共通の文化の記憶でもあろうか。その後も東南アジア各地でよく似た造りの建物に出会う機会があった。そして、それらを日本の古い習慣や住居に重ね合わせて、幾度となく遠い過去に想いを巡らせたことを覚えている。その中で、高床式の神社と生活の場を一緒に象ったような二千年前の住居を中国雲南省の博物館で見た。そこで見た彼らの服装や住居のたたずまいは記録や発掘物に見られる過去の遺産と現在の日本の姿に、どことなく通じるものがあった。そこからは、大陸北部や半島の人々が列島に渡り来るずっと以前に、南方各地から稲作や高床式住居とともに本邦各地に海を越えて人々が移住してきたことを連想できた。そして長期間にわたり、彼らが自らの生活圏を拡大しながら独自の社会を形成してきた様子とともに、北方民族とは明らかに異なる独自の文化と信仰に包まれた庶民の素朴な生活が広く分布していたことを推測できた。

時代がずっと下った列島での部族の分立時代までには、すでに何派にも分かれて半島を経て多くの人々が渡来し、先住民と人種的にも文化的にも数限りない混血・融合を繰り返していた。それ以後も、本邦に幾多の異なる民族が押し寄せてきた。そうした動きのうち、三世紀前後に朝鮮半島から組織的に起こった大規模な移住が大きくこの地の様相を変えた。その頃の移住者を一般に渡来人といっている。その後に起きた武力を備えた支配者の渡来は、まさに国家建設に直結する王朝設立への歴史的な歩みであり、特定の血縁関係にある一族が近隣を支配する形で行われた。そしてその支配が強固になると、出自の国からその国が分化して、独自性を主張するようになってきた。その過程が古代大和国家の形成期から充実期に到るまでである。

本書では、歴史上の人物だけでなく、今日まで受け継がれる渡来人達が果たした役割と影響を支配者の血脈の視点から描いてみた。その背景には、世界でも類を見ない、永きにわたる皇統をどのような形であれ、結果的には日本列島・朝鮮半島とその周辺の地域の人々が共同で支えてきたという認識があるからである。そして、皇室を一つのシンボルとして日本人とその歴史が無数の血と無数の智恵、無数の社会単位とその文化が混在しながらも見事に融合調和して、いま、我々の眼に触れているからである。そのような見地から、第一章ではそれ以前の日本列島はもとより大陸や朝鮮半島の人々の思いも意識して、史実に推測を交えながら時代の背景を、そして第二章では、日本の発展過程と古代天皇制の成立を象った権力闘争の流れと当時の和歌文学を添えた心の動きを、そして第三章では訊ね歩いた現存する遺跡をもとにした個人的体験を含めて、史実に沿った小説として描いてみた。

本文中、朝鮮半島の歴史に関する人名・地名に関しては、適当と思われ、良く使われる発音による記述を用いた。同一人物・同一地名が本邦での史実に関してより定着した部分では多くは日本語の発音で訓じた。時代表記については、元号を部分的に用いたが、概ね西暦で記述した。また、皇族の身分に関する記述では、原則として天皇の呼称がほぼ定着した天智期以後の御代について、天皇（帝）、女帝、皇后、皇太子、皇子、皇女の記述を用いた。しかしそれ以前の王族については対応する身分のそれぞれに（王）を用いて大王、女王、王妃、王子、王女のように記述した。

第一章王家の祠

百済は憧れの古国であった。人々は代を重ね拡がり融合し新しい文化を形成してきた。　そこには、海に架けた扶餘の血筋が絡んでいた。　そう想いながら飛鳥から奈良時代を見渡しての旅であった。

故国なるいにしえの郷を恋ひふるは　今に伝わる百済になごり

序　章

物語は今から千七百年を超えた昔に遡る。三世紀中頃、まだ、国やその境界の概念が極めて希薄で混沌とした頃、倭と呼ばれた朝鮮半島南部と北九州一帯での武力に優れた人々の間に鉄の利権を巡る絶えざる抗争があった。この動勢

が結果的に、半島南の伽耶地方から海を経て渡来した有力な扶餘王家の傍流に大和国家の建設の起点を与えることになった。大和の地に入った同族の長が大王家の祖先となり、本邦での多方面にわたる総合的な力を最初に発揮する基礎を築いた。軍事能力と統治能力に優れた彼等はまもなく、古墳時代の支配階級となった。

そこには、北方で遊牧生活を営む扶餘族の天孫降臨の強固な思想と統一的な王室維持のために、血脈の乱れを極力避ける伝統的風習が受け継がれていた。それは天孫としての王家一系の血脈の重視とその堅持法であった。王室直系に血筋が近いほど、天上界の支配者たる神々と地上界の支配者たる王位により近い。従って、血統の比較的上位な者が出現すれば、これを組み入れ、地上の支配権をずっと維持することを常に意識してきた。その結果として、連綿として受け継がれた王統の血筋が皇統を形成してきた。

その過程のなかで必ずしも十分にそれが維持できない事態が生じたときにも、王統を受け継いだ皇室自身が、またその周囲が血の濃度を一定範囲に保つ方法を選択・実行してきた。これこそが、長い歴史の中で、皇室が権力の枠外に置かれた時でも、所謂万世一系と云われる血筋による皇室を維持できた最大の理由であろう。このことによって、遠くは扶餘に遡る天孫の一系であるとの思想を基盤として、皇室に最も色濃く入った百済王家の血統が、政治権力とは別の次元の高い尊厳と文化の担い手とされてきたことと同義として受け入れられてきた。このことを取り上げるのは、古代日本の支配者の核となった皇室の成立に言及せずして、日本人のルーツはともかく、日本の国家形成を語れないのはもちろん、併せて誰もが深層に己の核心ルーツを知る願望を常に備えているからである。言い換えれば、文化人類学的または生物学的総体としてのルーツであれば、科学的にそれに接近可能であるが、周囲の大きな環境形成までも語ることはできないからである。

それゆえ、不十分でも内外に多くの《記録》が存在し、世界の現存のどの王家よりも古く遡れる、日本の家系の代表でもある皇室の祖を日本国民が何とか納得したいと思うのは当然の成り行きであり、感情の発露でもあるはずである。したがって、困難でもそれに少しでも接近可能であれば、その近辺や周囲にいた我々の祖先の生活の様子や役割についても、心安く誇りをもって思いを巡らすことができるのである。また、そのことは今日の皇室の存在がそれ自身のみならず、日本を創った人々と周辺諸国の人々の間に密接な人的交流と文化交流が行われたことを認める客観的証拠たり得るはずでもある。そして、そこに今日の日本形成の重要な根幹と文化の発展の礎を確信できるものである。

絶えざるこの地域の多面的交流の中で、古代の地域文化圏の境界が固まるとともに、いわゆる日本民族も周辺民族も今の姿に変化していった。これを事実として認識することが、とりもなおさず、地域の相互信頼を構築するための前提であり、それが現在から未来にわたって、真の国同士の友好の第一歩であると固く信じている。内容は概ね史実に沿っているが、過去の歴史資料を基に推測をを一部に交えながら、著者の紀行を踏まえて記述する。

石の祠

近江日野で小さな祠を偶然に見た一人の旅人がいた。もともと古代に興味を抱く、旅に足を染めた若き日の松原の姿があった。突如その影が立ちどまった。この物語の展開に関わることになる重要な動機に連なる景色であった。

彼の見たものは、鎮守の森に佇む質素な社殿の裏にある石造りの小さな祠であった。

地元の人々は、その昔、朝鮮半島から渡来した偉い人を祀っていると言う。見ると《鬼室集斯墓》と刻まれた、宝珠柱石の墓碑がある。伝承では百済の将軍鬼室福信の子の集斯を祀ったという。今もそれが続いている。晩年に自分の領地の蒲生郡小野に隠棲した。現在の日野町のこの丘陵地帯である。近くに朝鮮坊山が見える。ここから流れる蒲生川の傍の崖の小さな森の境内にあるのが鬼室神社である。

瓦葺きの社殿の背後に石造りの神殿らしきものがある。そばには樹齢四百年を越える杉が聳えている。毎月決まった日に、村人がお供え物を差し上げて大事に護っているとのことだ。

旅人の松原は、何故そのようなことが行われているのかを考えた。そして歩きながら、日本人の誰もが思い浮かべることができる遠く大和と百済の歴史に想いを馳せた。

百済は漢江流域に位置する馬韓の一小国から出発した。旅の途中の松原はそう記憶していた。その建国以来、十二代王位の継嗣が伝わっているが、実質的

には十三代近肖古王（餘句王、または速古王）を祖とする国であったと言われてきた。

東晋より鎮東将軍領楽浪太守の号による冊封を受けた。四世紀に晋書にそう記されている。

しかし、最近の研究によれば高句麗（コグリョ）の始祖が扶餘族の東明聖王(朱蒙)で現在の中国領の卒本に建国し、その長子解明がこれを嗣いだという。そして同じく朱蒙の子の温祚王が、やがて現在の遼東半島を版図とする勢力として百済(ペクチェ)を建国したという。この国は、三国時代に一時衰退したが、再興した。その間漢江流域、熊津(公州)、泗沘(扶餘)に本拠を移したという。温祚王の兄の沸流王もまた建国し、その後、半島を南下して、これと接する当時、倭と呼ばれていた地域の済物浦(仁川)に移り、さらに南下して、伽耶の地の御目支に一族とともに目支国として定着した。両国とも高句麗とともに古代の日本に多大の影響を与えた半島の国であった。しかし後者は大きな勢力になれず、金官伽耶として西暦五六二年に滅亡した。そして前者の百済は高句麗、新羅（シルラ）と共に朝鮮半島で栄え、互いに覇を競い破れ、やがて西暦六六〇年に滅んだという。

その頃、日本は斉明女王の治世から天智天皇の御代へ変わる時期であった。

故国の再興に努力したが遂に果たせず、六六四年には、王族をはじめ多数の民が日本に亡命、同化し一部が祀られたという。昔、学んだことを松原が思い出した。

これとは別に、時代がすこし下ってから祀られた人々もいる。このことは、先のことを手掛かりに知ることになった。そこで国内の百済ゆかりの地をつぶさに調べてみた。

ゆかりの地は他にも色々あった。いやそれどころか、半島に栄えた国々の影響は、本邦各地の地名や日本語のなかにも如実に窺うことができる。

例えば、日向国南郷(宮崎県)に百済の里がある。伝説の鵜萱草葺不合命を祀る鵜戸神宮がそこからそう遠くない位置にある。この祭神が、あの山幸彦として神話の世界に登場する火遠理命の子である。すなわち初代神武天皇の父といわれている神代の人である。

ここには、百済滅亡時に逃れてきたという禎嘉王子の墓がある。百済王朝の三十一代義慈王の子である。新羅の追撃にあって、彼ら王族が血を流した。この時に飛び散った返り血が付着したという血染石が残っている。近隣には韓国の風景に見まごう国見山や韓国岳がある。

毎年、年末には相逢祭（師走祭）で王子と妃、それに三人の子福智、華智、白智を祀る祭礼が行われるという。

「百済の王子さま。やすらかに」

「今も、わしらがこうしてお護りしていますだ」

祭祀のあとに《オホサラバ》という韓国語の別れの辞が述べられる。我々が現在、日本語と思って誰もが普通に使う言葉である。その祭礼がこの村の神門神社と木城町の比木神社で行われている。神門御神幸という。何日もかけて行う珍しい祭りである。

そうした中にあって、現在の枚方市中宮西之町にある百済王神社は、直接的に大和王朝と百済王朝とに縁があり、日本の文化に大きな影響を与えてきた。この社は、百済の義慈王の禅広王子を祖とする敬福が聖武天皇の許しを得て建立したことが知られている。この神社の境内にあるのが百済寺の跡で当時、一緒に造られたという。それからは、ずっと代々の祖先を祀るために使われていた。

「ここは、百済の人々が住んでいたところです」

と土地に住む人々がいう。昭和二十七年特別史跡に指定され、現在は枚方市の名所となっている。

禅広は六四三年に兄の豊璋王子とともに来日した王族であった。父の義慈王は百済の滅亡を怖れて、備えのために、二人の王子を友好国の大和に送りこんでいた。

しかし、実際のところは、人質同然であった。

六六〇年の百済滅亡後には、豊璋は斉明女王や中大兄王子の援助を受け、百済の復興活動を行った。しかし、六六三年に唐・新羅連合軍との戦いで白馬江の大敗となり、百済は完全に滅びた。その時、百済より多くの王族や貴族たちが日本へ亡命した。一族は集団で六六四年から難波に居住し、それから約三十年後の六九三年には、持統天皇から百済王の身分を賜り、摂津や河内を拠点とし

て、徐々に朝廷内で勢力を伸ばしていった。

そんなことが旅人の松原に少しずつわかってきた。そうなると今度は、この旅人は百済と大和の関係をもっと深く知りたいと、思うようになった。そこで、まず古代の日本列島への半島からの渡来人といわれている人々について考えてみた。

百済と大和

一

列島には先史時代から、大陸や朝鮮半島より何波にも分かれて人々が入ってきた。そのうち、歴史的には比較的新しい、古墳時代の初期から半島から移住した人々が総括的に《渡来人》と呼ばれている。古代の日本の固有の文化は、彼らが運んできた当時の先進文化に大きく変えられ、そして支えられていた。このことは、だれもが等しく認めるところである。

とくに紀元前後、朝鮮半島北方の住民には、遊牧を生業とする騎馬民族の扶餘族が多かった。だが、半島中南の住民は、もともと倭人系だった人々が多く含まれていた。また、中国大陸北部にいた漢人も楽浪郡・帯方郡を経て、朝鮮半島から折にふれて北方アジアや漢の文化を携えて、日本列島に入ってきた。

大陸では、北方騎馬民族のツングース系が主力となり、そのうちの扶餘族が一世紀ごろには鴨緑江近くまで南下して高句麗を建国し、さらにその傍流が百済を創設していた。もちろん新羅とも共通の祖をもつ親類関係にあり、彼等の王家の血を一系に保つような厳密な身分制度は、例えば後の時代に新羅では骨品制として確立されるものであった。

そこには、《国ゆずり》と《天孫降臨》の物語など扶餘族に共通に見られる文化的伝統があった。そんな歴史的背景が朝鮮半島と日本列島の周辺にあった。

そして、三世紀中葉過ぎには、その中にあって、小さくとも有力な部族が北九州を経て日本列島にやってきた。この時期の本邦の土着の家系の概略を象徴的に表したのが、部族の名称であったり、後世に与えられた天皇家という名称であった。

したがって、総体的な実在の所業に個々の年代別の実在性を論ずることなく、後世になって、支配者として天皇名を虚実混在させて、やや作為的に当てはめたのがこの時代の歴史である。

二

その夜は、寝床に入っても何故か松原は目が冴えて、なかなか眠りにつけなかった。宿の小さな部屋の古びた布団のなかで、仰向けになって、朝鮮半島と日本列島の地図に見まごう天井のシミをぼんやりと眺めていた。シミは偶然についたのであろうが、不思議にもその形が現在の両国の姿を映し出していた。

ふと、何か動く気配に脇を振り向くと、旅人の眼前に、金色の縁どりの裾の長い、赤い衣装をまとった高貴な出で立ちの一人の偉丈夫が現れた。

「あなたさまは？」

「わしはのう……」

ゆっくりと語り始めた。

「遠い昔、半島から海を渡って、この国に来た扶餘の血をひく者だ」

話を聞いているうちに、彼が優壽と呼ばれる、御目支（任那《ミンナ》）の依羅で生まれた百済の王族のひとりであることがわかった。

「もしや、このお方が……」

しかし、自らを御目支の王族の一人と呼んだだけで、大王とか天皇とはことさらに言わなかった。とはいえ、このひとが大和の最初の肇国王つまり《はつくにしらすやまとのきみ》であることが松原にはすぐにわかった。

「最初はごく普通の実力者の聡明な王であったようだ」

旅人の松原はそう思った。

「見るからに、謙虚で威厳に満ちた素晴らしいお方のようだ」

と心の中でつぶやいた。

かねてから、自分が敬愛する天皇家の祖先に抱いていた素朴な思いに一致していた。

「やはり、そうであったか」

もう一度、今度は声に出して夢現の松原はつぶやいた。

優壽は九州南部の狗奴国に渡って、ここを支配下に置いたという。若いとき

から、大きな志をもった百済王族の一人であった。温祚王系の嫡流にあたる百済の古爾王の牽制もあって、運よく九州南部を自らの勢力下におくことができた。しかし北部にあった国々はどうにも制圧できずにいた。そんな状況にあっても、自分の支配地域を少しずつ拡げていった。子の垂仁が跡を継ぐ頃には、瀬戸内海を経て淡路から河内に進撃する準備も整ってきた。

その凛々しい姿の偉丈夫は、自分の偉業を誇示することなく謙虚に見も知れぬ旅人にそう語ってくれた。

このひとが任那から入った、後世になって崇神天皇と呼ばれる王である。皇室の祖として崇められた、その名の示す通り実在の優れた王であった。

伝説に依れば、彼の曾祖は満州にあった扶餘国の解夫婁であった。この王の意志と血筋は高句麗の朱蒙を経て、百済国の温祚王と、その兄の目支国の沸流王に別れて受け継がれたとのことだ。そして時を経て後者の傍流が南下し、半島を東に廻って、さらにその一部は御目支の地に定着したという。

後に、崇神天皇と諡号すなわち、おくりなされた優壽は、『古事記』では、所知初国之御真木天皇、『常陸風土記』では初国所知美麻貴天皇で、どちらも《ハツクニシラス・ミマキノ・スメラミコト》と呼ばれている。その意味は任那城に住んでいたことを示す、後世の天皇の呼び名である。

任那は君主を表す《ニム・ラ》も意味し、ここが屯倉(官家)で領国であった。少なくとも、比較的大きな部族長の合議制から成る貴族会議の筆頭たる者が王であった。当時、王は世襲制であったが、この会議が王としての資質のみならず周囲の組織的な権力と権威に基づいて、その適格性を決めた。これにより、無用な同族間の争いを避けた。その会議で和をもって王位を譲り渡したのが同じ王族の一人の優壽であった。

「そして、……だから、わしが、いやわしの近親一族がこの地にやって来たのだ」

やや躊躇しながら、言葉を継いだ。

任那こそ、日本の皇室の出発点であり、国家建設の始まりであった。

すなわち、この地が朝鮮半島南部から当時の列島にに渡来した扶餘族王家の血を引く大王の祖先の故郷であり、これによって従来から言われていた任那日本府の後の命名とその実体および存在そのものの疑念の解消への説明が可能である。

御目支に本拠をおく沸流王傍流の子孫の優壽が九州南部から東部にかけて、次第に土着の他の部族を従えて、この地では最も有力な勢力となっていった。そして、やがて国東半島まで支配し、この地方の有力な王にまで成長していった。

もちろん、この地は大王家にとっては最初は移住の地であって、任那を依然として自分の本拠地、いや故郷とみなしていた。しかし、移住地で実力がついて、影響力が増すにつれて、その思いが少しずつ変質してきた。すなわち、自分の本拠をやがて九州北部を経て、大和の方面に移す気持が強くなってきた。次いで、その子の垂仁へと王位が受け継がれると勢力はさらに東方に及んでいった。

そしてこの地は、移住してきた者にとって、やがて最も愛すべき大地となった。

後世に大王、さらに天皇と呼ばれた優壽が千七百年を超える歳月を隔てて、自分にこの宿で出会い、座を正しながら真剣に尋ねる夢の中の旅人の松原に、ゆったりと向き会って、はっきりした口調で語った。

彼の話では、大和の王の直接の祖である沸流一族は半島の伽耶で比較的大きな勢力になることができた。しかし、依然として新羅の圧迫が絶えることなく、しかも百済の干渉もあって、他の三国のような大きな勢力にはどうしてもなれなかったとのことだ。

この周辺の鉄の生産に関する権益を巡っても、この地の部族はことごとく新羅と対立し、百済とも長らく争っていた。したがって、伽耶・御真の城(任那)の地で沸流の一族は力のバランスを取りながら、やむを得ずこの地に留まっていた。

こうした不安定な状況にある中で、傍流であったが、その後大和朝廷の祖となった沸流王族の優壽が活路を求め、意を決して海を渡ろうとしたのであった。

「大和へ渡りましょう。海の向こうに」

「しかし、どんな所かのう」

「美し国ときいております」

「米はとれるのか？」
「はい。雨が多く作物は豊かとのことです」
「ことに、南方の土地は温かく、暮らしやすいと聞き及んでいます」
「しかし、心配だ。何といってもここは最高だ。
ここよりよい所がほかにあろうはずはない」
「とにかく、海を渡りましょう」

三

ところが、来てみると心配をよそに、この地は、彼等の生活にはきわめて好都合であり、定着した南九州の宮崎あたりは気候も良く農業・漁業に適し、資源も比較的多く、暮らしに好都合であった。ほどなく、軍事的にも大きな力をもつようになった。しかし、垂仁の後は内紛もあって、この間隙に乗じて、力の衰えたこの百済沸流系に替わって、同じ扶餘族の血を引く、遠縁にある新羅系の景行が王位を要求し、強引に王位を嗣いだ。
「わしが王位を継ぐ」
いってみれば、百済の血統からみて血の濃度の薄い王位継承が結果的に行われた。そして、その後はこの系統にある成務、仲哀へとその王位が受け継がれた。こうしているなかでも、この渡来王家は代を経るにつれて、さらに、勢力を拡大してついには大和に入って、その地の豪族を従えて安住の地を得た。
これらが王の和名諡号から最初が依羅王朝そしてそれに続くタラシ王朝と後世になって、呼ばれることになった、本邦での最初の三輪王朝である。
しかし、この時代の王は、個々の実績の個人的な担い手というよりは、複数の首長と複数の史実が投影された歴史的総体と考えるのが妥当であろう。
その過程が、崇神から仲哀に至る後世に天皇と呼ばれた大王の〈家系〉に個々に投影され、今日の姿として我々の眼に触れることとなった。
ところで、半島の先進的文化の担い手による新しい文物を彼らの王家はいつも必要としていた。したがって、諸々の形で半島との交流を積極的に行っていたし、半島における過去の自分たちがもっていた権益をも絶えず強く主張していた。
「伽耶の一部は、もともと自分たちのものだ」
「そうですとも」
「我々が先祖から受け継いだものだ」

大和の王家

一

それから時代が下って四世紀の中頃、この先発部隊に倣って、任那を本拠とした、より本流に近い王家一族が地理的条件のよい北九州に入ろうとした。これについては、後に、拙著『夢路の倭の影』で語っている。
任那を大和の本家とすれば、先に渡来し、この地から大和に入っていた分家の崇神系統の依羅王朝や新羅系統にある景行天皇のタラシ王朝より、この王族の扶餘の血は濃いはずである。
沸流王の流れにある優台を父、召西奴を母とする百済の契王（本名が本牟太）は神の怒りに起因する凶年と厄病のため、和合制決議によりやむなく僅か二年で退位した。天の意に沿わぬ王であったからである。しかし、野心家であった彼は諦めずに、側近の王族の優福を伴って本邦九州北部に渡来した。これが後に応神天皇と呼ばれた大和大王である。彼の業績については、歴史と文化がこの個人に投影された姿として述べる必要があろう。
この大王がそのように扶餘の正当な出自であり、権力を掌握しても、後世には辻褄合わせのために、史実に少々手を加えざるを得なかったようだ。おそらく万世一系の血統の連続性を強調するために、敢えて神功皇后と新羅系の仲哀天皇との間の子として、百済系の応神天皇を説話上で誕生させたのであろう。すなわち、これによって表面上は新羅系色を消し、百済沸流系の王家がずっと以前から継続していたように装う目的で、後世になって、そのような説話を創造したのであろう。それゆえ、三韓征伐も大和の半島に対する優位性と血の正当性を主張するための後世の説話であろう。
そんな風に、松原は考えを巡らせた。
しかし、ともかくも王家の血統を新羅王系から百済王家の、より濃い扶餘の血を引く沸流王系に応神が取り戻した。これが河内王朝である。
「われらが、正当な大和王家を嗣ぐ血筋なのだ」

その経緯について述べてみよう。

退位した王家一族は、半島から対馬を経由し、まず現在の佐賀県唐津に着き、そこから大牟田に辿り着いた。ホムタ(本牟田)という名の王族の長がホムタ別(和気)として、最初は蕃主(外地の主)となり、東方へ向かって勢力基盤を固めていった。そしてやがて彼は武力で新羅系の大王を廃して、自ら大和で即位した。

その史実が神武東征として、神話に投影されたものであろう。

ところで、百済契王の《契》と《・》は元来同音といわれ、《・》が朝鮮半島を経て本邦でセツに音韻変化したとすれば、応神陵が摂津に在るのは単なる偶然とは思えない。そんなことをソウル大学名誉教授の安秀桔氏が示唆してくれた。

彼に纏わる、こんな国栖歌がある。

ほむたの日の御子大雀大雀佩かせる大刀もとつるぎ
するふゆ冬木の(如)すからが下木のさやさや

吉野の国栖人が、元日節会、踏歌節会、新嘗祭、大嘗祭などの節会に参賀して、贄を献じ、笛を奏して口鼓を打つ風俗歌が国栖歌とよばれる。応神天皇の時に起源があるという。日の御子は天孫の応神の子の仁徳天皇のことであろう。

二

新しく渡来した応神の家系は首長として、天孫の血の意識は強烈であった。しかし、その一方では、百済と倭とが混じった人々が住んでいた北九州の国々を支配する有力な国王ともいうべき勢力を力不足のために平定することができずにいた。そのころは、その地に土着していた豪族らも含めた勢力が依然として強かったからである。

したがって、そこには上陸することができず、敵の少ない瀬戸内海を攻め上がり、淡路島に到達した。つまり、歴史が投影されて創られた記紀神話に出てくるように、各地の先住民と戦闘を交えながら進軍した。

しかし、やがて、奈良時代に《難波の碕》とよばれ、万葉集では《八十島》と歌に詠まれた土地に達することができた。そして、さらに瀬戸内海の東端から、現在の応神天皇陵など古墳群のある羽曳野台地に達することができた。

ここまで来て、後発渡来の王家は大和地方の支配権を確立しようとした。が、先住の王家が自分たちと同族であっても、そうやすやすとこの地の支配権を譲るはずはなかった。そこで、応神は優勢になった武力を背景に、ここから山越えで強行に、風水地理に優れた大和盆地に入ろうとした。

このようにして、支配領域を拡大した河内の大王家が、先陣の王朝との激しい争いはあったものの、ついに大和に入ることができた。

結果的には、血筋の本家に近い新参者が、血の薄まった旧来者を征服・懐柔・吸収する形で大和に王朝を建てることに成功したのであった。

大和に大王・大伴・物部の勢力の跡が、河内に大王・大伴・物部・中臣・平群・葛城・巨勢・和珥・春日の勢力の跡が、いずれの場合も高さ八十㍍以下の台地に分布している。

このことは、先住の崇神の名で代表される王家が一族とともに大和に入り、これを新羅系の王朝が受け継いだことを、さらに、邪馬台国の女王ゆかりの支配を経て、任那の本家のより濃い扶餘の血筋を引く応神王家が有力な家臣とともに河内に入ったことを示している。そして、この応神王家が前王家に替わって、より強固な支配体制を確立した。

この地における二群の古墳の分布を眺めて、松原はそう推測し、やがて確信をもつようになった。

百済の嫡流の近肖古王が同族としての親愛を示す証として三七二年に、大和王(倭王)になったこの王家の応神に七枝刀を呈している。この刀は石上神宮に納められ現在国宝に指定されている。祝福と同時に、百済が大和の血より濃いことが両王家に示された。

応神の次に即位した仁徳の陵と伝えられる大山陵が和泉(堺市)に築かれた。この頃には、個々の大王の実在性や系図上の意図的な操作説はともかく、どうやら大王家の基盤が固まりつつあった。

しかし、大王は王の尊称に類するものであって、地位を意味するものではなかったし、後者の意味では、ずっと後に使われたものである。

三

この王家の血の系統がそのままずっと何代も続いた。しかし、武烈に子がな

く王位継承が不可能になると、沸流系応神嫡流の仁賢の女、手白髪皇女と百済温祚王系の男大迹王がいわゆる婿入りの形で結びついた。

「わしは、かの応神大王と同じ百済の血を引き、妃も応神大王の血を引く」

母が越前三国の出身である彼は、大伴氏らの支援もあって、王位を窺っていた。しかし、王位継承を主張するものは他にもいた。

「いやわしこそ。この地を統ろぐ血を受け継いでいる」

「そうではない。わしが最も濃い血筋にあたる…」

それゆえ、それから二十年の永き歳月を要して、やっと大和国内の強い反対勢力を抑えて、後にこの小説の舞台となる樟葉に有力者が現れた。これが王位に象徴される国体を継いだ男大迹王、後の継体大王であった。

ところで、百済の王族の昆支とこの男大迹王は温祚系の毘有王を祖父、蓋鹵王を父とする兄弟であった。したがって、昆支の子で斯麻と呼ばれた武寧王の叔父にあたるのが継体大王である。欽明大王はこの天皇と手白髪皇女の間の子であるから、百済の武寧王とは従兄弟にあたる。

雄略紀四七九年四月条には、昆支の子の東城王が大和から百済に帰って即位し、東城王の後には、五〇一年に弟の武寧王が即位したと記されている。五〇三年に武寧王が継体に隅田八幡鏡を贈って、彼の長寿を願ったのも、両者がこのような血縁関係にあったからである。五三一年、継体大王の没後は彼の先妻の子である安閑・宣化が後を継ぎ、さらに欽明がその跡を継いだ。とすれば、当時の両国の付き合いが理解できる。

そしてまた、ずっと先のことになるが、この武寧王の残す血脈が実は王統にとって、またこの物語のなかで大きな意味をもってくる主題になるものである。しかし、この時点では次の事実も含めて、旅人の松原にはまだ武寧王の存在の意味と重要性を知る由がなかった。

実際に、公州で発見された武寧王陵の棺は直径百三十センチメートル、重さ三・六トン、樹齢三百年以上、堅くて湿気に強い高野槇からなる。これは最高級の材料で、この木は高さ四十メートル以上、径百五十センチメートル以上になる。降水量六百～千二百ミリメートルというように、雨水の豊富な高野山周辺の日本特産種でスギ科常緑樹である。百済と大和の交流の親密さゆえに大和からもたらされたものである。

こうした歴史的背景から、大和と百済の二国の間は、いわば親戚同士の付き合いであった。そのような意味で百済は早くから大和と親交があった。それゆえ、すでに六世紀までには、互いに国としての協力関係にもあり、定期的に大和に送られた五経博士は大和の文化の発展にとって極めて重要であった。

それから後に、両国間には権益を巡って、何度か小さな争いがあった。しかし、長い間、概ね友好関係を保っていた。

高句麗王家とも共通の祖をもつ、近い親類関係にあった大和王家と百済王家は、おそらくそんな付き合いであったろう。ちょうど、ヨーロッパの王室間の血縁関係と交流を連想させるものである。

渡来

一

このような王家の渡来とは別に、五世紀頃まで、動乱による生活環境の変動の激しい朝鮮半島を避け、有力な技術小集団が渡来してきた。誰もが、安住の地が欲しかったからだ。

力が衰え、治安が行き届かない百済から逃亡した者が多く、『日本書紀』にもその記述がなされている。他には、四百年間も続いた楽浪郡の衰退と共に、外交事情に通じた漢人も渡来してきた。

「まこと、力を発揮したいものだ。ならば、海の彼方に」

この中で、有力な渡来人の王氏は名前からいって、半島を経由していたとしても、出自が元々は大陸の血であったろうと推測される。このころの渡来人は土着の豪族に支配されることなく、自由な立場で自らの能力を背景にして、朝廷に直接仕えた知識人であり、技術者であった。その主な氏族には、他に大和の漢氏、山背の秦氏、河内の文氏が挙げられる。

秦氏は葛野川流域を開発して養蚕や農耕に従事した。神祇信仰と結びついて、賀茂神社の加茂氏とともに在地勢力として発展した。

聖地の下賀茂神社から京都御所さらに神泉苑の広大な水脈を護った一族の鴨脚家が今も続いている。文氏は文筆・学問を専門とする家柄であった。西文氏がここを起点に北陸まで広がり、地名を今に残している。漢氏は朝廷の文筆・

財務・外交などに従事した。やがて手工業を主導し、兵器を備え相当な武力をもつ有力氏族となった。

ところで、六世紀前半になると、朝鮮半島は新羅の台頭によって百済・伽耶との勢力地図が大きく塗りかえられようとしていた。

「父祖の地伽耶が危ない。それに百済も……」

百済の聖王は高句麗の侵略によって半島西の扶餘への遷都を余儀なくされた。国防の苦境に立たされていた百済と半島南部を領する伽耶に大和の欽明王は軍勢と顧問を送り込んで支援していた。人口の多い大和のできる援助は、主として人の援助であった。この頃は史実からいっても、大和はすでに対外的に十分な影響力をもつに至っていた。この支援は百済の強い要請を受けての措置であったという。

外交上、《天皇》と云う尊称が使われるようになった。しかし、この頃は、いまだ政治的意味を表す後世の天皇ではなかったし、地位を意味するわけでもなかった。すなわち、大王の呼称と同様に最初は一種の称号であった。ここ半島東南部は良質の鉄の産地で、百済・伽耶・新羅・大和の権益が複雑に絡んでいた。鉄の権益は政治的にも軍事的にも極めて重要であった。鉄の支配が血筋と並んで朝鮮半島はもちろん大和の皇統維持に決定的な力であったからである。したがって、このような利害には、どの国もとうてい関心なしではいられなかった。

二

百済の聖王が日本では未だ元号の定まらなかった五三八年に、阿知使主と王仁を使節として大和の欽明大王のもとに遣わした。その贈り物として金銅釈迦像と経典千字文が伝えられた。

「我が国情を説明し、……よいな」

「ご心配なく。そのように」

一行は、現在の奈良県桜井市にあった御所の磯城島金刺宮に着いた。御仏の加護もあってか、途中の嵐に飲み込まれずにすんだ。

「よくぞ、来られた」

「これを」

「経典千字文にございます」

「御仏にございます」

欽明大王をはじめ陪席の大臣・大連などの顕官や群臣たちは、金色に輝く仏像の姿に接した。

初めてみる神々しい大韓神に思わず嘆息を漏らした。

「何という輝きと美しさ」

まばゆいばかりの光と優しさにみちた仏像であった。

残念ながら、その金銅釈迦像は現存しないが、金色に輝く百済伝来の仏像と同様のものと推測されるものが今日の韓国に現存している。その作風は後の飛鳥時代の造仏に影響を及ぼした。鞍作鳥の法隆寺釈迦三尊像はその代表例である。

これが大和への最初の仏教伝来であり、まとまった文字の伝来であろうか。だが、新しい宗教観を受容する下地は古来の神々を崇拝していたこの時代には、まだできていなかった。

しかし、これを契機に広く文字を学び、教典の意味を知り、やがて仏教が宮廷周辺の人々に徐々に浸透していった。

「我々には新しい教えが必要なのです」

比較的新しく渡来した百済王家に連なる蘇我氏は仏教を優遇した。蘇我稲目とそれに反対する古来の神道のみを敬う物部尾輿の政治的対立は深刻であった。

「この国には、美しい伝統があるのだ」

「何も、わざわざ、得体の知れないものを」

五七〇年の稲目没後に、尾輿の巻き返しに起こした仏教弾圧がそれを物語る。しかし結果的には、仏教擁護派が蘇我馬子の時代には物部守屋に勝利した。

「大韓神こそ」と呼んで

「この国の安寧を護る」と宣言した。

「百済の血を、そして我が血統も護る」

宗教上の争いと云うよりは、大王家を巻き込んだ新旧勢力の主導権争いであり、最終的に旧勢力が敗れ、滅亡し、やがて時代の中に埋没していった。

三

百済芸術は高句麗を源流とし、仏教と共に優雅で洗練された貴族的性格が強く、大和の人々の心を捉えた。日本には仏教芸術としての影響が大きく、百済伽藍という建築様式が飛鳥時代に各所に見られる。代表的なものが四天王寺である。伽藍の配置は中門、塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ典型的な百済時代の様式である。

聖王の父が武寧王である。公州に有名な武寧王の墳墓がある。すでに破壊された墳墓が聖王自身のものと伝えられる。

前者は一九七一年の水系遮断工事の時に、偶然発見されたという。王妃との合葬墓で宋山里古墳群の一隅にある。盗掘を免れた完璧なもので、史跡として現在は観光の名所になっている。後者は昭和八年に日本軍が破壊した。そのとき立ち会ったのが、日本の旧制高校の歴史教師であったということしか分からない。したがって、今では古墳が誰のものであったかそれを確実に知るすべはない。

百済がこの時期に、高句麗の圧迫にあって、都を再度移さねばならず、利害の一致するところが多い友好国の大和に救援を求めていた。一時は、新羅と連合して共同の敵の高句麗を押し返した。そして故地の漢江流域と漢城を奪回した。しかし、今度は新羅がここに侵攻してきて、半島西岸と大陸への交通路まで制圧した。さらに、任那の諸国の支配権を巡っては、新羅の真興王によって五六二年にそのすべてが奪われ、大和も自らの故地を完全に失った。

これより先に、聖王が新羅によって五五四年に討たれた。このとき王子の余昌が大和に知らせにやってきた。

「こうなったのは大和のせいだ」

軍隊派遣の遅れによるものだと、余昌は即位して威徳王になってからもずっと、そう考えていた。

「倭は信用できない」

そのころ、人口が多い大和が百済にできる最大の貢献は兵力援助であったはずだ。それゆえ、援助に冷淡であった大和との外交に、この王はしばらくの間は消極的であった。しかし、隋が高句麗に侵攻するに及んで、今度は大和朝廷との歴史的関係を強調して大和と国交を開いた、いや開かざるを得なかったのであった。

「大和と手を結ばなければ」

百済は、何としても援助が欲しかった。

大和朝廷は百済からの新文物の魅力から、外交的にも軍事的にも多面的に支援をすることになった。五経博士、易・暦・医博士、僧侶、採薬師、楽人が贈られた。これを条件に欽明王は百済に救援軍を送った。

血と権力

一

百済の八大姓に木羅氏がいた。遠く騎馬民族の扶餘の王家の朱蒙の直系のみが、すなわち天から降りた始祖伝説による万世一系の氏族が王位に就けると信じていた。

第一が高句麗であり、第二に百済であった。そして、遠い時代に伽耶から移住した大和の大王家であった。他にも新羅など、この一系の血統を主張する多くの氏族がいた。

高句麗から分かれた扶餘の血を引く百済の木羅氏の木満致が政争に敗れた。郎党を引き連れて大和に渡来した。朝鮮半島からのこの王族の移住者が本邦での満智で彼が蘇我氏の祖といわれる。一族が集団で伽耶を経て移住してきたのは、大和盆地西南部の高市郡に位置する蘇我の地である。現在の橿原市曾我町がその本貫といわれる。

蘇我氏は満智、韓子、そして高麗と続いた。蘇我稲目は高麗の子で短期間に力をつけた。彼らの名前が渡来を強く印象づける。稲目は財政担当の大臣の実力者であった。彼等一族はさらに朝鮮半島から訪れた渡来技術集団を味方とし、中央の財政の殆どを掌握し、一方で私物化して権力を握った。

「我が血脈は遠く遡れば、大王と等位にある」

力を蓄えた稲目の子の馬子が主張した。

もともと半島からきた王族の渡来人でも、大和に永く根づいた、出自が明確な大連の物部氏や大伴氏はこれに対して何も言えなかった。当時は、血統で身分のすべてを評価した。

蘇我は血統から言うと大王家とともに王家の血統に近い。とすれば大王に替わって、この国の王になる資格に手が届くことになる。これが短期間で権力を掌握した大きな要因でもある。しかし、大和の王の側近ではあったが、後発の側近であったこともあって姓は連ではなく臣であり、大きな実力を備える大臣の身分であった。

百済から伝来した仏教を巡っての旧守派の物部守屋との争いでは、崇峻王が蘇我氏についた。厩戸王子（聖徳太子）も十五歳頃に、この戦いに参戦し、苦戦の末に勝利した後、護世四世のための感謝から四天王寺を建てる決心をした。

蘇我馬子の女婿である太子にもやはり、百済の血縁が働いていた。その影響の中での太子の政治であった。

本来、大王、大臣、大連の間には役割の違いはあっても、そう大きな力の差異はなかった。しかも《大》は尊称に近いものであった。

意見の対立から崇峻王は大臣の馬子の手の者に暗殺された。すると後継王の擁立を巡って、争いが起こった。そこで、政界のバランスを考慮しながら、敏達王の王妃であった炊屋姫が即位することになった。これが王統最初の推古女王である。

蘇我氏は稲目、馬子、蝦夷の三代にわたって、その子女を大王家の後宮に入れて、自らの血縁関係を張りめぐらした。欽明王には堅塩媛と小姉君を嫁がせた。さらに、用明王には稲目の女の石寸名を、そして厩戸王子に馬子の女の刀自子郎女を嫁がせた。これらのことができたのも、扶餘の血の濃度によるものであろう。

その傍系にあった蘇我倉山田石川麻呂が後世の持統女帝の母方に連なることが知られている。すなわち、持統女帝の母で天智天皇の妃である遠智娘の父がこの石川麻呂である。

出身地は先に述べたとおり、曾我町である。ここには曾我川が流れて、曾我橋があり、そして彼らの氏神の宗我津彦神社がある。

二

それから、月日が流れ、大和は飛鳥時代に入った。厩戸王子らが物部守屋を斥け、推古女王の摂政となったのはこのころである。心に掛かっていた四天王寺の建立に着手した。冠位十二階の制度、十七条憲法を定め、仏教立国を目指した。彼の重んじた仏法僧三宝は百済仏教ではなく、より本流に近い高句麗仏教の流れであった。高句麗から僧恵慈を招いた。高句麗仏教の具布のために勝鬘経と法華経を自ら廷臣に講義した。

「御仏こそ、国の救いに」

大王家の血による影響もそのように働いた。

しかし、本来、同様に半島から影響を受けて成立した、神鏡、神剣、玉類という宗教的依憑も、このころは既に民族固有のものとして、定着し、神道のなかで神聖化されていた。

その中にあって、仏教に根ざす習慣が優勢になり、大和固有のしきたりに反することが目立つようになったことへの懸念を飛鳥豊浦宮の推古女王が感じ始めた。そこで、神道の神祇信仰の詔により、斑鳩宮で政務を執る厩戸王子の仏教一辺倒の政策に釘を刺した。

「我が国は、古来自然のなかで神々とともにあったのです」

このころは、古く南方から移住した人々がもたらした生活習慣や風習が、日本の風土を基礎としていた。そして、自然への畏敬の念が一層強固になり、半島から影響は受けてはいたが独自の強い信仰の伝統形成していた。

推古女王は【古】き良き伝統やしきたりをさらに【推】し進めようとした。

朝廷内でも微妙な権力争いの構図があった。ところで、太子と同時期に馬子が百済から僧恵聡を招いた。馬子の百済の血筋がそうさせた。ここにも、微妙な権力抗争が見られた。

六〇七年に法隆寺が建立された。敬虔な仏教徒の太子は和を以て国を治める理想を掲げていた。周囲からの進言を受け入れ、技術に優れた百済の方式を採用した。事実、百済の蓮花文瓦が法隆寺の丸瓦の祖型といわれる。

ところで、百済王宮正殿の前庭の石槽は蓮の花を栽培するための蓮花池と呼ばれた。宗教的儀式にも極めて、重要なものであった。

この年、厩戸王子は隋に小野妹子を遣わした。浄土により近い、西方の大帝国隋の煬帝を敬いながらも、毅然とした国家意識を表明した国書を送った。

「大和は、隋の属国ではない」

「国と国の付き合いなのだ」

太子の没後も、仏教立国の彼の遺志は形を変えて受け継がれた。

この時期から程なくして第一回遣唐使として派遣されていた犬上御田鍬が唐使の高表仁と留学僧の旻を伴い、六三二年に帰国した。犬上は遣隋使の経験をもっていた。それからしばらくして高向玄理と南淵請安も帰朝した。彼らは自分の眼で見てきた新生の唐の政治・文化・外交のすべてにわたって、中大兄王子らと親しく語らっている。

後に、大化改新に関わる人物であることはいうまでもない。

蘇我馬子により発願され、五九六年に完成をみた飛鳥寺建立には百済人の寺工と百済系東漢氏が携わっている。この寺は法興寺とも呼ばれ、やがて平城京に移されて元興寺となった。

大和で最初の官寺である百済大寺が現在の奈良県に立てられることになった。これについては『日本書紀』に次の様な記述がある。

《舒明十一年秋七月、百済川ノ側二、大宮ト大寺ヲ造立ス。書直県ヲ大匠二任ズ。同年十二月、百済川ノ側二、九重塔ヲ建ツ》

大匠とは今で言う建築技術長である。書直は、六世紀初頭に百済または伽耶から渡来したといわれる阿知使主の子孫と称する古代日本の豪族である。一族は奈良県高市郡明日香村檀前を本拠とし、六世紀には、書、坂上、民、長など多くの氏に分岐して、繁栄をみた扶餘の流れの渡来人である。

新羅の都であった慶州に五六九年に完成をみた皇龍寺の跡が残る。寺地は、東西約二八八㍍、南北約二八四㍍、約八万平方㍍の広さである。法隆寺の塔の二倍の高さに相当する約八十㍍の木製の塔は六四六年に百済の工匠である阿非知の指導のもとに建立された。

「大和にも、帝とともにある大韓神の大寺を」

「新羅に劣ない、……　いや、もっと立派な」

それ以前の六三九年の百済大寺建立が百済系の東漢氏によって行われた。百済の建築技術が、当時、半島では格段に秀でていたことによる。

ところで、奈良県桜井市で巨大な吉備池廃寺跡が発掘された。発掘されたのは金堂と塔の跡で、塔の高さは九十㍍に及ぶと推定され、面積は法隆寺五重塔の約四倍になる。これが百済大寺の九重塔に当たるのであろう。基壇跡から西に百済川が流れる。付近で発掘された回廊の規模は、同様の伽藍配置をもつ法隆寺の約二・三倍である。そして、出土瓦の年代が百済大寺の建立時期と一致する。

いずれにせよ百済と新羅の影響を大きく受けて、寺が建立されたことは間違いない。

敗北

一

それから約二十年後のこと。百済は、今度は新羅のために王国滅亡の危機に陥った。国には天変地異が相次いだ。厚い黒雲が天を覆い風雨が荒れ狂い、王城の周囲には蛙と蛇が何万と現れたという。

扶餘の地の扶蘇山に百済の兵が登った。彼らは追い詰められた。疲労のために動きが自由にならない。ここから眼下には錦江が広がっている。水陸交通の要所の白馬江である。途中、忠義を尽くした二人の文臣の成忠と興首、それに将軍階伯を祀る三忠祠がある。

愛国の武将の階伯は妻子を斬り捨て、覚悟をきめて出陣したという。五千人の軍隊を率いて、最後まで抵抗した。黄山平野で新羅の金庾信将軍と唐の蘇定方将軍の率いる連合軍と戦い、壮絶な最後を遂げた。

百済の都がすでに四七五年に熊津(公州)に移され、そしてまた、五三八年に泗沘（扶餘）に再び都が移されていた。ここは、それ以来の都であり、百済の最後の王都になった。西に錦江、東に錦城山というように穏やかで優しい山河があり、北に松の林が茂る扶蘇山がある。そこにたたずむ山城が遠く霞んで見える。

この辺りは今では、遊歩道になっている。ここを登ると迎日楼が見えてくる。

天孫降臨の思想をもつ扶餘族の百済王はここで日の出を必ず拝んだ。山頂には泗沘楼がある。ここは扶餘を見渡す高台である。ここからの眺めは素晴らしい。扶餘八景と呼ばれる。白馬江、落花岩、百済塔が見渡せる。泗沘楼から下ると百花亭に到り、皐蘭寺本堂の岩場に出る。その裏手には皐蘭という薬草が自生しており、不老長寿の清水が湧きだしている。王は毎日、官女の汲むこの水を飲んだという。

新羅と唐の軍勢が城に迫る。どよめき声が聞こえる。

官女が、衣装の裾の乱れを気にしながら

「あれ！　どうしたら、いいの！」

と右往左往する。

王宮の秘苑から、戦火の恐怖を逃れて、ここ岩の上に逃れてきた。戦いの様子が見える。

「もう、だめだわ！」

「これまでよ」

現在、落花岩と呼ばれる場所に息を切らしてやっと登った。官女がこの世に別れを告げる。

「ここで辱められるより」

「自分の手で」

「そう、極楽へ」

仏教信仰のあつい、百済の貴婦人たちであった。

「でも、怖いわ」

「一緒に！」

眼下には岩塊とその側の河水がみえる。河の岸辺の軍勢がもみ合う。水が血に染まる。その近くの岩場が彼女達の命を捧げる場所である。

「浄土へ！」

合掌して、足を岩から離した。

「南無阿弥陀仏！」

宮廷の華麗な花が岩を伝い河岸に風とともに舞う。まさに、落花そのものであった。義慈王とその周囲に侍した多くの宮女を祀る皐蘭寺本堂裏の壁には、この扶餘の地での百済の盛衰を後世になって描いた壁画が見られる。なぜか、哀れを誘う壁画の雰囲気である。

五層石塔である百済塔のある定林寺の址が、かつての王宮内に見られる。石仏塔の原形で国宝に指定されている。これと形のよく似た石塔をかつて近江で見たのが、旅の途中の松原の記憶に鮮明に蘇った。

百済から渡来した人々が活躍した蒲生町の石塔寺で見たあの三層石塔である。

定林寺は中門、塔、金堂、講堂が一直線に並ぶ伽藍の配置が典型的な百済時代の様式である。

唐軍の館には『大唐』と銘打った瓦を載せて自らの占領を誇った。そして唐への帰国を急ぐ戦勝指揮官の蘇定方が六六〇年、帰国間際に急遽、間に合わせ程度に、この重要な百済塔に《大唐平百済碑》として、自らの功績の彫り込みを入れた。

百済にとっては屈辱的な銘であり、つらい想い出である。しかしながら、その塔に夕日がかかる姿は、百済塔残照といわれ、扶餘八景に数えられている美しい佇まいである。

二

そのころ扶蘇山の麓では、負け戦の将軍が配下に指示を与えていた。

「国王が捕らえられたという」

「残念だが、再起を期して引く必要がある」

「大和へ行くのだ」

「百済の再興のために」

「我らには、聡明な王子がいる」

「大和に二人の王子がいる」

「はい、そのとおりです」
「大和の将軍はすでに承知だ」
「国王がそう託していた」
「何人いる？大和に行く者は」
「千人ほどです。閣下」
「以前にも三千人が大和に渡ったが」
「河口の群山に船が集結しております。ここからは急げば五日で行けるはずです」
部下が、港に将軍を急かせた。
人と荷物を満載した船が対馬を経て北九州に着いた。
「ここが大和か？」
将軍が尋ねた。案内の倭人が答えた。
「いえ、ここはまだ大和ではありません」
「ここから内海を通り、都に入ります」
飛鳥の都に着いた。
斉明女王に拝謁した。もはや、彼等には自分の国はなく、王族としての身分を失った亡命の家臣の身であった。故国のことは、女王から訊くのが憚れた。
「遠路、お疲れのことでしょう」
老いた女王がただ、ねぎらいの言葉をかけた。
「後は王子に」と、ことばを継いだ。
連合して敗れた大和の指導者も同じであった。が、国を失った王子達とその側近の心中を察するにあまりあった。

再興の努力

一

百済の義慈王は、日嗣王子扶餘隆の救出のために、六六〇年に敢えて錦江の中流の扶餘邑付近にある白馬江の伎伐浦で戦った。しかし、ここで敗れ、さらに王城である泗沘城でも敗れ、ついに捕えられて、唐の長安に護送された。王が捕虜になった百済は事実上滅んだ。王族・大臣合わせて約九十名、農民一万二千余名が唐に連行された。このとき、百済の二人の王子である豊璋と禅広は大和にいた。
百済の王都の泗沘(扶餘)が陥落したことが大和に急ぎ伝えられた。
「泗沘城はいかに？」
王子は使いの者に会った。
「王子様、無念にございます」
ひざまずき泣きながら、二人の王子に報告した。
「父上、兄上、さぞ、ご無念でありましたでしょう」
この大和の地に王家の血が残ってはいても、すでに太子の扶餘隆もまた唐に捉えられ、百済の再興は絶望的であった。しかし、王子の豊璋が後継者として大和で反攻を模索する決心をした。
「何としても。祖国を」
百済の復興を願う旧臣の鬼室福信は豊璋の帰国を大和朝廷に奏上した。
「どうか、豊璋さまのご即位にお力を添えてください」
「百済再興には、外国が国王と認める必要がありましょう」
即位した王はやがて日本からの随行者とともに朝鮮半島に戻った。このとき中大兄王子は豊璋に大織冠を与え百済王に冊封した。時に六六二年であった。大和から官位を授かり、百済国王と認められたことは、血の優位にある百済からみて屈辱と感じる者もあった。
「祖国復興のために」
形式的には大和が上位にあることになった。が、それでも血はやはり百済が優位であった。
これがきっかけで、半島の戦争に大和朝廷が直接的に介入することになった。

「難しい事態になった」
眼を閉じて、中大兄王子は呟いた。
このころ、王族の福信や僧道〻らも大和の支援をうけて、高句麗とともに戦うことになった。他に耽羅(済州島)も友邦であった。大和からも斉明女王が自ら指揮を執り、半島に向けて出兵した。しかし、老いた女王は気苦労からか、筑紫朝倉宮で急に崩御した。亡くなった母の女王の喪に服す間もなく、中大兄王子は百済援軍の指揮を執り続けた。
しばらくして百済と同盟関係にあった大和水軍は六六三年に百済復興軍とともに四百隻の船で唐と新羅の連合軍と百済の西海岸の近くで戦うことになった。しかし、館を積んだような楼船と呼ばれる軍艦をもつ唐の水軍の圧倒的な力に、大和軍は上陸できずに多くの兵を失った。
「何としても、上陸するのだ」
大和の水軍は必死に上陸を試みた。
「上げるな。突き落とせ。倭の奴らを皆殺しにせよ」
海水は大和の兵の血に染まった。唐は全力を水軍に投入した。しかし、それでもやっと大和の水軍は上陸して、白馬江に向かった。そして河幅の広い、砂地の河洲が拡がる地で唐・新羅との激戦を迎えることになった。

二

一時は勢いも盛んで新羅の周留城を奪い、国を再建できたかに見えた。が、戦いを巡って福信と僧道〻と間に争いが起こった。
「わしが、指揮を執ったればこそ、ここまできたのだ」
「いや、わしが人脈を使って、大和の援助を得たからだ」
凄まじい、主導権争いであった。道〻が福信の策に落ちた。
この経過を見て、豊璋が福信のやり方に不安を覚えた。その不安から、道〻を追放した福信と国王豊璋との間に感情的確執が生まれた。そして、少しずつそれが拡っていった。
「福信は、信用できない」
側近にもらした。
「そうでしょうか。陛下」
「ご心配には及ばないと思いますが」
しかし、王は自分の身の安全をことさら案じた。
《その前に、やらねば》の思いが、脳裏を離れなくなった。
やがて、それを察した側近が
「では、私にお任せを」
と豊璋王の眼を見ながら、静かに答えた。
そして、わずかの手勢をもって、福信の暗殺が実行された。
「国王がどうして私を」
福信が悲痛な声をあげ叫んだ。
「自分の胸に覚えがあろう。すべては、国王のご下命である」
国王の腹心が答えた。ここに至って兵の士気は大いに下がった。すぐに負け戦に転じた。
「援軍を送るのだ」
大和朝廷は、筑紫で待機していた将軍らに防人の出兵を命じた。征新羅将軍として出兵したのが安倍比羅夫であった。援軍の将軍としては舒明王の頃から百済と縁の深い将軍であった。大化改新以来、大和朝廷で実権をもった中大兄王子は孝徳、斉明の二代にわたって、政務を執っていた。もちろん軍事も統括していた。
「どうか王子様、ご即位を」
側近がそう勧めた。しかし、頑として即位することなく、その後も称制として政務に携わり、戦後しばらくして、やっと六六八年に即位し、名実ともに天智天皇の御代になった経緯がある。
兵は百済王家の内紛を知っていた。彼らの心は王からすでに離れていた。このために、また力が衰えていたこともあって、唐・新羅の連合軍にことごとく

敗れた経緯がある。
こともあろうに、百済の元太子扶餘隆が唐の命を受けて、水師都護として大和軍と闘った。
「何の為に？」
「どうしてなのか」
「兄上と戦うとは！」
豊璋王の近衛軍も戦いに敢えなく敗れた。王は高句麗に逃れ、ここに百済は完全に消滅した。大和軍も白馬江での激戦に敗れ、無惨な姿をさらした。こうして、百済はもちろんのこと、大和も半島への足がかりを失った。しかし、この戦いは結果として、大和の誰を盟主と仰ぎ、団結すべきかを部族連合国家としての形にとどまっていた本邦の人々に印象づけることになった。
「大和は我が大王が治める国だ」
「この国をすめろぐのは大王だ」
「そう、我らの統ら御言葉だ」
それまでは、部族ごとに、ものを考えたのが、初めて国を意識したのであった。
もともと神々の言葉である『みこと』を伝える者たちを統べると云う意味がこのころは、特定の人を意味するようになった。

三

生き残った者は大和の国に逃亡する他に方法がなかった。このとき、集斯も王族や将軍とともに同行を決意した。彼を、心から慕う人が、われ先にと争って乗船を志願した。
「ご一緒させてください」
殺された将軍の福信は息子の集斯ら遺族と家臣によって丁寧に葬られた。福信は後の世に、現在の韓国忠清南道の扶餘郡恩山面にある恩山別神堂に祀られた。
諦めながらも何とか再起を期して、大和へ向かった。大和に着いた将軍たちは、なおも再興を画策した。残った王子も懸命に努力を続けた。
こうして、時が過ぎた。しかし、百済再興は遂に成就しなかった。
その間に、たくさんの百済人が集斯を慕って、小さな船で移住してきた。
「集斯さま。お懐かしゅうございます」
人々を自ら出迎えた集斯がねぎらいと激励を与えた。
「この大和のために、働くのだ」
大和での生活が始まった。田畑を耕した。懸命に働いた。
たくさん棚田ができた。水と日光を効率よく利用する方法だ。
百済は日本では《クダラ》とよぶ。《ペクチェ》は韓国語である。
しかし、王子の妃や高貴な身分の女官は、折りにふれて望郷の念をもらした。自分の住んでいた地がもはや、すっかり遠い存在となっていた随行の人々にも、やはり懐かしい故国であった。
「あのクナラに帰りたい」
仏教と芸術の国。もはや、いにしえの国となった《百済》のことだ。
宮南池の周りの垂れ柳を想った。池の中央の築山とその上の東屋での宴や管弦の遊びが懐かしい。武王の治世に建設された美しい池である。
今も扶餘の南にその庭園の跡がある。その風情はいにしえの王侯貴族のたたずまいを想わせる。新羅や大和の造園にも大きな影響を与えた様式である。
その池でのかつての雅に想いを馳せ、懐かしんだ。
ふるさとの《クナラ》。今ではすでに古き国。《ク》は古いという意味がある。
《ナラ》は《奈良》と同じで《国》の意味であった。
いにしえの国となった故の国《クナラ》が訛って《クダラ》になった。
武寧王陵から発見された金の王冠や青銅器品が収めてある国立公州博物館の林裁俊学芸員と以前に語りあったことがある。
ところで、新羅・百済・耽羅・倭国の四国が創った国が現在の四国であると

いう説がある。これはそのときの林氏の言葉であった。

ついでに述べると、かつて北方に広大な支配地域をもっていた扶餘族の広大な国を栄光の故国として百済の人々が懐かしんで大（クン）国（ナラ）すなわちクンナラと呼んだことが《クダラ》の語源ともいえる。ソウル大学名誉教授の安秀桔氏の言葉である。

また、朝鮮半島南部にある王の古墳が大和の古墳に比べて小規模なのは、北方の故地に戻って大規模墓地の建設を、なおも意図していたからともいう。つまり朝鮮半島の古墳は仮の墓地だという。《帰葬》の習慣からきたことにあるとのことである。しかし、このことは現在、否定されている。

「お父上、やすらかに」

ふと、集斯はあのとき、父に語りかけた言葉を思い出した。そして、同時に大韓神に誓った。

「自分は大和にわたり、百済王朝の復興に身を捧げます」

父福信の優しかった、遠い昔の笑顔を想った。父の声が無性に悲しく集斯の脳裏に響いた。

百済の残党は六六四年ごろまでは、自己の権益と生活を頑なに護ろうとする、朝鮮魂ともいうべき本質的特質を随所に見せていた。が、ついにこれを断念せざるを得なかった。時間の経過とともに、百済の再興は絶望的になっていたからだ。

しかし、海を渡った王族・高官は故国の命脈を四千人の百済の人々と共に、日本に残すことになった。つまり、多数の亡命者が当時の日本に受け容れられ、同化の道を辿った。

旅人として松原が最初に見た石の祠に祀られたという集斯、その人がそうであったし、王家の祠に祀られ、その血を皇室に永く残した百済王子の禅広も同様であった。

これとは別に、先に触れた百済王子禎嘉が妃と三人の王子を伴って現在の宮崎県臼杵郡南郷に家臣とともに逃れた。しかし、後述するように、新羅の追求に屈し、この血筋はやがて途絶えたという。

これらのことは、日韓《両国民》にあまり知られていないようである。

日韓両国の歴史的故地を尋ねる道すがら、人々の語り口のなかに、そんな印象をもちながら、その後の両国の交流とその行く末について松原は大きく思いを巡らした。

新天地

一

中大兄王子の率いる大和朝廷は、敗戦後は自国の安全を第一に考え、国際紛争に介入する危険性を極力避けた。海港に面したかつての難波宮を再び都とするには、地理的に敵の来襲の危険を感じた。しかし、この難波長柄豊碕宮は飛鳥板蓋宮に移るそれ以前の都であり、乙巳の変後に定めた都である。したがって、中大兄王子の政治の原点でもあり、絶ちがたい郷愁があった。

このころ、国の内外では、戦乱が続いていた。

「とにかく、手を打たないと」

そこで、人心一新のためにも近江大津に遷都し、即位の決心をも固めた。いざというときに、近江の地なら湖上の船行きで越国へ、あるいは東国に脱出できる。

疲労を感じる毎日である。飛鳥の法興寺の夢を見た。子供の頃から何度も訪れたふるさとの寺である。

「あの御仏」

燦然と光り輝く仏像は彼の心の支えであり、守護でもあった。

「不安で一杯だ」

「どうか、お力を与えて下さい」

夢の中で必死に仏に縋った。

二

唐という巨大な国の姿と文明の圧倒的な差を見せつけられた中大兄王子は、大和が侵略され王統が滅亡することをそれこそ過剰なぐらいに案じていた。

「何とかしなければ」

誰もいないところでしきりに王子が口にした。
もっと身近に、新羅から受ける直接的な恐怖を感じたは即位することなく、王子のままで政務を執った。とにかく戦争で疲弊した国力の充実を図る必要があった。
中大兄王子は、禅広や渡来した集斯の側近の博識を高く評価していた。
国が滅びたことを冷静に受け止めた聡明な彼らが王子から呼び出された。
「そなたらの噂は聞いている」
開口一番、そう言葉をかけた。
「大和も百済も破れた」
ゆっくりと続けた。
「唐という国は大きな国だ」
王子は呟くように云った。
「武力ではとうてい、かないません」
集斯が丁寧に答えた。
「ならば、我々も技術だ。武器だ」
王子が、合点したように声を張り上げた。
「いや、文化です」
「それには学問です。制度です」
文化人の禅広も付け加えた。
「まず、大和の国勢を知ることが……」
「戸籍を整えましょう」
「法を整えましょう」
側近の皆が、心より進言した。
「百年後、二百年後を考えましょう」
「国を整えましょう。集斯が手筈を整えてくれましょう」
禅広の目が嬉しそうに輝いた。
「我らはきっと大和に役立つ」
百済からの亡命者のうち官位の高かった佐平の餘自信と沙宅紹明は大錦下を授かった。佐平とは百済の高官位である。百済では佐平以下、十六官による地位高低による統治組織をもっており、宮廷内での着衣の色も決まっていた。
彼らは禅広とともに中大兄王子の側近として、大所高所に立った種々の提言を行なった。大和で大錦下を授かったのは、巨勢氏だけに見られる程に、稀な破格の待遇であった。谷那晋首と木素貴子を唐と新羅に備えて軍事顧問に任じた。そして実際に、憶礼福留は亡命後まもなく筑紫での築城を命ぜられた。
「この城ならば」
堅固な造りは他の城のモデルになった。
重要な職務に百済の人々が次々と任じられた。
「この国の建設のために」
陰陽道、医学、兵法などの専門職に、渡来直後の百済の人々が百人ほど任じられた。これらの人々は技術をはじめ文化を携えた集団であったが、このほかに一般の人々がたくさんおり、実務上重要な労働力として貢献した。近江の琵琶湖岸の周辺はまさに百済の様相を呈していた。
こんなことを考えるうちに、旅する松原は歴史の中での思索にいつしかのめり込んでいった。同時に、この時代の人々が動きのある生身の人として彼の頭のなかに登場し、生き生きと語り始めた。そして、やがてその物語は想像を越えて彼の眼前で実像として走り始めたのである。
天智紀によれば《佐平福ノ功ヲ以テ、鬼室集斯ニ小錦下ノ位ヲ授ク》として従五位下に集斯が任じられた。朝廷は学問振興のために、百済の高官であった集斯の言を採用して大学寮を創設した。そして、集斯を官僚の子弟の教育担当の重要な仕事である学頭職に叙任した。今で言う大学の学長にあたる。これが日本における最初の公的な教育機関である。同時に、文部科学大臣兼任というところか。後に、漢詩集『懐風藻』にも現れる文化人の沙宅紹明は、法官大輔（法務大臣）に任じられ、大和の制度の近代化に専心した。

ところで、本邦で官位が整備されたのは、文武・元明・元正にわたって活躍した藤原不比等らによるところが大きい。文武期には彼は忍壁親王とともに大宝律令の撰定を行ない、また元正期にも自ら中心となって、養老律令を撰上、制定したからである。

集斯の子の方信をはじめ、宮廷の貴族の子弟が共に大学寮で学んだ。加えて、東宮学士として大友皇子を補佐した吉太尚が知られている。

集斯らに同行した技術者には水路の作り方を伝授させた。水の少ない朝鮮半島から来た人々の得意とするところであった。この暗渠はいまもこの地方の人々の生活に密接に結びついている設備である。

《百済ノ百姓男女四百余人ヲ以テ、近江国ノ神崎郡ニ遷シ居ク》と『日本書紀』に記録されているように、六六五年には神崎郡に入植が行われた。集斯ら一族はこの地に住んだ。

「都を整備しましょう」

「新羅に劣ない都に」

「いや、唐の長安に劣ない都に」

滅びた百済のかつての高官らが言った。

「半島には、新羅の文化に馴染めないものが、まだたくさんいます」

「呼び寄せましょう」

周囲のものたちが口々にそう言った。

さらに《百済ノ男女二千余人ヲ東国ニ居ラシム》という記事からいっても、大和各地には亡命者が確実に根づく様相を見せていた。

「山に囲まれた敷島よ」

「暖かく、実りの多い秋津島」

「水の豊かな、稲穂の地」

「大海原、この豊旗雲」

「美し国なのだ。この大和島」

「豊葦原の瑞穂国。私たちはこの国が好きになったのです」

「だから、ここが、私たちの国なのです」

渡来した人々が揃ってそう言った。

六六九年、《男女七百余人ヲ以テ、近江国ノ蒲生郡ニ遷シ居ク》として男女七百余人が入植した。蒲生郡は神崎郡とは隣接地である。ここが鬼室集斯や餘自信の本拠となった。

やがて、この地が、渡来人の住む地域として桜や狩りで有名になり、宮廷人により盛んに宴が催され、後に文化の中心地として大きく栄えることになった。

唐の圧力

六六三年、戦いに完全に敗れて、大和は自信を失った。同時に、今度は唐と新羅からいつ行われるかわからない侵攻に恐怖を感じていた。

戦時中に斉明女王が崩御した。しかし、その後も中大兄王子は即位せずに称制として政務を執った。王子は異常なほどに唐の力を恐れていた。

「いつか、大和が滅びる」

私的な唐の使節の郭務■が、大和に軍事的な脅しをかけてきた。

しかし、外交上は、毅然とした態度をとり、使節が都に入ることを許さず追い返した。

「正使ではない」

「お帰りあれ！」

帝の言葉としてではなく、官僚からの意向を私人としての使者に丁寧に伝えさせた。臆病ではあったが剛胆な、国際感覚を十分に備えた、それゆえすぐれた政治家であった。

壱岐、対馬、筑紫から長門に至るまで、城を築いて防備の基礎とした。防人や烽を置いて戦に備えた。この頃の若き防人の情感のこもった歌が、万葉集四三四六に残っている。

父母が頭かき撫で幸あれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

今度は唐の劉徳高が来日した。軍の派遣を匂わせ大和を恫喝した。しかしこの正使に対しては、大和は小錦の森君大石を返礼として遣わした。体面上は対等であったが、国内は、現実的な恐怖で震え上がった。しかし中大兄王子はそれをおくびにも出さなかった。

「都を移さねば」

そう、王子は思った。寝床に入っても、眠れない。

「ここは危ない」

六六七年になって、ついに、朝廷は長い間都であった飛鳥の地から、より防備に有利な近江大津に都を移した。それでも、恐怖がおさまらず、大和、讃岐までの築城を急いだ。

やっと落ち着いたこの年に、女王でありながらも再度皇位に就いた母の斉明女王、それに叔父の孝徳帝と間人皇后を丁重に合葬した。また、八歳で世を去った愛する王子の建王をも一緒に葬った。この山陵は高さ五㍍、周囲一六〇㍍ほどの円墳である。

そして、気持の整理をつけた中大兄王子は翌年に、この地で即位した。この年、異母兄の古人大兄王子の女である倭姫を皇后として自らの周囲を整えた。古人大兄王子の生母は馬子の女の法提郎媛で、ここでも純血保持による部族団結の騎馬民族の風習に従った。

このころになると大和にとっては幸いなことに、唐と新羅の間に争いが起こり、往年の脅威が和らいだ。

それからまもなくして、六六九年には、乙巳の変以来、ずっと一蓮托生の盟友であった中臣鎌足が亡くなった。権謀術数の限りを尽くした二人の世界が終りを告げた。

「鎌足、わしを残して」

「何とも、寂しいのう」

死の直前に帝は大織冠を与え、終生の功に報いた。息子の不比等がこのとき十歳であったが、鎌足の跡を嗣ぐことになった。事実上の藤原氏の始祖である。

このころから、天智天皇は自らの身体の不調を感じた。医師の見立てでは、引水病である。いまでいう糖尿病であろうか。喉の乾きとだるさを感じる毎日である。

この時期には、国家体制の整備とともに、大和は国の名になりつつあった。

天智天皇が没すると、六七二年に皇位継承を巡って、壬申の乱が起こった。これに勝利した大海人皇子が即位した。これについては後述する。

半島では、滅んだ百済を六七五年に新羅が併合して三国の統一に大きく前進し、徐々に唐の影響を薄めていった。

ところで、後の政界の実力者となった不世出の不比等の跡をさらに継いだのは、藤原南家の武智麻呂、北家の房前、式家の宇合、京家の麻呂であった。ところが、時代は下り、ずっと後の話になるが、筑紫に痘瘡が流行した。七三七年になると、この流行病は都でも猛威を振るい、運悪く四人は皆相次いで亡くなった。

そこでまず、力を確保した者は不比等の長男の武智麻呂の子である豊成と仲麻呂である。やがて豊成が右大臣になった。このとき年齢はすでに五十を過ぎていたが、彼には人望があった。

「我が祖も遠く、半島の血を受けている」

「いつか、お祖父様が話してくれた」

この豊成の子の継縄が、桓武天皇に寵愛された百済王族の子孫の明信と結婚した。

この明信こそ、平安初期に重要な政治的役割と朝廷内の血筋に大きな影響を与えた女性、その人であった。

そして、この豊成の弟が、後に絶大な権力を掌握した藤原仲麻呂であった。仲麻呂は兄とは全く違って、人望は薄かったが、孝謙天皇と光明皇太后の寵愛を欲しいままに受けて、異例の昇進をしていた。

「これからは、わしの世だ」そういって憚らなかった。

やがて、自ら擁立した淳仁天皇に提言・奏上して、恵美押勝の名を天皇から賜った。天性の政治家・策略家で、最高位を極めたが、後に孝謙上皇や僧の道鏡らと対立して滅んだ。

こうした事件も見方によっては、血の争いである。もちろん、王家と自分の血の結びつきの濃淡の争いであったが、それを如実に主張し、護ろうとしたのは、蘇我の遠祖を通しても扶餘の血を受け嗣ぐ持統、元明、元正の三女帝であり、そして桓武とともに登場する直接の百済王家の血を意識する百済義慈王の後裔の明信であった。

このことは、後々まで皇室の歴史の潮流に、一貫して息づく血の伝統意識である。

そして、松原の頭脳のなかでは、この血の伝統こそが、これから展開する歴史物語の大きな背景であり、同時に諸々の事件の理解の根幹となるものであった。

扶餘の血

一

蘇我馬子の子が蝦夷である。蝦夷の弟が倉麿で、石川麻呂は倉麿の子である。盟友中臣鎌足の進言で石川麻呂の女の遠智娘とは、中大兄王子が乙巳の変の前に政略結婚した。そしてもうけた娘が鵜野讃良皇女、後の持統天皇である。

蘇我氏は百済王家の傍流である。騎馬民族・扶餘族の支配階級では、血統を維持することが最も大きな関心事で、父方の血筋は勿論、母方の血筋も王家に近いことが王位継承に要求される。大和の大王家は百済王家と縁戚にある古い扶餘族の家系である。百済王家が血縁の近い、同じ扶餘族の流れを汲む高句麗との間にも、古くから緊密な付き合いがあったことは前述した通りである。

そこに、一族郎党を引き連れて海を渡ってきたのが、百済の中にあって王家に近い血縁関係を保っていた蘇我氏である。渡来後、まもなく一族は朝廷内に入り込み権力を掌握した。

「我々は、扶餘の血をひく名家である」

大和に移住してから、彼等が直ぐに大王家と近づけたことは不思議ではない。大王家よりもツングース系扶餘族の百済王家に近い血縁をもつことが、重要であった。これが、前述のように、蘇我の子女を大王の後宮に入れることのできた最大の理由である。また、後の世になって、滅亡した百済王の子孫を大和が素直に受け入れたことの大きな素地であり、理由でもあったろう。

蘇我氏は大王家に対して自分の血の優位を、ことあるごとに主張した。その現われが時として、対外的にも大王家を無視するような振る舞いであった。

この話はさておいて、鵜野讃良皇女は自分の愛しい母を失意に追い込み、結果的に死に追いやった父の天智天皇には、決してよい感じをもっていなかった。この精神的傷跡と王家の本筋を頑なに護ろうとする、すなわち自らの出自でもある王家に最も近い血を護ろうとしたのが持統天皇であり、息子である草壁皇子の妃で異母妹である阿閇皇女、後の元明天皇である。そしてさらに文武天皇の姉、氷高皇女の元正天皇である。これらについては、詳しく後述しよう。

二

天智天皇には伊賀の采女が生母の大友皇子がいた。聡明な皇子であった。本邦最初の漢詩集『懐風藻』に、この皇子のことが記述してある。唐の正使の劉徳高が《大友皇子は常人と異なる人相を表していた》と語っていたとある。この書は大友皇子の孫の淡海三船の撰になる。

父帝は、有能で文化人であった皇子に後事を託すべく皇位を譲りたい一心であった。折りにふれて、権力志向を疑わせる行動が窺える大海人皇子には、自らの四人の女を娶せ、警戒していた。それゆえ、天智帝は大友皇子を新設した太政大臣に任じ、さらに皇太子に立てた。

六七〇年には、懸案であった戸籍の庚午年籍を導入し、翌年には近江令を制定し、これを治世の基礎とした。あとは皇太子の安泰を願って、北九州に地盤を置く大海人皇子を葬る必要があった。病床の帝はそれだけを考えていた。

「なんとしても、これだけは、やらねば」

自分の死が近いことを悟っていた帝は焦りを感じていた。

ところで、蒲生の里では、天智天皇と大海人皇子の額田姫王とのロマンスが必ずといってよいほど語られる。

額田姫王が大海人皇子の舞をみて

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

と歌を寄せた。すると大海人皇子が答えて詠んだ。

紫の匂へる妹を憎くあらば人妻ゆえにわれ恋ひめやも

このやりとりは、あまりにも有名な話である。恋のさやあてといわれ、よく内乱の一因といわれる。が、内乱の真相はもちろんそんな生やさしいものではない。

天皇が《薬猟り》の年中行事を蒲生野で主宰した。この地の豪族、鏡王が二人を接待したときのことであった。《薬猟り》では、男は鹿を狩り、角をとり、女は薬草を摘んだ。実際に薬効の高い素材を集め、同時に野遊びをすることであった。鹿狩りも野遊びも遠く扶餘に起源がある。これについても後述しよう。

このとき大海人皇子が無骨な舞を舞って袖を振ったのを鏡王の女の額田姫王がからかった。これに対して、即座に示した機知的反応を詠んだのが、ことの真相であろう。したがって、そこには政治的なことを敢えて考える必要はない。

三

大海人皇子は額田姫王との間に十市皇女をもうけていた。この皇女が大友皇子の妃である。そしてまた、身分の低い妃との間には高市皇子がいた。胸形尼子娘の生んだ皇子であった。古代海洋氏族の宗像と海女子とを連想できる名称である。大海人という名も同様に海洋氏族か外来氏族を想い起こさせるに十分である。

鵜野讃良皇女は十三歳で大海人皇子に嫁ぎ、十七歳で皇子の第二子の草壁皇子を生んだ。

身分の高低は血の濃淡で決まる。百済の王家、いや高句麗の王家、いや、遠くツングース系扶餘族の王家に近ければ近いほど身分が高い。それゆえ、後にこの持統天皇が自分より本家の血に近い百済の亡命王族に王（ここしき）の身分を与えたのも頷ける。

それに比べて、大友皇子は采女の宅子娘の子である。自分の息子の草壁皇子こそ、百済の血を引く最も扶餘の血の拡散の少ない収束度の高い皇統にあり、天皇となるべきであると思った。となれば、まずその父の大海人皇子が皇位を継承しなければならない。

病床に大海人皇子がよばれた。天皇が政務を彼に託した。

「そなたに譲位する」

しかし、帝の心底を知っている細心の大海人皇子は固く辞退した。

「私はその器ではありません」

「大友皇太子のを補佐け、国を盛り立てます」

だれよりも彼は帝を恐れていた。

身の危険を感じた大海人皇子は逃亡を決意した。大津を出た彼は僧形に身を変え、木津川に沿って南に下り、大和の盆地にでた。さらに吉野に出た。従者は鵜野讃良皇女、子の高市、草壁、忍壁、舎人と女孺の数十人であった。折からみぞれがふる、暗くわびしい行程であった。しかし大海人皇子には人望があった。途中、各地で有力者が少しずつ合流した。

「皇子様、我らがお護りします」

天皇が崩御すると大友皇子が直ちに践祚した。この機を見て、新羅にも密接な人脈をもつ大海人側が戦いを仕掛けた。高市皇子が先頭に立った。戦いは圧倒的に朝廷側の不利に展開した。敗れては、後退、また敗れては、また後退の連続であった。ついに、瀬田韓橋が陥落した。

「もうよい。覚悟をきめた」

践祚して間もない二十五歳の弘文天皇が側近に言った。

「いえ、なりません」

天皇の側近であった百済衆が激励した。鬼室集斯の子の方信も傍にいた。方信と敗残の天皇は子供の頃から一緒に遊んだ、そして学んだ仲間であった。僅かに七ヶ月の天下であった。無念であった。天皇側近の木素万承はあの朝鮮半島の牟弓水門から母とともに逃れて、大和に渡来したときには、十六歳であった。

いま、大恩を受けたこの地で、一緒に過ごした天皇の身代わりを申し出た。

「わたしに、お任せください」

もちろん、敵を欺くためである。そしてついに、ここ湖岸に辿り着いた。

「どうか、武運を」

「お祈りしております」

湖岸から一隻の小船に乗り込んだ天皇を涙ながらに見送った。
史跡を見ながら、遙か昔に想いを馳せるうちに、松原は大和と半島の人々の政治や経済の関係は勿論、文化の交流をも強く意識するようになってきた。
この大乱に至るまでの天智と天武の戦いへの推移については第二章で詳しく扱う。

血の執念

一

乱が治まり、天武の時代になった。この時代は大和の基礎が整い、新羅の影響もあって、優雅な白鳳文化が花開いた時期であった。
六七三年、元号を改め、二月に天武が飛鳥浄御原で即位した。国際感覚に優れた新天皇の即位を祝う遣使が新羅はもちろん耽羅からも相次いで来訪しこれを慶賀した。
これを契機に大和は、遣新羅使・遣耽羅使外交を開始した。
「これからは、諸外国と幅広く」
天武天皇は武勇に優れていただけではなく、占星台を創り、天文と占術を能くし、農業神事を司り、天皇を中心とした国家体制の基礎を築こうとした。
自らの経験からも、皇統の血脈の乱れからくる内乱を何よりも恐れていた天武は即位から六年経ったかつて戦いの拠点となった地の吉野への行幸の際に、草壁・大津・高市・川嶋・忍壁・志貴を集めて、《相扶ケテ逆フルコト無キコト》を六皇子に盟約させ、政権の基盤を整えようとした。
「団結こそ、国防の要である」
そのために、六八一年には律令官人制や公地公民制の整備を推進するための飛鳥浄御原令を制定し、草壁皇子の立太子の準備を執り行った。
「しかし、他の皇子をどのように」
天武は悩んだ。そして、二年後の二月には、皇室内の権力均衡を意図して、帝は一時的に、大津皇子に朝政を委ねることにした。有力な皇子への政治的配慮である。
これが鵜野皇后にとって、大きな不安の種になった。
次いで、天武は宮中での身分制度を改め、八色の姓、冠位四十八階を制定し、朝服の色をも定めた。さらに、宮中での礼法のうち過剰な伏礼、跪礼、匍匐礼を禁じ、例外は認めるものの孝徳時代に行われていた立礼に簡略化した。
一方、『日本書紀』の編述など、自らの皇位の正統性を主張する国史編纂に意を注いだ。また、川原寺に『一切教』の写経を納めて仏教の振興につとめ、僧正・僧都・律師を任命し、僧職を国家の統制のもとにおく制度を整えた。また、諸国の庁に仏舎を作り、仏像と経典を置いて礼拝を奨める詔を出した。
これより先の六八〇年に鵜野皇后が病に倒れた。自身も病に伏せった帝は薬師寺建立を発願した。その甲斐あってか、やがて二人とも本復した。
その頃、漢詩に優るとも劣らない独自の美しい境地に立つ大和の詩歌を詠む歌人がいた。柿本人麿である。この天才が宮廷で天武天皇や鵜野皇后と親しく交わっていた。まさに、天武の意志と新羅文化の影響を強く受けて花開いた、優美な白鳳文化を謳歌する宮廷であった。
才智に優れ、近江朝との戦いを指揮した高市皇子に比べて、鵜野皇后の子の草壁皇子は血筋が本家に近い。それゆえ天武の継嗣は当然草壁皇子である。母の鵜野皇后はそれについて何の疑いも、もたなかった。しかし、鵜野皇后には以前からずっと気がかりなことがあった。
天武天皇が病弱であったことと自分の姉の太田皇女が天武天皇の間にもうけた有能な大津皇子の存在であった。
しかし何と言っても自分は皇后である。草壁は天皇と皇后の間の子である。そして皇位継承も約束されている。
六八五年九月、再び病気に倒れた帝は、政務を皇后と草壁皇子に託し、病気平癒を祈願して、翌年七月に元号を朱鳥、和風にいえば繁栄を意味する《朱》と神の使いの《鳥》をもって《あかみとり》に改めた。しかし、その甲斐もなく、九月になって天武帝が崩御した。草壁皇子の身分が安定していないことを心配した鵜野皇后は、時を移さず、皇后の身分で称制として自ら政務を執る手筈を整えた。

「もしかすると姉の産んだ天武の子の大津皇子が有力な後継候補となる」

彼女は、そうつぶやいた。

彼の血の濃さからいってそうなるかもしれない。ふと不安が彼女の脳裏を過ぎった。何とかそれを避けなければと思った。そのためには、この皇子を除く必要があった。崩御後一ヶ月、陰謀を廻らした。そしてついに皇子を排除する段取りが整った。

大津皇子と親しかった天智天皇の子の川嶋皇子らも、こともあろうに謀略に加担した。自らの身をまもるためであろうが。

二

大津皇子が神事を尋ねるために、姉である伊勢の斎宮の大伯皇女を訪れた。朝廷より謀反の嫌疑をかけられて、一時的に皇子がここまで逃れてきた。

姉が占った。

「凶です」

姉の声は震えていた。

もはや逃れられない運命を嘆いて、手を取り合って、一晩中泣き明かした。明け方、逃亡する弟を想って彼女が詠んだ歌は

わがせこを大和へ遣るとさ夜更けてあかとき露にわが立たち濡れし

であった。弟への愛というよりは、夫婦の愛を覗えるような明け方の別れの歌である。

捕らえられた皇子が宮廷のほとりにつくられた磐余池の堤で死を賜った。

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

辞世の句である。二十四歳であった。鴨は霊魂の保持者であると信じられていた。

斎宮の皇女は都に帰り、皇子が埋葬された二上山に愛しい弟の魂の在りかを見ていた。

うつそみの人となるわれや明日よりは二上山を弟背とわが見む

聖なる三輪山の《日の出》を想い、浄土へ連なる二上山の《入り日》のなかに、愛する人の姿を見た。

雄岳と雌岳が寄り添うように立つ美しい山々を眼にして、続けて皇女が溢れる哀惜の情を詠んでいる。

巌石の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言わなくに

皇女の死者に呼びかける哀傷の声が今も松原の耳に聞こえてくるようであった。

最も有力な姉の子の大津皇子が、皇統から抹殺された。

三

ところが思いもかけない事件が起こった。草壁皇子が急死した。

父天武天皇崩御後、未だ三年にも満たない時期であった。母鵜野皇后の嘆きは尋常ではなかった。

しかし、嘆きながらも皇太子として不安定な地位にあった草壁皇子の跡を何とかその子の珂瑠皇子にと、鵜野皇后は心の内で必死に考えていた。

「どうすればよいのか」

天皇となるべき日皇子の地上支配権については、その母である自分を天の支配者の日女尊（天照大御神）になぞらえて、祭祀権を一定期間保有することを側面から正当化する必要があった。

日並皇子尊と呼ばれた草壁皇子の殯宮の時、そのための長歌と短歌を側近の柿本朝臣人麿が詠んだ。

天地の初の時のひさかたの 天の河原に 八百萬千萬神の 神集ひ 集ひ座して
神謀り 謀りし時に 天照日女の命天をば知らしめすと 葦原の瑞穂の國を天地の
依り合ひの極 知らしめす 神の命と天雲の八重かき別きて 神下し座せまつりし
高照す日の皇子は 飛鳥の浄の宮に神随太敷きまして 天皇の 敷きます國と 天の
原石門を開き神上がり上がり座しぬ 吾が王皇子の命の 天の下 知らしめしせば
春花の 貴からむと望月の 満はしけむと 天の下四方の人の 大船の 思ひ憑みて
天つ水 仰ぎて 待つに 何方に念ほしめせか 由縁も無き真弓の岡に 宮柱 太敷き

まし 御殿を高知りまして 朝ごとに御言問はさず 日月の 数多くなりぬれそこ故に 皇子の宮人行方ら知らずも

その反歌が

ひさかたの天見る如く仰ぎ見し皇子の御門の荒れまく惜しも

あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡り月の隠らく惜しも

であった。これらの詠歌には、哀惜の情だけでなく、明らかに、政治的意図が見られる。

「ならば、それまで皇位は私が預かって、時期が来たら確実に譲り渡しましょう」

そう言いながら、《草壁皇子と阿閇皇女の間に生まれた珂瑠皇子に》と、鵜野皇后は心の内で密かにその決意を固めた。

天武天皇の殯宮を鵜野皇后が南庭に起し、二年半の殯を済ませた六九〇年に自ら即位した。そして、四年後には都を藤原京に定めた。畝傍山、香具山、耳成山の大和三山に囲まれた風光明媚なこの地に造営した本格的な都城であった。東西二・一キロ、南北三・二キロで、大極殿を備えた統一国家に相応しい都であった。それまでは、天皇の即位ごとに新たに宮殿を定めるのが慣わしであった。

春過ぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香具山

宮殿の庭に立ち、澄んだ空遠く、香具山を望んで女帝は歌を詠んだ。

四

とはいえ、ここまで来るのに、決して平坦な道のりではなかった。大津皇子は何とか、首尾良く処理できたものの、血の濃さでは以前には問題にならなかった高市皇子のことが浮かび上がってきたからだ。

太政大臣をつとめ、人望があった高市皇子については、草壁皇子と大津皇子が亡き後にあっては、

「次の皇太子様に」と多くの大宮人が進言した。

壬申の乱をともに戦い、勇猛で知的な高市皇子こそ、自他共に中臣命と許す女帝が譲位すべく、それに相応しい人であった。

しかし女帝には自分の血の意識とそれを越える女としての血脈の執念があった。

ここに至って、かつての盟友であり、側近の柿本人麿と彼女との対立が表面化した。その結果、この宮廷詩人の人麿の理想は持統女帝にとって、いや皇統にとって、そして自分の血の正当性の維持にとって、もはや有害無益な存在に変質していた。

「皇統は高市皇子が嗣ぐべきである」

人麿はことある毎に詩歌とともに奏上したからだ。

この事態になって持統女帝は父天智天皇に関わる寵臣鎌足の子で律令に精通し、権謀術数に長けた不比等を現在の自分の権力構造の維持のために、自らの側傍に引き寄せた。

このさなか、六九六年に高市皇子が原因不明で急死した。

やがて、女帝の意を受けた不比等の策略により人麿は流罪となり、朝廷から遠ざけられることになった。

「人麿は遠ざけねば」

不比等はその功から持統女帝より《藤原の氏》を賜わった。ここに、遠く神職の血を引く藤原氏が名実ともに誕生した。

百済王子禅広の子孫が《百済王の氏》を賜ったのもほぼ同時期である。

「百済は扶餘の一系なるぞよ」

女帝のその言葉と厚い処遇に、王家の人々は涙ぐんだ。

女帝が自ら建設したこの藤原京で、翌年に孫の文武に念願であった譲位を果たすことができた。十五歳の初々しい天皇である。

天皇の晴れ姿をみて持統は自分の重い責務の終着点を確信した。

「血を護った。扶餘の血、王家の血を！」

そう、安堵の言葉を漏らした。心のなかは喜びで満ち溢れていた。

その持統上皇が五年後に、二十歳の文武天皇と文武の母である阿閇皇女(後の元明天皇)に看取られて、崩御した。

「後は、主上が。すべてを、主上が」

持統は《素服哀ヲ挙グルコトナク、文武官ノ政務常ノ如ク、哀葬ノ事務ハ倹約ニ従ハシム》との自らの詔書を遺した。

これに従い、飛鳥岡で火葬に付され、奈良県高市郡明日香村檜隈大内陵に天武天皇と合葬された。当時としては稀な質素な葬儀であった。波乱に富んだ女帝の人生であった。

五

しかし、彼女のそんな願いと思いは、永くは続かなかった。

それから五年後の七〇七年に、文武が若くして崩御すると、今度も、血筋を護るために、持統の妹であり、文武の母である阿閇皇女が即位しなければならない事態になった。

「亡きお姉さまの願いを、いや持統上皇の思いを何としても」

女の凄まじい血の執念であった。皇后でもなかった阿閇皇女の即位は異例のことであった。

阿閇皇女が元明帝として即位してからまもなく、七〇八年に武蔵野国で銅が発見された。銅が献上されると、これを祝って元号を和銅に改元した。そして、和銅開珎が鋳造された。子を失った母としての深い悲しみの中で、先に見えた明るいできごとであった。国中が沸きあがった。人々は幸先の良さを感じた。

七一〇年になって、唐の長安にならって築城した平城京に遷都した。百済のかつての都の公州に風光の似た、美しい奈良の都は人々の憧れの都になった。

奈良とは《ナラ》、国の意味である。

故郷の国、古国、いにしへの国、宮廷のだれもが、美しい伝説のクナラ、クダラ、百済を想った。

青丹よし寧楽の都は咲く花のにおうがごとく今盛りなり

そして七一五年になると元明の譲位を受けて、草壁皇子との間に生まれた女の元正が即位した。何としても自分の血筋に皇位を繋ぎたかったのだ。

「わたしが必ず」

とにかく皇位の血を護るための政治闘争の連続であった。とはいえ、文化的には仏教美術が盛んになり、白鳳文化を経て華麗な天平文化の開花の時期を迎えた。

そして、この期には、天武帝の念願でもあった『古事記』、『風土記』、『日本書紀』というような、歴史・地理に関する書が編纂され、日本が対外的にも国家を形成していく時期に入った。

皇室が支配する限定した地域の意味の《大和》が真に日本を意味するようになったのはこのころである。

やがて、文武の子の聖武天皇が即位して、やっと自分たちの蘇我の血、いや百済の、そして扶餘の血を護ったとの思いを確かめることができた。

伯母の元正帝が安堵の胸をなでおろした。

「おばあさま、血を護りました」

亡き祖母の持統に報告した。

ところで、大宝律令が文武天皇の時に制定され、大和は律令国家の建設に着実な一歩を踏み出していた。一方、この頃は朝鮮半島の新羅は唐と結んで勢力を増長し、東アジア各国間の緊張が高まった時代でもあった。

大和は、過去の経緯とは別に、唐と外交関係をもち、国の建設に積極的に活用した。新羅とはそれからしばらく、正式な国交をもつことはなかったが、民間では貿易が盛んであった。

これより少し前、大陸から半島にかけて唐に滅ぼされた高句麗の王族の後裔が立ち上がった。大祚栄が六九八年に渤海国を建設した。版図は朝鮮半島北部から満州沿海州に及んだ。さらに豆満江から日本海に進出した彼等は大和に交易を求めてきた。

また、これとは別に本邦に渡ってきた高句麗の王族や民衆については第三章に述べる。

高句麗王朝の流れをくむ渤海国との関係には大和の宮廷は血の伝統を意識

し、積極的に交流を進めた。

《やはり、血筋がそうさせたのだ》

《きっとそうであったろう。いや、そうに違いない》

松原は、そう思った。そして、女帝については

《持統は国家そのものを意味する血【統】を自らの手で保【持】したこと》、また《元明は陰陽道に基づき、先行する天皇の血統と在位の紀【元】を【明】確にしたこと》、さらに《元正は皇統の血の【元】を【正】しく維持し、後世に伝えたこと》への思いが、一緒になって、旅人の想像の中に浮かび上がってきた。

一旦そう思い始めると、それが真実のような気がしてきた。そして、血を護った三人の女帝に対して、彼の心の中にとめどもなく深い感慨が満ち溢れてきた。

ついでその感は、今自分が住むこの地を国家として創りあげた祖先の営みへの遠大な想いに拡がっていった。

万葉集

朝鮮半島一帯には、三国時代に中国から漢字と文学が入ってきた。このころは、漢字の意味と音を使って表わした吏読で言葉を広く記録していた。日本の万葉仮名に相当するものである。

その時代の歌は新羅の郷歌が代表的であり、彗星歌、薯童謡などが伝えられている。

楽器には管楽器、弦楽器、打楽器など、いろいろなものが見られた。笛の三笙とコムンゴ、伽耶琴、琵琶の三弦があった。それを用いて多くの曲が作られた。百済音楽は高句麗音楽に近い。大和の宮廷音楽に大きな影響を与え、現在の皇室に伝えられている。

新羅統一期には郷歌が仏教の影響を受けて発達し、僧侶や上級貴族の花郎の間で多くの作品が創られた。花郎とは、上級貴族の師弟を出身母体として眉目秀麗な者が着飾り、儒教・仏教・仙教の三教を修めて、国家のために貢献するものであった。これを源流に花郎道と呼ばれる民族主義的思想が生まれた。ずっと時を経て、八八八年にこれらの郷歌を集めて歌集『三代目』が編纂された。当時の歌が『三国遺事』に収録され、今日まで十四首伝えられている。多彩で高い精神世界を築いていたようだ。現存する歌が少ないのが残念である。

日本では同時期に和歌が発達した。そして、のちに万葉集として集大成された。四千五百余首の中には、古く仁徳大王の王妃后の相聞歌、雄略大王の雑歌、聖徳太子の挽歌などが見られる。しかし多くは舒明大王以後のものである。このことは王統がその時期の半島と密接な関係があったことを如実に表している。

この時代の古墳に高松塚古墳、キトラ古墳がある。同様のものが半島にも見られる。例えば、前者には高句麗の古墳壁画に酷似した女人像が描かれていることが、また後者には高句麗で観測される天空の星辰図（天文図）が確認されている。これらは、朝鮮半島との不可分な関係を物語っている。

「いつの日か、高句麗の古墳壁画が見られたら」

旅人の松原には、そんな想いがこれらの古墳を見て次第に募ってきた。

後世、万葉仮名の読み方をこの半島との歴史的関係から推測、検証したとのことが知られている。また、近年韓国人の手で万葉集の字句の解釈と和歌の隠された意味が研究されているし、和歌に詠み込まれている万葉歌人が託したメッセージの興味深い解釈が梅原猛氏によって行われている。

ところで、祭祀などに際して使う言葉が宮廷用語として受け継がれていた。このなかに、王を意味する古爾岐支《コニキシ》という言葉がある。これに関連して王妃という古爾女人《コニオルコ》という言葉もある。どの国でも民衆の風俗と言語は変質するが、王家の風俗と言語はかたくなにまで変更されないことが少なくない。王族の周辺で使われてきたといわれる用語が韓国語に類似していることは注目に値する。

例えば、天皇の呼称が《テンノウ》の他に《コニキシ》と伝わっていたとのことである。これは初代の崇神天皇が百済古爾王の血筋にあたるからであろうか。大和に正式の王がなかった時代なので、古爾王の幼名が《岐支》だったことから、古爾に岐支を合わせて王を《古爾岐支》と呼んだことがやがて天皇の呼称に転じたという説がある。

繰り返しになるが、《古爾女人》は同じく百済の古爾王に因んだ言葉で、当

時女子を《オルコ》と呼んだので《コニオルコ》といわれる。

また、王母や王太妃を《オモニ》と呼んだという。これは当時の百済語の母の尊称であり、現在の韓国語でもある。さらに、《アジュメ オーゲヨ》は女官を呼ぶときに使う王室用語であったという。《アジュメ》は慶州地方の方言でもあり、《アジュマ》の丁寧語でもあるとのことである。ところで、日本の皇室に連なる藤原家・冷泉家では、《オモ(吾母)》、《アチマ(叔母)》とよんでいたという。おそらく、前者は《オモニ》と、後者は《アズムマ》あるいは《アズモニ》と関連のある言葉であろう。

もっと興味深いのは、《ペンノリ(船遊)》という言葉である。宮崎県南郷の人々は酒席で盛り上がると《船遊歌》を歌う古い習慣がある。その歌詞は《ペンマガンヘ、ペテウコ(白馬江にて、船に乗って)》オギヤテイヤ オギョジヤ《ペンノリカジヤンタ(船遊に行こうよ)》である。歌いながら船遊をしたという。原形で全体を歌うと、間に挿入された船を漕ぐかけ声《オギヤテイヤ オギョジヤ》が自然に出るようだ。まさに《白馬江での船遊び》の歌詞がほとんど完全な韓国語のままで、受け継がれているのである。

これとは別に、前に軽く触れたが、日本の一般的な《さよなら》とは異なって、この地では《オホ サラバ》と言う。これは韓国語の《ザル サラバ(よく生きる・裕福になるように)》という言葉から接頭句の《ザル》を抜いて代わりに《オホ(嗚呼)》の二文字を付けて《オホサラバ》になったという。

また、この地では韓国語によく似た方言を幾つか見ることができる。例えば、村人は何かに盡力した場合に《ヒンタレッタ》という。これは百済語の《ヒンタヘッタ(力をつくした)》という語彙から来た言葉である。また、自分の父親を《アボ》と呼ぶが、これは《アビ》あるいは《アボム》から来た言葉であるという。

ところで、百済が滅亡した時、義慈王の息子の禎嘉王子が妃とともに三人の子福智、華智、白智および数名の家臣、宮女とともに南郷に亡命した。追撃軍を恐れて禎嘉と次男華智は南郷に残り、妃と長男福智、三男白智は南郷から離れた財部で暮した。やがて、追撃軍により禎嘉が襲われた。この時、財部に住んでいた福智が父王の危急を知って南郷の父を訪ねた。禎嘉は福智の手を握り

「お前たちは無駄死にせずに《ザル サラバ》……」

と言って亡くなった。そんな悲しい伝説がある。

禎嘉の陵墓は南郷村の守護神《神門大明神》として祀られている。年末に王子の魂が眠るこの神門神社の氏子と福智が眠っている財部の比木神社の氏子が父子間の出会いの祭を百済の滅亡以来、千三百年を越えた年月にわたって毎年続けている。この祭りを終えて人々が別れる時は、《オホ サラバ》といいながら別れる。これを禎嘉が福智に最後に残した遺言として聞くとき、村人は百済の血筋に対する熱い感情をもつとのことである。

神門神社で発見された三十三個の《伝世銅鏡》を保管するための西正倉院が昭和四十一年に完成した。禎嘉に同行した家臣の末裔がこの建設に携わった。これによって、禎嘉の怨念が氷解し、また《相逢祭》が国際観光事業となり、住民二千五百名に過ぎなかった寒村が今は裕福な村に変貌した。この地域に住む村人は自分たちが百済人の後裔であることを誇りに思っている。

《伝世銅鏡》の幾つかが日本国宝に指定されている。これらと奈良正倉院に所蔵されている国宝級文化財の鏡の形態と材質が同一であることが知られている。これらの銅鏡等は『梁書』に記録されている百済の行政組織である二十二の檐魯諸侯の任命状だったという説がある。

国見山の辺りに禎嘉王子と華智が住み、また韓国岳の周辺に妃と福智、白智の兄弟が暮した。彼らは故国の山河を懐かしみ、山に登って百済側を眺めたという。

ここで、話は若干ずれるが、時代がずっと後の十六世紀末の沙也可(金忠善)に触れてみたい。この人物は日本と韓国の架け橋となった実在の日本人である。韓国の書『沙也可慕夏堂記』から司馬遼太郎は、彼が『島夷』に因んだ対馬武士で沙也門という日本名を推測している。儒教の文明にあこがれていた彼は渡鮮後すぐ朝鮮王に降伏し、逆に秀吉軍と勇戦奮闘した。そのころ技術的に完成していた鉄砲製作と射撃法を朝鮮軍に教授した。それゆえ、鉄砲軍団として名高い雑賀衆の別名とも言われている。

壬辰・丁酉倭乱(文禄・慶長の役)の後、大邱の南方の友鹿洞に隠棲した。彼の号が慕夏堂で、当時の朝鮮国王の宣祖から金姓を賜り、名を忠善とした。妻は晋州の牧使という地方長官の張春点の女であった。沙也可の配下の者も何人か一緒に山野を開墾した。

その後、北方異民族の侵略に対して三度出兵した。李朝は功に報いて高い官職の正憲太夫を与えた。彼は官吏としての栄達を求めることなく、仁祖二十年にこの村里で没した。彼の教えは権力と名誉への志向の堅い戒めであったという。

慶尚北道達城郡友鹿洞が本貫で、その風景は日本的である。この金姓はすべて、特権身分階級の両班であった。現在十五代目である。『慕夏堂先生』と刻まれた桐の位牌があり、秋には山吹が咲く儒教の祠堂には「慕夏堂先生」と刻まれた桐の位牌がおかれ、この村を自分の姓の本貫としている家が韓国で約五百戸、約四千人になるということである。村を離れた今もこの祠を訪ねてくる。

この時代までは、このように両国を往来できる心理的環境が存在していたのであろうか。日本の童子女の風俗画に酷似した、この時代に描かれた朝鮮半島の絵画を以前に博物館で眼にしたのを松原が思い出した。

節会相撲

聖武天皇は神事としての相撲を何度か観戦したことを不意に思い出した。相撲は遠く神話の時代に起源があるという。赤疱瘡が前年から流行し、都は不安で混乱していた。何とか流行病を克服したかった。神事として人心の平安を祈願したい天皇であった。

「敬福と話がしたい」

百済王敬福が帝から呼ばれた。

「そなた、相撲をどう思うか」

帝は何かと彼を頼りとする。

「相撲は、おもしろうございます」

亡命した百済禅広王子の曾孫にあたる敬福が丁寧に答えた。

「いや、流行病の終息を祈願したいのだ」

多くの悩みを抱える帝の胸中を敬福は思いやりながら次のように言った。

「……古来、相撲は困ったときに、人の心を明るくする神技です。天岩戸の話のように」

しかし、その願いも空しく、流行は留まることを知らず、藤原不比等の四子も敢えなく相次いで亡くなった。

相撲の起源は定かではない。というよりは人類が地上に現れて以来の本質的な行動であろう。動物にも同腹同士の子供が、じゃれついて取っ組み合いを行うのが見られる。神代の話では、高之原を治めていた天照大御神が須佐之男命の狼藉にあって天岩戸に隠れてしまったことに起源があるといえよう。葦原中国は真っ暗になってしまった。困った神々が相談した末に、天宇受売命が裸で賑やかに踊り天照大御神の気を引こうとすることにした。何事かと思った天照大御神がそっと岩戸から覗いた。この期を逃さず、力ずくで手力男命が戸を開けた。この力自慢が相撲の伝説起源であろうか。

相撲の形式も神話伝承から始まる。古事記には建御雷神と建御名方神が、出雲の伊那佐（大社町稲佐）の小浜で、互いに手をとり合い投げ合い、ついに建御名方神が負けて信濃国に逃げたと書かれている。このように、《国ゆずり》の難問を当時の《力くらべ》によって解決したという話がある。

これよりもっと相撲らしい《角力》の話は、これも神話であるが、『日本書紀』にある。垂仁七年七月七日、天覧の《力くらべ》で野見宿彌が当麻蹶速に勝った話である。今も野見宿彌は日本の相撲の始祖として祀られている。これらは、新たに渡来した民族と先住出雲族が争った話の中に挿入されたのであろうし、《力くらべ》は語り伝えられている部族間の争い話を、相撲の物語にしたものであろう。つまり、百済の神は、形式的には武力を用いずに、出雲の神に勝つことによって、《国ゆずり》が行われたということを主張したかったことであろう。

ところで奈良県桜井市穴師の相撲神社入り口には、相撲跡の伝承地がある。それとは別に、古墳時代には盛んに相撲を取っていた形跡がある。例えば、和歌山県井辺八幡山古墳から出土した埴輪に、褌を締め、裸足で鉢巻を締めた力士埴輪がある。脚を開き、腕を前方に伸ばした相撲の形を表した埴輪である。この古墳は高句麗系で、六世紀初頭のものと推定される。農民の間では、農作物の収穫を占う儀式として神事相撲が盛んに行われた。

こうして古墳時代またはそれ以前の相撲に関する神話や伝説が語り伝えられるようになった。

相撲が史実として記録されたのは、皇極女王時代の六四二年からで、このとき百済の使者をもてなすため、宮廷の兵士の衛士を集めて相撲を取らせたことが『日本書紀』に載っている。

高句麗、百済では、占星術と併せて農事占いのひとつとして相撲が王家で行われていた。この伝統が、古く渡来してきた大王家の祖先と随行した人々の間に受け継がれていた。

したがって、百済の使者は古式豊かな相撲と舞楽のもてなしに感激したとの記録がある。舞楽は本来仏教と一緒に飛鳥時代に伝来した伎楽が元になったもので、仮面と衣装をつけ音曲に合わせて行う仮面劇であった。

相撲は農作物に被害をもたらす悪魔払いの儀式でもあった。これが日本の気候の温暖な地の農業と深く結びつき、農作を占う相撲が、奈良時代の頃から貴族たちにも愛好されるようになり、宮廷においても取り上げられた。元明天皇のころであった。

「やがて、相撲を神事として祀ることにより、民の安寧をも祈願するようになったのです」

子供のない伯母の元正女帝が聡明な首皇子、後の聖武天皇によく話してくれた。

頼りの敬福がまた内裏に呼ばれた。博学で文化人の聖武がこれを敬福に語った。

聖武天皇は遠く高句麗と百済から伝わった相撲を何度か側近からも聞いていた。何とか伝統を宮廷内で制度化しようとした。

文章博士に訊ねた。すると、起源の説明を始めた。

《秦の時代に相撲の意味の角觝が始まった。漢の武帝の頃に盛んになり、梁の時代に相撲の文字が現れた》ということであった。

この地で、上古から《力くらべ》をしていたが、やがて原始的な《打つ、殴る、蹴る》を徐々に排除、変化してきたという。そして、やがてここ大和に伝えられたという。

実際に、六世紀前後の満州南部の輯安の通溝にある、高句麗の古墳の相撲塚に相撲の壁画が見られる。

「やはり、扶餘の地に起源があるのか」

聖武は呟いた。

「となれば、何としても」

まず勅命をもって

「国中から力自慢を集めよ」

全国から力士を募集した。

野見宿彌が相撲を取った故事に因み、七夕祭の儀式に、宮中紫宸殿の御庭で相撲天覧を行うことにした。

「七夕に行うのだ」

文人に命じて七夕の詩を作らせる儀式の余興として相撲を催すことにした。そして、七三四年には聖武天皇は節会として相撲を宮中で執り行うこととし、敬福らがこれを取り仕切った。節会としての成功から、毎年この日に行うことにした。こうして相撲節会が恒例の宮中行事になった。

天皇が宮廷において相撲を観覧し、相撲に付随した舞楽を演技させて、臣下に併せて宴を賜わった。そして、それが後世には絢爛豪華の壮大な儀式に発展していくのであった。

帝は先祖の故郷の百済や遠く北アジアの扶餘大国に棲んだ人々に想いを馳せた。

みことのり

一

聖武天皇が即位したのは、七二四年であった。このころは唐を中心としてシルクロード交易が活発に行われ、いわば世界帝国の都の長安には胡人と呼ばれる外国人があふれていた。

中国では胡は北方か西方の蛮族を意味する言葉である。元来、中国に存在したものは一字で表すことが多い。したがって、例えば、胡瓜、胡椒、胡麻、胡桃は外来の食物であり、胡笙、胡琴（胡弓）などは同様に外来の楽器である。

因みに蝶は単独でも使われるが、現在は胡蝶が普通に使われるとのことである。

彼らが貿易を通して日本にさまざまな珍しい文物を間接的にもたらした。本邦作の文物とともに聖武天皇の没後に正倉院におさめられている。

この時期は、律令政治が未だ安定せず、多くの政治闘争が繰り返して起こった。そこで、外敵に目をそらすためと、鉱物資源の経済的利益のために、政府が積極的に東北進出を図り、蝦夷を征服しようとした時期であった。これと同時に、征服された人々との融和も進んでいた。

聖武天皇は国内の政治的混乱を避けようとして、平城宮（奈良）、恭仁宮（京都）、紫香楽宮（滋賀）、難波宮（大阪）、そしてまた平城宮に復すというように何度か都を遷した。しかし、そのためにかえって民の不安は高まった。加えて地震、それに天候不順による災害や飢饉が続いて起こった。そして、都には天然痘など流行病が拡がった。

「今日の食べ物がない」

「子どもらの着物がない」

「病でみんな死んでいく」

「大地がゆれる。天罰だ」

「恐ろしい世の中だ」

「争いばかり」

このように、相次いで起こる天災と人災に、世情は不安に大きく揺れ動き、人々はますます落ち着きをなくしていった。

聖武天皇は世の安寧を仏に祈願した。宇宙を永遠に照覧し続け、光明を授け、人々を救う毘盧舎那仏の造立を決意した。そして紫香楽の地に朝廷の威信に懸けて、この毘盧舎那仏を造る決心をした。それは、世界帝国の唐王朝を意識した大和の主張でもあった。したがって、世界最大の金銅大仏であることを条件とした。

「どこにも劣ない仏様を」

国家鎮護の大仏として、毘盧舎那仏造立の詔勅が発せられたのは、七四三年十月のことである。これより先に帝は全国に、国分寺と国分尼寺創設の詔を発していた。

聖武天皇は仏教に深く帰依していた。それゆえ、朝廷の全勢力を傾けて、巨大な仏像を造りはじめた。七四四年十一月、初めて毘盧舎那仏像の体骨柱を建設することができた。そして、翌年九月には、全国での一切の鳥獣の殺生を三年にわたって禁止し、大願成就の準備にかかった。

《菩薩ノ大願ヲ発シ、毘盧舎那仏金銅像一体ヲ造ル。国中ノ銅ヲ尽シ、仏像ヲ鋳造シ、大山ヲ削リ仏堂ヲ構築ス》が詔であった。このために、東海・東山・北陸三道の調・庸はすべて紫香楽宮に貢納させ、甲賀寺（滋賀県甲賀市）に造仏の準備を国を挙げて整え始めた。

しかし、紫香楽宮の周辺で不穏な出来事が続いたのでその計画は中止され、都を平城京へ戻すとともに、現在、東大寺大仏殿がある位置での建造が開始された。

大仏の本体は銅で鋳造される。この高度な技術を要する鋳造には幾度も失敗した。が、やっと完成の目途が立った。しかし、当初の計画の金銅大仏とするためには、表面に鍍金する大量の金が不足し、その完成が危ぶまれていた。

「何とかならんかな」

「いや、どうにも」

「ならば、黄金の飾りや仏像を大仏様のために」

「いや、それはいけない。魂のある御仏を壊すことはできない…」

「如何に、毘盧舎那仏のためであろうとも」

天皇をはじめ側近が日夜悩んでいた。仏像に荘厳さを現出するために、どうしても仏の御身全体に金箔を貼る必要があったからであった。

「遣唐使を派遣して、文物と交換して黄金を得ようか」

そこまで計画していた。当時は、黄金が大和からは産出されなかったので、金を手に入れる見込みは国内では殆どなかったといわれている。そのために海外から調達しなければならないと朝廷の重臣たちが考えていた。

しかし、七〇一年三月には《大凡海宿禰ヲ陸奥ニ遣ワシ、金ノ精錬ヲサス》と記録があるので、以前から、奥州には金があることは知られていたようだ。

二

ところで、故国を失った禅広王子は将軍集斯とともに、前述のように、大和の朝廷に貴族として臣従した。その子孫が持統天皇の時に百済王の姓を受けていた。

血の伝統を強く意識した破格の待遇であった。禅広の息子の昌成は当時父と一緒に来日していたが、父よりも早く亡くなった。

時代は下り、昌成の息子の朗虞が大和朝廷で従四位下の官位で摂津介になった。

敬福はその朗虞の子として、文武天皇即位と薬師寺の大仏開眼の年に生まれた。

「この子は仏の申し子だ」

父の朗虞は殊の外、喜びを露わに、王家を挙げて慶賀した。

「この子は王家にきっと福をもたらす」

そんな確信と神仏への敬虔さがこの子の名を決めた。七〇一年、敬福が四才のときに大宝律令が制定され、律令国家としての大和の国の基礎が形づくられた。

百済が滅亡して、すでに七十年を越えた七三七年に敬福の父朗虞が亡くなった。世は不安の絶えない天平時代になっていた。

父の死の翌年、四十一才になった百済王敬福がこのとき、陸奥介として公式の記録に現れた。この時の上司の陸奥守は大野東人であった。これに伴い、翌年四月には敬福は正六位上から従五位下の位を授けられた。そして、敬福が四十六才の七四三年六月には陸奥守に任じられた。この官位を得て彼は大いに満足であった。

「わしは、果報者だ」

自分の幸運を日本古来の神道と仏教の融合した伝統宗教を基にした大韓神に感謝し、日夜、敬虔にも手を合わせた。

七四六年の四月に、敬福は上総守に転任した。ここで、鉱物資源探査の専門家を見出した。これがまた、彼の将来の運を呼びこむことになった。

朝廷は先進技術者、とくに鉱物資源の探査技術者を配下にもつ敬福を頼ろうとした。

「もしかしたら、鉄鉱石を……」

と皆が望みを託した。

「見つけてくれるかも……」

時を移さず、朝廷は九月に敬福を陸奥守に再び任じた。同時に、従五位上へと位階を昇進させた。これが敬福や百済王一族のさらに大きな転機となった。

彼は豪放磊落な人柄である。国司としての勤めを終えて、国庁から今戻ったところである。

「客人だぞ！」

「お帰りなさいませ」

「おい、酒だ、用意せよ。料理もだ」

「直ぐ、ですか？」

「そうしてくれ。舞の準備もだ」

「はい」

「手みやげを用意して置けよ」

「はっ…はい、だんなさま」

そんな会話をしながらも、敬福は神仏混淆の流れにある大韓神にまずはお祈りした。こんな生活が続いた。

ある日、造東大寺司の造仏長官であった大仏師の国中連君麻呂から、書簡が届いた。

「東大寺の大仏の鋳造もどうやら終りました」

「ところが、鍍金の金が足りず、困っています」

「朝廷の体面上、公にはなっていませんでしたが、帝もお困りです」

「うわさでは、ご存知でしょうが」

使いの者が付け加えて説明した。
「このままでは……」
「どうすれば、いいのか」
このころ、朝廷では皆が頭を抱えていた。
これを知らせてきた者は、百済滅亡の時、王家一族と一緒に亡命した国中連国骨富の孫であり、百済王家の故国における家臣筋である。名を君麻呂といった。年上であったので何かと頼りにしていた。
大仏建立に彼の大仏師としての技術は不可欠であった。それに加えて鋳物を担当する大鋳師の高市真国、真麿やその配下の技術者など延べ四十二万余人を投入しており、すでに五年の歳月をかけて、ほぼ大筋はできあがっていた。
陸奥の敬福の許へは、東大寺造仏の状況は常に詳しく伝わっており、この情報に基づいて、
「そうか、金が足りないのか」
何度も呟いてはしきりに考えていた。
金の不足で東大寺毘盧舎那仏の完成が危ぶまれていた。そのような時期にあって、
「鉱脈は見つからんか。砂金以外にとれないのか」
百済から受け継いだ技術をもつ者が敬福の意を受けて探し歩いていた。
そして、ついに七四九年四月に、陸奥国小田郡の北上川流域で配下が金を発見した。その知らせが敬福の許に入った。
偶然ではなかった。綿密な計画があっての成果であった。
「それにしても、何という幸運」
敬福の顔がゆるんだ。
この辺が砂金の産地である噂はときどき聞かれたが、大量に見つかるはずがないという常識をうち破る発見であった。
「どのぐらい必要なのか？」
「八百両ほどでしょうか」
都から詳しい知らせが入った。敬福は黄金の量とその献上のタイミングを図った。
そこで、まずは小田郡産出の砂金と銘を打って九百両（一両＝約十四㌘）を朝廷に献上することにした。そうはいっても、九百両の黄金を短期間に集めることは無理であった。というのは、この場所だけでこれだけの黄金を採取することは難しいからである。
ところで、当時は、宮城県の北部の辺は蝦夷たちの居住区との境界であった。しかし、蝦夷たちとも比較的平和に共存していた頃であったので、機を見るに敏い敬福は交易で黄金を集めようとした。歴史的には、この時から我が国で産金が始まったとされているが、東北の奥地では蝦夷たちによって、それ以前から砂金が採取されていたに相違ない。おそらく秘密に行われていたのであろう。彼らはかなりの量の黄金を蓄えていた。
敬福は中央の状況を耳にすると、急遽、蝦夷たちと交易して黄金を買い集める決心をした。
「黄金を集めろ。百済からの宝物と取り替えるのだ。蝦夷の長と上手に接触せい」
「献上品として都に送るのだ」
国庁はにわかに忙しくなった。そして、その効果を上げるためにタイミングよく大量に朝廷に献上したのだった。

開眼供養

一

当時は、金の鉱脈はわが国にはないと人々は思っていた。それを覆すような大発見に奈良の都は沸き返った。聖武天皇はこれを聞き及び、格別の喜びをもって御仏に感謝し、天平から天平感宝へ改元し、さらに年内に天平勝宝と改元したほどであった。
金の発見後、聖武天皇は東大寺に直ちに行幸して、未完の毘盧舎那仏像の前

殿で、平易な詔を述べさせている。

《天地開闢以来、黄金は他国より献上されるだけであった。しかるに、陸奥守の百済王敬福が所管の地で黄金を発見し、献上に及んだ》とのことである。

この黄金により東大寺の大仏は完成の見込みが立ち、大仏はこの大和の地に光輝くこととなった。金と水銀の合金を大仏の表面に塗布する。そして、開眼供養の後に、金の鍍金により最終的に大仏完成の運びとなる大仕事となった。

金発見の年の五月には、歌人で政治家でもあった、現在の福井県にあたる高志(越)の国司の大伴宿禰家持が黄金の発見と産出を祝って、次の歌を詠み、万葉集巻十八―四〇九七に残している。

天皇の御代栄えむと東なる陸奥山に黄金花咲く

この歌が《すめろきのみよさかえむとあずまなるみちのくやまにくがねはなさく》と先に述べた万葉仮名で記されている。

当時、漢字の音読みと訓読みを混在させた複雑な表音・表記によるものが少なくなかった。

こうして敬福は、入手した黄金九百両を鍍金用に献上した。この功労によって、聖武天皇からことのほか重んじられることになった。

黄金を産出した陸奥国小田郡の黄金山神社で祈願奉斎が行われた。後に、産金に縁起をもつ延喜式内社という由緒ある国家神社となり、『延喜式神名帳』に登載された。その境内には、万葉歌人大伴家持が前述の黄金の産出を寿いで作った歌を刻んだ歌碑《みちのく黄金花咲く》が立っている。本邦の《黄金の国伝説》はこの時期に遡るようだ。

昭和三十二年に宮城県遠田郡涌谷町の神社周辺の発掘調査が実施された。伝説通り、当時の産金を記念した建物の柱跡が発見された。また、《天平》と刻名された瓦も出土した。黄金はきっと黄金山神社付近から産出されたものであろう。近くの黄金沢では今でも砂金が見られる。

仏教が国家の政治と結び付き、大韓神として神道仏教が崇められた。神仏混淆による国家鎮護の時代にあって、この時期には神社と仏堂を並べて産金を祀った。鎌倉時代に仏堂は朽ちて廃虚となり果てたが、神社の拝殿は江戸時代末期に再建されて、民衆の信心に支えられ年月を経て現在に伝わった。本邦初と言われる金の産地が伝説どおりであることが確認されたことにより、昭和三十四年九月には、《天平産金遺跡》として神社境内が宮城県史跡に指定された。さらに、昭和四十二年には国史跡の指定を受けた。

二

七四九年五月には黄金の発見に関して、国司をはじめ主な功労者が昇格・任官の栄誉を朝廷より賜った。

陸奥守であった百済王敬福を従五位上から七階級特進させて、従三位を授けた。そして、宮内卿を任じ、河内守を兼ねさせた。百済王家は摂津国百済郡(大阪市)から由緒ある河内国交野郡(枚方市)にも広大な土地を賜り、皇室に縁の交野郡内に移住し居館を営むことを許された。まさに、朝廷からの破格の待遇であった。

このとき、陸奥介・従五位下の佐伯全成を従五位上とした。他に鎮守判官・従五位下の大野横刀を従五位上とした。そして、掾・正六位上の余足人を従五位下、黄金を獲た上総国の丈部大麻呂を従五位下に任じた。このとき、下級官僚の左京の朱牟須売を外従五位下に特進させたことは極めて異例の注目すべきことであった。また金の精錬をした人にも恩賞が順に授けられた。ほぼ同時に、陸奥国にはとくに三年の調・庸が免除され、小田郡については永くこれらが免除されることになった。

敬福の頃は、自分の周囲にまだ百済の伝統を色濃く保っていた。金を抽出するには水銀を使うが、それを知っていた技師を半島から呼び寄せていたからだ。陸奥守になってからは、敬福は彼らとともに方々の山を歩いて金を探し求めていたのである。特に伊勢の水銀が有名で、元明天皇治世の和銅六年に水銀が献じられたことが『続日本紀』にも記されている。《東大寺要録》にも使われた水銀は伊勢からのものであったことが記録にある。

この地方では、色別に朱砂、辰砂、丹砂などと呼ばれる硫化水銀が現在も生産されている。これを高温にすると水銀が取り出せるが、天然には火山活動により排出される。大仏の鍍金量からいって約二トンの水銀を必要としたはずである。したがって、大仏の表面の金と水銀のアマルガムから水銀を蒸気として除いたときに、環境に与えた影響がどれほどか推察される。もちろん、当時の技術者らはこの影響を知って、防毒マスクを使っていたであろうが。

因みにキトラ古墳の壁画にも辰砂の紅色が使われた。

水銀の殺菌力は中国では古くから使われ、始皇帝や馬王堆での遺体の保存効果が実証済みであり、戦前から《赤チン・マーキュロクロム》として家庭薬として使われていたが、一九七三年に製造中止になった。

なお、メチル化した水銀の毒性は熊本や阿賀野川の水俣病で有名な公害病として、記憶に新しい。

七五〇年三月には小田郡ばかりではなく廬原郡多胡浦の浜(駿河田児の浦)でも黄金が発見されている。

そうはいっても、それから二年後には免除されていた陸奥国の調・庸が多賀郡以北の郡に対しては黄金で貢納させるように改められた。その基準は正丁四人で一両とされた。

三

仏教伝来からおよそ二百年後、仏教は国を治める根本を担うようになっていた。七五二年四月九日、大仏開眼法要が仏教伝来二百年祭として盛大に営まれた。大和の国力を示す格好の事業であった。この法要会には、大和国内だけでなく海外からも大勢の政府高官と高僧が招待され、大変な賑わいであった。内外のさまざまな舞楽が披露された。仏教が日本に伝わってから最も盛大な儀式であったと伝えられている。国家的大事業として着手され、完成した大仏の開眼供養が国家的祭典として行われたのであった。

仏陀の徳を表す燦然たる金色の光明の慈光を遍く照らし、万人に利徳をもたらす。それを最高級に奉った最勝王と称した経は後の法華経とともに朝廷の国家鎮護の仏典となるものであった。

平城京の象徴としてだけでなく国家鎮護のための総帥としての東大寺において、聖武上皇・光明皇太后・孝謙天皇の臨席を仰ぎ、全国から招いたおよそ一万人の僧侶が列席、参列者は他に数千人に及ぶなかの式典であった。

この日のために唐を経て来訪の長旅を賜ったインドの高僧の菩提僊那も出席した。そして正式に導師を勤める彼の手によって、群衆が見守るなかで毘廬舎那仏に瞳が入れられた。

まさに世界最大の毘廬舎那仏坐像の世紀の開眼大法要であった。

法要が終わった。若き孝謙天皇は、三年前に譲位して上皇となっていた父君の聖武と母君の光明子と共に、やっと私的な時間をもつことができた。

「やれやれ、終わりましたね」

「これで、きっと……」

「御仏の御加護で、この世の平安が」

聖武上皇の意向により皇太子となっていた道祖王も交えた安堵の日が過ぎた。

その後、敬福は常陸守に転任し、後任の陸奥守には佐伯全成が任ぜられた。そして、七五七年六月には、六十才の敬福が出雲守に転任した。出雲鋼で名の知れたところである。敬福の携えた鉄鋼技術をもって、朝廷がこの地を経済的にも完全に掌握するために特に命じた重要な役目であった。任務を果たすとともに、大韓神に敬虔な彼はここで古来の大和の神々とも親しく交わり、百済の祖先を想いながら、大和の風土と文化を一層愛する人になっていった。

みちのく

一

敬福が金を発掘した小田郡と呼ばれたところは、繰り返しになるが、現在の宮城県遠田郡周辺の地域にあたる。多賀城跡地から見てずっと北で、南隣が金山という土地である。八世紀中葉には鉄を探し求めて人々が歩き廻るうちに、どうやら、出羽国と陸奥国の境も明確になったようだ。宮城県北端中央部の登米郡あたりは、この時期は大和朝廷と蝦夷の支配地域の境界で、軍事上は重要な地域になっていた。『日本後紀』の七九九年三月の条に《登米郡ヲ小田郡ニ併ス》の記述がある。『和名類聚抄』の国郡部には《止与米》と訓じられている。

この地の中央東寄りに山林を見ながら北上川が流れる。西には水田が広がり、秋には米がたわわに実る。近くを迫川が流れ、郡内の南端で旧北上川に合流している。盆地の様相を呈しているこの地には遊水池が点在している。付近の鉄の生産に関連する古代集落の存在から見て、金とは別に、人々の生活に密接な関連をもつ、経済的にも軍事的にも重要な地域であった。

敬福は鉄の所有と加工技術が国家の力であることを十分に承知していた。か

つて、百済と半島南部を領する伽耶に大和の欽明王が軍勢を送りこんで支援していたのも、良質の鉄の産地を巡る百済・伽耶・新羅・大和の権益が複雑に絡んでいたからだ。

遠く、北アジア一帯にツングース系の鄂倫春族が活躍していた。現在も中国の内蒙古自治区に少数ながら住んでいる。オロチョンの意味は《トナカイを飼育している人》である。気の荒いトナカイを訓練するに長けた人々であった。

古代日本で大蛇の呼び名のオロチが、このオロチョンに起源するとは興味深い。江戸時代の《刀と鹿の角》の組み合わせもトナカイの訓練に長けた人々の行動から云って、偶然なことではないと前述の安秀桔氏と語りあった。なるほど、八俣大蛇は実は鉄鋼産業を意味した。それ故、神器の《草薙の剣》が朝廷の護りであり権威の象徴であった。この伝説はインド・ヨーロッパ語族の神話に共通に見られる。多頭の水蛇とヘラクレスの話はほんの一例に過ぎない。

『記紀』の神話はヒッタイトの鉄器文明などに見られる類似の説話が騎馬民族に媒介されて、沿海州と半島を経由して本邦に古墳時代に伝わったものであろうか。

ところで、現在の福井地方にあたる高志国が鉄鋼技術者の定着地で、大蛇の出自と同じであると言われるのは不自然ではない。鉄鋼を産出する出雲国に何度もオロチョン、すなわち八俣大蛇が出掛けては生娘を要求した。このときの生贄の奇稲田姫を助けた須佐之男命の話は有名である。砂鉄を採っていた先住者が大蛇のすなわちオロチョンの侵略に悩みながらも、遂にこれを斥けた。この結果、大蛇の血すなわち砂鉄の色で斐井川がまっ赤に染まった。そして大蛇の体内から叢雲剣を取り出すことができたということだ。これらは史実を神話に投影したものであろう。

『古事記』によれば応神天皇の御代に百済より韓鍛冶の卓素が来朝したとある。また、敏達王の頃、新羅より優れた鍛冶工を招聘し、刃金の鍛冶技術の伝授を受けたという。その技術はおそらく鉄鉱石を原料とする箱型炉による製鉄法であろう。ふいご技術や銑鉄を脱炭し、鍛冶する製鉄法は、大和、吉備に伝えられ、鉄鉱石による製鉄が古代の一時期に盛行した。

一方、出雲を中心とする砂鉄製錬の系譜がおそらく六世紀以前から存在した。そこに伝来技術である箱型炉製鉄法を取り入れて、古来の砂鉄製鉄と折衷し、技術革新の末に生まれたのが古代蹈鞴製鉄法であろう。

鉄は農業生産力と武力を支える国力の基礎となる最も重要な産業のひとつであった。原料の砂鉄の産地には金の発見に近い場所などが知られている。鉄の生産加工、製品の流通に関連した地名も各地に見られる。さらに製鉄や須恵器の生産技術工人集団の出自は和泉国と関係があり、この地方出身の百済系の行基も高志あたりで、鉄の探索を行っていたことが知られている。当時、執拗なまでの蝦夷征伐は、その背景に、《富と力》の《実質と象徴》だけでなく、鉄と金への根強い執念があった。

敬福が陸奥守に任ぜられたのが八世紀中葉であるから、おそらく彼と関係の深い鉄工人集団によって、東北の金は発見されたのであろう。

「お館様、鉄を帝に奉ることが大事です」

ぼんやり物思いに耽っている主人に家臣が言った。

「分かっておる。分かっておる」

「はい、さようでございますか」

「かつて渡来した先祖のもたらした鉄のこと、

いやその伝説をわしは今、考えていたのじゃ。邪魔するな」

「ハッハァー。恐れ入ります」

「ところでお館様。どうやら、大和では海に沿って鉄鋼が在るようです。いや、そうにちがいありません」

敬福が頷いた。顔の輝きが増した。

「国の充実には、鉄こそ要であるぞよ」

天を見据えて敬福が力づよくいった。

このころは、農地の拡大による生産性だけでなく、交易による利益も追求できる素地が国内に整ってきた。後の平安朝や奥州藤原氏の繁栄の素地も遠くこの辺にあり、とにかく国家経営にとって、大和朝廷の経済基盤が強固になった大きな理由がこの辺にあった。

二

敬福は義慈王の末裔で、百済が滅亡した時、この国の人になった禅広王子の

曾孫にあたる。この血筋のため、百済王家は朝廷からも皇族に準じた待遇を受け、周りの百済系の渡来人たちからは宗家と仰がれていた。《敬福は、性格が放縦にして、生活は自由気ままで、物にこだわらず、酒食を好み、艶福であった》と『続日本紀』の敬福の薨伝にある。

とにかく、規則や慣習にとらわれない発想の自由な人であったようだ。

聖武帝の寵愛もあって、何かと恩賞や賜り物が多かった。自分を頼って来る者には気前よく物を与える豪放な性格であった。余録の多い国司などの地方官にあっても、特に蓄財がなく、清貧の官僚の窮状には心を尽くして援助した。

人心掌握に長けていた。そして、ここぞという時に知力と財力を集中する。財の使い方を心得ていた。したがって、傍に接する者にはまさに豪傑肌の人物に映った。これが役に立った。

金の発見の環境と人的基礎がすべて整っていたのであった。

聖武天皇も自分にはないこんな彼の性格を愛し、公私ともに寵遇した。それに、彼の行動力にも惹かれた。とにかく彼が道理を極めて、物わかりがよく、政治の力量も信頼に足るものであったことは間違いない。すべてが、敬福の運命に幸いした。

「敬福、敬福、参内せよ」都では何かと呼び出しがあった。

敬福は、実は以前から陸奥には金が出るという情報をつかんでいた。自分の配下の百済人脈を活用して、陸奥守に就任してからは小田郡を中心に黄金の採掘に懸命だった。百済人の中に鉄や金の精錬に精通していた人がいたのも幸いした。

「百済王にして、やったり」宮中の役人は口を揃えてそう言った。

陸奥からの黄金発見の知らせに朝廷は歓喜して、改元するほどであった。しかし、程なく、朝廷は陸奥に金の採掘を強要するようになった。というのはそれまで金の輸入国の大和は、金を使って貿易の決済を行うようになっていたからである。

「金こそ経済の要である」

ところで、我が国は、古来、世界有数の金銀銅の産出国であった。戦国時代には自らの領国の経済力を増強するために、熱心に金銀山の開発を進めたり、領有権を巡って他国との間に争奪戦を演じた。江戸時代初期までは産出された金銀は大判・小判として使用され、日本はまさに黄金の国だった。しかし、江戸時代も中葉には金銀に替わって銅が増産され、明治時代には世界有数の銅の産出国となり銅の公害が問題になった。その銅もやがて枯渇した。

金属の地下での生成には巨大なエネルギーを必要とすることが科学的に明らかにされている。火山や地震の多い我が国に資源が存在したことは偶然ではない。今でも採算を無視すれば、各地に残る鉱山を利用できると云われている。

蝦夷征伐

乙巳の変から数えてほぼ二年経過した頃に遡る。中大兄王子は百済の情勢を鑑み、国力増強のために、本格的に蝦夷経営に着手した。

「蝦夷は手強い」

「しかし、東国を治めねば、安心できない」

「彼らの武力は、なかなかだ」

「となれば、拠点を築かなければ」

そこで、まず、越後の北に淳足柵、磐舟柵を構築した。後世の城に相当する。しかし城といっても平城である。

「この拠点を堅く固めねば」

「食糧の輸送と備蓄を」

「兵には、味方になった蝦夷を用いよ」

討伐軍の居住が可能な軍事拠点であった。

この頃、現在の関東地方全域には蝦夷が混在していた。ときどき小さな叛乱が起こったが、概ね懐柔され同化していた。しかし、奥地は大王家の力が十分に整わず、先住の蝦夷が侵略者に抵抗した。

「頭が痛いのう」

宮廷は困り果てた。

六五八年には朝廷に命じられた安倍比羅夫が津軽の近くまで進軍し、蝦夷の叛乱を鎮定した。

「何んで、おらたちの土地に入ってくるだ」

「土地は、ずっと前から、おらたちのものだで」

このころ、半島では百済の政情が不安定で、軍事的にも政治的にも大和の援助が必要であった。そこで、大和は百済援助のための軍勢を朝鮮半島に送った。しかし、最終的に唐・新羅に完敗し、遂に百済が滅亡した。このために、国力が疲弊した後は、元明帝の時代まで大和は海外に目を向ける余裕がなかった。

しかし、そのなかで武蔵国で銅が発見されたのは人々に大きな希望を与えた。

「これは、幸先がよい」

元明帝は元号を和銅と改め、これを契機に朝廷は出羽郡を設置し、拠点の城をさらに北に築いた。これに対して、翌年には蝦夷が猛烈な反撃に出た。大和朝廷は渡来系の巨勢麻呂や懐柔された佐伯石湯に討伐を命じた。この時の軍事的成果をもとに、さらに出羽国を設置すると、朝廷は豪族と農民を移住させた。そして、蝦夷の部族を別地に移動させた。このやり方が大和の懐柔政策の常套手段であった。

一方では支配階級の血の純度を護り、他方、庶民や被支配階級には徹底した混血を求めた。これに対して先住民は何度か叛乱を起こした。

「おらたちが生まれた土地だども」

「どうして、よそに行かねばならんのか」

蝦夷の立場からは、大和の朝廷は自分たちの生活の平和を脅かす、侵略者以外の何者でもなかった。それゆえ、必死に朝廷軍に抵抗した。

「大和をはやく統一するのだ」

「もうひと踏ん張りだ」

朝廷は占領地の防衛のために、援軍を何度か送った。

しかし、相互の移住はやがて混血による部族の融和を結果的にもたらした。これが、対立部族の同化政策であり、朝廷の伝統的な方法であった。

明治以後も台湾、朝鮮、満州経営に一部受け継がれた政策である。

聖武天皇の御代になった七二四年に藤原宇合に命じて多賀城を築いた。以後、陸奥国府が置かれ、東北各地の城柵の中心になった。宇合の祖は乙巳の変の功臣といわれる中臣鎌足である。中臣は渡来系の神祇を司る神官を出自とし、不比等のときに藤原の姓を賜った。神官として、一族は東国常陸の鹿島・香取に縁があるという。宇合は藤原氏二代目の不比等の子にあたる。

中臣は遠く、扶餘の朱蒙の傍系勢力の流れを汲む、弁韓、現在の慶州金海の出身で伽耶、任那の故地と関係ある出自であろう。直系の血を引く大王家や百済の王家に連なる蘇我氏とは別の血筋であったろう。しかし古くから大和に土着し、古来の神々を祀る中臣鎌足を取り込んだ中大兄王子は朱蒙の血筋を東方へ巧みに延ばしていった。

遠く歴史を振り返ってみれば、大王家の本国であったはずの故地の任那が次第に力を失い、分国ともいうべき大和の地がいつしか自分たちの本拠になった。その大王家の故地はやがて新羅に滅ぼされ、この大和が本国として徐々に東に支配地域を拡大した。そして、この時代になって、朝廷による統一国家が少しずつ出来上がっていった。

民衆の間でも、先住者と徐々に融和し、やがて一体化していったのが、この時期である。

「この辺り、安全な土地かの？」

討伐軍の兵卒が言った。

「こんどきた輩はおもしろいことをやっておるぞ」

蝦夷地の住民が言った。

「おらがとこでも、やってみるか」

大和の、いや日本の歴史は、古来、実は絶えざる混血と均質化の連続であった。従って、勢力範囲の拡大の経緯は今日の侵略の概念とは異なるものであったに違いない。朝廷は七三三年に出羽柵を雄物川附近に移転した。そんな中で、七四九年には陸奥での金の発見があって、世が大いに沸いていた。

時代が下って、朝廷側は、七七四年に光仁天皇が大伴駿河麻呂を、さらに七八八年には桓武天皇が紀古佐美を派遣したが、蝦夷に敗北した。

「ここは、おらたちの土地だ」

「おまえら、出て行け」

侵略に対しては、なおも執拗な抵抗があった。これらの遠征は平安京建設とともに朝廷の財政を圧迫した。

七九七年には坂上田村麻呂を征夷大将軍とし、現在の東北地方の太平洋岸を平定した。さらに、四年後も同人に命じて蝦夷を征伐させた。そして、その翌年に鎮守府を胆沢城に移し、八一三年に文屋綿麻呂に蝦夷討伐を命じた後は、奥州全域がほぼ平穏になり、大和朝廷による日本の統一がなったと考えられる。

しかし、小さな叛乱は十一世紀の頃までは断続的に続き、前九年の役、後三年の役までそれが続いた。そして奥州平泉への半独立政権の維持へと脈絡を残し続けることになった。

陰謀と叛乱

一

七二九年に天武皇孫の左大臣長屋王が謀反のかどで処刑された。気性の真直ぐな、かの悲運の高市皇子の子である。享年五十四歳であった。陰謀の渦巻く、激しい権力争いの結果の冤罪であった。

「左道（呪術）を学び、国を傾けんとする」

それが謀反の理由であった。

近年、彼の居城跡やこれを物語る興味深い遺品が発見された。そして、この事件の半年後には、藤原不比等の女の光明子が聖武天皇の皇后になった。こうして、皇親体制が骨抜きになっていった。

七四〇年太宰少弐の藤原広嗣が太宰府で叛乱を起こした。政情不安が続いた。しかし、陸奥国からの金の献上の年に聖武天皇が東宮の阿部皇女（後の孝謙天皇）に譲位して、それから三年後に大仏開眼供養をともに行ってからは、しばし平安の日々が過ぎた。

そして、七五六年には、ひたすら護られてきた百済の血筋の象徴でもあった聖武上皇が五十六歳で没した。国際性を物語る数々の宝物の収集家として知られた聖武の治世が名実ともに終わった。多くの遺品は正倉院御物として納められて、現在に伝わっている。

聖武上皇の意向で継嗣のない女帝の皇太子となっていたのが道祖王であった。これを自らの意志で廃した孝謙天皇は、即座に立太子の儀を済ませた大炊王とともに、寵愛する従兄にあたる藤原仲麻呂の屋敷にしばしば行幸し、親密にくつろぎの時を楽しんだ。

大炊王は仲麻呂の強引な推挙により孝謙天皇の東宮になっていたからだ。後の淳仁帝であり、敬福がやがてこの帝に関わり合いをもつことになる。

七五七年七月に大乱が起こった。敬福はこれに対して、舎人親王の子である太宰帥の船王らと衛府の人を率いて、事件の処理に当たった。

「帝のご下命があった」

「ゆゆしき、謀反」

「こともあろうに、親王さま方が連座とは」

橘奈良麻呂の乱である。奈良麻呂は皇室の血統にある橘諸兄の子で参議の重職にあった。事件に連座したのは黄文王と孝謙天皇のもとで、前年廃太子となった天武の孫の道祖王および大伴古麻呂、大野東人、賀茂角足、多治比犢養らであった。

獄囚にある彼等の警護の役を、信頼厚い敬福が孝謙帝から命ぜられた。これらの人々は橘奈良麻呂と共に、大極殿を囲み東宮の大炊王を退け、内相の藤原仲麻呂を殺害し、塩焼・道祖・黄文・安宿の四王を天皇の候補とし、最終的に黄文王を孝謙天皇に代わって帝位にたてる陰謀に加担していた。

しかし、王の中から密告があり、四百人以上の要人を巻き込む企てとして、首謀者が捕縛され、拷問で死んだ。これに連座した陸奥国司の佐伯全成が取り調べを受けた。前年四月に全成が黄金の貢納のために入京したとき、叛乱への参加を誘われたことを白状し、朝廷の尋問が終わった。その後全成は首を括って自殺した。

七五九年七月に、敬福は伊予守に転任した。そして、二年後の十一月には、さらに南海道節度使に任命された。なんとも目まぐるしい転任の連続であった。所管は紀伊・阿波・讃岐・伊予・土佐・播磨・美作・備前・備中・備後・安芸・周防などの十二ヶ国である。その結果、約百二十隻の船を擁する水軍の提督に

なった。そして、七六三年正月には、敬福は六十六才ながら讃岐守に転任を命ぜられた。

ところが、その翌年の九月初旬には、今度は太政大臣恵美押勝（藤原仲麻呂）の叛乱の計画があった。時の権勢の弓削道鏡を除く名目で、叛乱を起こそうとした。しかし、事が露見して仲麻呂は近江へ逃れた。すでに孝謙上皇の追討の手がこの地にも延びていた。あの唐の留学生として名高い吉備真備の討伐軍が迫っていた。

湖畔の道を駆け抜け、湖上は船を利用した。その昔、近江太守であった父の武智麻呂に随ってこの地で過ごした日々や長じて七三五年に自ら近江守として赴任した日々を懐かしく想った。

《今までのことは、何であったのか》

自分の落日を想った。

《わしは、確かに、権力に執着した》

かつて、孝謙天皇の寵愛を受けて、権力の頂点にいたころの自分の華やかな姿を幻影の中に見た。湖面が風に波立つ様子を空ろな視線で眺めながら、来し方行く末を想った。

《でも、それだけではなかった。理想があった。この国のあるべき姿の》

そう、美しい国を、豊かな国を夢見て、現実のものとしたかった。その思いで一杯であった。

この地の湖西高島から塩津港に向かい、越前か美濃で態勢を立て直すこころづもりであった。しかし天運に恵まれず、湖上で逆風に遭い漂流して、高島に戻った。ここで戦いになり勝野の浜で敗れた。

「無念にございます」

数少なくなった従者の一人が言った。

妻子徒党三十四人が殺された。この高島には現在、白髭神社がある。神社の丹塗りの大鳥居が最も美しい姿を映し出す湖中の位置に立つ。稚児柱に支えられた水鳥居が波の光に美しく調和している。その風情がどことなく厳島の鳥居に通じる。そんな想いを巡らせ、松原はしばし脚を休めた。

その裏手にある白髭古墳は押勝一党の墓と伝えられる。全国にはこの名のつく神社が各所に見られる。《シラギ》の名が転じたのが《しらひげ》だという。新羅の子孫が崇めた神社とも伝えられている。

藤原仲麻呂の後押しで大炊王が淳仁天皇として帝位についてから間もなく起こった事件であった。しかし、九月中葉過ぎには石村村主石楯によって藤原仲麻呂が殺されて、この乱は終った。

孝謙上皇の命によって、外衛大将の敬福は十月に兵士数百人で淳仁天皇を取り囲んで幽閉し、その後淡路国に流した。ここで、孝謙上皇が返り咲いて称徳天皇となった。

ところで、近江菅浦には村の娘と淳仁天皇の何とも悲しいロマンスの伝説がある。そのときの愛の証として娘に与えた佩用の懐剣が近くの鎮守菅浦神社のご神体と伝えられている。訪れた神社を眺めながら、血筋が故に権力争いに巻き込まれて、歴史のなかですべてを失っていった一人の高貴な血筋の哀れな姿と行く末とより平凡なことを求めてやまなかった純真な心に旅を続ける松原は想いを馳せた。

二

七六五年十月中頃に称徳天皇が紀伊国に行幸した。この際に、百済王敬福は騎馬将軍に任じられている。

「光栄に存じます」

帝の幼い頃を知る老境の敬福が感謝のことばを奏した。

称徳天皇に寵愛を受けて、この十月に、弓削道鏡は太政大臣禅師となった。そして翌年には法王の位を授けられた。

「禅師そなたこそ、大和の救い」

女帝が道鏡の本拠の弓削寺に行幸した際、刑部卿・従三位の百済王敬福らは、先祖の故国の舞を奏している。代々受け継いできた百済の優雅な舞であった。帝はその優雅さに涙ぐむ程心打たれた。

「なんとも美しい韓の舞よ。敬福」

自らも阿部皇女として、父聖武天皇と母光明皇后の前で、当時八歳の端午節

句に五節舞を舞ったことを思い出した。
「はい、そのようで……」
《もし、弟の基親王が夭折さえしなければ、
ここに居る愛しい御人との恋も自由に行えただろうに》
そんな思いが、純真な女帝の頭を過った。
「百済こそ、雅の源」
「仰せのとおりです」
こんどは、道鏡が帝に相槌をうった。
「管弦の響き。こころが洗われる」
「行ってみたい。百済の里へ」
「いにしえの国、古国よ」
女王にとってはロマンを誘う百済が終生の憧れの国であった。
ところで、聖武帝以来の天皇の敬福への寵愛は決して血筋や黄金を献上したことのみによるものではない。絶えず皇室との親密な交流が、特に天皇との個人的な接触が在ったからだ。
「私は果報者だ。大韓神の加護のなかで幸せな人生であった」
敬福は朝廷の高官として、たび重なる叛乱にも加担することなく、七六六年六月二十八日、当時としては六十九才という長寿を全うした。まさに、大韓神を敬い祖先を思い、自らの天分を享受し続けた百済の末裔の《福と徳》の人生であった。

歌垣

七七〇年三月、河内の弓削の称徳離宮で歌垣が行われた。万代にわたる帝と離宮の存続を祈り、周囲六ヶ村の男女二百三十人の渡来人が夜を通して歌い踊った。
乙女らに男立ち添い踏みならす西の都は万代の宮
歌垣は若い男女にとって、他の部落との間の通婚の機会設定に大きな役割を果たしていた。このころは、山麓の景勝地まで人々が出かけて、賑やかに野外舞踏会を開いたものであった。
というよりは、日のあるうちは野に遊び、日が暮れると篝火が灯され、酒が入って宴は佳境に入る。
日野の朝鮮坊山では、毎年歌垣が行われていた。お月見の習慣と併せて、朝鮮半島からの伝来の風習であった。いまも扶餘や慶州あたりの野原では、夏の夕べに月見の宴を張る。これを野遊とよんでいる。大和の民衆もこの楽しみをまねて、農業神事に取り入れた。
相撲の儀式も民衆の神事の中に巧みに取り入れて、古来の風習と同化させた。祭りの《わっしょい、わっしょい》は《来た、参りました》という韓国語《ワッソ》由来という。相撲の《はっけよい》は《やります》との韓国語《ハッケ、ハルケヨ》に原型があるという。
ところで、日本の神仏混淆の八幡信仰には、放生会の儀式がある。秋の祭りに鯉、鮒、亀、鳥、貝などを放ち、生き物を供養する。この儀式は仏教の殺生戒に基づく。
白馬江の渡し場の亀頭来から亀や鮒を餌とともに祈りながら放流する。このとき黄や赤茶の衣の僧侶が経文を唱え、民衆が祈りを捧げる。今も続いている儀式である。その源流は八幡信仰の放生会と共通のものであろう。
この渡しの名《クドウレ》が《くだら》になったという説もある。
慶州の仏国寺の松林で、水色・桃色・緑・赤など色とりどりの袴・上衣を着た老若男女が楽しそうに踊るのを見ることができる。杖鼓を膝の前において鞭のようなバチで打つ。このリズムに合わせて踊る。韓国ではいまでも一般の家庭で使われている楽器である。日本舞楽の羯鼓に似た楽器である。
因みに雅楽をリードするこの楽器に、演奏を合わせ音曲を仕上げることから《打ち合わせ》という慣用語が生まれた。
筑波山麓の歌垣や常陸国風土記にある童子女松原の歌垣が知られている。筑波嶺の歌垣で詠んだ歌一首と短歌が万葉集巻九―一七五九にある。

鷲の住む 筑波の山の蒙羽服津の 其の津の上に 率ひて 未通女壮士の 行き集

ひ．歌ふ　．歌に　他妻に　吾も交らむ　吾が妻に　他も言問へ　此の山を　領く神の昔より　禁めぬ行事そ　今日のみは　めぐしも　勿見そ　言も咎む莫男の神に　雲立ち登り　時雨降り濡れ通るとも　吾反らめや

この伝統が盆踊りの形で現在の日本に引き継がれた。

称徳天皇が離宮で過ごしたこの年の八月、世の中を騒がせた弓削道鏡は下野薬師寺に配流され、和気清麻呂が都に召還された。宇佐八幡宮のお告げにより、天皇の地位を窺った道鏡が追放されたからである。皇室の流れにある渡来系の高僧であっても、さらに天皇の譲位の強い意志があっても、血の濃度と周囲は彼に皇位を許さなかった。

時代は天武系から天智系の光仁天皇の御代に移ることになった。この時期になって、明信が歴史に登場する。旅人の松原には、それまでにあまり馴染みのなかったこの明信をこれからの歴史の流れのなかで知ることになった。この時代に重要な役割を演じた百済の血を引く一人の女性である。この女人にあれこれ思いを巡らしているうちに、なぜか、彼女の周囲に展開した百済王家と皇室との関わりを知りたい感情の高まりがどうにも抑えきれなくなってきた。

我が家に戻った松原は可能な限りの資料を集めて彼女のことを知ろうとした。そのなかで、資料に現れる原像を越えた映像が、より鮮明に生き生きと彼の眼前で展開して行くことになった。

初恋

河内守となって、交野郡内に広大な土地と屋敷を給わった敬福は、明信にとって厳しいが、やさしい祖父であった。敬福は隠居してからは、ずっとこの中宮で先祖を祀っている。大韓神と神祇を調和させた神道仏教のお勤めを日課にしていた。

敬福が神社に出て、鳥居をじっと眺めていたのをよく眼にした。

構えの間に鳥の彫り物が数羽並んでいる。

「自由に羽ばたく鳥が居るから鳥居というのだよ」

そう教えてくれた。

「その鳥たちが神々と自分たちを結ぶのだよ」

年老いた祖父が幼い孫の明信と俊哲に、目を細めて説明してくれた。

父祖の良き行いの恩恵もあって、敬福は天皇から寵愛を受けて、周囲からも敬愛され、望外の幸せな人生であったことを折に触れて想い、大韓神に感謝していた。そして、この幸せが末永く続くことをこころより願っていた。

その祖父も亡くなった。時代はこれから大きく転換することになる。

時は、桓武天皇がまだ山部王と呼ばれて、日の当たらない世間から忘れ去られた廃れ王子の頃であった。明信は交野で山部王が出逢った淡い初恋の女性として初めて歴史に登場する。

自分の思うようにならない、山部王の心と生活は荒んでいた。

「あの天智天皇の曾孫が私だ」

ことある度に、周囲に無念さを語った。権力志向の強い、頭脳の明晰な男であった。小柄ながらも、傍からは大きく見える出で立ちであった。

聖武・孝謙・淳仁・称徳ときて、この女帝で天武系の皇統が断絶した。

《天武は真の皇統ではない》

《廃太子になった身で、弘文天皇から簒奪したのだ》

《だからこそ、天武系には蘇我を通した天智系百済の扶餘の血が必要だったのだ》

山部王はそう考えていた。

そのころ交野は何といっても、憧れの地であった。総ての流行がここから始まるからだ。それよりも、何よりも、最も優雅な血筋にある百済の姫君たちが住む、風光明媚な行楽の地でもあったからだ。それにこの地では、帝や貴族の狩りや管弦の遊びなど折にふれて催され、社交の場にもなっていた。

『日本書紀』と『朝鮮三国史』によれば雄略大王の頃、すなわち百済の蓋鹵王の頃、筑紫の各羅島で生まれ、島君と名付けられた子供がいたという。この島は現在の壱岐に近い、椿の名所として古くから知られていた加唐島と比定されている。公州で偶然に古墳が発見されたときに、墓誌として《地底を地の神

から買い取ったことと買い主の来歴を記した買地券》が見出された。この墓誌によれば、被葬者は、後に武寧王になった斯麻であった。

彼は東城王の後継として五〇一年に即位し、五〇三年には叔父である継体大王に長寿を願って隅田八幡鏡を贈った。これには当時の百済の不安定な国内事情のみならず、両者がこのような血縁関係にあったからである。

《自分の母である高野新笠の祖先が武寧王である》という。山部王が子供の頃、よく母方の祖父が語ってくれた。

ところで、現在枚方市域にある百済寺跡や百済王神社は、こうして交野に営まれた百済王家の館の様相を想わせてくれる。

その百済王屋敷の傍を覗き見しながら、ある時偶然に、竹の垣根越しに垣間見たのが、見目麗しい少女の明信であった。蹴鞠や骰子あそびをしているのが見えた。時には父君と双六を、また母君とは管弦の優美な曲を奏でていた。

「あれが、百済の雅か！」

「何ともすばらしい調だ」

折をみて

「我が母君は、出自が百済の国ぞ」

と王子が言った。

「そうでございますか」

「何かと百済とは縁があるのう」

そう続けた。自分と明信との共通点を強調し、

話を発展させたかった。

明信も王子と言葉を交わしながら同様に思った。

「自分に心を寄せてくれた、初めてのお方」

彼女の胸がときめいた。

いま、山部王が中山観音寺から天の川に架かる逢合橋へ下る野中の道を急ぎ足に歩いている。細い道である。その先の橋が逢合橋である。その袂で山部王を待っている女性がいた。明信であった。

山部王は人目をさけて逢うために、野中の道を少し急いだ。明信の姿が眼に入った。小走りに駆け寄った。よろめいた。胸のときめきが、彼の足もとを不安定にした。彼には昨日交わした明信との約束の言葉が脳裏を離れない。

「明日は必ず」

と山部王にささやいたことである。そして今日になって

「織姫さまのお参りに行くわ」

といって家を抜け出していた。山部王の入れ知恵であった。乳母一人だけを伴って、約束の橋の袂で待っていたのだった。七夕の祭りの日、山部王と逢うために、織姫を祀る交野の機物神社のお詣りを口実にしたのだ。

天の川を橋で挟んだ対岸の台地の中山観音寺跡にはいまも牽牛石がある。この逢合橋で年に一度、七夕の夜に織姫と牽牛の二人が逢い、愛し合うというロマンチックな話が伝えられている。

暑い夏の盛り、セミの鳴く声のなかでしっかりと抱き合った。

しっとりとした心地よい感触であった。それは二人にとって、初めての抱擁であった。

王家の女

一

独身女性の称徳天皇(孝謙重祚)が後継を指定せぬまま崩御した。称徳天皇の後は天武系列に替わって、天智天皇の孫で、廃れ王子だった白壁王が皇位を嗣ぐことになった。即位したのが老齢の光仁天皇である。それには、実は藤原氏一族の様々な陰謀が渦巻いていた。

「これで、真の皇統にもどった」

その後、紆余曲折の末に、光仁天皇の第一皇子の山部親王はそう側近に語った。百済の武寧王の流れの末にある高野新笠夫人の間に生まれたこの山部親王が後に桓武天皇として即位した。

それについても、また陰謀が絡んでいた。というのは、光仁天皇の皇后となった聖武帝皇女の井上内親王から生まれた第四皇子の他戸親王が廃太子された事件があったからだ。その結果、山部親王が悲願の皇太子となった。

この時代までに天智系と天武系が複雑に絡まった勢力争いが絶えなかった。天武から聖武を経て称徳に到るまでにも何度か大きな政権争いが起こっていた。天智天皇の直接の血脈にある桓武天皇の即位の後にも周辺には、絶えず権力争いが生じた。その度に、桓武は側近らと共に難を切り抜けてきた。

ところで、それに先だって、こんな逸話が伝わっている。光仁天皇が井上皇后との遊びで、天皇が勝負に敗けたときの約束の履行を皇后が迫った。

「どんなことでも約束する」帝の直々の言葉があったからである。

これを聞き及んだ藤原百川がこのことを皇位継承に利用したと『水鏡』に記されている。まさか、このようなことが国の大事の皇位継承に関係あるとは思われないが。

とにかく、他戸親王は、母の井上皇后が光仁天皇を呪詛した罪で皇后位を剥奪されたのに連座する形で廃太子された。これは実は、山部親王を皇太子に立てた藤原百川の謀略であった。百川は藤原式家出身で、後に自分の娘の旅子を桓武天皇の夫人にしている。桓武天皇の後宮には、自分の兄藤原良継の女の乙牟漏を一緒に入内させた。このことからも、桓武天皇時代の初期における藤原式家の勢力の強さを窺わせる。

ところで、百済王一族は義慈王の子禅広を始祖とし、もともとは摂津百済郡を本拠地としていた。持統天皇のとき百済王の正式な身分を授かった。

百済王を《くだらのこにきし》と呼ぶのは、『周書』の百済伝に《王はコニキシと呼ばれる》とあるからである。古朝鮮語で《コニ》は大、《キシ》は吉支と記され、首長や王族の意である。あるいは、前述のように古爾王に因んだ宮廷内の呼び名とも言われる。とは言っても、臣下としての彼らの役職は主に地方の国司であり、その官位も四位、もしくは五位に過ぎなかった。

しかし金発見を契機として、その後百済王家の一族は河内交野郡を本拠とし、朝廷において重く用いられるようになった。

桓武天皇の御代になると、母の高野新笠が百済王族の出身であることから《百済等ハ朕ノ外戚ナリ》と『続日本紀』にあるように、百済の血筋を厚遇した。これにより、百済王一族はやがて天皇家の外戚として栄えるようになった。

その菩提寺ともいうべき、百済寺は王家の人々と盛衰をともにしたが、十一世紀から十二世紀頃に焼失したと伝わっている。百六十㍍四方に及ぶ遺跡からは南北に南門、中門、金堂、講堂、食堂が並ぶのが分かる。それは実に創建時に深い関わりのあった新羅の感恩寺と同じ形式であって、中門から金堂につながる両側の回廊やそれらに包まれる東西両塔の跡は往時の偉容を偲ばせる。

百済寺跡南門から十五㌔ほどで生駒山頂に辿りつく。ここから東十五㌔に東大寺大仏殿があり、西十五㌔に難波宮跡がある。敬福が難波、河内を拠点にした渡来人であったことや、彼ら一族が生駒山を中心に享受した生活の空間を今に伝えている。

百済王神社や百済寺跡を松原が訪ね歩くと、いにしえの大宮人やその子弟の生活の匂いが木陰に漂ってきた。同時に、その栄華の跡にそこはかとなく寂しさを感じたこの辺りである。

二

「お父様。私は継縄さまと幸せです」

父理伯の問いに答えた。

「おかあさまは？」

藤原南家豊成の第二子と結ばれた百済王明信が母の所在を訊いた。

彼女は敬福の子理伯の女で、生まれが現在の枚方市の中宮である。

百済王家では百済の国の伝統による名前がつけられた。

明信は、この交野の中宮の百済王家の御殿からそう遠くない樟葉に自分の屋敷を持ち、入婿の継縄と共に過ごしていた。

樟葉は継体大王が大伴氏の援護で越前三国から入り、即位した由緒ある皇室の故地であった。

その頃は、大伴氏と物部氏は勢力を競っていた。彼らは大王以上の力をもっていたし、現に大王の地位は空席であった。しかしながら、彼等は決して大王位には就くことができなかった。王統に最も大事な血の筋が細いか、殆ど無かったからであった。しかもずっとこの地に住んでいるので、自らの血統は誰に

でも知られていた。つまり出自を偽ることができなかったからである。
明信は、何日も前から中宮の父理伯の御殿に来て、召使いにいろいろと指示を与えていた。自らは、百済風に庭を念入りに手入れした。帝のことを思うと胸が熱くなる。
七八三年の十月のことであった。
明日は、行幸になる帝を百済王家が家のすべてを挙げて接待する日である。遠く唐から百済を経て伝わった宴が催される。
「明信、そなたは明日帝とご一緒にな。決して、粗相のないようにのう」
彼女は父理伯に、夜伽を促されたのである。前から言われていたことである。
高貴な人を屋敷に迎える場合には、寝所に女人が付き添い細々と世話をやき、もてなすのが慣わしであった。その任に当たるのは、その家で最も大切な女性、つまりその家の主人の妻か娘であることが多かった。その場合に、十分な配慮が行き届くには、既婚であって若く美しい者が歓迎され、彼女らもそれを心から誇りと感じていた。まして、帝以上の客は考えられない。明信は人妻で、しかも、帝の昔からのお気に入りである。これ以上の女人は他にいるはずがない。
父母も夫の継縄も弟の俊哲もみんな、明信のこの上もない栄誉を喜んでいる。それを伝え聞いていた帝が誰よりも嬉しく感じて、前日には眠れぬほどであった。
当日のこと、ここ交野の地で、狩猟が行われた。桓武は獲物の雉を三羽、小脇に抱えていた。
「明信、そなたに」
といって、獲物を差し出した。
「まあ、ありがとうございます」
明信が顔をほころばせて、丁寧に受け取った。
久しぶりに見る桓武に、胸熱くときめく。懐かしさで一杯だ。
屋敷の中、襖を丁寧に開けながら、帝を案内する。雅な池の庭を帝が眺める。この広間には楽師が控え、帝の歩調に合わせた優雅な管弦が響く。帝のそばで、明信が百済から伝わる、珍しい絵画や置物の説明をする。
「なんとも、雅よのう」
「それに、調度がすばらしい。のう、理伯」
「はい、ありがたきお言葉」
管弦が舞によく合う。舞楽の優雅さが心を動かす。でも、何よりも帝の側でこんなに親しく語り合うことができる。帝も喜色満面である。唐渡りの玉杯の美酒に酔いながら、雉の焼肉を口に運んでいる。雉は桓武の好みである。
やがて、夜も更けて休むことになった。
緊張と満足感に満ちた寝所で睦言が語られた。二人だけの静かな昔話が続いた。帝とともにずっとそうしていたかった明信であった。
昼間の疲れからであろうか。帝はそのまま、まどろみはじめた。

三

明信はいまや、すでに成長した藤原乙叡の母であった。あの日からしばらくして正四位下に叙せられ、その翌日からは主上の後宮への出仕を仰せつかっていた。身分は内侍司の次官である典侍であった。その頃、出仕していた女官の多くは既婚の身であった。乙牟漏皇后の母である阿倍古美奈が彼女の上司の尚侍であり、蔵司の長官尚蔵をも兼ねていた。古美奈は藤原良継の妻であり、後宮で絶大な影響力をもっていた。
ところが、彼女は翌年の七八四年、遷都であわただしいさなか、急に病で亡くなった。それに代わってしばらくは、明信がその代役をも勤めた。
「自分が尚侍さまの代わりをしなければ」
これが桓武の寵愛だけでなく、後宮での権力を握っていく端緒になった。それから三年後に、彼女は従三位に叙せられ、正式に尚侍に至った。そして、やがて従二位にまで昇進した。
律令制度では、後宮には十二の司が設けられており、その筆頭が内侍司である。その任は天皇の側近くで身の回りの世話をし、臣下から天皇への奏請、天皇から臣下への伝宣を取り次ぐ重要なものであった。また陪膳なども行い、かつ女官全体を取り仕切り後宮全体を管理する役目であった。その長官を尚侍、

次官を典侍と云う。以下、判官の掌侍など幾人もの女官がいたことが知られている。

ここに、政治的陰謀が外から働く素地があった。内侍司は、天皇の身辺に近く、そこには当然天皇との男女の間の、また他の女官との間の愛憎を含む利害が絡んでくる。したがって、後世、江戸時代の側用人や大奥のお局のように、そこに権力と謀略が絡むようになる。

桓武天皇の世には百済王家から急に多数の女性が宮中に召されるようになり、そのうちの幾人かは皇子・皇女をもうけ、高い官位に叙せられた。百済王家から多くの女性たちが後宮に入ったのは、明信の直接的な働きかけと云うよりは一族の思惑であろうが、それを行ってきた彼女は桓武後宮では権勢並ぶものがない実力者となっていく。まさに、政治と権力が一族の閨を舞台にして展開されることになった。

このようにして百済王家に繁栄をもたらしたのが明信であり、実際に平安朝初期にあって女性として最高位に登りつめた。もちろん、敬福のかつての功績や一族の支援があったからであろう。しかし、明信がここまでに昇進し、力を得たのは、桓武帝が、まだ日の当たらない王子だった山部王として暮らしていた頃の初恋の人であったことや帝が終生の愛情を注ぐことのできた女性であったからであろう。それとも、やはり遠く扶餘一系の血をひく明確な百済王家の子孫であったからであろうか。確かなことはわからないが、女性を巡る心の遣り取りからくる権力構造の論理を超えた不可思議に想いをめぐらす松原であった。

とにかく、この百済王明信は皇室に自らの直接の血筋を残しはしなかったが、特別な存在であった。

そのことは菅原道真による『類聚国史』の《曲宴の条》の記事からも窺い知ることができる。

明信は百済王家の血を直接に受け継ぐ敬福の孫娘で、藤原継縄の正室だったが、桓武の寵愛を受け、後宮の長官である尚侍となっていた。百済の高貴な血筋の女性を宮廷奥深くに送り込んだ一族は宮廷政治の細部をつぶさに見ることができた。

その結果、百済王家はもとより、夫の継縄も政治的な、それに当然のことながら経済的な見返りも大きく獲得した。彼は栄進出世して、右大臣の要職を占めていたし、その息子乙叡も出世の階段をかけ登ろうとしていた。

ところで、万多親王が編んだ『新撰姓氏録』によれば、桓武天皇の外祖父の和史乙継は、百済の武寧王の子孫とされている。桓武天皇はそうした血統を意識してのことか、たくさんの百済系の女性を後宮に迎え身辺に置いている。また、桓武に続く天皇も百済王一族と多くの姻戚関係を結び、そのことが結果的に彼らの繁栄に連なった。実際に、内侍司の女官全体を統率する立場の明信が百済王家から次々と女性を桓武の後宮に入れ、百済の血筋を固めたからである。

その基礎を築くために後宮に入った主な百済王家と周辺の女性を挙げてみよう。

まず、百済王家の血を引く阿知使主の末裔であり、陸奥鎮守府将軍となった坂上苅田麻呂の女の全子が高津内親王を生んでいる。彼を父とする田村麻呂は後述する薬子の乱でも密接な協力関係にあったが、彼の女の春子は葛井親王と春日内親王の生母である。また、百済系の貴族、錦部春人の女は坂本親王の母であることも知られている。

ところで、明信の直接の血筋にあたる百済王武鏡の女の教仁は太田親王の生母であり、また百済王教徳の女の貞香は駿河内親王の生母である。百済王家から同じように後宮に入った女性には、ほかに孝法、恵信、明本、教法、真徳、真善があげられる。

「百済の女性は、よい匂いがする」

「みな教養がある」

「優雅な物腰だ」

「あでやかな人達だ。さすがは百済の血筋だ」

身分については、掌膳、尚侍、宮人、女御、女孺で、従五位下から従二位までの高い官位にあった。

さらに、蝦夷征討に活躍し陸奥鎮守将軍となった百済王俊哲の孫娘で、教俊の女の慶命は後に嵯峨天皇に嫁して皇女をもうけている。またこれより先に、嵯峨の後宮には俊哲の女の貴命が入っており、皇子と皇女を生んでいる。この女性二人については、後述しよう。

ところで、皇統は桓武、平城、嵯峨、淳和、仁明と継がれているのに、平城・淳和の後宮には明信と直接関わる者がどうして見当たらないのであろうか。これを知った時に、少なからず松原は不思議に思った。

《これは偶然なのであろうか。どうもそうでもないようだ》

多分、最初は明信は何よりも百済の武寧王から受けた自らの血を自分と同じ血を受けた桓武に連なるすべての皇子に入れるつもりであったろう。そして、伝統的な血脈をより濃く収束させるためにそうしたであろう。しかし、桓武天皇と平城天皇との拗れた父子関係の中で自らの振幅の大きい感情の推移のなかで、嫌悪の念が蠢いて、自らの百済王家直系で子供の時から愛育してきた姫君であってもそこからは一人として入内を取りはからうことがなかった。これとは逆に個人的にも管弦や和歌のつきあいが深く、親近感を強く抱く嵯峨帝の後宮には、彼女に親しい百済王家の美女を送り込んだ女心は興味深いものがある。

ところで、明信と親しい橘嘉智子が嵯峨天皇の間に産んだ皇子が仁明天皇である。そしてその仁明天皇の後宮には、自ら深い関わり合いのあった永慶や豊俊の女など百済王家の女性が入り、御子をもうけている。王家の女性たちの最高の栄達でもある入内に見られるこうした人間模様は、皇室とその周辺の権力構造の一面とそれに連なる女性の関わり合いを雄弁に物語るものである。

天覧相撲

一

時代は下って、七九三年の七月に桓武天皇によって天覧相撲が行われた。このときは、長岡京での観覧であった。

「明信、あの力士」

「立派な体躯よのう」

「はい」

明信が傍にいた。彼女には、何でも気軽に話せる。

平安朝に入って、毎年七夕時に宮中行事にあって恒例とする相撲大会となった。年ごとに基礎を固めて制度諸式を整え、ついに相撲節という独立した儀式ができあがった。

宮廷の儀式を制定した内裏式の中に、相撲式が嵯峨天皇の御代の八二一年に定められている。

この頃にはこの儀式が七月中旬、次いで下旬になり、平安末期には八月に行われるようになった。

相撲節が盛んになるにつれ、大会の二～三ヶ月前に、左右の近衛府から相撲部領使を派遣し、力の強い者と、技に優れた者を競って探し求めた。また、諸国の国司や郡司に強豪力士を宮中に差し出すよう勅令で命じた。こうして、年占いの国家的な相撲節に発展して行った。

節会相撲の当日は、まず《占手》という子供の勝負で吉凶を占った。続いての儀式は、豪華壮麗な《召合》である。その式場は紫宸殿が主であったが、清涼殿、宣陽殿、仁寿殿、綾綺殿、神泉苑、武徳殿、冷然院などでも行われた。庭を掃き清めて砂を一面に敷き詰め、殿上には座を設けて水色と白色の太縞の清楚な幕を張り巡らす。

幕の内での楽人の優雅な演奏のあと、関係者は列をなして整然と式場に参列する。力士は上位の者が幕の内側に控えた。幕の内力士という呼称が現在に続いている。

三百人を越える参列者を兵士が囲み、力士約四十名がその後に付く。その壮観さは絵巻物そのものであった。その順序や配列は複雑で、行列には人形や風景の飾り物が置かれた巨大な標という山車を引き回す。

「何とも見事よのう」

「さようでございます」

斜め向かいの左大臣が丁寧に相槌を打った。

楽人は鉦太鼓をにぎやかに打ち鳴らし、行列の中で軽業師、曲芸師などが宙返りをしたり、木の棒に登ったりした。また、手品師もいて、興を添える。

「見よ。明信、あれは何かのう」

「みかど、あれは百済の手品ですわ」

きらびやかな幡と幟を風になびかせて進む大規模で重要な儀式である。

節会相撲には現代と異なり、土俵と行司がなかった。

「さて、取り組みが始まるかの」

《立合》という役が、左右の近衛府から出て取組を進行させたが、今の行司の任務とは異なる。

「地面に相手を投げ倒すか、手や膝を着かせれば、勝ちぞよ」

「勝ち方を決まり手と呼ぶのだ。明信」

「はい、みかど。よくご存じで」

力士は左右いずれかの近衛府に専属し、《内取》という事前の稽古相撲で、各近衛府で役相撲や順位が選ばれた。最強者には最手、次位は脇の二役があって強い者順に番付序列を作った。召合は一日だけの取組からなり、左右に分かれて番付け順に勝負を決め、脇、最手とも同位置の相手と顔を合わせた。結びは最手同士が取り組んだ。これは紫宸殿で行われることが普通であった。最後の二番の取り組みは、現在の千秋楽の《これより三役》に相当するのであろう。それとは別に、他日行われた選抜戦の《抜出》や選手対抗の《追相撲》なども あり、多彩であった。

「帝、あれは何でしょう」

「あれは、左右の近衛の《寿刺》というがのう」

「何のための？」

「勝負ごとに、勝ち力士側に矢を立て、その合計の数で陣営の勝敗を決めるのだがのう」

「はい」

「その時に一緒に舞楽も奏されるのだが」

楽器だけによる合奏雅楽が管弦であり、これに舞を伴う形式が舞楽である。

桓武は、明信に聞かれて嬉しそうに答えた。そして、続けた。

「個々の勝負は左右の近衛次将が判定する」

「……」

「もっとも、意見が合わないこともあるが……」

ところで当時も《論》という物言制度があった。この場合、天皇は両方の言い分をもとに《天判》という最終判定を下した。

「最後は朕が、勝敗を決めるがのう」

規模の盛衰があったり、天災や政変のために相撲節が中断した年もあったが、射礼、騎射とともに三度節の一つとして、三百数十年間相撲は宮中の重要な儀式になった。

乱暴な技が禁止され、今日に見られる洗練された形と内容が生まれた。この風潮は庶民の間の相撲への関心をも促して、やがて日本の国技となったのである。

二

しかし、一一七四年の高倉天皇の天覧を最後に相撲節会は廃絶になった。

中世以後は、宮廷に関係のある神社では、儀式をともなう神事相撲を行うようになった。とにかく、大和では上古のころから、相撲は農作物の収穫を祈り占う農民の祭り事であった。豊作になり、神の恵みを受けることができるかどうかを、部落で選んだ力士の相撲の結果から占った。

「今年は、きっと」

このような五穀豊穣を祈願し、また神明の加護を感謝する奉納相撲は今も村の鎮守祭りにみられる。

ところで、相撲だけでなく競馬、弓矢、綱引き、石合戦なども、すべて神の思し召しを伺う意味があった。

時代が下るにつれて、民間と武将らの保護を受けて、次第に儀式や装束も整い現在の姿に変わってきた。そして、後世には土俵入りや弓取り式なども行われるようになった。それは神聖な領域での勝負と勝者に対する賞賛の表現であり、やがて伝統の神道と融合して、美しさを体現する相撲文化を形成するに到った。

力士が心・技・体として結実し、綱を締めるのが完成の象徴である。その整った姿が今日の横綱であり、これが理想の力士の象徴となったのは江戸時代か

ら明治にかけてであった。玄武・朱雀・青龍・白虎に因んで柱が立ち、神明造りの屋根を支え、その下の土俵で力士は相撲をとった。それは、まさに、道教方位四神と古来の神祇が結びついた世界の中での《力比べ》の儀式であった。

昭和になると、天井を吊り、さらに方位を示す房が吊された。天皇が正面の位置に座れば、力士は東西に別れる。土俵を作る米俵は農業神への奉納の名残であり、最高位を極めた大関が締める綱も注連縄がもとになり、それらがすべて融合して現在の美しい姿になった。しかし、相撲そのもの支える思想の源流はやはり百済、そして遠く扶餘にあった。

子供の頃から相撲の好きだった松原はそんなことを考えていた。

天皇の都

一

古い奈良の都では事件が続く。とくに南都六宗の政治介入には朝廷は困り切っていた。

何とかここを離れたい。天皇はそう思っていた。桓武は忌まわしい事件が多発した、柵の多い平城京から離れることを決意した。

「新しい政治を行うためには……」

長岡に都を移すことが決まった。

そんな中で、自分の即位に関して最も恩を感じ、信頼の厚かった今は亡き藤原百川の縁に連なる種継が桓武天皇の目に留まった。

「よいか、頼むぞよ。種継」

「ありがたく、お受けいたします」

「かくなる上は、身命を賭して」

藤原種継が長岡京の造宮長官に任命され、造都の指揮を任された。後の平城帝と嵯峨帝の母である藤原乙牟漏と藤原種継とはいとこにあたる。乙牟漏の父の良継と種継の父の清成が兄弟である。その意味でも万全の人事であった。旧勢力の妨害があったものの、造営は比較的順調で、七八四年に遷都を成し遂げた。桓武天皇はその成果に満足であった。

が、翌年九月二十三日深夜、種継は工事現場の視察中に何者かに矢を射られて暗殺されてしまった。享年四十九歳であった。突然の事件で挫折感と絶望感が関係者の心底に走った。

桓武帝はこれを大伴氏一族の犯行として、大伴継人、大伴竹良ら容疑者数十名を逮捕、処罰した。こともあろうに、事件より前に没していた春宮大夫の中納言大伴家持については事件に関与していたとして、官位を剥奪した。そして、これに加担したとして、かつて妥協の末に決めた弟の早良皇太子が廃された。しかし暗殺事件後も、これに怯まず天皇は大納言藤原小黒麻呂らに命じて長岡京の建設を続けた。この地は現在の向日市にあたり、大極殿跡が発掘されている。後に、山城国乙訓郡に属して、平安京の後背地として農業を中心とした地域となった。

桓武は大帝国の唐に倣って、長岡京の南郊の交野柏原に郊祀壇を築いて予定通り十一月に北天祭祀を催した。併せて遷都の神恩を謝し、自らの地上における権力の確固たることを世に誇示した。これは、陰陽道に基づき、中国の皇帝が毎年冬至に天壇を設けて北天を祀り、北極星と日月星辰の運行から、季節を知り、暦をもって農民を導いたことによるものである。

こうした背景があって、古来、生活の根本をなす《耕作》を司る北斗七星を祀る郊祀壇と《織物》を司る織女星を祀る機物神社がこの交野に設けられたのである。ここが若き日の桓武と明信の逢瀬を取りもったことは、すでに述べたとおりである。

それから間もなく、桓武帝の長子の安殿親王が皇太子になった。ところで、藤原種継の女である薬子は、天皇の祝福もあって、自分の長女を安殿親王の後宮に入れることができた。これを機縁とし、東宮付き女官である春宮坊宣旨として自ら、安殿親王に仕えることになった。

「東宮さま。娘をよしなに」

このときが、薬子の安殿皇太子との初めての対面であった。彼女は藤原縄主と結婚し、三男二女をもうけていた。しかし、天性の美貌のためか安殿親王の寵愛を得て、やがて大きな政治的影響力をもつようになった。こうした事情を知った桓武帝は彼女を危険視し、一旦後宮から追放した。この騒動については、後述しよう。

二

種継の暗殺後も諸々の権力争いの渦に巻き込まれた山背国南部の長岡京の建設は事件後も止まることなく、犠牲者に纏わる怨霊を気にしながらも緩やかに継続されていた。しかし、折しも大雷雨による内裏までの洪水は、怨霊で打ちひしがれた桓武に、これを契機に長岡京を棄てる決心と心機一転の再遷都の気持ちを促した。しかし、これがまた大きな乱の遠因になることをこのときの桓武はまだ知る由もなかった。

そんな中で、人心一新も兼ねて、陰陽道に基づく山背国葛野への遷都が渡来系の学識豊かな、弓削道鏡の配流事件で知られる和気清麻呂らによって高らかに提唱された。

「新しい都を……帝に相応しい美しい都を」

他の側近も帝にそれを勧めた。帝はそれを受けて、葛野に大規模な都の建設の開始を命じた。そして、大納言の藤原小黒麻呂、左大弁の紀古佐美、百済系子孫の民部大輔菅野真道らによって工事が開始された。工事は順調に進められ、七九四年に遷都の運びとなった。

十月遷都の詔が《葛野ノ大宮ノ地ハ山川モ麗シク、四方ノ国ノ百姓ノマヰデ来ル事便ニシテ》であった。そして、《此ノ国、山河襟帯、自然ニ城ヲナ作ス、此ノ形勢ニヨッテ新号ヲ制スベシ、宜シク山背国ヲ改メ山城国トナスベシ、又子来ノ民、謳歌ノ輩、異口同辞、号シテ平安京ト曰フ》というような十一月の詔が続いた。

ついに、数々の忌まわしい事件と権力争いの思い出が残る長岡京を捨てて、王者たるべき念願の遷都が成った。思えば、和気清麻呂らの進言から始まった国家の繁栄を願っての遷都であった。陰陽道からみても、水利、軍事から見ても、好都合な都であり、世の平安を願って平安京と名付けられた。唐の都長安に倣った条坊制の街並みは整然としたたたずまいである。

「これこそ、我が理想」

大極殿に直線的に連なる朱雀大路の南端には、間口七間を占める重層朱塗りの羅城門が建設された。都を訪れる人はすべてここから出入りした。東寺と西寺が門の左右に対象的に建設された。その姿を現在に到るまで伝える東寺は往時の規模とその姿をほぼ忠実に推測させてくれる。

残念ながら、十世紀後半に西寺は焼失した。東寺の美しい五重塔はそれからずっと、千年の都の象徴として、桓武の描いた国家と支配者の理想と理念を今に伝えている。

曲水の宴

一

遷都がなって三年目の七九七年、晩秋十月のよく晴れた日のことである。桓武は権力の絶頂に在りながらも、微かな不安をいつも心に抱えていた。まだ都は完成していないし、蝦夷征伐も完了していないことが大きな理由である。しかし、遷都がなってから、神泉苑で毎年、曲水の宴を催すのが慣例になっており、外見は繁栄の極みに達しているかのように映っていた。今日は《梅》や《桜》とは趣の異なる《菊》の宴が張られている。

世の平安を願い、強大な専制君主を夢見た桓武天皇を主とする大極殿は、日の光をはじき返すように天に向かってそびえ立ち、甍の波で空を分けている。富と権力の象徴である列柱の朱色とその祝福を意味する緑色が民の目を驚かし、揺るがぬ権力を誇示している。

平安京は風水の教えに従い造営された。大内裏の南の沼沢を開いて設けられた苑池には常に清泉が湧き出す。ここは龍穴にあたる。水が枯れることのない龍口水が流れるこの場は神泉苑と名づけられた。

曲水の宴とは、咲きほこる花のもとでくり広げられる優雅な宮廷の宴遊である。遣水の流れる曲がりくねった水路のそばに座り、上手から流れてくる盃が自分の前を通り過ぎないうちに一句詩歌をしたため、これを競う。もともとは中国宮廷の遊びである。朝鮮半島の宮廷でも盛んに行われた。そして、百済を経て、大和で発展し、管弦の遊びとも結びつき公家の間で流行したものである。

現在も太宰府では、毎年、春にふさわしい華やかな宴遊が行われる。知名士が招待され、男性は衣冠姿、女性は十二単衣姿というように、奈良・平安時代そのままの出で立ちである。

宴が始まった。酒肴が運び込まれた。帝をはじめ、群臣やお妃に菓子が運ばれた。管弦が響きわたる。百済の舞と古来の舞が披露される。

今日、この日に宮中において開催される曲水の宴は、後に《桜》とともに《王朝の花》となる《菊》が採り上げられた。中国文化に造詣の深い桓武天皇が菊を題材にした和歌を朗詠した。

このごろのしぐれの雨に菊の花散りぞしぬべきあたらその香を

一応の政治的安定と強大な権力が、この菊花観賞の曲水の宴を開催する気持ちの余裕を桓武に与えた。この頃には、菊が園芸的に栽培され、菊花観賞が宮廷儀礼として行われるようになり、現在の《歌会初め》での《お題》のように《菊》が帝から直々に与えられた。

さて、曲水の宴の歌詠みが始まる前のことである。

「何と、良い音の管弦よのう」

「さようでございます。みかど」

「天女の舞のようだのう」

すでに、盃を傾けること幾度か、ほろ酔い気分の桓武は、乙女の衣の裾が風に舞う艶やかさを見た。女官が何やら螺鈿の筆墨入箱と重ねた色紙を用意しはじめた。しばらくして、曲がりくねった浅い流れの遣水に沿って側近が並んだ。その上手には柳の葉がそよぐ。促されて帝はその下の切り株の上に座った。上機嫌であった。

小春日和の日差しが紅葉の錦に映え、そこから光が漏れこぼれ落ちていた。明るく、秋のさわやかな風が頬に心地よい。心が弾むようであった。遣水に流した盃を帝が丁寧に拾い上げ、それを手にした。やおら身を起こし、

「何とも…」

そうつぶやきながら、傍らの女官に語りかけた。

「よい、日和よのう」

「はい、そのようでございます」

赤い傘の下で、顔が赤く美しく染まった女官から酒が勧められた。

「ならば、ひとつ……」

といいながら、盃を傾けた。

宴たけなわになった。座のままに、それぞれ詩歌を詠んでは、酒を飲み干す。

平安遷都の功労者の和気清麻呂をはじめ紀古佐美、菅野真道も傍にあって、一同、秋の高い天を仰ぎ、風の感触を楽しんでいた。皇室の血を大儀に掲げ、己が権力を護ろうとした若き日々と、主上の即位をめぐっての壮絶な争いに一同が思いを巡らした。

《それゆえ、今の主上がある》

同時に、遷都を目前に、こころざし半ばで倒れた藤原小黒麻呂の笑顔を思い浮かべた。この都を一目みせてやりかった。

「正しい扶餘の血が主上には流れている」

その血は、後宮にあって、百済王に連なる高貴な女人がこれからはずっと護ってくれるはずだ。

決まった形式で、詩歌が読み上げられる。そのかん間に帝はつい迂闊にも、安心感から睡魔に襲われ、まどろんだ。蝶がひらりと帝の額にとまった。帝は夢の中に引き込まれていった。優雅な明信の姿が羽衣をまとって天から舞い降りて、玉座に歩み寄った。

「どうして…そなたが」

不思議なことに、この場面は平安京遷都がなったばかりの七九五年春四月のよく晴れた日の様子である。そうしたなか、この神泉苑で開かれた曲水の宴と交野の管弦の遊びがだぶって現れた奇妙な光景である。

「確か、明信は尚侍のはずだが」

やや離れた玉座に座った明信の方を見やった。彼女は《女帝》であった。どうもいつもの様子と違う。目が何度か出会った。自分は女官の席にいる。明信は上機嫌で唐渡りの貴重な茶をゆっくりと飲み干した。玉座の隣には、彼女の夫の右大臣藤原継縄らしき者がいる。

《何かが変だ》桓武はそう思った。

明信が桓武を振り向くその都度に、自らが微笑みを返し、眼で明信の気を引く素振りをする。ふと、桓武は、彼女に機物神社での少女の愛くるしい目を見た。

場面が突然変わった。天の川に架かる逢合橋での人目を忍ぶ逢い引きの場面になった。しかし、どうも様子が違う。急いでいるのは明信である。待っているのは自分で、自分と明信の役割が入れ替わっている。明信から愛されている自分の姿をその中に見ようとしていた。明信が小走りに駆けてくる。自分に向かってよろめきながら近寄ってくる。あの《野中ふる道》が現れた。二人の立場が逆転して、あの日の胸のときめきとその光景が現れた。

夢の中の季節は夏で、日差しが強く暑い。周囲では、セミがうるさく鳴いている。

まどろむ桓武の身に日差しの加減が変わって、晩秋にしては強い日光が木陰のない玉座に注いでいる。そして、周囲は管弦の音だけでなく、人の声で賑やかである。それもそのはず、自分の妃、夫人、嬪、女御らの宮廷女性たちが戸外での開放感から姿勢をやや崩して、互いに陽気なお喋りをしているからであった。

流れに浮かぶ次の盃が明信の前を過ぎようとした。すると、どうしたわけか、明信がすくっと立ち上がって詠じ始めた。

いにしえのォ……

野中ふる道あらためばァ……

《確かこれは自分のせりふなのに》と夢のなかで桓武は不思議に思った。続けて下の句である。

あらたまらんやァ……

野中ふる道ィ……

とゆるりとした美しい声の調べが響いた。

振り返ると群臣たちの目は羨ましそうに桓武自身に注がれている。明信はみんなの憧れの的なのだ。それを自分が手に入れたことへの羨みと賞賛だ。

明信は、詠い終わると、今度は桓武を振り返って微笑みながら、返し歌を求めた。

ところが帝には適当な詩句が浮かばない。《万能であるはず》の自分としたことがどうしたものか。人々は、宮廷内の実力者たる自分に向かって、媚びるように拍手を送り、返し歌を促した。もちろん、明信の座興と知って、周囲も微笑みながら《何かが起こる》のを密かに期待している。

このとき、和気清麻呂が帝の耳元でそっと声をかけた。

「みかど…みかど」

ここで、帝は目を覚ました。現実と逆の夢を見ていた。自分の深層心理を暗示する夢であった。

帝は、周囲の目を憚ることなく、近くにいた明信の座に、にじり寄っていった。明信と一緒にいると心が和むのだ。そういえば、今の夢は遷都がなったばかりの頃の《春の曲水の宴》の光景であった。このときの光景を夢を見たことで、やっと己の心の中の最も大切なことに気がついた。それを、この《野中ふる道》の夢が教えてくれた。

しかし現実には、あの時は明信が立ち往生していたのだ。それに救いの手を差しのべたのが清麻呂だった。

それゆえ、そのあとに帝が

「ならば、朕が代わりに　……　物語を」

といって、明信の言葉に続けて、

君こそはァ…

忘れたるらめ にぎたまの 手弱女我は常の白玉

と素知らぬ顔で返歌ならぬ物語を詠じたのであった。

《とうにお忘れになっておられるわね。でも、無垢な私の心は昔と変わりないわ》

そんな女の気持をこめた歌であった。

あの時、桓武と明信のやりとりに対して、人々は万雷の拍手を贈った。そして、専制君主としての帝の栄誉を口を揃えて讃え、万歳の繁栄を祈念唱和した。まさに、これからさらに大きくなる桓武帝の姿がそこにあった。

《あの日の帝は威厳に満ち、日の光に輝いていた》　明信がそう思った。

桓武が自分の傍らにいま一緒にいる明信に目を遣った。安堵と喜びの表情の

彼女は桓武帝の目に何とも美しく映った。桓武はつかの間の幸福感に浸った。

二人はそんなことを、現実の《菊の曲水の宴》のなかで、それぞれ別に考えていた。

ここで、話はやや脱線するが、菊について語ろう。

菊は中国原産で、万葉の時代までは日本ではほとんど見られなかったようだ。中国の故事に詳しい桓武が菊を取り上げたことは意義深い。八〇七年九月九日の重陽節句には平城天皇が菊花宴を開催した。以後これが恒例になり、大和の宮廷に菊が根を下ろすようになった。

次の嵯峨天皇は唐風の学問や芸術などに造詣が深く、その影響もあって、菊は桜と共に宮廷文化の花となった。勅撰漢詩集の『凌雲集』と『経国集』には、嵯峨天皇の手になる《菊》を詠んだ多くの漢詩が見られる。とにかく宮廷で、重陽節句と菊の花との強固な結びつきが定着した。

菊水による長命の中国故事から、菊花の雫の心身に生気を与える効能や重陽節句の不老長寿の物語は、平安王朝の知識人にとって、和歌や絵画の主題にもなっていた。

この時代には、《菊》が文雅宴会に欠かせない題材として、宮廷でこのような曲水の宴も開かれるようになったという。宮廷貴族の愛好や絶えざる日本人の品種改良により芸術の域に達した菊花は韓国人も愛でるところである。明治維新の太政官布告により最高権威の象徴として天皇の専用の紋章になったことは誰ひとり知らぬ者はない。

戦後は自由に菊花の図案が使われるようになったが、それらは高貴な品格の象徴とみなされ、《桜》とはその扱いが異なることが少なくない。

父と子

一

桓武にとって皇后との間に生まれた安殿皇子は、愛しい子供であった。しかし、生まれつきひ弱であった。となればこそ、皇太子となるべき大事な身は過保護になったのであろう。

後になって、互いに憎しみ合いにまで至った二人の間の関係が何に起因するものであろうか。

二人の間に亀裂を与えた一因に、藤原薬子の存在があり、また我が子の問題に権力が介入したことにあるという。

「どうして、私の自由にさせてくれないのですか？」

「しているではないか」

「私には、私のやり方があるのです」

「おまえは、これから国を率いていくのだ」

「私には父上のように、できません」

息子の立場から言えば、有能な父にありがちな価値の押しつけに対する反発と、それを毅然として跳ね返せない父の存在と能力への越えられない無力感であったろう。

一人の男として、どれだけその苦しみが大きかったことか。

「おれは、だめだ」

「でも、女のことまで、なにも」

安殿皇子でなくとも、自分の最も本質的欲求に連なる愛と性に関することは、たとえそれに問題があっても、他からの干渉は感情的に波を起こすのは当然である。

皇子も父と同様に多くの妻妾をもっていた。そのなかで、藤原縄主の女の入内が決まった。百川・種継の縁に連なる姫君と我が子との縁に桓武はことのほか慶んだ。ところが、こともあろうに娘の介添えで東宮の御所に参内した母の薬子の美しさに安殿皇子が惚れ込み、自分の手元に引き留めて離そうとしなかった。

妻が夜伽で客人をもてなすことも、複数の男性とのつき合いも珍しくない時代であった。したがって、縄主という夫のいる薬子との関係には、安殿にとっても、さほどの心理的抵抗感がなかったと推測される。しかし、多くの女と交渉があったがゆえに、女の性を良く知る父帝は、妖しいまでの美しさと人を惑わす巧みな言動の底に、男を狂わす危険な女の本質を見抜いていた。桓武はそ

んな薬子を嫌悪した。そして、別れを再三再四にわたって息子に迫った。
「よいか。必ず、別れるのだぞ」
彼は《天皇の命令》にやむなく、薬子を東宮御所から形の上では追い出した。しかし、四条東大宮の別邸に囲い、夜な夜な、密かにそこへ通って睦を通じた。
ことは縄主と薬子の娘が東宮に召されたことから始まった。初めは付き添いで伺候したはずの母の薬子に安殿皇子が露骨な関心を示し、やがて身も心も奪われることになった。薬子は若くして亡くなった母乙牟漏皇后に似た女性であったという。傍にいる主役であるはずの娘に対しては、女としての関心を安殿は全く示さない。
「私は、東宮さまの何なの?」
娘は女としての屈辱と悲しみの余り、神泉苑の池に身を投じた。
「恨みに思います。おかあさま」
生きては行けなかった。遺書を残して自ら命を絶ったという。
自らの欲望を前面に押し出し、ひたすら我が身のことのみに関心をもち、娘には決して母親の愛を示さなかった。
「皇子は、私が… 私が、皇子を」
娘の女としての幸せを願うはずの母親が皇子の寵愛に身を任せ、実の娘を押し退けた。娘の心の苦しみなどは全く意に介さなかった。それゆえ娘を死に追いやっても、形ばかりの涙であった。
「どう、この衣装は? 似合う?」薬子は周囲の女官に訊いた。
彼女は東宮に働く身分であるにもかかわらず、着飾って、色香の仕掛けで安殿を誑し込むように桓武には見えた。父桓武には政治的利害を安殿に絡めた薬子の姿を見て、薬子の愛欲への執心だけでなく、彼女の存在そのものがこの国の将来のために許し難きものに思えた。
「いけない。あの女だけは」
そこに、将来の大和を託すべき東宮という重責に不吉の予感がしたのであろう。
「そなたは、私の宝だ。傍にいてくれ。母のように」
閨のなかのこと。皇子が薬子にせがむ。心からそう思っての言葉であった。
「あの方は、皇子さまのことをこう言ってましたよ」との薬子からの告げ口もあった。
遙かに年上の女にうつつを抜かしながら、父の意見に対してはどうしても素直になれない子の安殿であった。それゆえ、桓武は自分の築いてきた国の行く末を思うと、これまで国の指導者として幾多の艱難を乗り切っただけに、天皇としての不安と憤りを感じたのである。
「政治を誤る。国を傾ける」

二

尚侍の職務にある明信が桓武の意向を安殿皇太子に伝える役目にあった。安殿は、幾度となくやって来ては、自分に不都合なことを言う明信を嫌うようになった。
「あの女め!」
「父桓武が意見するのは、あの女狐が側できっと焚きつけているからだ」
そう言い切った。安殿の邪推であり、思い過ごしであった。
父桓武帝に面と向かえば、
「そういう父上も、藤原内麻呂の妻の百済永継との間に子の良峯安世をもうけているではないか」
「……」
「それも永継には内麻呂との間に真夏・冬嗣の二子がありながら」
というように、ときおり激しい口論となった。
しかし、そんな例は枚挙にいとまない。当時は、婚姻の形態が妻問婚や入婿婚の時代であり、今とは倫理観も全く異なっていたからである。したがって、それが言い訳としては理屈が通らない。
「また来たか。あの百済女、追い返せ」

とは言っても、帝の使いである。
「お前こそ、父君をたぶらかした狐ではないか」
「うるさい。うるさいな」
「婆々の口出し無用だ」
聞くどころか、明信に対して敵意を露わにした言葉を浴びせかけた。
「お前に関わりのないことだ」
「とっとと帰れ」
明信が言葉を返すことは皇太子に対しては許されない。歯軋りした。その分だけ、安殿に対する嫌悪感が、心の奥に深く鬱積していった。
「神野皇子であったらば！」明信がため息をついた。
桓武も長子の安殿皇子の行動を見て、彼に替わって、神野親王か伊予親王に国家の将来を託したいと考えるようになっていた。
「それに比べて、兄君は……」
側近の評価でもあった。
「そうはいっても」
といいながら、父桓武はすでに決めた皇太子の安殿親王に皇位を継がせ、適当な時期に神野親王か伊予親王に嗣がせようと考えるしかなかった。
長幼の序の逆転は古来、とかく乱を招く原因になることが多いので、帝も慎重にならざるを得なかった。うわさを聞いて、何かと面白くないのは兄の安殿親王であった。
そのようにして、安殿との間が冷たくなればなるほど、明信の気持ちは弟の神野や我が子乙叡との関係が深い伊予の方へ傾いていった。
神野親王や伊予親王が温厚で、学問に勤しみ、群臣の信頼を得ていたからだけではない。明信は一族の繁栄を思って特に神野に百済の血を送り込んだ。そこには、後述するように神野に対する愛着が強く働いていたからでもある。

皇位と血統

一

ところで、桓武天皇の異母弟の早良親王は兄が天皇位に着いた後、皇太子として立った。しかし、桓武の子の安殿親王が皇太子として立つために邪魔になってきた。我が子可愛さの一心であった。密命があった。陰謀が渦巻いた。
遷都を巡って、藤原種継の暗殺事件が起こったことは前に述べた。暗殺事件に関わったとして早良親王が廃太子されて乙訓寺に幽閉された。ここで無実を叫んで断食した。淡路島へ移送される途中、高瀬橋で亡くなっている。しかし、彼の遺体はそのまま淡路島へ移送された。これが後々まで桓武の心にのしかかる重圧になった。
後に平城天皇となった安殿親王は桓武天皇と皇后・藤原乙牟漏の第一子である。叔父の早良親王が廃太子された後に皇太子になった。まさに、側近あげての巧妙な謀略の結実であった。
安殿親王は生まれつき病弱であった。長じてからも、何かと不安定な精神状態にあることが少なくなかった。彼が病弱であることから、陰陽師が占ったところ、以前に藤原旅子が亡くなり、高野新笠、藤原乙牟漏が相次いで亡くなったことまで、すべて早良親王の祟りであるという結果が出た。
「祟りだ。早良親王の怨霊だ」陰でみんながささやいた。
「そうかも知れない」桓武もそう呟いた。
宮中は重い空気に沈んでいた。帝は弱気になってきた。一人でいると何かに取り憑かれたような感じが強まり、しきりに不眠を訴えるようになった。怨霊は、この時代の政治に重大な影響を与えるものであった。そして、身内の者にまで、その陰を落とすものでもあった。
しかし、表面では、これらをものともしない姿も桓武天皇の真の姿であった。彼は国家を大局的に見ることのできる王者であった。事実、行政的見地からは多くの人材を登用し、国家建設に意を注いだ。《朕の外戚》と呼んだ百済王氏の男女を多く登用しただけでなく、渡来人とは密接な関係にあったし、彼らを重用した。
その理由に、長岡京や平安京への遷都など都の造営の知識と技術を必要とし

ていたことがある。それに蝦夷の制圧や渤海との交流も彼等に頼る必要があったからである。すなわち、これらには渡来人の行政能力や土木技術、外交、軍事の専門的知識が不可欠であったからである。そして、秦氏は山城に、文氏は河内、漢氏は大和に古くから根付いており、活用のためのすべて条件が整っていたからでもある。

平安京のモデルは長安とされている。それに加えて風水地理説に基づく都の設計は、新羅の慶州などが直接の参考になっている。

「唐、それに新羅こそ我が手本よ」

それゆえ、新羅系の秦氏一族が都の造営に関して、百済系渡来人と共に大いに貢献した。また、それまでの唐や新羅との交易に替わり、このころは、高句麗の後裔が建てた渤海との交流に、高句麗系渡来人が大いに活躍した。

「交易こそ、国力に」

それに、国家の統一を達成するためには、優れた戦略と豊富な軍備を必要とした。

「軍備を増強せよ」

「しかし、国々とは誼を……」

これらの渡来人をバランスよく使いこなし、強固な政権を築き上げた桓武天皇は何と言っても政治的に傑出した人物であった。もちろんその政権を支える総合力は当時の支配者総体の素質によるものであろうが。

ところで、後宮の女性の血筋について補足すると、平城天皇も、明信とは直接的な縁にある者ではないが、やはり百済系の葛井氏の女である藤子との間に阿保親王をもうけた。この親王が六歌仙の一人である在原業平の父である。彼は、後に臣籍を賜り、身分を皇族ではなく臣下として過ごした。

次の嵯峨天皇の御代には、天皇の御子でも臣下として生涯を送る者が少なくなかった。当時の皇室の経済的基盤からいって、皇族の人数が多くなり過ぎて、この対策として源姓を皇族に与えることが盛んに行われるようになった。いわゆる皇族賜姓の始まりであった。

明信は自身の姪にあたる百済王貴命を神野妃として送り込んでいた。貴命は、蝦夷征討に活躍し陸奥鎮守将軍となった百済王俊哲の女である。さらに彼の孫の慶命をはじめ、自分が入内に携わった百済王氏の何人かの女性は多くの御子をもうけることになった。

また、百済の一族として親交ある坂上田村麻呂の姪である高津内親王の神野親王への入内にも力添えをした。残念ながら、この内親王は若くして亡くなったので皇后にはなれなかった。皇后になったのは仁明天皇の生母の橘嘉智子、後の檀林皇后であった。

ところで、嘉智子は出自が橘氏ではあるが、地縁で結ばれており、幼い時より自分の膝の上で面倒をみた仲にあった。というのは、彼女の母は明信と同じ交野郡内で育ったので、二人は幼い日の遊び友達であったからだ。さらに仁明天皇も百済王氏の女性との間に高子内親王をもうけたというようなありさまであった。とにかく、明信自身がこの神野皇子と幾重もの縁で結ばれていた。いや積極的に結んだことにもよる。

そして、こんなことが、すべてにわたって役に立った。

《この当時の女性は百済系の血筋でなければ》というよりは、百済王家の血の収束度の高さと近接度が、子孫が支配層の上座に居るための決め手であったからだ。女は文化的にも高貴な百済系に限るといったことであろうか。百済が滅んで一世紀以上経ても、血の純粋さを重視することが百済系の女性を妻に選ばせたのであろう。繰り返しになるが、支配者は自らに純血による血族の維持を求め、庶民や被支配者には混血による均質化を求めていた。

二

平安京が完成した年、百済の阿知使主の後裔である坂上田村麻呂は京に清水寺を造った。彼は軍事的手腕にすぐれた将軍であった。この年の六月、《副征夷大将軍坂上田村麻呂以下、蝦夷ヲ征ス》という報があったと『日本紀略』には記されている。そしてやがて、蝦夷の制圧は事実上、坂上田村麻呂により成し遂げられることになる。

彼は帰順した蝦夷の中心人物の大墓公阿弓流為と盤具公母礼を伴って入京し、彼らの助命と戦後の蝦夷経営への登用を嘆願した。

「ここに居りますは、アテルイとモレにございます」

田村麻呂が居並ぶ高官群臣に許しを請うた。

「敵ながら、いまではみかどのご威光にこころより、臣従の意を表しております」

懸命に続けた。

「ハハァーッ、恐れ入ります」

蝦夷の酋長と参謀が頭を下げた。

「この者たちを、朝廷のために役立てては？如何なものでしょうか？」

田村麻呂が進言した。

「わが朝廷を苦しめたとはいえ、彼等の勇猛さ、部族からの尊敬は格別のもの。敵ながら、まことにあっぱれにございます」

「どうか、寛大なご処置を」

「ならぬ、決してならんぞ」

自衛戦に敗れた勇将を朝廷は許さず、現在の大阪府枚方市で二人を処刑した。一方的に蝦夷を野蛮人とみなし、朝廷が権力を誇示した時代であった。その後、坂上田村麻呂は七九七年と八〇四年の二度にわたって征夷大将軍に任ぜられている。

百済滅亡の頃、百済系移民の多かった滋賀県東部と百済寺付近にある棚田はこの時代の治水と開墾技術の進歩を示している。このころは、すでに濃尾平野の河川近くまで稲作が行われていたようだ。渡来人は土着の豪族と一方では協力し、他方では抗争しながら生活圏を拡大した。その意味ではこの拡大は、異民族征伐ではなく民族融合、文化融合であった。

もちろん、このころ盛んに行われた各地の支配拡大は『日本書紀』からも窺えるように大和の王の権威と実力による侵略の側面を多分にもっていた。例えば、近隣の濃尾平野の加茂郡の地名はそれから推測できるように、当時の有力な氏族の賀茂氏が朝廷の名をもって、かなり早い時期に行った領土拡大であろう。

とにかく大和から出発して各地の有力な部族を従え、神話の中に彼等の歴史を完全に押し込めることによって歴史を一元化し、被支配者に妥協的な歴史を強制した。そして、この時代には、主に東方の蝦夷地に支配地を拡大していく政策を推し進めたのであり、その意味では、もちろん大和朝廷の発展は土地を奪い生産力を発展させていった《侵略》そのものの歴史でもあった。

しかし、彼らの基本的政策に民族と文化の同化と均質化が随所に見られる点で、ヨーロッパ的な侵略や植民地化とは本質的に異なっている。そのことは渡来人が歴史的に先住民族である多くの氏族、また蝦夷とも時間をかけて融和して行ったことに、はっきりと認めることができる。

当時の支配者は確かに、経済的利権を求めて勢力範囲を拡大していった。そして、彼らの傘下に入った被支配者は集団として分散させられ、懐柔されて、最終的には融和の道を辿った。しかし、そこには朝廷の名を用いた、征服者による文化の強制があまり見られなかったという大きな特徴があった。

宗教

一

「仏教では、《本質を説く経》、《内容を語る論》、《践を説く律》が大切です」

最澄が桓武天皇に説明した。

南都六宗から離れた桓武に南都で修業した最澄が近づきになった。これまでは華厳宗・三論宗・法相宗は主要な仏教宗であった。

「ならば、法相宗、三論宗は論を主とする認識論であろうのう」

「そのようでございます」

「しからば、本質を説く経を追求すべきかのう。最澄」

「天台大師こそ学問体系と実践体系を主張したお方です」

魂の救済のために修行中の若き最澄の言葉である。

「天台宗といえば隋朝の初め、智顗大師が創始したのであろうが」

「仰せの通り、天台山にこもって天台教学をお創めになりました」

「どのように？」

「法華経を軸に諸宗を総合し、止観を中心とした修行法の体系化によるもの

でしょうか」
「止観？」
「はい、瞑想のことですが」
智顗のあとを弟子が引継ぎ、やがて華厳思想を取り入れたことを最澄が帝に丁寧に説明した。
「ときに、そなたはいずこで、天台大師の説いた《法華経》を？」
「鑑真和上のもたらした経典で学びました」
最澄が言った。
「和上は律宗の高僧。戒律を伝えると聞いておるが」
「さようで、ございます」
「もすこし、詳しく」
「それらの根本は、慧・戒・定にございます」
「すなわち、経典研究・行動規範・内省瞑想でございます」
「して？」
「心の静止こそ、…内奥深観をもとにした《止観》による定こそ、自己の反省に基づく魂の救済でございます」
「さようか」
「つまり、物となって物を見る。自己を明らかにし、自己を通して世界を明らかにするのです」
「それには、悔い改めと御心の浄化が大切です」
「というと？」
「自らの心の痛みを除くことでございます」
「そう…したではないか」
「はい」
「だから、朕はのう、あの腐敗した政治の改革のために」
「……」
「古い柵を権力という道具で断ち切ろうとして、新しい都を定めたのだ」
「承知しております…」
「それに蝦夷を征伐し、国家の盤石の基礎を創ろうとしたではないか」
「おっしゃるとおりです…」
「それだけなのだ…」
「はい」
「でも、ひとはそうは見てくれなかった」
「そのようなことはよくございます」
「……」
「ですから、話を前に戻しますが、そのためにもまず早良親王と井上皇后の復権、いや名誉回復を。
どうか、そのように」
「……そうか、わかった」
「そちには、新しい教えをこの地でのう」
「有り難きお言葉。謹んでお受けします」
桓武帝は親王禅師と呼ばれた、不遇な弟の早良親王を想った。即位はしなかったが、この弟に帝は崇道天皇の尊称を贈った。
「どうか、浄土にのう」
「必ずや、そのように」
最澄は七六七年に近江国に生まれた渡来一族の末裔であった。幼名を広野といい、父は三津首百枝であった。七七八年に出家し、行表を師として近江国分寺に入り、二年後には得度して最澄という僧名を名乗った。七八五年に東大寺戒壇院で受戒し、比叡山に登り、草庵を結んだ。さらに三年後には比叡山に自

刻の薬師像を安置して三つの法灯を祀った。
平安遷都のために、行き場を失ったが新しい教義を説く最澄は、桓武にも平城にも魅力的であった。
「そうか。ならば、唐にも渡って、研鑽せい」
桓武の言葉であった。
これに従い、八〇四年に入唐し、天台山にて道邃や行満から天台の法を学び、翌年には唐より帰国した。そして、八一七年からは東国巡化に出た。
「《一隅を照らす》は信仰の心である」
彼は言った。
「仏教は一部の特権階級の学問であってはいけない」
「仏教は多くの人を救う教えなのです」
そう言って、比叡山に入った。
不滅の法灯は、大和に新しい世の到来を人々に告げる灯であった。これは心と世の隅々までも遍く照らす平和の灯である。光輝く世にあっても、暗い闇の世にあっても大師のこの灯は永遠に続くものである。今日見られる《日本人と仏教》のきずなも、この灯によって徐々に導かれた結果であろうか。後に伝教大師と諡号された彼の許からはやがて多くの優れた高僧が輩出し、その影響は鎌倉仏教に連なることになる。
そして八二二年六月四日に、比叡山中道院にて入寂した。

二

一方、空海は七七四年、四国の讃岐に生まれ、幼名は真魚であった。空海の父は佐伯直田公善通、祖先は蝦夷と百済の血を引く豪族であった。母は阿刀玉依姫といった。父の弟の大足は母玉依姫の妹と結婚し、阿刀家の養子となり家を継いだ。阿刀氏は代々学者の家系で、真魚は阿刀大足から論語や史伝や漢文などを学んだ。十七歳のとき、奈良の大学寮に入学したが中途で退き、山野で修行に入った。
因みに、大足は桓武天皇の皇子伊予親王の侍講をしており、空海の大学入学や入唐に際し、大きく尽力した。その子孫は明治初年まで、俗人ながら官命により京都東寺で代々事務管理を務めた俗別当で、家系は現在に至っている。
ところで、佐伯氏は移住を強制された蝦夷の出自の子孫であり、後世に名を残した多くの政府高官を輩出している。このように、後の世に大きな影響を及ぼすような学者、宗教家、政治家などを育む土壌を作るに至る民族融合が強力に推し進められた。そして、得られた人材をかなり積極的に登用した大和朝廷の採った政策は、併せて評価する必要があろう。
仏教寺院の強い干渉から逃れようとした桓武天皇が都を奈良から平安京に移した、その頃、空海は神道と大乗仏教に注意を向けていた。
「私は、密教の奥義を学びたいのです」
朝廷より二十年の唐留学の許可を得た空海は最澄らとともに、四隻の船団からなる遣唐使節団に随行する形で九州から乗船した。しかし、出発後に嵐で船が離散し、空海と最澄の船は一ヶ月以上の漂流の末に、別れて唐の別の港に到着した。空海は西明寺にしばらく止宿し、その後に訪れた長安の青龍寺で、彼にとって密教の師恵果との運命的な出逢いがあった。
「この者こそ、これまでわしが待っていた」
師は密教の第七代総司教で、並み居る高弟を越えて、空海に密教の伝授に取り掛かった。
「法の伝授は、身体のすべてをもって行う」
そういって、恵果は先師から受け継いできた密教のすべてを自ら空海に伝授した。すでに死期を悟っていた恵果は、それから三ヶ月後に入寂したが、その前に、密教の後継者とした空海に大和での密教の流布を指示をしたと言われている。
師の恵果が入定すると、留学僧としての約束である滞在期間に違反することではあったが、空海は師の指示に従って、その翌年に使命を果たすべくして唐から九州に戻った。そして、如何なる経典や仏具を持ち帰ったかを記した『請来目録』を直ちに朝廷に提出した。
当時、最澄と天台宗については桓武天皇に続いて、平城天皇による保護が進められていた。したがって、後ろ盾の薄かった空海と真言宗はそのまま九州の

地に留まっていなければならなかった。

しかし、嵯峨天皇が即位するとその保護のもとに、すぐに空海は都に入ることができた。

「これで、やっと布教ができる」

翌年、華厳宗の総本山の別当になった空海は、ここで恵果から受け継いだ密教の儀式を厳かに遂行することができた。

「儀式はすべて恵果先師からのご伝授にございます」

この時期には最澄の密教に対する興味から宗教上の互いに密な交流もあった。というのも、奈良時代の主要な仏教宗であった、華厳宗・三論宗・法相宗に代わって、このころは、桓武以来、保護にあった天台宗が大きな力をもつようになっていたし、その後の仏教界に測り知れない影響を与える多くの人材を擁していたからである。八一一年になると、空海は乙訓寺の別当になったが翌年これを辞し、高雄山寺で真言宗を説くことになった。

「本格的に、真言を!」

さらに本格的活動を志して、高野山の下賜を請っていた空海は八一九年にこの山中に開基した。ついで、四年後には、嵯峨天皇から任された東寺を真言宗の中心とするために高雄山寺からここに移った。そして、高野山の千㍍の山頂近くに、金剛峰寺の開設を決意した。

このころは、嵯峨天皇やその周辺の文化人と宗教のみならず、幅広く宮廷の文雅を通しての交流が深まっていた。これについては後述する。

淳和天皇が嵯峨天皇の跡をついだ頃、空海は初めて『真言宗』という言葉を公に用いた。東寺講堂で布教のかたわら、空海は皇太子の師になっていた。

八二八年には、東寺の近くに庶民の教育のための綜芸種智院を創立し、これが軌道に乗ると高野山に隠棲した。そして八三四年に真言院創設の許可を得て、自らの大きな使命を果たしたことを悟った空海は、翌年三月二十一日に自らの言に従って高野山で入定した。

空海の人生には彼の運命と後の弘法大師に連なる数多くの偶然が語り伝えられている。第九回以後に行われた遣唐使派遣で空海と同じ航路で往復とも災害を免れたのは、僅かに一回、それも最澄とともに渡航したときだけである。このときの渡航に使われた往路四隻中、空海と最澄がそれぞれの乗っていた二隻が辛うじて大陸に無事に着いた。どちらかが沈没していたら、我々が今日、目にする《仏教・思想・文化》は、全く異なっていたに違いない。

空海は恵果和尚より灌頂を受け、正当の密教伝承者となった。唐皇帝の国師でもあった恵果が一介の留学僧の空海を運命とはいえ、どのようにして彼を見い出し、大日如来の密号である遍照金剛の号を短期間の修練しか積んでいない者に与え、周囲の多くの高弟を越えて正式な後継としたのかは、謎のままである。

ところで、空海の生誕地の善通寺、長安の遍照金剛誕生地、高野山の入定留身地、これらの三大遺跡は全てほぼ同じ緯度の上に在ると言い、しかも前述のように、空海は自らの入定の時期を予告の通りに実行したという。

生誕地を訪ねた松原は、地元の人の話を聞いて、改めてその不思議さを思うとともに、深い畏敬の念が心の隅々に広がっていった。

このような伝説から空海は、いまもなお、ずっと高野山奥の院に生き続け、人々の幸福と世の平和を願っているという。そんな信仰が生まれ、民衆の中に広まった。また、彼の社会活動が広く行われたこともあって、民衆を救うという幾多の足跡の伝説が全国の各地に生まれ、人々の間には根強い民間信仰が育まれてきた。九二一年になって、醍醐天皇が空海の類まれな功績を讃えて弘法大師の称号を贈った。

それから千年以上経た今にいたるまで、民衆の救済者として空海は人々の心の中に生き続けている。そして、霊場八十八ヵ所の巡拝はその証しでもあり、願いでもある。

後宮の愛

一

絶対君主を目指し、制度を整え、国力を高めてきた。《民は自分を覇王という。すべてを我が儘で決め、数多い妻妾を侍らす好色な帝》という。確かにそうであった。

桓武は自らの来し方行く末を思った。でも、この世にあって帝の面子を投げ出し、本心をさらけ出して頼れる者はない。優しく見守ってくれる者もいない。周囲は自分の機嫌を伺うばかりの群臣や女官であった。

「こころの平安がほしい」
だからこそ、最澄を通して御仏との交流をもってきたのだ。
「平安京も世の平和とともに、自らの平安を願ったものだ」
その中で、権力や政治と無関係につき合える女性を頼り、共に手をたずさえ、真に互いに労わりあって生きたかった。しかし、伴侶となる女性は生涯、自分のそばにいなかった。自分の生活の場は、多数の女たちがひしめく後宮であったが、そのような女性を見い出すことができなかった。
女たちが天皇亡き後の、我が身と我が子のことのみに腐心する。優雅に振る舞う女たちも醜い心理的葛藤をさらけ出す。嫉妬、怨嗟、いじめ、呪いなどが女の世界に漂う。それは、身分とは全く関係のない女の性である。入内した娘たちの親も天皇のことなど心底にはなかった。自分の利益のために利用する権力でしかなかった。とくに次の帝になるべき皇太子の周囲では、女たちとともに、そこに渦巻く思惑が火花を散らす。
「我が子が次の帝に。そうでなければ、高い官位と職を」
浅ましい姿であった。それを自分の家系の繁栄のためだけに考えていた。それゆえ、いつも、桓武は一人ぼっちだった。それが帝の偽らざる気持ちであった。
物の怪のせいか権力を欲しいままにしていた、あの桓武帝が病に伏った。あんなに大きく見えた体が嘘のように小さい老体である。
丁寧で優雅な言動が表面を飾る後宮から、病になって離れてみて、はじめてすべてがわかった。
「いつ、祈祷の僧が来る?」
「本日の予定です。物の怪は退散しましょう」
彼女たちは、儀礼的に帝を見舞いに来るだけであった。
「みかど、一日もはやく、ご本復を」
その中にあって、明信は尚侍という職務をはなれ、一人の愛する男性として桓武の容態を気遣っていた。夕刻になった。燭台に灯をともした。
「みかど、お休みになれました?」
そばに侍して看病する明信の姿があった。
「明信…」
「はい」
「明信、そなたそこにいたのか」
「ご気分は?」
「ありがとうよ」
「そなたの夢を見ていたのだ」
「何をおっしゃいます。お戯れを…」
「朕は、いや、わしは本当にそなたの夢を見ていたのだ」
「……」
「明信、わしは孤独で淋しい」
「……」
「わしは怨霊を恐れる臆病な一人の男に過ぎぬ」
「……」
「ただただ、毎日が不安なのだ」
「……」
沈黙する明信に真顔で語った。自分を誰よりも桓武はよく知っていた。
「明信……」
桓武は云い澱んだ。
「……」
こんどもまた、二人の間に沈黙が漂う。
「いや、わしをそなたの腕で支えて欲しいのだ。……不安なのだ」
「死霊が怖い。生霊も怖いのだ」

「……」
「のう、みなは何といっている?」
「……」
「さぞ、わしの悪口を言っているのであろうな」
「いえ、決して、そんなことは」
「世の夫婦のように、そなたといつもいたいものだのう」
「……」
「どうか、離さないでくれ」
静寂の中に、燭台の赤い炎がはじけて、急に明るさが増した。
燭台の菜種油の残りが燃え尽きる直前の最後の輝きであった。
「は、はい…」
明信は、はにかみながら、帝の小さく軽くなった体をしっかりと自分の腕で抱き締めた。
「みかど…」
「明信…」
明かり障子を炎が照らした。二人の影が揺れて映った。

二

翌日は、昨晩よりももっと気分がよい。二人の想い出の話が続く。
「七夕の日のそなたとの逢い引き、天覧相撲でのそなたとの会話。本当に、楽しかったのう」
「はい、わたしも……」
「それに、もう二十数年も前になるかのう。交野に行幸した日のことを、いま思い出しているのだ。……」
「私とて、あの日のことは、……ただ、もう、夢のようです」
彼女は父理伯に呼ばれて促された夜伽を思った。激しい鼓動が胸から全身に波打ち伝わる、張り裂けんばかりの思いであった。明信は、そんなことを思い出していた。
「あの夜は、一睡もできなかったのう。明信」
「……」
「そなたとの間に子があったらのう」
帝から突然にそう云われて、明信は返事に戸惑った。
藤原内麻呂の妻の百済永継は、自分との間に良峯安世を生んでいる。明信の表情を見て、桓武はふとそんなことを思った。
「もし御子が授かっていたら、こんな清らかな気持ちではいられなかったわ」
「そうかのう」
「きっと醜い女の闘いに明け暮れる日々になっていたに違いないわ」
「……」
「こうして、帝を心から愛しながら生きられなかったでしょう」
桓武は目を閉じて聞いていた。
「そうかもしれんなぁ」
そう云いながら、
「あの頃は、若かったなぁ」
と明信の袖を引いた。
ふと、帝のこの言動から返歌に困ったあの曲水の宴での帝の古歌を連想した。
愛しい帝から名指しで返歌を求められたことである。
「は、はい、ただいま……すぐに」
そうは答えたものの、どうしてよいか咄嗟には適当な詩句が浮かばなかったことである。
もとより雅な王家に育った、教養も人並み以上の彼女である。そして、詠歌も抜群の才媛である。しかし、あの時は遠い日の甘い美しい思い出の中で、夢

見心地に陥り、女心は異常に高ぶっていた。
《帝とのやりとり。何とも羨ましいことだ》そんな声が聞こえた。明信は、返し歌の催促の拍手に、普段の宮中での冷静な物腰をすっかり失ってしまった。
「そうであったのう」
「でも、みかど、あなたはそれとも知らず、悠然と構えて、盃を取り、素知らぬ顔で口へ運んでおられましたね」
帝との思い出の会話が続く。
その間に、周囲から《とく、返歌を…》との催促の声が聞こえたのを鮮明に思い出した。
「その声にせ急かされるように、そなたは《君こそは…》と上の句を詠じ始めたのう」
「そう、そこでわたしは初めて、大変なことになったのに気がつきましたわ」
「……」
「古来、返歌が慣習ですし、わたしは迷いましたの」
「どうして」
「愛の相聞歌へは愛を籠めた返し歌がたしなみでしょうから」
走馬燈のように、二人の会話の中に、かつての情景が再現された。
「冷や汗がにじみ出てきたわ。お妃や高官群臣の前で」
その中には、夫の右大臣藤原継縄の心配顔が見えた。
《うまくやれるか》夫の立場からは、帝に失礼なく、妻が無事にそれをこなせるかどうかが重大な関心事であったようだ。そんな夫に不満がないではなかったが。
「あれは、ちと興が過ぎたようだのう」
桓武もあの時、雰囲気からそのことを察していた。
無理なことを言ったことを今にして明信に謝った。
「でもあの時は、どうにも引っ込みがつかなかった」
そう言いながら、どうしたものかと思って清麻呂の方を見やったのであった。
そんなことを思い出していた。
「みかど、すこしお休みください。……」
明信が桓武帝の言葉を遮った。
「いや、よいのだ、よいのだ。
こうして……もっと、話したいのだ。……」
「生涯、変わらず愛した女人はそなただけなのだ」
「はい……」
明信は、彼の顔を見ながら、にっこり微笑んだ。
「その証に、この護り刀をそなたに」
明信が手に取り、頷いた。
「わしと思ってのう」
すべてが、自分の思い通りになった頃を想った。でも、それも今の自分には、遠い過去のことになってしまった。
そんな姿の帝を見つめながら、あの時、救いを求めて帝と同様に清麻呂に視線を投げかけたことを明信が静かに告白した。
「わたしも、思いが溢れ、心が動揺し、先をためらっていたのです」
帝と明信のそんな表情を見て、清麻呂が助け船を出す決心をしたのであった。
《帝、主上が……　お続けください……》と目配せしたことである。
若き日の帝と明信が相思相愛の仲にあったことは、誰一人として知らない者はいなかった。それゆえ、時を経たあの時点で、なお遠い昔のことを忘れずに詠じてくれた帝の心持ちが嬉しく、同時に得意な気分であった。それは、たくさんの女性を前にして、偽りのない、女としての明信の気持ちでもあった。
とはいえ、やはり我が身の公の立場を思ざるを得なかった。そんな中で、巧

みに、第三者の恋にすり替えた思いやりのこもった桓武の機転でもあった。

「うれしかったわ」

桓武が詠い終わると、驚きと安堵、それに感嘆の声が入り交じって、居並ぶ群臣たちが総立ちになったのだった。

明信に寄せた桓武の愛情と信頼は、ずっと変わらず生涯を通して死の床まで絶えることなく続いた。二人の間柄は、権力者のもつ側面を象る《美しい語り草》となり、後世に伝えられた。

これらの思いを胸にいだきながら、桓武は細く弱い息の下で、

「ありがとうよ。明信」

と言い残した。最後の言葉であった。

それから数日後の八〇六年三月十七日、桓武は明信が看取るなかで、静かにこの世を去った。高く聳えた王者の最後であった。

四

桓武天皇が没すると、すぐに安殿親王が践祚した。平城天皇である。直ちに、明信の官職が解かれた。薬子は内侍となって宮廷に返り咲くことになった。薬子なしではとてもいられない。帝にとっては、そんな毎日であった。

しかし八〇九年になると、平城天皇は病の床に就いた。自らの手で死に追いやった、異母弟の伊予親王の怨霊に、傍から見て異常なほどに、悩まされた。これについては後述しよう。

「薬子、もっと近く」

「物の怪だ。ほら、あの襖の」

「帝、何も」

「あそこに」

「お気を確かに」

最澄が宮中に呼ばれた。

「ならば、ご譲位を」

先帝の頃から宮廷と関係をもっていた最澄がそう進言した。

怨霊から逃れるためにこの年の四月、在位三年で平城天皇は遂に同母弟である神野親王に譲位する決心をした。皇位を離れれば、怨霊から解放されると考えたのである。怨霊から逃れたい一心であった。

「お上、上皇として政治にご関与のほどを」薬子がいった。

もちろんそのつもりであった。政務に対する執念は強かった。ともかく、譲位して八ヶ月後には、上皇は平安京の宮殿を出て旧都平城京に移った。

『奈良御集』に、懐かしい奈良の都を眺めて詠んだ平城上皇の御歌がある。

故郷となりにし奈良のみやこにも色はかはらず花さきにけり

薬子も内侍のままで上皇のもとに呼び寄せられた。

「平城の都こそ我が都ぞ」

「これで、何もかも変わります」

「また、我が正しい位置に戻る」

薬子は平城上皇の側近ながら、内侍として朝廷に出入りできる。それゆえ、国の政治に関して、ますます大きな影響を及ぼすようになっていた。

「朕は譲位はしたが、政務をみる」

「当然のことにございます」

これはやがて嵯峨天皇との対立の原因となり、嵯峨天皇が平安京に、平城上皇が平城京で政治を行うという状況になった。そして、天皇と上皇による制令二途の変則状態が起った。

当初はそれほど混乱はなかったが、八一〇年に嵯峨天皇が制度改革により、これまで内侍司の権限下にあった臣下の天皇への奏請、また天皇から臣下に伝える伝宣を蔵人頭の職掌とした。尚侍の藤原薬子の行動や平城上皇の行動に制約を与える意図があったからであった。ここに、嵯峨天皇と平城上皇との対立が表面化し、やがて激化の途を辿った。

樟葉

一

樟葉の屋敷での毎日は、神仏を思い、花鳥風月を愛でながらの静かで落ち着いた生活であった。仏間には、先祖代々と夫継縄の位牌と、先頃崩御した桓武帝の形見の護り刀が安置されていた。

明信はかつて祖父の敬福から譲り受けた数珠を、朝な夕なに仏間で手にする。位牌の前で手を合わせ読経する。早朝に、笥に飯を盛り、閼伽を汲み仏前に供える。時には庭の草花を手折り、これを手向け法華経を読誦する。静かな隠遁生活であった。余生をここでゆっくりと過ごすことを心から念じていた。

一人息子の乙叡は藤原雄友の引きもあり、伊予親王と親しく交わっていた。すでに中納言となっていた。明信自身の縁の深い神野親王との微妙な絡みからいって、行く末に多少の懸念はあるものの、とくに深い心配事はこれといってなかった。

時折、都からの風聞や噂を耳にした。即位間もない平城帝は、父桓武帝が定めた制令を改め、独自色を出そうと懸命であるとのことだ。例えば、参議に代わって観察使が設けられた。これは地方を明確に把握する有効な制度であった。この任には、桓武の側近であった藤原緒嗣と平城帝の腹心の藤原真夏が、ついで薬子の兄仲成らが任じられた。しかし、按察使を兼任させられた緒嗣は、任地の関係から実質的影響力を削がれた形になっていた。

それまでに政治権力の移り変わりを見てきた明信は無常の世を達観していたと、自分自身は常に思っていた。それゆえ、これらから離れて、自らの心の平安を神仏とともに保っていた。

「明信さま、どうやら薬子がまた新帝とともにあるとのことです」

「そう……」

薬子は自分に替わって尚侍になったのだ。

祖父敬福の優しい、ふくよかな満足顔を思い出した。争いに関知せず、己を知り、足るを知り、誇り高く生きた祖父は彼女の最も敬愛する人であった。祖先の禅広王の伝説を思った。兄豊璋王とは違って王の身分にこだわらずに生きたという。敬福の護ってきた《百済の王家の祠》を時に訪れては、見たことのない祖先の故国クナラを思った。

しかし、静かで安寧な日々は長く続かなかった。八〇七年十一月、突如として平城天皇は異母弟の伊予親王を謀反のかどで、母の吉子夫人と共に強引に逮捕して、大和の川原寺に幽閉した。これに連動して、伊予親王の外戚の藤原雄友らが除かれた。

「私たちは、何もしておりません」

「濡れ衣です」

そう言いながら、母と共に毒を仰いで、あわれ親王は自害し果てた。

無実にして潔白なることの証と帝への抗議のためであった。

「何ということか。これが政治か」

明信はためいきをついた。

事件は、平城帝の猜疑心によるものと伝えられる。桓武が伊予親王を深く愛したことへの仕返しであったともいう。自分と桓武への怨霊が伊予親王にだけは憑いていないという祈祷師の言葉が帝に伝えられていた。吉子夫人が毎日神仏に祈る姿を呪詛とみなし、それをきっかけとする巧妙に仕掛けられた罠であった。それほど、父桓武との心の断絶と相剋があり、伊予親王に対する憎しみも強かった。

「中納言もだ。とらえよ」

この事件に連座したとの嫌疑が中納言乙叡にかかった。職を解かれた。もとより事件に関係があるはずはない。平城は彼の無実を知りながら、敢えて失脚させたものであった。

「明信めが、思い知ったか」

これが明信に対する根深い意趣返しだと分かった乙叡は、約半年後の翌年六月に四十八歳で憤死した。

「わたしが何をしたというのだ」

『日本後紀』によれば、これに関して《天皇が皇太子の頃に乙叡が宴に侍し、酒を注ぐ折りに不敬あり》とあり、宴席での些細なことを根にもったと考

えられる。彼の死因にも疑問があったという。桓武帝の側近であった藤原緒嗣らもそう思った。

「もしかして、毒を」

涙が止めどもなく流れた。

「ごめんなさい」

乙叡の好きな菊の花を庭から摘んできた。花は愛する息子が母に支えられて咲き誇る姿を映しているようであった。牡丹と菊はともに母子で愛でた美しい花である。

「私のために、おまえが殺されたようなものね」

仏壇の新しい位牌に何度も語りかけた。

やがて彼女は意を決した。もはや、それまでのように朝夕に位牌に手を合わす追憶と冥福を祈るだけの日々ではなくなった。子を思う一人の執念の女に変わっていた。

「明信さま。新帝は生霊、死霊に悩まされているそうです」

と侍女がいった。

「やはり、怨霊が……」

既に、齢六十の半ばを過ぎて、かつての美しい髪も白く変わった姿の明信がそう呟いた。思い詰めた彼女の表情は硬いながらも、静かに遠くを眺めている姿が不思議に妖しく美しかった。

「待っているのよ。それまでね。乙叡」

愛する息子の位牌の前であの日誓った決意はゆらぐことなく、この日、はっきりと行動を起こすべく準備に入った。涙を拭った眼が鋭く異様に光った。

明信は、ごく側近の従者だけを伴って、隠密に京の寺院を尋ね、そのまま数日屋敷を空けることもあった。彼女は、かつて後宮で培った人脈に働きかけ、密かに連絡をとりあった。

僧を自分の屋敷にも呼びよせ、終日密教の儀式を行った。法力の効果は忽ち現れてきた。平城天皇が病に伏した。それから程なく、嵯峨天皇に権力が移った。

血の命脈

純粋な大和の心をもつ、快活で美しい、百済王家の血を引く女人がこの地に幾多生まれ育った。そのうちの一人に貴命がいた。父は陸奥鎮守将軍兼下野守の百済王俊哲で、明信の弟にあたる。彼女はこの百済王家の血を引く姫君であった。

実は、平安遷都の翌年に、明信にとって子供のころから何かと相談相手であり、最も信頼していた弟俊哲が没した。強力な後ろ盾の一部を失うことになり、百済王家に翳りが見えた。しかし、持ち前の強運をさらに拡げていく彼女の存在はそれからも長期にわたって、宮廷の中で大きな影響力を保ち続けた。

明信の引きがあって、貴命は嵯峨天皇の女御として入内し、基良親王、忠良親王、基子内親王をもうけた。八一九年には、従五位上に叙され、同年、従四位下に昇叙された。八五一年に没したが、薨伝には《容姿麗シク、手技裁縫ニ長ズル》とある。

明信の甥の百済王教徳の女の貞香と貞徳はすでに落飾していた。二人とも、いまは亡き桓武天皇の女御であったからである。

時代は、これから平城天皇を経て嵯峨天皇のもとで弘仁貞観文化の開花期から爛熟期に入ろうとしていた。

小鳥が内裏の小さな林の中で囀る、日の光が柔らかに射す縁側で、貴命は侍女に手伝わせながら、趣味の仕立てを行っていた。百済風のお召し物である。

《貴命そなたは、命の尊さを願って名付けられたのです》いつか、幼い頃に、伯母の明信に言われたことをぼんやりと思い出していた。伯母の膝の上で遊んでいたときのことであった。

そこに、聞き慣れた声がした。顔を上げると、女官の姿が見えた。久しぶりに突然訪ねてきた伯母の明信が庭先に案内された。貴命に、にこやかに話しかけた。

「あら、すてきなお召しね」

「だれかと思ったら、伯母様」
「自分で仕立てたのね。それにしても、本当に上手ね」
「楽しいんですもの。こうしているのが」
「時々、お上もここにお渡りあって、日向で物語などしますのよ」
「伯母様もお変わりなく」
「今日は、急にちょっとこみ入ったことを」
春ののどかな日には、そぐわない政治の話であった。
「それは、また……」貴命の美しい顔が曇った。

翌日は、まだ幼さの残る慶命をあわただしく訪ねた。彼女の父教俊は敬福からみて曾孫で、明信の弟俊哲の子にあたる。
慶命にとって、父の教俊が朝廷で毎日働く姿は、祖父俊哲の思い出の姿と一緒に、誇り高い自らの祖先を遠く想い浮かべるのに十分な出で立ちであった。
美しく成長した、亡き弟の孫の慶命の姿をみた。そこに、昨日会った貴命の姿を重ねてみた。その様子から、桓武帝が心血を注いで築いた朝廷と大和の発展を思い、帝の遺志を継ぐべく心構えを明信は新たに強く確認するのであった。
この子たちは弟俊哲の目に入れても痛くない、百済の武寧王の正当の血を引く子孫である。
この子らこそ、百済の血を末の世に伝える役割を担っている。
《血は神代より天孫から受け継ぎしもの》であり、貴重な命の血を慶賀するのが使命のはずである。だから二人の名を貴命とし、慶命とした。
帝はもちろん天の支配者日女尊とそれを嗣ぐべき、扶餘のそして百済の血を受けた日皇子である。そして、この百済の姫君も帝と同じ扶餘の血を受け継ぐ女性なのだ。
「私も帝をお慕いしております」
慶命が言った。
「なれば、やはり帝の子をなし、血を護る定めなのです」
「はい、そのように」
「そういえば、管弦では帝にひけをとらないとのこと」
「いいえ、そんな」
「詩歌もそのように」
「いえ、とんでもございません」
「でも、さきの交野の遊びでは主上と貴命さまとご一緒で、とても楽しゅうございました」
本当は、貴命よりも、慶命よりも、自分がその役目にあった。その運命を担っていたはずである。でも自分の血を、その百済の血を皇室に残すことはなかった。桓武とはその運命にはなかった。そう明信は思った。
慶命は嵯峨後宮に入内し、女御として皇女の源潔姫を生んだ。他に源善姫、源若姫、源定、源鎮などが確認されている。嵯峨天皇の退位後は従三位に叙され、五十戸の封を賜り、八三六年には尚侍に任官、五年後には従二位に叙された。薨伝には、従一位を追贈されたとある。それほど、慶命への寵愛が厚く、譲位後に嵯峨院に移ると、彼女のために小院と呼ばせた別宮を与えた。彼女は血筋からいっても、百済の伝統に則した有職故実に詳しかったと伝えられている。
このころは皇族が臣下になることが盛んに行われた時期であった。前記のように、嵯峨天皇の皇子女が相次いで源姓を賜り臣下になった。これに準じて、百済王家も持統帝から賜った名誉ある姓を返上し、《三松》の姓を名乗った。御真木の古い名と音に通じるミマツの姓を帝から賜ったからである。三松家は現在に家系をつなぐ旧家で慶命の従兄にあたる百済王豊俊がその祖であるといわれている。
ところで、聡明な神野皇子は兄の平城天皇とともに筆が達った。
「空海という名僧がいるそうな。何とか都に招けないものかのう」
神野皇子はそう望んでいた。
「でも、父君の意向もあるし、兄君、いや主上の意向もあるしのう」

とはやる気持ちを抑えていた。しかし、程なく自らの治世になり、宮中に空海を迎えた。神野皇太子が嵯峨天皇として即位したからである。

本来、帝は平城上皇ともに仏教の深い理解者でもあった。子供の頃から仲の良かった二人ではあったが、いつのまにか権力の構造の渦中で互いに背を向ける立場になっていた。

この期に空海と交わったことが、嵯峨帝に大きな文化的転機をもたらした。帝が空海や橘逸勢とともに日本三筆であることはあまりにもよく知られている。遠く百済の世の優雅さが、文化人の帝の許で花開くことになった。

柳の垂れ下がる宮中の美しい池の辺や交野ヶ原の木立は、貴族の優雅な社交場となった。池に船を浮かべ、歌を詠み、書をしたため、管弦を楽しむ。近辺では馬を走らせ、狩りをも楽しむ。まさに、遊びを通した大宮人の社交の世界が展開した。百済の雅の文化がここでさらに洗練され、完成されようとしていた。

兄と弟

一

奈良の都は荒廃していた。ここに帰った側近の藤原葛野麻呂や藤原真夏らとともに平城上皇が朝廷に対して、新宮を造営することを要求した。両親とも同じであり、血を分けた兄弟であっても、病弱な兄には弟に対抗する気持ちがどうしても強かった。何につけても、優れた弟を心の深層で憎んでいた。帝も兄上皇には約束もあり、何かと気遣いが多く、やや閉口していた。しかし、自分にとって、やはり血を分けた兄であった。幼い頃二人で遊んだことを思い出した。

譲位後は上皇は怨霊から抜け出し、健康を回復した。すると彼の側近で尚侍としての特権をもつ薬子や兄の仲成らは、上皇の名で次々に命令を出した。自らの出自の藤原式家を昔の姿に戻したい一心でもあった。

本来の命令系統はもちろん形式的には天皇が優位である。しかし、何といっても上皇は前の天皇である。このころは、上皇は天皇とほぼ同等の権力を所有し行使できた。それゆえ、矛盾した命令が伝達され、行政が混乱するようになった。

この頃、嵯峨帝は空海との交流が進み、宗教だけでなく、話す内容が文化の全般にわたった。詩歌、書道を通して一層親交が深まった。また、異母弟の良峯安世が良き側近として文雅を語らい、時を忘れて過ごすほどの親しい仲であった。

因みに良峯安世は、後述の在原業平らとともに六歌仙の一人にあげられている僧正遍昭（良峯宗貞）の父であり、『経国集』を編纂した。

しかし、帝が病の床に伏した。原因がはっきりしない。平城の怨霊が嵯峨に憑いたと囁かれた。側近が気をもんだ。明信はこうした報せを聞くたびに、平城側の陰謀が、嵯峨天皇の朝廷にも後宮にも、延びていることを微妙に感じとった。というのは種々の密議が平城側に漏れていたからである。秘密保持には女官は危険な存在でもあった。密命をおびて、後宮に紛れ込んでいる者もいたからである。

「何かが起こりそうだわ。何もなければよいが」そう、明信は独り言を言った。

ここにきて、平城上皇が再び政治的な力を発揮しようとした。仲成・薬子兄妹はその背後から、強力にその後押しを推進した。すると平安京への遷都に不満を持っていた人たちが上皇の周囲に集まってきた。その勢力は平安京の嵯峨天皇側の勢力に匹敵するほどの大きさに成長していった。そして天下の状況はまるで、都が平安京と平城京の二ヶ所にあって、帝が二人いるかのようになった。

年が明けて八一〇年になると、明信はしきりに、都に出掛けては寺院にこもり、何日も屋敷を留守にするようになった。

桓武帝の柔和な表情と冷厳な顔が、明信の胸に交互に浮かんでは消えた。

「でも、私がやらなければ」

密教は超自然現象もその手の内にあるという。

この年、平城上皇は平城京の修復に功のあった人達に独自に叙位を断行した。これに対して嵯峨天皇は薬子が掌握していた内侍司を命令伝達経路から外し、令外官である蔵人所を設け、天皇の命令伝達の機構改革を行った。蔵人所は天皇の機密文書を扱う仕事であり、薬子らの情報操作を妨害する目的があった。このことは前にも述べた。この長官である蔵人頭に藤原冬嗣と巨勢野足が交代

で就任した。
このころ、平城側にいた藤原真夏と嵯峨側の藤原冬嗣の兄弟の対立も深刻であった。仕えた主人と自らの地位への執着と互いの競争心がここにも露骨に表れていた。右大臣の父内麻呂を巻き込んでの駆け引きがあった。
明信の身体の中で扶餘の血が騒いだ。守るべき百済の血筋だ。遠く半島で巡らされた三国時代の互いの陰謀を想った。
「何とかしなければ……」
最も頻繁に連絡を取り、情報収集と画策をともにしたのが明信にとっては甥の教俊の女の百済王慶命である。
「お願いがあるの」
慶命にささやいた。嵯峨の後宮にあって、慶命は既に内侍司で重要な地位を占めていた。
美貌の彼女は大伯母の指示に従って帝と後宮に仕掛けられた謀略の阻止を図っていた。というのは薬子を通じて上皇の密命を帯びた者が到るところに潜んでいたからである。
「おばさま、ご心配なく」
いまでも明信をそう呼んでくれる。
明信は嵯峨帝の女御となっている姪の百済王貴命、同じく嵯峨帝の夫人となっている橘嘉智子をも頻繁に訪ねた。
「主上の朝廷を護る。何としても」
「主上の皇子に流れる血こそ、最も濃い扶餘の血なのです」
この時点では、明信はもはや策を弄す、そして息子の復讐のための夜叉ともいうべき一人の女性になっていた。密議を凝らし、打つべき手を嵯峨帝に奏上させた。蔵人頭の冬嗣がいつも帝の傍にいた。
「こちらかも、仕掛けなければ」冬嗣が提案した。
「うむ……」
ついに、右大臣の父内麻呂との間でも暗黙の了解がなった。

出　陣

一

何度か、平安京を廃す願いが薬子から上皇になされた。
「お上、どうか長岡へ！」
長岡京の完成は、非業の死を遂げた父種継にとって、そして仲成・薬子にとっても大きな悲願であった。
「それが、叶わぬなら奈良へ都を」
仲成が薬子とともに、奈良をこよなく愛する上皇に上申した。
実際に、このころ観察使を経て参議になっていた仲成が兵を動かし、嵯峨天皇を廃して、平城上皇が再び皇位に就くための策謀があった。そして、ついに八一〇年の九月に入って、上皇の名のもとに平城京に戻す還都令が発せられようとした。天下の人心はここに至って大きく揺れ動いた。彼らの政権奪還の陰謀と桓武帝が心血を注いで建設した平安京の否定は誰の目にも明らかになった。
自らの地位の安泰も考えた天皇は平城上皇に対して、やむを得ず武力を背景とした強行策をとった。しかし、それも本格的な戦闘を回避するためであった。
九月十一日の昼近く、朝廷より明信の許に緊急の知らせが入った。《何ごとか？》と屋敷の人々が色めき立った。
表のざわめきと馬のいななきが明信の耳にも入った。先駆けの家来が門前で案内を乞うた。
「ただいま、表に蔵人頭の巨勢野足殿がお見えです」
侍女が興奮しながら明信に伝えた。
「かねての打ち合わせどおりです」
「いよいよなのですね」
明信は得心して門口で蔵人頭を迎え入れた。顔にかかる風が無性に快かった。内密の相談ということであった。安全のために内裏への参内が命ぜられた。宮中では群臣が明信に親しく呼びかける。

「散事どの、いや明信どの」
官位をもつが、職務を離れているので、散事と呼ばれた明信が答えようとした。
「はっ、はい」
久しぶりの参内で、緊張してすぐには声が出なかった。後宮のかつての腹心の女官を通して、すでに、文屋綿麻呂将軍に与力を働きかけていた。明信は朝廷よりその確認を求められていたのだ。
すでに、彼女は気脈を通じた観察使らからも、朝廷の命を受けて、彼らの昇任を引き換えに、協力の約束を内密に確保していた。それに、仲成の観察使としての掌握下にある伊勢だけでなく、近江や美濃の三国をも朝廷の味方につけることができた。それもこれも、兼ねてからの百済人脈を通じての迅速な運びであった。これらのことは、誰からも怪しまれず、女の仕事としてやり遂げることが可能であった。
平城還都の最終的な要求を朝廷に認めさせるために、仲成が上京する情報が朝廷に入っていた。
内裏では上皇軍の行動を逆手に取った方策の密議が進行していたのである。《遷都を約束する》と見せかけ、造宮使としての助力のために冬嗣と田村麻呂を奈良へ派遣することにしたのだ。それは表向きには、平城京の混乱を未然に防ぐべく勅命であったが、仲成や真夏に知られぬように、政治的手腕に長けた右大臣藤原内麻呂と冬嗣が練り上げた策であった。しかし、実際には、平城上皇側の《側近》の陰謀と行動を封じ込めるための武力行使の準備であった。
「先手を打つことが、未然に混乱を避ける最良の方法です」
諸嗣もそう献策した。歴戦の将も賛同した。かくして、九月十二日早朝には、宮廷周辺は臨戦態勢に入った。まさに、内乱勃発の危機感が高まるなか、朝廷側からのクーデターであった。嵯峨天皇の聡敏なところは文才だけに留まらず、乱の企ての知らせがあったその日のうちに、軍備を整え、国政分裂の危機を回避する決断力と実行力を持ち合わせたことにある。

二

右大臣内麻呂は嵯峨天皇に上奏して叙位と昇任による人事異動を行った。電撃人事である。遷都の要求に平安京を訪れた藤原仲成の右兵衛督の任を解いた。替わって藤原緒嗣を直ちに右兵衛督に任じ、仲成を逮捕した。同時に朝廷は一連の騒動の原因は全て仲成・薬子の兄妹にあるとして、仲成の佐渡への配流、薬子の追放令を出した。天皇としては、実兄の平城上皇を傷つけないように全ての責任をこの二人に押しつける以外に方法がないと判断したからである。ここで正式に嵯峨天皇の勅命を拝した内麻呂が冬嗣に命じ、造宮使による平城宮の包囲によって上皇側の動きをおさえようとした。さらに、本格的軍隊として遅れて出陣する坂上田村麻呂将軍らの任務を決め、各地の関所を固め、東国に動き出した上皇軍を遮断することにした。
平城上皇が勝てば、高岳皇太子を経て、皇統の扶餘の血がより薄く受け継がれることになる。何としても嵯峨天皇による扶餘の血統を守る。そのためには策略が必要である。密偵の女官を通じて働きかけた文屋綿麻呂は、すでに田村麻呂将軍の意向に従って彼の麾下に入っていた。あとは、東国の百済系人脈にさらに手を回し、上皇軍を遠巻きにし、戦わずして降伏を迫ることであった。まさにその謀議を通じて打つ手を漏れなく張り巡らしたのであった。
夜更けに冬嗣が父内麻呂に出立の挨拶をした。内裏からの見送りがあった。夜明けにはまだ早い時刻に、先陣の蔵人頭の藤原冬嗣が名目上は造宮扶助のために、軍勢・手勢を率いて古都の奈良に向かった。途中の道は露もしとどの下草で覆われていた。それを踏みしめながら駒を進めた。日の出前の冷気が顔に快い刺激であったが、心の内を憂鬱の雲が覆い尽くしていた。父右大臣も承知でやむを得ないこととはいえ、子供の頃一緒に過ごした一歳違いの兄真夏と戦闘になることを道すがら、想像した。
「兄上とは戦いたくない」
このころ、事が露見し、追撃を受けようとした上皇軍も危険を察知していた。上皇が藤原葛野麻呂、藤原真夏、薬子らと共に軍を動員し、奈良からいったん東国へ出て勢力を整備すべく、兵を募っているとの情報が伝令を通じて朝廷に入っていた。
続いて、明け方には甲冑姿の老将軍の出発である。内裏に帝が現れた。
「大納言、頼むぞよ」
「恐れ入ります」

挨拶が済むと早速出陣であった。時も過ぎて、すでに坂上田村麻呂将軍は交野の途中の道筋にあった。明信の屋敷の付近を通過しようとしていた。

馬上で伝説の百済と祖先を想った。田村麻呂は遠く百済の血を引く阿知使主の末裔といわれ、百済王家とともに皇室に扶餘の血を入れている。そんな経緯もあってずっと百済王家と親しい交わりがあった。かねてから桓武帝の腹心であった藤原緒嗣とも、いざという時のための打ち合わせを行っていた。

出発の前に、明信の控えていた後宮の一角に立ち寄ったときの光景を思い浮かべた。宮殿の庭に整然と並んだ勇ましい甲冑姿の兵を従えて、共々挨拶したことである。

「帝の御下命により、奈良の関所に馳せ向かいます」

将軍の張りのある武勇に満ちた声での出陣の挨拶であった。

「さようでございますか」明信が頷いた。

「いざ出陣します、百済の血のために」

百済に縁の深い二人が互いに挨拶を交わした。

「すでに蔵人頭殿は山城を過ぎ奈良坂あたりでありましょう」

明信が言った。将軍が大きく頷いた。本来なら妃に先に挨拶のはずであるが、ついうっかり、貴命、慶命の入内以前の昔に戻って、先に明信に語りかけてしまった。しかし、それに気づいて、あわてて将軍が二人に言上した。

「貴命さま、慶命さま、上皇さまは東国で挙兵のご様子、ご謀反を必ずや阻止します。ご心配なく」

「これもひとえに上皇さまでは叶わない血の脈絡のためです」

「ことはすぐ済み、安寧が回復します。どうか、ご安堵なされますよう」

百済王家の二人の寵妃の貴命と慶命から激励の言葉があった。

「私達は、大納言殿の武運を陰ながらお祈りしていますわ」

そんなことを老将軍が馬上で思い出していた。

一方、明信もこの宮殿で将軍を見送ったときの光景を反芻していた。蝦夷征伐で名声を欲しいままにした老将軍は、今日は若々しかった。いつもとは異なり別人のようであった。彼は桓武帝以来、朝廷の恩顧に心より感謝している律儀者であった。

将軍がゆっくりと馬の手綱を従者から受け、たぐり寄せる。その姿が何とも美しく、一幅の絵を形づくっていた。《これにて…》といって馬上の人の将軍は、朝露に濡れた道の彼方に消えていった。

明信が貴命と慶命にささやいた。

「お父様の、そしてお祖父様の俊哲殿が元気であれば…… 坂上大納言殿と共に、再び出陣であったのに……」

将軍一行は、木津川沿いに路を辿っていった。そして、現在の奈良市帯解にあたる大和国添上郡で、上皇の一行は将軍らの兵に行く手を塞がれた。このとき、平城側から寝返った蝦夷征伐に活躍した文屋康秀将軍は坂上田村麻呂将軍にすでに合流していた。上皇に従う者たちやその配下の兵は二人の将軍名に恐れをなし、総崩れになって逃げ散った。この時点で勝敗のすべてが決した。結局、上皇軍は真夏らの東国行きの計略を断念せざるを得なかった。

逃げ場を失った上皇側近の薬子は毒を仰いで自害した。

「誰が何と言おうと、女として幸せでした。こころの底から、お慕いしておりました」

「上皇様、先に旅立つのをお許しください」

乱が急速に収束に向かった。将軍が事の顛末を奏上するために、嵯峨帝の待つ皇居に急ぎ馳せ参じた。事が表立って生じてから僅かに六日間で、処分を含めた後始末のすべてが終わった。

上皇は平城京に連れ戻された。そこで、幽閉の身となり、薬子の最後の言葉を伝え聞いた。上皇は嵯峨帝との命をかけた確執と薬子との激しい愛を思い、涙ながらに剃髪出家した。そして失意のうちに五十一歳で没した。乱が宮廷抗争以上のものにはならず終息し、平城上皇の御子の高岳皇太子が廃され、皇弟の大伴親王(後の淳和天皇)が東宮になった。

乱の責任からいって死罪に相当する平城側近の葛野麻呂と真夏は許されて、上皇の側で過ごすことができた。怨霊を恐れる嵯峨の姿勢は法律の弾力解釈により、以後三百五十年間死刑を避ける伝統を造りあげた。このことは特筆すべ

きことである。
因みに坂上田村麻呂は五十四歳で亡くなったが、嵯峨天皇は彼の功績を心に刻み、名将として彼の墓を山科に造らせ、都に向けて立位のまま葬り、平安京の守護とした。

神仏の加護

一

数日後、事件の顛末を坂上田村麻呂将軍が自ら語ってくれた。すでに、明信の屋敷には伝令を通じて将軍からの報告がなされていた。したがって、事件のおおよそは知るところであったが、そのなかでやはり、いろいろと悲劇があったことに気がついた。
将軍が屋敷を去ったその日の夕刻、明信は百済寺と百済王神社を訪ねた。百済の義慈王に連なる祖先の禅広に呼びかけ、大韓神への祈りと一緒に夫の継縄に事の次第を報告した。しかし、祖父の敬福と息子の乙叡には心にわだかまりがあって、手を合わせながらも、どうしても事件の顛末と心のうちを語ることができなかった。
明けて、明信は家に戻った。仏間に一人籠もり、来し方行く末を思った。一応、気持ちの整理のついた彼女は、祖父敬福と我が子乙叡の位牌に向かってやっと静かに語りかける気持になった。
「お祖父様、乙叡、終わりました」
「私は、ひとの心を裏から操りました」
「かつて帝のお傍に侍していたころ、ひとの陰の側面をどれほど見てきたか。そんなことが皮肉にも役に立ったのです」
宮廷の政治は、明信は細部にわたって熟知していた。
「でも、今度は、お国のためでもあったのですよ」
私利私欲のためではなかった。そう自分では思いたかった。しかし、本当にそうであったのだったろうか。
《いや、それどころか、ありとあらゆる裏の手立てを考え、自らの手で謀略の限りをつくしたではないか》大韓神がそう囁いたように思えた。
《その結果のきわどい勝利であった》そう認めざるを得なかった。
闘いに勝ったという晴れ晴れとした実感がなかった。というのは、正面からの闘いではなかったからだ。実際に、機先を制した戦いであった。それも汚い陰謀のなせるわざによるものであった。しかしそうしなければならなかったのだ。
「もとはといえば、身内同士なのに」
権力争いと怨嗟のからむ、悲しい結末であった。
「心ならずも事件に加わった人々もいたことでしょう」
ここに至って、明信は初めて敵の心を推察し、同時に良心の呵責に心が沈んだ。
それからは、しばらくの間、自らの行動の懺悔の日々であった。毎日が、歴史のなかでの埋没感と虚しさで一杯であった。《魂の救いのために最澄とした対話》を桓武が死の直前に明信に語りながら、涙を浮かべていたことを思い出した。
「地獄に堕ちるかも…」
「でも、やはり、母は浄土のお前とお父上のもとに参りたいのです」
しかし、このとき、明信の心の救いは謀反の罪科を死をもって償わせようとしなかった嵯峨天皇のとった寛大な措置を伝え聞いたことである。
「争いのない浄土に！」
祖父敬福の柔和な面影を明り障子の前に微かに見たような気がした。
争いを徹底して避けてきた祖父を想った。
彼女は仏壇の奥に置いた、桓武の下賜である護り刀をそっと手に取った。眼を閉じた。
《みかどの御子がなかった。だから、女同士の醜い戦いに明け暮れることにならなかった》

と帝に言った自身の言葉を思い起こした。
「みかど、そうです」独り言が続く。
「それは、そのとおりでした」
「でも、恨みをもったときのわたしは、ただの女でした」
「私的な了見から、ひとの心を操り、秘術の闘いを仕掛けたからです」
あの時の言動を思い出し、今にして人の行動の根源を知る思いであった。
あのころ、帝が自ら築いた国を護るために、どれほど、心血を注いでいたかを想った。
「だからこそ、帝はやすらぎが欲しかったのでしょうね。山部王さま」
王子の頃の呼び名でささやいた。
「でも、きっと、山部王さまが心配なさった政治の乱れを抑えて、これからも主上はこの国の平安に心を砕くことでしょう」
「そして、万代を一筋の血に連なる帝たちがずっと護って行くことでしょう」
実際に、嵯峨天皇はいろいろな政策を実行した。国司の監視役の勘解由使や都の警備の検非違使などを設置し、人々の生活を大切にする政策を実行した。それらに関連ある格式を定め、十年後には藤原冬嗣に命じて、弘仁格式を編纂させた。格は律令の補足で、式は律・令・格の施行規則である。
桓武帝は大きな血の流れを、そして自分も、実は百済の血筋を守るために生きてきたのだった。それが、明信にも今になって本当にわかった。
しかし、同時に何百年も続いた血筋を護ってきたのが、何のためであったのか、その疑問が頭を過ぎった。明信は、遠く伝説の百済の温祚王を思った。自分が護った血の脈絡が本当に永久に続くのであろうか。そんな一抹の不安とこれを打ち消す一条の光が彼女の脳裏をかすめた。
先祖を祀る百済寺と百済王神社を何度も訪れた。もはやかつての激しさも薄れ、淡白な心の日々であった。時折、蘇るかつての生々しい感情から、自分の罪深さに苦しむことも無いわけではなかった。しかし、大韓神の加護もあって穏やかな日々を取り戻した明信には、扶餘の血筋を護ってきた安堵感でやはり満たされていた。それはまさしく彼女に託された《血の責務》の達成に対する神仏の加護と祝福によるものであったからである。
それから五年の後の八一五年十月十五日に、百済の血を生涯かけて全力で護り抜いた一人の女人が静かにその生涯を閉じた。

二

平城還都を画策したのは、藤原仲成・薬子であった。この一連の事件は《薬子の変》と呼ばれる。彼らは、父種継が造宮長官として敏腕を奮っていた長岡京の完成した姿をずっと心の中で追い続けていた。しかし、これが惜しげもなく棄てられたように彼らの目には映った。
したがって、平安京を新たに造った桓武天皇の政治的決断は仲成・薬子にとっては無念と怨念の渦巻く以外の何ものでもなかった。それゆえ、どんなに立派に見える都でも平安京はとうてい心からは納得して、受け入れられるものではなかった。
ところで、一系の血の濃さを求める皇統にあって、橘逸勢や空海と共に、三筆に数えられる文化人の嵯峨天皇には、皇后の橘嘉智子をはじめとして、妃二人、夫人一人、女御二人、更衣……と沢山の女人が取り巻いていた。そこには、百済からの渡来人の子孫や、橘家、菅原家、紀家など権力者の血脈にある女性が種々見られる。しかし、藤原家が宮廷内で勢力をもちその繁栄を謳歌するのは、まだずっと先の時代である。
嵯峨天皇が退位すると藤原百川の女の旅子が生母である異母弟の淳和天皇が即位した。その後、嵯峨天皇と皇后橘嘉智子の間に生まれた仁明天皇の御代に至って、但馬権守の橘逸勢が春宮坊帯刀舎人の伴健岑とともに、承和の変に巻き込まれて流罪となった事件があった。その結果、彼等の後見にあった恒貞親王が廃太子された。こうして、橘氏・伴氏らが徐々に藤原氏によって排斥されていった。
嵯峨天皇の皇女の源潔姫と藤原冬嗣の間に生まれた娘の順子が道康親王を生んだ。この親王が仁明天皇の皇子であり、後の文徳天皇である。それからは、藤原氏の血が次々に入り込んで来る。そして、すこしずつ百済の血が薄められていくのであった。
もっとも渡来系の藤原氏にも、百済王家の血がこのころは濃厚に入っていた

のだが……。

百済の血はそうした形で受け継がれた。

これとは別に百済王家そのものがその血脈を残した。前述のように、その直系の血筋が三松家であるという。この三松家の始祖が豊俊であり、系図上は敬福―理伯―俊哲―教俊―豊俊―俊房―俊行―俊兼と受け継がれた。豊俊の兄弟に慶仲がいることや慶命が嵯峨天皇の女御であること、また『三代実録』から窺える俊房の存在からもこの家系の存続がわかる。

そのなかで、扶餘の血の薄まりとともに、《百済王》の姓も返上して、名実共に普通の臣下としての《宿禰》に変わり、その後の家系が続いてきたようだ。因みに、この家系から分かれた別系統の子孫により、百済王氏の雅の伝統が、代々篳篥吹、京八幡楽人として受け継がれ、現在の宮中楽人系統として存続しているという。

交野ケ原

現在、国の特別史跡となっている百済寺跡や中宮一帯は、かつて百済王敬福をはじめとする渡来人が活躍した場所である。

渡来人の活躍を想像しながら、旅の途中の松原がこのあたりをゆっくりと散歩する。この辺は《百済寺跡の松風》として枚方八景に数えられる名勝地である。御殿山の北西の眼下に広がる渚本町は狭い路地の入り組んだ、昔の集落の面影を残している。その静かな佇まいの中に、背後の山の斜面には石仏が見られる。いにしえの夢の跡をとどめるこの地は緑が豊かであり、ことに春が美しい。春には、百済寺跡・百済王神社や周辺の寺社に咲き誇る桜が見られる。

七夕伝説の観音山公園から、天の川沿いを下るのも風情がある。

「このあたりであろうか」

「桓武と明信の交わした愛の語らい」

中宮からは、殿山百済寺道を通って、小高い丘の御殿山神社を経て、渚本町から渚の院の鐘楼に出る。やや戻って白雲寺を経て御殿山駅に出る道が続いている。これらは現在市の指定文化財となっている。

毎年、四月には御殿山神社でさくら祭りが、月を追って百済寺跡文化財収蔵展、そして百済王神社と一緒に秋祭りも賑やかに催される。

枚方には、古くからの集落と三角縁神獣鏡などを出土した万年寺山古墳、牧野車塚古墳、禁野車塚古墳などが見られ、当時この地を支配した豪族の政治力と経済力を物語っている。

ここは、畿内一円の要衝の地であり、大王家もこの地の支配を重視した。越前三国生まれといわれる継体大王も、まずここに入り、しかる後に大和を手中に収めた。そのような由緒のある土地であったがために、やがて宮廷文化と百済の高貴な血が根づいた処となった。

この地がいつから《ひらかた》と呼ばれるようになったかは不明であるが、『日本書紀』には

ひらかたゆ笛吹き上る近江のや毛野の稚子い笛吹き上る

という歌が残されている。また、『播磨国風土記』には《河内国茨田郡枚方里》と記録されている土地柄である。

中宮の史跡の百済寺跡は、奈良時代中期に河内守に任ぜられた百済王敬福が、一族の氏寺として崇めたとされる寺の跡である。当時の偉容が礎石などから偲ばれる。七堂伽藍の甍を並べた華麗な寺院であった。それらの復元した遺構を中心に据えて、現在は史跡公園として、人々に親しまれている。

都を長岡京・平安京に移した桓武天皇は現在の枚方市にある交野柏原で唐の天壇に倣い北天を祀り、自らその年の農作業のための天運の道標とした。そしてたびたびこの地を訪れ、鷹狩を楽しみ、宴を張った。以来、交野ヶ原は貴族の遊猟地として名を馳せた。

百済文化の流れの中にあって、宮廷文化の中心地として、歴代の天皇がこの地をこよなく愛した。《薬猟り》など宮中の行事もここで行われた。桓武天皇はこの地に十七回の行幸を行った。嵯峨天皇の時には四回の行幸があったし、仁明天皇の時には五十四回を数え、その後も平安貴族の間には鷹狩りや百済の伝統を引く野遊びが流行した。また詩歌・管弦の遊びも催された。まさに宮廷文化の花が咲くその中心であった。

時代が下って、仁明の子の文徳天皇の御代、天皇の第一皇子惟喬親王は、この地に《渚の院》という別荘を営んだ。鷹狩に興じ四季の花を眺めて心を慰め

た。

よく知られている在原業平も惟喬親王の供をして、狩りを楽しんだことで有名である。業平の父は平城天皇の皇子の阿保親王で、在原の姓を受け臣民になった。

在五中将と呼ばれた業平は六歌仙の一人である。その美男子ぶりは同じ六歌仙の小野小町の美女ぶりとともに人々の憧れのまとになった。

『伊勢物語』の中に、こんな話がある。

交野ヶ原の天の川を訪れた《渚の院》の惟喬親王は

「交野を狩りて、天の川のほとりに至る。これを題して歌詠みてつかわせ」

と在五中将に促した。これに応じて供の在原業平は

狩り暮らし七夕つ女に宿からん天の河原にわれは来にけり

と詠んだ。しかし、これに対して惟喬親王は返歌ができずにいたところ、ひとときにひとたび来ます君待てど宿かす人もあらじとぞ思う

と業平の義父の紀有常が助け舟を出したという。その当時、すでにここ交野ヶ原には天の川と七夕伝説が定着していたようだ。

そして『古今和歌集』にも見られるかの有名な業平の歌がある。

世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

この地に遊び、《渚の院》の桜を詠んだものであることが知られている。

このころは梅が心を映す高貴な花に変わりはなかったが、大和の国には桜の心が加わり、さらに菊の高貴さも加わり、やがてこれらを核に独自の文化を育てていったようだ。在原業平らとともに桜を愛でた惟喬親王の別荘《渚の院》跡は百済王神社と片埜神社のほぼ中間にある。

再びこの地を松原はゆっくりと訪ね歩きながら、遠く《大和と百済》への思いを新たにした。そして《海に架けた血のきづな》と支配を巡って《渦巻いた血の怨念》を想った。

武寧王の血脈は海を渡り、この大和で、愛と憎しみ、協調と対立など様々な形になって展開していった。松原には、それらについての深い意味と因縁の絡む顛末を、旅の初めには到底知る由はなかったが、今になってようやく、その血脈が重要な役割を担っていたことを明確に《知らされる》ことになった。

血は明らかに歴史を形づくった。そしてそれが、今も日本列島と朝鮮半島の歴史的関係に無視しがたい感情をもたらしている。

終　章

日本が遠くシベリアからの狩猟民、南方から来た漁労民、そして中国大陸からの農耕民など、時代別に様々な集団的移住があって、地域差があるものの、相当程度の混血が進み、今のような形になったことは否定できない事実である。言語から見ても、マレー・インドネシアなどのポリネシア系の言葉によく似ている開音節からなる現在の日本語が構造的に韓国語に類似しているのは、変化しにくい音韻は受け継ぎ、支配者の言語の文法を受け継いでいるからであろう。その流れが、三世紀前後から朝鮮半島より渡来してきた王家の祖といわれる支配層とともに押し寄せてきた人々が社会の基礎をつくりあげてきた。その後、種々の抗争を経て、血統を同じくする王家が四世紀後半に渡来するに及んで、より大きな武力と優れた知略をもって、その後の古墳時代の支配階級となった。こうした社会の在りようが長く居住していた先住民とともに日本の文化の礎を形造ったといえよう。その支配者層には、統一的な王室維持と血脈の乱れを極力避けるという北方民族に特徴的な掟でもある血筋の強固な維持の思想があった。それゆえ、王統に血の濃度が近ければより王位に近く、仮に血の濃度がより優位な者が出現すれば、これを取り入れ、権力を離れていても、なおその血への尊厳がその一系を支え血統を維持し、また、必ずしも血統を王位に十分な範囲に維持できない事態が起こっても、血の濃度の範囲を婚姻などにより維持してきた。そして、その血筋が連綿として今日の皇統に連なってきた。それと並行して、支配者階級周辺の家系以外の者には、混血による均一化を求め、随時・随所でそれを行ってきた。その周囲で渡来人達が果たした役割と後世への影響について描写してみた。

なお、古典の歌物語を参考に、百済の文化の流れが交野に定着し、この地で古来の文化を核にして融合・開花・発展したことは、日本のその後と今日に至る文化に与えた影響の大きさを物語る。古来の自然観と渡来文化の融合が大陸や朝鮮半島からもたらされた価値観の前向きの変化と発展を促した典型的なも

のが花鳥であり風月である。自然に対する認識で、とくに目立った変化は桜に代表される花であった。これについては古来、蓮の花とともに梅の花が最も重視され、梅がいわば国の花であったが、平安時代には桜が国の花になり、菊が重んじられるようになったことがあげられる。どれもが日本の風土にあった花であり、貴族が親しみ、文化的にその美を高めるようになった。此の点も文中に取り上げてみた。以下、第二章では権力の抗争をとりあげ、そこで繰り広げられる心の遣りとりと、それらを支えた歴史の考察を語ろうとするもので、さらに、第三章ではそれを支えるる古来の遺跡との現在の日本文化への投影について語るものである。

第二章 大海の都邑

扶餘の血を織る大和の王位と國に懸けた天武の思い
日本の権力機構の基礎がどのように作られていったか
そして、その中で登場する人々の心の動きを和歌に託して物語る。

序　章

我が国では社会の大きな変革期には必ずといって良いほど外圧が働くという。とくに国の存亡の危機感や何らかの敗北感が国内に広まり、苦境に陥ると、指導者の資質が高まり、周囲も一致してその不足を補う努力をすることが歴史の中の随所に見られる。

朝鮮半島と本邦で、部族国家が成長し充実するとともに、国家間の紛争が次第に複雑化し、小さな争いが次第に大規模な国家間の紛争に変貌してきたのが七世紀前半である。最終的に強国の前に決定的な敗北を喫したきわめて困難な時代にあって、これまでの国際交流や戦争の仕方を旧態依然として踏襲した中にあって、大きな国家変貌を余儀なくされた大和は、天智天皇の治世のもとで、大きな変革に取り組んだ。この具体的な動きを必要とするこの重要な時期には百済からの亡命者を受け容れて広く活用するだけでなく、一転して、本邦からも人材を戦勝国に送り制度や法律など多くの事柄を学ばせ、さらに学問の基礎の修得のために必要な人材を積極的に招請した。その結果、新来の人々と旧来の人々が互いに協調する体制が整い、やがて社会のなかで融合同化していった。その際、行政、立法、司法のなどの制度的整備だけでなく、教育文化の積極的向上に重点を置いたことが、後の日本独自の文化の形成の遠因として決定的な役割を演じた。

しかし、この間内外の勢力の激変から国内への圧力のために、日本は不安定な状況にあった。そしてこの期にあって、進取の気にとんだ有能な天智天皇は心ならずも自らの理想を実現する前に、不運にも病魔に襲われ、さらに国内での権力闘争を避けることができず、非業の死を迎えなければならなかった。にもかかわらず、同天皇の遺産を原形として、その後にいくつかの戦乱がありながらも、国家の確実な発展過程を天武・持統の時代を経て、文武、元明、元正期を着実に歩みながら、聖武時代には天平文化が花開き、桓武、嵯峨に到る時期に受け継がれ、ほぼ日本の今日の姿の基礎が形成されて、以後の独自の文化や社会発展の推進力になった。

文中、「倭」は概ね朝鮮半島南部と一部北九州圏を指している。また、「倭国」は五世紀ごろの蔑視的日本の呼称であり、これを嫌った当時の人々が自国をヤマトと呼んでいたことと「和」がその音が通じるものとして用いた。さらに、「和」に大王、大臣などに使う敬称「大」をもって大和（ダイワ）とし、これを日本人が大和（やまと）に当てたものと考えて、これが複合的に使われたことを歴史の流れに沿って用いてみた。

本章では国際紛争で大敗を喫した天智天皇の国家再建と充実の時代から、天武・持統両天皇の時代を経て、次々と行われた諸々の施策が国造りの礎となり、そのなかにあって支配者階級の密な関与が天皇の権力と権威を形成していった経過を具体的に考えてみたい。とくに、天智帝後に天武が権力を掌握し機構を整え、天皇親政の世を確立し、法制も整え、国家の基本を確立した過程を述べる。しかし、身内の権力移行に必ずしも成功したとは言えず、そこには、支配者間に見えない掟として、王家の血筋の拘束力が常に大きく関与していたし、桓武天皇の時代に至るまでは、王統の継嗣の混乱を生みながら、なかなか安定を見ることがなかった。

「天孫と血の思想」の視点から、争いの中から抜け出し権力を確立し固定化していく様を権力の中枢にいた人々と関連人物の動きと人々が日本独自の文化と社会の発展に寄与していく流れを考慮する。そして、そこに浮き沈む情景を

文学的遺産を眺めながら、とくに花鳥風月を織り込んで詠んだ和歌の背景を思いながら、関わる人々の心の動きと遣り取りを描いてみる。

即　位

一

厳しかった冬も去り、桜の蕾がほころび始めた宮中には、国際感覚に優れた新天皇の即位を祝う人々で溢れていた。楽人の優雅な演奏が式典を引き立てていた。

激しかった壬申の乱も治まり、六七三年二月になって大海人が飛鳥浄御原で即位した。天武天皇である。海外からは、新羅と耽羅はもちろん唐やかつての高句麗や百済の縁から相次いで来訪があり、これを慶賀した。

「新しい世が来る」

そんな予感を誰もがもった。

帝は、新羅と唐の使者には自ら丁寧に応対した。帝と呼ばれて、いまだ一寸、違和感をもっていた。このとき、齢はすでに五十歳を越え人生も終着点に近づこうとしていた。しかし、彼はなおも余人にはない若さに満ちていた。これを契機に天武は、国の基礎づくりのために、遣新羅使・遣唐使外交を始めようと考えていた。

「新羅だけでなく、唐の制度も取り入れよう」

自らの血筋と故郷を意識したことばであった。

百済に続いて、高句麗もすでに六六八年に唐により滅亡の憂き目に会い、新羅は六七四年に百済地方を併合して唐と対立していた。このとき新羅は六七六年の統一になる建国の目前にあった。しかし故郷を意識したとはいえ、そこは生まれた土地ではなく、当時は伽耶と呼ばれる自分の智と力を育んでくれた一帯である現在の慶州の地である。

彼は、武勇に優れていただけではなく、占星台を創り、天文と占術を能くし、農業神事を司り、天皇を中心とした唐や新羅のような国家体制の基礎を築こうと希望に胸を膨らましていた。

〈天智のこれまでの、高句麗と百済に根ざした外交は国を危うくする〉

そう、新帝はずっと以前から考えていた。

この時期には、国内ではすでに〈天皇〉という呼称は定着していたが、国名は明確になっていなかった。誰もが大王が住む地方の古くからの呼称である〈倭〉または〈日下〉、〈大和〉を用いていた。

ふと、自分のこれまでの波瀾万丈の人生と今の複雑な立場を想った。二十年以上前にはじめて大和の地に足を踏み入れたときのことが眼前に幻のごとく浮かんだ。海岸に美しい松原と砂浜が見えた。来し方と行く末への思いが重なり合って、脳裏にその幻影が揺らぐ。意識の底に沈みゆく、そして浮上する繰り返しの中に、これまでに周囲に生起した数々の印象風景が現れる。しかしながら、心の襞に潜む複雑な感情は鬱積したままで、決して表層に浮上することはなかった。

「なぜかどうも落ち着かない」

実体のない不安からである。しかし何に起因するものか確かめることができない。それゆえ、どうにも、今のこの祝福がもろくも消えてしまうような、不安を禁じ得なかった。

「この大和の国は、自分にとって一体何なのであろうか」

「かつては、異境の国であったはずなのに」

「それが今では、自ら統ろぐ、最も愛する国になっている」

この国は半島や大陸に比べてまだ脆弱である。しかし、海に囲まれた美しい大地は、自分をすっかり変えただけでなく、それに続く無限の可能性を自分に与えてくれるような気がした。

「他からの干渉のない、力のある国に」

何とかそうしたかった。それほどこの国が今は愛おしい。

多くの修羅場を潜ってきた自分が、遠く原点にあった若い頃を、そして朝鮮半島に渡る前後の情勢の変化と大和でのこれまでの生活を感慨深く振り返ってみた。

椰子の木陰から強い光の漏れる豊かな森に包まれた南の島の様子がはっきりと記憶に残っている。現在の奄美大島であった。そこで彼は生まれたのであ

った。

伽耶王家の血を引く父が、国家の存亡を懸けた唐王朝との交渉のために海路、大陸に赴く途中、嵐で船が難破してその島に漂流したという。多くの貢ぎ物を持参の上であった。草木の生い茂る湿気の多い土地であった。滞在中、そこで知り合った土地の豪族の美しい娘との間に男の子が生まれた。後の大海人皇子である。

しかし、その父も、胸に抱いてくれた母も、彼がまだ物心がつく前に亡くなった。それゆえ、両親の記憶は定かではない。ただ、父は伽耶王家に連なる由緒の証拠の品を残していたので、自分の素姓が知れていた。

育ての親は手広く漁業を営む母方の祖父母であり、その土地を支配する豪族であった。同時に、海洋が拡がるこのあたり一帯で、海運をも手掛けていた。彼らには早逝した大海人の母である娘の他にもう一人の娘がいた。

父とこの地に漂流した随行の人々も、この家でこの子の成長を待っていた。

「利発な、聡明な御子ですな」

人々の口にのぼった。

そして、時が過ぎ、いつしか凛々しい背丈の高い若者に成長していた。

長者は自分の烏帽子をなでながら、

「跡継ぎはこの若者に」

と目を細めて、長年連れ添った妻と語らった。

その期待もあって、成長したこの若者が指揮をとって、漁に出かけることが日常的になった。水のしぶきが金色に輝く南海の大海原を舞台に生きる。そして、いつかは、父の故郷の半島へと、ふくらむその気持ちで一杯であった。

ところが、あるとき油断もあったか、天候の判断を誤った。

「舵をしっかり」

「もう、だめです」

嵐にあって船が流された。随行の数人とともに浜に打ち上げられた。気がついてみると、どうやら、そこは日向国であった。

「明かるい日射し。美しい緑だ」

このころは、この周辺の政治情勢が安定していなかったこともあって、故郷に帰るすべが無かった。その結果として、彼らはこの地で生き続けることを余儀なくされた。しかし、このことが彼に運を呼び込んだ。

二

子供の頃、奄美の網長者の養父が半島の歴史と一緒に、北東の遙か彼方にある大和の歴史を語ってくれた。もちろん詳しく知っている訳ではなかった。奄美に近い九州の地は、豪族が割拠しており、このあたりは、隼人と熊襲が活躍していた。この頃に任那地域に本拠をもつ金官伽耶国を中心とする沸流百済系の扶餘の血を引く王家一族が手薄な九州南部を迂回して、宮崎に入ったという。

「ここは、高千穂」

時代を遡って当時のことを想像した。

「最初に王が入ったのはこの地なのか」

ここで力を蓄えた後、日向から東の海岸沿いに大和に入り優壽が王権を確立した。

崇神王朝である。

「大王の祖先ということだ」

しかし、途中で新羅系の王族の景行王が王権を主張し、これを強引に継いだ。このように王権には常に大和と半島における扶餘の血の濃度と総体的力関係が反映していた。これに引き続いて仲哀大王や神功妃、そしてこの時代に重なる邪馬台国の卑弥呼女王や後継の壱与女王らの関与が語られる。

それから時代がさらに下ると、朝鮮半島では神の怒りに起因する凶作と疫病が猛威を振るった。このため、金官伽耶国で、僅か二年でやむなく退位した沸流系の王がいたが、野心いまだ衰えないまま、なんとか活路を見いだして、一族は半島から対馬を経由し、まず地理的条件のよい、現在の佐賀県唐津に入り、大牟田に辿り着いた。本牟多別として、最初は外地の蕃主であったが、やがて国東半島に入った。

「そうか、王たる野心を捨てきれなかったのか」

諦めずに、側近の王族を伴ってこの地までやってきたのだ。そんな風に、大海人は考えを巡らせた。

本牟多別は王家の血統を新羅王系からより濃い扶餘の血を引く伽耶の沸流百済王系に取り戻そうとしたという。彼は首長として、天孫の血の強烈な意識をもっていた。

「天の下は天孫の正当な扶餘の血が治める」

しかし、北九州の国々を支配する有力豪族を力不足のために平定することができずにいた。そのころは、その地に土着していた豪族の力が依然として強かったからである。

「力を蓄えなければ……力こそ頼り」

そこで、東方へ向かって勢力基盤を固めて、彼は武力をもって自ら大和で即位しようとした。

「それが、大和なのだ」

養父である祖父が聡明な大海人に、そんなことを折にふれて語ってくれた。

目指すは大和であった。そこで、敵の少ない瀬戸内海を攻め上がり、各地の先住民と戦闘を交えながら進軍した。やがて、東端の淡路島から羽曳野台地に達した。優勢になった武力を背景に、ここから山を越えて、血筋は本家に近いこの新参者が、血の薄まった旧来者を征服・懐柔・吸収する形で新しい大和王朝を建てることに成功した。

「これで、正当な王朝になった」

そこで百済の嫡流の近肖古王が同族としての親愛を示す証として三七二年に、大和国王になった応神に七支刀を呈した。

「これこそ、同族の好の証」

この刀は石上神宮に納められ現在国宝に指定されている。祝福と同時に、百済が大和の血より濃いことが両王家に示された。

「そうか、王位には扶餘の血で一系が保たれているということが重要なのだ」

天孫の血が神代から自分に続き、しかも史実の東征を神話として投影し、歴史を崇神の時代から、さらに遡ればよい。そうすれば、朝鮮半島の伝説の王朝成立と同時期になるはずである。

「そのような歴史を創るのだ」

「ほぼ、確実な崇神と応神の業績を、それ以前の歴史のない時代に投影して建国の話とすれば、矛盾も生じないはずだ」

「あとは、各地の豪族のもつ、古い歴史を集成して、伽耶王室の祖の事績に矛盾しないように相互に積み上げればよい」

彼は、各地を旅しながら、王家の本質を細かく分析していた。

「そして、それを基礎に自分と子孫の新たな歴史を創ればよい」

応神の王家の系統がそのままずっと続いた。しかし、武烈王に子がなく王位継承が不可能になると、沸流系の応神嫡流の手白香姫と温祚系王家の男大迹がいわゆる婿入りの形で結びついた。

「わしは、かの応神大王と同じ百済の血を引き、妃はまさに応神大王の血を引く」

結果的に天孫の扶餘の血の濃度が高まり、その子の欽明は大王として十分な血の資格を備えることになる。そのようにして、男大迹が王位を継ぎ、継体王となり扶餘の血が温祚系に変わった。

「わしこそ、この地を統ろぐ血を受け継いでいる」

継体王の伝説の言葉を思い出した。本当にそうであったのであろうか。大海人は継体のそのことばと彼の王位に対して抱いていた心の内を思った。自らの立場と彼が当時置かれていた立場はそう変わらないはずだ。

「自分の扶餘の血は薄いが、その元ともいえる伽耶王家の血を受けている」

血　筋

一

半島では優壽と呼ばれていた後の崇神王がこの大和に移ってから、幾たびか王朝が変わって今に至っている。建国の祖は崇神大王に遡るという。これについては第一章で述べた。

ところで、大海人が最も関心をもっていた大和の王は継体王である。母が越前三国の出身である継体王は、大伴氏らの支援もあって、王位継承を主張してから二十年の永き歳月を要し、大和国内の強い反対勢力を抑えてようやく樟葉で即位した。昆支とこの継体王は温祚系百済王の〉有王を祖父、蓋鹵王を父とする兄弟であった。したがって、昆支の子である百済の東城王と武寧王の叔父にあたるのが継体王である。百済では東城王を経て、五〇一年に弟の武寧王が即位した。五〇三年になって、武寧王が継体王に隅田八幡鏡を贈って、彼の長寿を願ったのはこのような血縁関係にあったからである。

継体王の没後は手白香姫との間の子で武寧王とは従兄弟にあたる欽明王が先妻の子の安閑王と宣化王を経てその跡を継いだ。

しかし、当時の外交のあり方から見ると継体王と欽明王の父子の関係には、在野でこの時代の研究している松原には、どうにも合点がいかない。何となく辻褄合わせのように思えた。少なくとも、後者はどうも伽耶の宗主家の血を引いた王であるような気がした。しかし、いずれにせよ血縁のある当時の大和と百済の付き合いが理解できる。実際に、公州で発見された武寧王陵の棺は日本特産種の材料からなる。大和と百済の間は、いわば親戚同士の付き合いであった。それゆえ、すでに六世紀までには、互いに国としての協力関係を維持し、定期的に大和に送られた五経博士は文化の発展にとって極めて重要であった。共通の祖をもち、近い親類関係にあった大和王家、伽耶王家、百済王家はそんな付き合いであった。

「ここは、応神大王の縁の地だ」

彼らが辿った経路を大海人はつぶさに訪ね歩いた。

〈扶餘の一系の血が保たれているなら、自分の王族としての血の濃度を高めることも可能なのでは…〉

後に天武天皇となる若き日の大海人はそう思った。

二

このころには、彼は自分の出身地を反映する奄美人を名乗っていた。

国東半島にでた。広々とした台地が見える。ここでは、日向地方と同様に日が昇る方角からいって、天孫の思想に重要な意味をもつ。応神大王に縁の深い宇佐八幡を丁寧に訪ねた。この地は八幡信仰の原点といわれ、今日に続いているが、彼は軍事の神としての信仰と結びついた。後世、応神大王と呼ばれた彼に因んでここ宇佐に八幡宮が建立され、宇佐八幡として後の皇室と密接な関係を保つようになり、八世紀ごろには天皇家と縁戚の格を与えられている。

古来、鏡は神事に重要な意味をもつ。宇治から鏡をつくる部曲を統括する鏡王が呼ばれた。彼には二人の美しい娘がいた。鏡姫王と額田姫王である。姉妹が宇佐八幡から神聖な巫女に所望された。鏡王にとってはたいへんな名誉である。父鏡王にしたがって、この時期に彼女らは宇佐八幡に参上し、巫女として神に仕えることになった。

この神宮でお務めに励む巫女のうち額田姫王を奄美人が見染めた。毎日、この地で遠くから彼女を見ていたが、ついにたまらず鳥居の傍で彼女に声をかけた。ふいに、声をかけられ、驚いた様子の額田姫王が

「何か?」と軽く答えた。巫女はもちろん男子との交際が許されていない。

しかし、異国風の猛々しい姿は彼女には新鮮な印象であった。それに、女の心を捉えて離さない軽妙な対話のなかに、教養が自然に滲む。遠く大海の彼方からやってきた奄美人、後の大海人に額田姫王はすぐに心を奪われてしまった。

やがて、心身共に離れられない一体の感を共有するに到った彼らは、将来への契りを交わした。むろん巫女の額田姫王にはそれは許されることではない。やがて罰を受ける形で彼女は宇治の父、鏡王の許に返された。故郷に帰ってからの額田姫王は悲しみにくれる毎日であったが、月日が過ぎて彼女に女の子が授かった。この子が後に皇女の身分を得て十市皇女となり、さらに政略結婚で大友皇子の妃として葛野王をもうけることになる。この地で、額田姫王は当時の慣習とは異なる形で、すなわち自分の手許で、娘の養育にあたった。

かつて宮中に仕えた縁もあって、やがて額田姫王はここ飛鳥の宮中の斉明女王の傍で再び働くことになった。このことが、後に大海人との再会をもたらし、天智天皇になる葛城王子との出会いに連なった。

一方、あの時に別れた大海人は自分が愛する人に子を残したことを全く知らずに、応神王家の縁の地である宇佐を後にして旅を続けた。

そのころは、大和の王家には北九州の王家が入り込んだり、兼任したりすることが普通であった。つまり王家の血を引くものが、合議によって大和の王家に入り込んでいた。したがって、半島と本邦一帯の有力な王家についてみれば、

すべて同族であり、血縁の深い親戚同士であった。そして、どの王家も王位の絶対的条件として、父祖から遠く遡る扶餘の血を受けていた。

「そうか、みんな扶餘の血を受けた親類か」

彼は、父の故郷の朝鮮半島に近い、筑紫へ向かって歩を進めていった。

叛　乱

一

筑紫の地でその昔に天下を揺るがす大きな叛乱があった。大海人はそれをやはり奄美の祖父から聞いていた。新羅の動きが乱の背景にあった。継体王が即位してから二十一年目の五二七年夏の出来事であった。

〈もしかしたら、ここは新羅が治める国になっていたかもしれない〉

〈いや、そうでなくとも新羅との友好国にはなっていたはずだ〉

大和では、沸流百済系の王統が武烈王で事実上断絶した後、丹波国の倭彦王の擁立の動きがあったが、大伴金村が男大迹を推戴し、継体王が誕生したことを再び考えてみた。この王位継承には反対も多く、すぐに大和に入ることができず、最初は河内の樟葉で即位し、二十年目にようやく大和に入ったという。彼は即位した当時は、既に五十七歳であったが、既存勢力の説得のため、先々代仁賢王の娘の手白香姫を妃に迎えた。結果的にはこの手白香姫が生んだ欽明王が、その後の王統の祖となった。そう、聞かされていた。

さてその継体王が大和に入って落ち着いた翌年の夏六月、

「半島に在る我が権益の擁護のために」九州から半島の任那へ軍を派遣することにした。

ところが、援軍の進路が筑紫国造の磐井の妨害にあった。それだけに留まらず、任那に遠征する軍に対しては公然と敵対行為を起こした。というのも、継体が出身からいって百済寄りであって、伽耶を重視、新羅を軽視していたからであった。

「進軍できずに、釘づけになっております」

古代史における最大規模の地方の反乱事件が起きた。世にいう磐井の乱である。

「豊肥二国を占拠されました」

ほとんど同時に、

「半島からの朝貢船が略奪されました」の伝令が届いた。

次々と連絡が大和に入って宮中は緊張してきた。新羅が背後で半島と海峡の情報を伝えてきた。これが乱の始まりで五二七年のことである。これらの反乱の原因として『日本書紀』は任那東部を占領して倭と対立する新羅が、筑紫国造の磐井に対して賄賂を贈ったことを挙げている。

「おのれ、新羅と通じておって」

かつての盟友であり、ともに同じ釜の飯をは食んだ仲の磐井との交戦は難しく、近江毛野臣の軍は任那へ遠征することができなかった。

「何ということか」

この事態に対し、同じ年の八月に大和朝廷からは筑紫以西に関する全権を付与された討伐の命令が大連の物部麁鹿火に下された。

「必ず、討ち取るのだ」

当時、磐井は九州の北半分を自己の勢力範囲に収めていた。大和方が必ずしも一枚岩でない勢力であるこの時期を見て、独自の国を創ろうと考えていた。

「この地は大和ではない」

「ここは我が父祖の地よ」

「ならば、我が独自の国を」

磐井の後背には新羅の勢力が常に控えていた。

「磐井の乱を放置することは任那だけでなく、九州を奪われることになる」

そう判断した大和朝廷はこれを潰すために、最強の兵力を動かすことのできる、武勇で知られた物部麁鹿火を将軍とする討伐軍を急遽編成した。

「麁鹿火をこれに」

討伐軍は翌年の冬十一月、現在の高良大社の立つ、筑後平野の筑紫国御井郡で磐井軍と激しい戦闘を交わした。その結果大和軍が勝利をおさめた。残党狩

りが進められた。反乱側の首魁である磐井が一時は豊前国へ逃亡したが、結局は討伐軍に捕えられた。

「斬殺にせよ」

ここに反乱は鎮圧された。しかし、磐井の子の葛子は、降伏と帰順の意を表明し罪を贖うために、自らの領地の一部である糟屋の屯倉を大和朝廷に寄進した。

「どうか、お許しを!」

この大規模な地方反乱を制圧した大和朝廷は、以後は国家組織を少しずつ、整備・充実していくことになった。

二

『筑後国風土記』では、この時磐井は豊前国上膳県へ逃亡したので、大和軍は、磐井が生前用意しておいた自分の墓の周囲に立てた石像の手や頭を叩き割ったという。磐井は呪術をよくした統治者でもあったので、その祟りで病気になる者が多く発生したと伝わっている。

「祟りだ。あな、恐ろしや!」

大和軍は恐怖を感じ、その不安を消そうとして石像の破壊を繰り返した。

『古事記』には簡潔に、磐井が大和の大王の命令に叛いたことと、物部麁鹿火と大伴金村によって殺されたことの二つが記されているだけである。そのほとんどが即位と崩御、その妃・子女に関する形式的なものである。にもかかわらず、仁賢王以後の記述の中で、この乱が明確に述べられているのは、この時代の突出した、人々の記憶に強く残った歴史的大事件であったからであろう。

「これがあの磐井の墳墓か」

夥しい石像を背後の風景と重ねてゆっくりと眺めながら、大海人は王位を窺った磐井の真の意図を思った。

「彼には天孫の王家の血は流れてはいなかったのであろうか?」

筑紫君磐井の墳墓に関する記述が『釈日本紀』にある。磐井が生前から準備していた墓とされるのが福岡県八女市の巨大な前方後円墳の岩戸山古墳で、多数の遺跡が周囲を取り囲む、壮大で独特な造りからなる。ここにはこの記述通りの区域が存在し、種々の石造物が出土している。磐井が独立国で政権が高い文化レベルにあったと推定される。というのも、実際に祭祀を行う衙頭と呼ばれる区域には、裁判官と犯罪者を表す石人や石馬・石猪・石盾・石殿・石倉というような当時の様子を語る石造物が出土しているからである。王族以外の被葬者が確定できるのは、飛鳥朝以前では唯一この磐井である。それほどこの地で大きな力をもっていた。この古墳の造りからいって、大和とも半島の王家とも関係があっても、独立した王朝ともいうべき大勢力であった。

なお、『日本書紀』では磐井を〈国造〉としているが、『筑後国風土記』に〈筑紫君磐井〉とある。しかし『古事記』には記載がない。したがって、磐井の大和朝廷との関係を正確に知ることはできないが、ともかくも、有力な大豪族であり、大和の影響から脱却を志向して起こした反乱であった。もちろん『日本書紀』は後に天皇の大和支配を正当化するための歴史書である。したがって、その記載内容のすべてが事実とは限らないし、権力側に都合の良いように記述され、後世に伝えられているはずである。しかし、いずれにしても〈磐井の乱〉は大和の王権を揺るがす大事件であった。

このころの天武の筑紫での見聞とその想いは、当然のことながら、後の『日本書紀』の記述に反映された。

新世界

一

筑紫の各地を旅した大海人が宗像の地に落ち着いた。この地は半島との関係から、早くから開けていた大和の要衝であった。街は賑やかな佇まいであった。この地の宿にしばらく逗留し、旅に疲れた身体を休めることにした。海産物が美味しい。生まれ故郷を思い出した。奄美の祖父母の笑顔がまぶたに浮かぶ。

ここで出逢った一人の美しい娘がいた。どこか額田姫王に面差しが通じる。やがて、恋に落ちた。胸形尼子娘であった。父は筑紫宗像郡の豪族で胸形君徳善である。

「私は海を渡って、朝鮮半島に行ってみたい。父が生まれたところだ」

海鳥が餌を求めて、海面すれすれに滑空するのを眺めながら、大海人が胸形尼子娘にそう言った。二人の間に静かで清らかな愛が育まれ、やがて男の子が

授かった。後に壬申の戦いで指揮をとった高市皇子であった。そのころは、この地の豪族は新羅と密接な通商交流をもっており、その縁で、胸形氏ともども新羅王家の縁に連なることができた。しかし、彼はこの地だけに飽きたらず、大海を自由に駆けめぐる大人を夢見ていた。そこに、自分の生きる場所と自分だけの邑、いや都をもちたい。そんな風に思っていたからであった。

しばし義父らと別れ、愛する胸形尼子娘と子を伴って、貿易船に乗って、子供の頃から聞いていた憧れの半島の地に入った。見るものすべてが、奄美、日向、そして国東、筑紫とは様相が異なる。そこは松林のつづく海岸からずっと奥に入ったところであった。

帝になった今でも松風の音が懐かしく、自分の原風景のなかで懐かしい音として思い出される。白い浜辺に島のように所々黒い塊を形づくる松原では、色とりどりの袴・上衣を着た男女が野遊を楽しんでいた。薄桃色と黄緑色の組み合わせがいともあでやかである。

しかし、この都では何か落ち着かない安定さを欠いた人々の動きを感じた。

「そうか、百済が攻めてくるのを恐れているのか」

血筋を示す証拠の品をもとに、彼は宮廷で働くことになった。昼は懸命に働き、夜も寸暇を惜しんで勉学に励んだ。

「あのとき、奄美でどうして嵐がくるのを予測できなかったのか」

「星の見方を誤ったからなのか、ならば天文学を」

かつて漁師として養った鋭い感覚から、天文や天候の読みにすぐれた彼はやがて、王室奥深く内に入ることが許された。それに、この地で身につけた先進的な学問がすぐに大きく役立つことになった。そして、同時に将軍として辺境の叛乱の平定に、周囲も驚く数々の武功をあげることができた。

「大海人よ、近う」

大海の荒波を幾度となく乗り切った彼はいまや大海人の名に相応しい人物になっていた。いつしか、働きぶりが王子の目に留まり、王室の側近として働くようになり、王子の信頼もあつく、無二の友人となった。

「聞けば、そなたは扶餘の王族の血を受けているとのこと」

「おそれいります」

「まことにさようか」

「は、はい」

「もとはといえば、伽耶も百済も大和も同族の王家」

「されば、我ら王家と同じ姓を名乗るがよい」

こうして、遂に独立し王族としての一家を構えた。大陸の故事を思い出した。

「もしかしたら、いつか、わたしも」

「王侯将相いずくんぞ種あらんや」

「自分の才覚で」

有力な勢力に成長しつつあった大海人は周辺との融和のためには、この王家のためと同様に、努力を惜しまなかった。しかし、高句麗、百済、大和は国内事情と諸国の力関係からみて、意に反して、新羅や伽耶との相互関係が微妙であった。王家の血縁でこれらの地域は政治的に複雑に絡んでいた。実は、新羅は扶餘の支流にあり天孫の血は比較的薄く、住民もやや異なる風習をもっていた。その意味では、他の地域よりやや低く見られていた。

六四二年に、新羅で政変が起こった。これを起こしたのが王子の金春秋であった。そして彼の腹心が金多遂であった。王の眼前で政敵を排除した。行動を共にした仲間は蹴鞠で知り合った若者達であった。

「新しい国、新羅をつくるのだ」

これを契機に春秋王子は権力を掌握した。そして、後の新羅王になるこの王子と金多遂将軍と知己を得て、大海人は六四七年に一緒に大和に渡ろうとした。

そんな昔の日々を大海人は即位の大典の中で思い出していた。

まず、彼らは対馬を経て、筑紫の国に渡った。ここは朝鮮半島の国々との関係が深く、遭難後に自分の運を開いてくれた第二の故郷であった。久しぶりに妻の家族にも会った。自分たちの姿を何よりも義父母がよろこんでくれた。家業はなお繁盛していた。後に、この経済力が大海人の実力を不動のものに支えることになる。そして、これがやがて太宰の地の有力者と自らを関係づけて、

将来の権力と地位の掌握に直結する基礎となった。
このころ、奄美から風の便りを聞いて、育ての親の祖父母が筑紫のこの地を訪ねてきていた。彼らはすでに隠居し、娘夫婦が奄美の海運と漁業を受け継ぎ、家は益々栄えていた。

二

政治的目的をもった春秋王子ら三人は随行の者とともに大和の地に入った。そこで、高句麗より逃れて大和に定着し、乙巳の変を指揮してきた孝徳王と側近の中臣鎌足や中大兄に面会した。
新羅に、いや半島に比べて、そして筑紫に比べて、ここ難波の都は穏やかで平和な地のように彼らの目には映った。旅の途中で目にしたものは、一行に強烈な印象を与えた。評判通りの美しい山と湖と海の国であった。それに豊かな実りの国である。

「美し国、秋津島、大和の国は」

それに引き替え、新羅の王国は都を除けば荒れ地が散在する寒冷の地である。それよりも何よりも、新羅は国力が整わず、苦境にあった。何とか生き残りのために、唐の制度に合わせて、王室は自ら名前を唐風に変えていたし、制度も官僚の服装も唐風にした。それに、国防の必要性から、王子の金春秋は金多遂とともに、唐・新羅の連合に大和が同盟するように各地の有力者に働きかけた。大和に入ってからは、ずっと各地の要人に国際情勢を説明し、協力を求めてきた。

「検討してみましょう」

それが、いつもの大和側の返事であった。失望しながらもなおねばり強く交渉した。結局、春秋王子は大和に来てから、九ヶ月にわたって各地の有力者を訪問したにも拘わらず、あまり成果もなく帰国することになった。国を長期間、空けることができない王子は後事を金多遂将軍と大海人に託して帰国する必要があった。ところで、王子は後に新羅の武烈王となった優れた政治家であり、その子の文武王は父王の意志を受けて朝鮮半島から唐を追い出し、六七六年に統一新羅を建国した。
この時期、春秋王子は家臣の反対を押し切って唐と軍事同盟を結ぼうとしていた。

「新羅は、唐と同じく文明国です」

「制度もすべて唐風です」

この地に住む人は、以前は長い名前であった。しかし側近もいわゆる創氏改名を王室に倣って行い、しかも王朝の姓を争って採用していた。一般の民には呼び名以外にとくに名前はなかった。〈何も、そこまでしなくとも〉多くの人々がそう思っていたが、新羅が生きるためには、巨大な唐と連携して、生き抜くより方法がなかった。そしていずれの日にか朝鮮半島を統一し、その後に唐に対抗する方法しか選択する余地がなかった。他の王族もこの時点では、そう思うようになっていた。

「いまに、必ず」

そのためにはまず、高句麗と百済に対抗できる大和の豊富な兵力の支援が欲しかった。

「いまのままでは、いずれ、必ず唐に侵略される」

大和の人々も、新羅と同様に唐の力を恐れていた。

「しかし、それにしても、唐風の服装とは」

大和を訪ねてきた使者の様相に、中大兄が陰で大海人らを通じて、不機嫌さを側近にもらした。

黎明期

一

渡来した王族の流れにある貴族が互いに、権力のるつぼの中で煮えたぎっていた。時は、六世紀の終わりから七世紀にかけての大和の黎明期であった。王は扶餘の血をどれだけ色濃く維持しているかで決まった。部族会議で、血の濃淡と武力の多寡に依存した合議で王を決めた。それが天孫の扶餘の血が大和での王位を嗣ぐ条件であった。
半島では新羅・高句麗・百済の三国時代が四世紀から七世紀まで三百年間も続き、その大半は戦乱状態にあった。この間、伽耶の領有に関連して大和の地から、また半島三国が近隣として自らの権益を主張し、自分の領土への編入を

目論みつつあった。そのための混乱を避けて、多くの人々が大和に同時に渡来してきた。

そうしたなか、出自が朝鮮半島でありながら豪族として大和で確実に力を伸ばし、部族国家を形成してきた崇神の名で代表される有力な王家が大和に基盤を造り、この時期には大王を中心に大伴・物部の勢力がこの地に根付いていった。そして、後の世に河内には応神大王を中心にした大伴・物部・中臣・平群・葛城・巨勢・和珥・春日の勢力が根付くことになった。このことは、先住の崇神の名で代表される王家を継いだ新羅系の景行王朝に続いて、金官伽耶国の本家のより扶餘の濃い血筋を引く応神の王家が河内に入り、前王家を征服・吸収したことを物語る。この時期の王権にあっても、半島の王が王位を併任するか、王族によって護られる形が維持されていた。すなわち、この一帯の支配は天孫の扶餘の血を分け合った王家だけに許された特権であると誰もが信じていた。それが当然であると王族自身も思っていた。

それから、大和ではしばらくは応神の王家が続いた。しかし、子がなかった武烈王の没後、繰り返しになるがこれを期に、応神五世の孫にあたると伝えられる彦主人王の子の男大迹が権力を窺い、大和政権内部に強い反対勢力があったが二十年を要し河内の樟葉で即位し継体王になった。日本成立以前の大和のなかで大王の地位が確立される過程にこうした権力の移行があったと考えられる。

しかし、その過程では

「でも、男大迹は王になるには扶餘の血が薄すぎる」との意見があり、これに対して

「いや、百済の血を直接にうけているではないか」と激しい反論の争いがあった。

二

安閑王は継体王の第一子で母は尾張目子媛で越前三国の出生である。安閑には子が無く、次に桧隈廬入野宮にて即位した第二子の宣化王は海外対策に大伴狭手彦を遣わし、任那と百済を援助したとされている。それ以前にあって、すでにかなり薄くなった応神の血筋と自ら主張する百済温祚系の継体が、応神を祖とする百済沸流系の血をより濃く受け継ぐ仁賢王の女の手白香姫を娶っていたので、その間に生まれたとするのが欽明王であり、安閑や宣化の異母弟にあたるということである。

〈公式にはそうであろうが、継体すなわち男大迹は百済沸流系の血を受けた王族ではない。しかし、欽明は当時滅亡してしまった伽耶の沸流系血統にあると考えるのが彼の後の対外的な行動からいってごく自然なのである〉

〈日本書記の記述から見ても容易にそう推測される〉そのように松原は絶えず繰り返し考えていた。

ところで、百済沸流系の王族である八大姓の蘇我氏が、政争に敗れて大和に渡ってから、比較的短期間に大和で力をつけた。とくに、馬子の代からは強力な権力を握るに到った。それゆえ、大和の王を百済の王族から選出するのに大きな発言権をもっていた。王族の血を引く蘇我氏自身が同様に血族の結束をもとに、将来の王になる基盤を造ろうとしたことがある。

「いつか、大和を我が一族の手で」

しかし大和の王にはなれなかった。いってみれば、推古女王が崩御して以来、実質的な大和国王は、蘇我蝦夷やその子の入鹿であったにもかかわらず、血の濃度が彼等には王位を許さなかったからである。

「百済の血を最もよく引く者が王家を継ぐ」

「ならば、山背大兄を」馬子が主張した。

「でも厩戸王子（聖徳太子）の血筋の山背大兄の王位推戴は反対である」

推古女王が反論した。しかしその代償として、推古自らの血を引く竹田王子の王位継承は蘇我氏から拒否された。そして大きな騒乱の後に最も無難な田村王子（後の舒明王）に王位を譲ることに落ち着いた。もとより、推古は厩戸王子とその子に王位を与えるつもりがなかったが、最終的な王位の決定は彼女の誤算になった。

「となれば、欽明王の直接の沸流系血筋は、厩戸王子を父とし、同じく聖人と言われる山背大兄が騒乱の後で、蘇我のせいで六四三年に最後となったということですね？」

場面が、現在の世界に戻って、友人であるソウル大学の 全 名誉教授が松原

に尋ねた。
「そうです。そう思います。しかし、実はそれも乙巳の変に連なる黒幕の高度な陰謀と歴史操作の途中経過ですが」
「すると、後の歴史家が蘇我氏を悪役に据えて本来の業績をすべて奪い去り、悲惨な形で血が絶えた厩戸王子の家系の滅亡への怨念を薄めるために必要以上に聖人化し、多くの業績を太子のものとなるように計らったとするわけですか?」
「ところで、そうした理由は史実に合わないのでは?」
「いやそんな難しいことではなく、厩戸王子の聖徳太子としての業績は本来蘇我氏のものであると言いたいのです」
「というと?」
「厩戸王子は暗殺されたとのことです」
「だれに?」
「王室に近いものによって」
「つまり、王家に好ましくない血筋であると後世が判断した蘇我の業績を史実から奪い、王家内の権力争いから非業の死を遂げて、約束されていた王位を継げなかった沸流系の厩戸王子の血筋に聖なる家系として供養のためにも、たくさんの良き行いを象徴的に移し、捧げようとしたのです」
「この頃の重要な王家の業績は聖なる家系にあり、というわけです」
「その象徴が、聖徳太子という諡号と偉大な業績なのでしょうか」
「ですから、仏教伝来に功績のあるインドの阿育王に百済の阿佐王子を、そして彼を聖徳太子の影としたのも、何といっても、やはり百済の血が大和王に相応しいと印象付けたかったからです」
「……」
「したがって、これまでの百済王家の血筋を山背大兄に継がせれば理想的であったが、こともあろうに蘇我がこれを断絶に追い込んだ極悪人としたわけです。これに沸流系百済王家の血筋を重ねるのに好都合なのが押坂彦人大兄で、本来は百済の王族で無難な舒明を子として系図上で結びつけたのです。なんと巧妙なことか。… 先生」
「厩戸王子の血筋が消えても、いわゆる沸流系百済の血は続く… ですね」

三

ところで、蒲生の石塔寺には阿育王塔とも呼ばれている、聖徳太子ゆかりの三重石塔がある。これは国内最古の国宝仏塔で高さが七メートルある。百済の阿佐王子の聖と徳を聖徳太子に投影したという。本来は蘇我とともに行った大きな業績である仏教伝来と保護政策に関して重要な役割を演じた太子の人格を阿佐王子に後世になって重ねたのであって、それ自体に不思議はなく、よく行なわれたことである。
朝鮮半島からの渡来した多くの技術者の蒲生への移住が確認されているし、形からいってこの石塔は後世、彼らの手になることは間違いない。
雨に濡れたその偉容を見て、あの扶餘の定林寺の五層の百済塔を松原が思い出した。
「つまり、そういうことになります」松原が念をおした。
「蘇我入鹿が山背大兄を殺害したとき、父蝦夷は入鹿の行為を嘆くとともに山背大兄の死を悼んだと日本書紀にありますが。信憑性に問題がありますね」全教授が確かめようとした。
「ですから、後の天智天皇自身の正当性を主張するためにも、蘇我の血のなかで一緒に消された山背大兄の百済の血に替わって、舒明の血統をもって高貴な百済の血の復活を後世への暗示としたものだと思うのです」
「そして、その後に蘇我が大きく、さらに残党が少しずつ業績とともに、権力を掌握した者から排斥されていく……」
「しかし、〈困った事態になった〉と、表向きは蘇我蝦夷がこのとき言ったといいますが」
「百済に対する配慮と考えれば、よいかと思います。また、これは、大和に根を張ったこれまでの沸流系百済王族の血が絶えたことと同時に、形式的に国政も難しくなることを敢えて主張したかったからでしょう」

「しかし、それでは……」
と全教授が口を挟もうとした。
「そこで、窮余の一策として血筋の近い百済の王族を迎える方法をやむを得ずとったことを暗に主張するためです」
そういいながら、松原は自分をも納得させようと言い張った。
「なるほど、言い訳ですか」
結果的には六二八年に、前述のように、沸流系百済王族とされる舒明が王位を継いだ。そして六四一年には温祚系との関係深い皇極が王位についた。温祚百済系といわれる継体に続き、欽明、敏達、用明、崇峻、推古と続く王朝が金官伽耶国の沸流百済王族であることを考えると、舒明を経て百済系王族の皇極が蘇我氏の同意で大和国王になることは当時の豪族達にとっては、合議により受け入れられない話ではなかった。
「大和の王は、扶餘の一系、百済系から選ばれるのが望ましいからでしょう」
「ところで、記録では舒明と武王は共に六四一年に没しているのをご存じですか」
「いいえ」
「舒明は百済の武王その人で、皇極は武王の后で中大兄は武王の子の説がありますよ」
全教授がそう付け加えた。
これこそ、一系の血を主張するために歴史的事実にも矛盾しない、巧妙な操作によるまことしやかな伝説である。在野で歴史を学ぶ松原はそう合点した。

陰謀

一

六四五年に乙巳の変が起こった。世に言う大化改新の前哨戦である。中大兄が中臣鎌足や蘇我倉山田石川麻呂などを味方に付けて、蘇我入鹿とその父・蝦夷を殺害し政権を奪取した事件である。
権力争いを経て後の世まで生き残った扶餘の血を引く王族が自らの正当性をすなわち血の一系を主張することは、王権獲得と維持に不可欠のことであった。歴史の編纂時に過去の人々の伝承的事蹟を矛盾なく説明することはとくに重要であった。このために、血統の絶えた人々に、極めて巧妙に、都合による事蹟を負わせて、しかも同一人物の人格を分けたり、他の人格を統合したりして、いわば当たらずとも遠からずという書き方で、王家の歴史を創り上げた。しかし、それでも大きな流れは、すべて隠しようがない真の歴史であった。いつか、どこかで聞いたことを、在野で熱心に古代史を研究する松原が思い起こした。
〈そういえば、乙巳の変は、六四三年に春秋王子が新羅で起こしたクーデターの方法と酷似している〉
韓国でもその歴史は確かに伝わっているという。当時、高句麗や百済と比較して、新羅の国力は弱く、唐との連合派と非連合派とで対決していたが、春秋王子が率いる連合派が、王座の前で反対派の頭目を殺害したというものである。
それが、不思議にも二年後に同様の方法で、中臣鎌足と中大兄が蘇我入鹿を殺害したという。また、中大兄と鎌足は、蹴鞠の席で出会ったという。そんな歴史が松原の子供の頃に学校で語られたことを思い出した。
「春秋王子も味方の頭目との出会いが、蹴鞠の席なのですよ」
歴史に興味をもつ全教授がそう教えてくれた。
「なるほど、……ということで共通しているのですね」
「ところで、歴史書である『日本書紀』は元正天皇の時代に書かれたのですよ」
「とすれば、天武系列の正当性のために」
二人は、テーブルの整然と並ぶ伝統の韓式のレストランで焼き肉を食べながら、語り合った。焼き肉には、幸福感を与える生理的根拠がある。一種のエンドルフィンの脳内での産生を即座に誘発する作用があるらしい。
「いや、先生この話は、天智天皇の正当性と後の皇室のためにと思いますが」
「そう、誰もが否定し得ない天智の正当性を述べ、これをもとに天武自身の一見王位簒奪と見られることを逆説的に正当性に転化しようとすることかも

……」

全教授が箸を休めて頷いた。

「うむ　……」

「そんな、深淵なねらいがあったと、私は思いますが」

「なるほど……」

「その意味では、話をまた遡りますが、蘇我が実質は大和国王であったかも」

「王家の血は確かに蘇我に傾いていましたね」

「実際は、隋との交流のなかでも、国王として行動しているのです」

「とにかく、蘇我の名前はどうしても、王室一系の血のなかでは否定せざるを得なかったのでは」

「だからこそ、後になって、蘇我の父系は根絶しが必要であったのでしょう」

「……」

「一方、持統が蘇我の自分の血も必死に護ろうとしたのも合点がいきます」

「……」

「つまり、あちこちで、実在の人物の行為を滅びた人物の影に配した、あるいはその逆にね」

「ほう、面白い。今まで、そこまでは、考えてはいなかったよ。松原さん」

「とすれば、史実の記憶が薄くなった後世の人々の意識の中に、それとなく自分たちの正義を植え付ける方法といえますね」

「それより、先生。紫冠を得た中臣鎌足こそ諸々の黒幕ではないか、と思いますが」

「とすれば、鎌足を祖とする藤原氏の成果を後世に示す常套手段のようですね」

「もしかしたら、鎌足が病で亡くなったのを天智の病と結びつける操作のための説話かもしれません」

〈天智は病で亡くなったのではない〉そう、松原は以前からそう考えていた。彼は歴史書を読んでいままで納得できなかったことが、全教授と話す中で、すこし分かりかけてきたように思った。

これをみると、春秋王子のやり方を中臣鎌足が知り、同じような方法で、蘇我氏討伐を計画・実行する大義名分を作り上げたのであろうか。そして、藤原の血を引く権力側の歴史家が後世になって、新羅の事件を借用し『日本書紀』のように脚色したのであろうか。

とすれば、〈蘇我入鹿を殺害したといわれる飛鳥板蓋宮の大極殿の事件そのものの信憑性は果たして保証されるのであろうか〉、松原の思考がやや混乱した。

その当時、蘇我氏は大和で最大で最強の豪族であり、大和をむしろ半島系王族の支配から脱却させ、物部氏を滅ぼした後は、仏教を国教とする国造りをしていた解明派であった。

「大和には、新しい秩序が必要なのだ」と常々主張していた。

しかし、これに対して二つの大きな反動勢力があった。一つは高句麗・百済系王族であり、他は古来の神々を信奉する土着勢力であった。前者の代表が後の孝徳王である軽王子と後の天智天皇の中大兄であり、後者を基盤とする代表人物が中臣鎌足であった。

なお、高向玄理、南淵請安は、六四〇年に十年間の唐留学生活から帰国している。その後、玄理は大和の外交官として活躍したが、彼に代表される親唐的な知識階級の勢力もやはり反動勢力であった。これを天智を経て、無理なく後の世の政策に繋げるために、彼等を登場させて、さらに政策転換とも言うべき、天武が行おうとした新しい国家の建設の布石を巧妙に行ったと松原は推測した。

〈これからは、統治能力のある者が、整った制度の下に国家を造るべきである〉という蘇我の立場を、天武が『日本書紀』編纂時に、自分の世の権力掌握の正当化に、暗に武が構想したと考えられるからである。

これとは本質的に異なる考えとやり方で大和で種々画策してきたのは高句麗系の孝徳王であり、中大兄らの蘇我氏排斥派の同盟があった。

ところで大兄という字句はもともと高句麗の官職名であったことは興味深い。

これにより、独自の路線をもつ、開明的ですぐれた蘇我氏を電撃的攻撃により政治の中枢から排除し、その路線をあたかも自分たち独自のものであったかのように、後世になって史実の記憶が薄れた頃に、これが事実であったかのように操作した。

このように敢えて首謀者の行動の記述を曖昧にし、後に伝えることこそ、この大和では伝統的に、脈々と後の世まで受け継がれることになる手法であった。

「血を護ることこそ、大和が朝鮮半島とともに生きる道である」

「すべての力は大王のために」

そう思って行動し、蘇我氏討伐後の政治の実権は、孝徳王と中大兄が握っていた。孝徳の目的としたところは、高句麗を唐から救済すること、そして中大兄にとっての課題は、百済を新羅から擁護することであった。当時、高句麗や百済は、唐の絶えざる脅威に晒されていた。現に、高句麗は、六四四年以降に、三回にわたって唐と交戦している。そのため、両国に最も縁の深い大和では国内の軍備強化と高句麗への救援が急を要したことであった。孝徳は、そこで兵や軍需物資の調達の道路や港湾の整備を行った。また、駅伝制を設置し、さらに戸籍や里・五保制・公地公民制を実施している。このような変革があって、さらに天智・天武時代を経て、大和が急速に変身し、国家の形式が整えられていった。

つまり、乙巳の変以来の目的は、蘇我氏の推進していた全方位外交、仏教国家建設のために、その基礎として採用していた大和の中立と独立といった理想主義路線を否定するだけでなく、後世から歴史の連続性を遡って肯定するための巧妙な史実操作であった。

しかし、いずれにせよ王家の血統との関係からみて、高句麗・百済を救援することにより、積極的に唐や新羅から大和を守ろうとするものでもあった。それほど唐の脅威は、高句麗・百済・大和にとって現実的で切実なものであった。つまり、孝徳や中大兄を中心とする大和の多くの王族は、気脈を通じる高句麗・百済と共同して、唐・新羅と対決する路線に傾いていたのであった。

もちろん、大和国内には親新羅派の人たちも、これに対抗する勢力として軍事力を拡大しつつあった。その盟主となっていたのが、金多遂将軍と親しかった大海人将軍らであった。

大和の王族が、そこまで、百済や高句麗を支援したのは国際情勢の判断からであった。高句麗はこれまでに隋の遠征軍を三回撃退した。そして、唐王朝になって、六四四年に太宗自ら、遠征軍を率いて侵攻してきたときも、唐の軍隊を撃退している。これからいって、大和から見ると高句麗は軍事的強国であった。

「さすが、血の濃さが力である」

大和の人々は高句麗と百済が連合すれば、唐と新羅連合に十分に対抗できる勢力と見ていた。当時の高句麗の領土は、現在の北朝鮮と中国吉林省の延辺自治州を合わせた領域であった。

なお、高句麗人は、〈句〉の文字は大陸からの辺境民族の差別用語であったので、高句麗国といわず当時は高麗国と呼んでいた。

二

乙巳の変以降、大和は唐式の律令制度の導入による政治改革をしたことになっているが、律令制度の根幹である〈改新の詔〉は、翌年の六四六年に作られたものではなく、後世に作られたものであるという見方が有力である。ただ、体系的でないにしろ、新政権は要路・港湾の改修、戸籍の作成などを行った。また、この時期、百済・高句麗から多くの実用品が大和に紹介されたことも事実である。後年、天智天皇により導入された水時計は、官僚の職務管理上、重要な道具であった。現在、これを見ることもできる。

だからといって、政治形態まで、唐式になったわけではなかった。その証拠に、乙巳の変から二年後の六四七年に新羅の大和への使節が唐風の服を着用したことに対して、中大兄が不快感を表しているからである。この時期、唐と新羅は、軍事的同盟関係にあった。乙巳の変は、蘇我氏の仏教国家作り路線から、八百万神派・百済派・高句麗派による朝鮮問題への介入路線に方向転換を意図したクーデターであった。

後の新羅の太宗・武烈王となった春秋王子は反対派の意見を押し切って、唐と新羅の軍事同盟を成立させ、交渉のために単身高句麗に赴いて自ら捕虜になった人である。脱出した彼は前述のように金多遂とともに大和を訪れ、九ヶ月滞在して帰国している。

このような優れた有力な政治家が大和を訪れたということは、金春秋が外交

上重大な意図をもっていた証である。前年、高向玄理が新羅を訪問しているので、唐・新羅・大和の三国軍事同盟の成立を目指して大和政府と交渉したことを受けた、いわば答礼の訪問でもあった。

ところで、『日本書紀』では、乙巳の変の推進者として、中大兄、中臣鎌足、蘇我倉山田石川麻呂などを挙げているが、変後に大和国王になった孝徳や大海人については、とくに何にも記述していない。蘇我馬子、蝦夷、入鹿の権力の時代にあって、推古女王以降、蘇我氏の意向により、百済に対する友好のためもあって、温祚系百済王族の血をひく舒明王、皇極女王などを大和王の後継者にしていたという説がある。

蘇我氏は、沸流系百済の王族出身ではあったが、王の近親の血族でなかったため、当時の扶餘の血を引く朝鮮半島の国々や大和の慣行として、王になることはできなかったのである。

「しかし、本当にそうであったのだろうか」

蘇我には、何か事実が投影され、歴史が隠されている。孝徳が突然歴史に現れた理由は何か。皇極は高句麗と百済の血を引いている女王と考えられる。系図の操作は、人々の記憶が薄まった頃、後で創り上げられたことである。歴史を研究すればするほど、松原はそんな懐疑を抱くようになってきた。

王　族

一

蘇我氏は沸流百済王家の傍系にあった。子孫の蝦夷と入鹿は乙巳の変で殺害されたが、依然として血は残った。物部、中臣も王家を古くから支える伽耶系の出自である。このころ新来の集団としては、舒明が温祚百済系、孝徳と皇極は高句麗王家の流れにある。安倍氏は、現在の福井の高志国に根付く高句麗系、大海人は伽耶系であったが、そのいずれも元を正せば扶餘の血をひく王族である。古人大兄は舒明と蘇我馬子の娘の法提郎娘との子で解明派であった。また、有間王子は高句麗系の孝徳と安倍氏の血を濃厚に引く有力な王位の後継候補で、安倍倉梯麻呂大臣は王子の外祖父である。

王位争いに関して、古人大兄や有間王子との間には、陰に陽に勢力争いがあった。そのなかで、舒明と高句麗系の皇極の系図に組み込まれた、温祚系百済の血をひく、最初は葛城王子といわれ、後世に中大兄と名付けられた天智天皇は、三人の中では王位継承については当初は最も劣勢にあった。

そんな中で、事件が起こった。いや巧妙に起こされた。

六四五年に古人大兄が蘇我田口臣川堀、物部朴井連椎子、吉備笠臣垂、倭漢文直麻呂、朴市秦造田来津らと謀議をもった。しかし、吉備笠臣垂は、中大兄へ密告し、事の全容を明らかにした。裏切りである。

「古人大兄が蘇我田口臣川堀らと謀りごとをしています」

時を移さず、中大兄は兎田朴室古、高麗宮知に命じて軍隊を派遣し、吉野に幽閉した古人大兄らを討った。孝徳王にとっても共通の邪魔者であった温祚百済系の抹殺に成功した。

古人大兄の討伐後、孝徳王は難波長柄豊崎に遷都し、六四六年春に改新の詔勅を出した。

「この国は新しく」

しかし、実際は蘇我の開明的政策の一部をそのまま採用しただけであった。

孝徳は大化元年に、高句麗、百済、新羅に使者を出した。その頃は高句麗王家が扶餘の血筋からいって最も高貴な天孫の国といわれていた。これこそ、彼の王位への権威付けであった。大和の巨勢徳陀古は、高句麗王の使節に対して次のように述べた。

「大和王の遣使と、高句麗王の遣使とは、将来も永く温和な心をもって往来すべし」

孝徳は出自から言ってこの高句麗の血筋にあったことを物語るが、六四九年になると妃の父である高句麗系の安倍倉梯麻呂大臣が亡くなった。哀しみにくれ、我を忘れた孝徳王の様子が伝わっている。この結果、高句麗系の勢力が弱まり、後ろ盾を失った孝徳の力が急速に衰えてきた。

孝徳との血縁の関連が深く、地盤が高志国であった安倍氏は、この頃から中央政界から遠ざけられ、やがて北方の蝦夷討伐のために働くことになったことがよく知られている。

今度は、馬子の孫で入鹿の従兄弟である右大臣の蘇我倉山田石川麻呂が反乱

を起こした。この乱は親百済系側近が仕向けた陰謀と誘導があった。
「蘇我は除く必要がある」
安倍倉梯麻呂大臣の死亡の混乱をついて策謀を巡らし、この罠が仕掛けられた。
「これがその絶好の機会だ」
このとき、蘇我日向の讒言を利用した。
「蘇我の大臣に謀叛の動きが見られます」
「して、どのような」
「兄の麻呂は、葛城王子さまが海浜に遊ぶ時をねらって殺害しようとしています」
策謀家の葛城王子はこれを巧妙に謀反に仕立て上げた。
倉山田石川麻呂は難波から大和へ逃亡した。葛城王子（中大兄）は異母弟、蘇我日向と追討軍として追わせるが、美原町黒山で大臣が家族と共に自殺した知らせを受けて、丹比道より還った。やがて陰謀と悟った赤猪、興志ともども山田寺にて自害して、妻子や随伴者にも自殺者が多数でた。そして、この日の夕刻には、木臣麻呂、穂積噛臣、物部二田造塩らが残党の籠っていた寺の周囲を囲み降伏させ、彼らを斬首に処した。連座して殺された要人は田口臣筑紫、耳梨道徳、高田醜雄、額田部湯座連、秦吾寺など多数にのぼった。
それにつけても、倉山田石川麻呂はかつての折りに、山背大兄と田村王子との争いには中立を保ち、改心時には中大兄側についた味方であったのだが、血の争いは非情であった。
「無念であります」
「あなたの無慈悲、父大臣に代わって、お恨みいたします」
改新前に嫁いだ、中大兄の妃の遠智媛が泣き崩れた。その娘で後の持統天皇になる鵜野讃良皇女も母の傍らで泣いた。
中大兄のもう一人の妃の造媛は父が斬られたことを知り自害した。
この結果、巨勢徳陀古が左大臣に、そして大伴長徳が右大臣となり、蘇我の残党整理が進み、新羅勢力が一時的にやや伸張した。いずれにせよ、元来、蘇我の血を引く者を最終的には除く必要があった。新羅派は大伴が主流であるが、物部二田造塩の役割にあるように、蘇我によって殲滅された物部氏の怨念も強かった。
「所詮、倉山田石川麻呂も蘇我の一派だ。しからば利用するだけである」
〈大和の我が権力機構には百済の血でも邪魔になることがある〉
中大兄はかねてからそう考えていた。
「禍根を残さぬように」
すべては、陰謀であった。倉山田石川麻呂には、謀叛の心が無かったことを人々は後で知ることになった。

二

乙巳の変後に大和国王になった孝徳王は、高句麗王の血を受けた王一族といわれる。乙巳の変は、局外中立すなわち朝鮮半島に対する不干渉の政策をとる蘇我氏を排除し、大和を百済・高句麗側に付けようとして行われたクーデターである。この時の首謀者が高句麗出身の王族の孝徳王であった。皇極も同様に、高句麗王家の血を受けていた。これに対し、父系が百済出身の王族は中大兄、百済王子の豊璋などであった。
乙巳の変により、高句麗・百済・大和の連合ができ、孝徳王はこの協調関係の中から即位した。したがって大和は、高句麗系の孝徳と百済系の中大兄の二頭政治となったが、月日が経つにつれて、権力争いから二人の間が不和になった。もちろん、このような状況にあっても、孝徳王の即位から六五四年までは、ほぼ毎年のように新羅と百済の使節が大和に来て、国際関係の模索を行っている。
「大和を味方につければ」
「人の多い、大和の協力は不可欠だ」
新羅と百済の駆け引きが長きにわたって繰り返された。
六四〇年初頭には新羅は国力が優れず、何としても自国の軍事力を補強する必要があった。この時期、大和の父祖の地の伽耶地方を百済が一部支配してい

たが、百済との友好は概ね保っていた。この間、同盟を求める新羅に、大和は六四六年九月に高向玄理を派遣し、その意図を確認した。

「ならば、その証を示すように」

これに対して、六四七年七月には高向玄理・中中臣連押熊を大和に送り返す際に、新羅は献品を添えて、従者とともに宰相の役に相当する上臣大阿飡の官職にあった金春秋王子と金多遂将軍を派遣した。

「孔雀と鸚鵡一隻ずつ献しあげます」

春秋は大和滞在の後に外交上理由から高句麗、唐へ渡り、新羅へ戻った。

大伴長徳が右大臣に昇進した頃を境に新羅勢力は大和の中枢に近づいていった。五月には小華下の三輪君色夫と大山上の掃部連角麻呂を新羅に遣わした。新羅王は六四九年にも金多遂を派遣して、大和への親和の意を示した。このとき、従者は僧、侍郎、丞など計三十七人であった。こうして、新羅は大和の支配層に次第に食い込んでいった。

翌年の六五〇年には白い雉が西の方で見つかり、その奉献があった。

「良き性、吉兆なり」

人々は幸先に希望を膨らませた。そこで朝廷は元号を〈白雉〉と変えた。

この六四九年の四月にも新羅が貢調のために使節を派遣した。実は、このころ、百済系の使者も何度も訪れ、大和を巡って新羅系の勢力としのぎを削っていた。

「頼みにしてるぞ」

新羅王からの伝言である

「宮廷からの意向を伝えよ」

新羅から再度来日した金多遂将軍がこの時期に宮廷内で力と実績を背景に徐々に進出していったが、その背景には、将軍が自分の大和での親和性を促進するために、かねてから心を良く知る大海人を極力活用したことにある。

このころ、国防上の必要性から、新羅は唐との関係を益々強化していた。

こうした中、孝徳王と中大兄の間で意見の対立は深刻になった。当時の大和国内の勢力を形成する人口分布は、百済、新羅、高句麗の順に多数であった。ほとんど総てが血筋にもとづいて決められていたとはいえ、この勢力図が権力構造に大きな影響をもっていた。すなわち、味方の数に劣る孝徳王が大和を統治する上で、数に勝る百済系の実力者を納得させることができなかった。つまり、血筋が上位でも総体的には力不足であったからであった。

そして、六五四年、ついに中大兄一派は、孝徳王と袂を分かちて、難波宮を出て、故地の飛鳥に戻った。中大兄の二度目の権力獲得のための冷厳なクーデターである。このときは、乙巳の変とは異なり無血であった。というのは、中大兄は高句麗を背景とする孝徳王を武力で抹殺できなかったからである。哀しみにくれた孝徳王は一行を追うように見送りながら、王祖母や王子らと慟哭したと伝えられている。その後、難波宮に事実上軟禁された失意の孝徳は、翌六五五年に病死した。

この期にあって、中大兄は、高句麗の王族の血を引く皇極女王を重祚することによって、高句麗との関係や百済との関係を維持した。

「しかし葛城王子は大和の王として認められない」

「ほかに、有間王子もいるではないか」

高句麗からの指示により中大兄の即位が拒否された。

この時点にあってもなお、思い通りには行かなかった。

「やはり、だめか」

結局のところ、乙巳の変後、中大兄は十七年間にわたって王位につけなかった。その理由は、軽王子・中臣鎌足に比べて、中大兄の乙巳の変への貢献度が低かったからである。

「高句麗か、百済に何か特別に貢献しなければ」

孝徳亡き後、六五六年春に、百済との友好関係をもつ中臣鎌足が新羅との提携に傾いてきた。紫冠をいだく実力者の彼の許での事実上の王権の行使と孝徳王の後継の斉明女王の間で大和の政策は右に左に小刻みに揺れていた。

持統三年五月の記事によると、孝徳崩御の際、〈巨勢稲持等を派遣して喪の日を告げる。このとき、金春秋奉勅〉とあり、新羅へは喪を告げていることが分かる。

六五八年の春には左大臣の巨勢徳陀古が亡くなり、斉明の孫といわれ、中大兄の子である建王が亡くなった。建王は斉明がこよなく愛した幼子であった。言葉も話せないほど、重度の障害を背負った子であった。愛児を亡くした中大兄の悲しみは深く、後に孝徳王と間人妃、それに斉明女王等とともに丁重に埋葬した。

松ヶ枝

六五五年、皇極が斉明として重祚した。大化から白雉への改元の時のように、中大兄の周到な策略を側近として大海人はつぶさに観察していた。

「王子様を兄とも慕っております。何なりとご下命ください」

年下の中大兄に向かってそう言った。

「実行は赤兄に任せよ」大海人に静かに命じた。

孝徳王の子の有間王子が無実の反逆罪で捕らえられた。『日本書紀』によれば、中大兄の忠臣、蘇我赤兄が有間王子に中大兄の悪行を述べ、共に中大兄を討つよう促した。十八才であった有間は、そこに陰謀を感じて、最初は気違いを装って、蘇我赤兄を警戒したが、ついに巧妙な蘇我赤兄に謀反の動きを同意した。

「そこまで、いうのなら」

「……」

「そして、もし、協力してくれるなら」

「むろんのこと…」

「されば…」

「実行あるのみ」

すぐに、有間王子の謀叛の疑いが発覚した。そして、その夜のうちに中大兄の追っ手が掛かり、有間はあっけなく捕えられてしまった。

「不届きな、こともあろうに謀反とは」

この時、斉明女王は南紀の牟呂温泉に行幸中であったので、有間はそこまで連行されて裁きを受けた。結果は死罪であった。

「お上に弓引くとは」

「私はお上に対する下心はない。すべては天が、そして赤兄がそれを知っている。私は全く判らない」

と懸命に言い訳し、涙ながらに狂おしく叫んだ。

捕われの身の有間は護送中、斉明女王への申し開きのみを頼みに運を天に任せて、遥か先に紀伊の湯を臨む磐代の地にて歌を詠んだ。自ら傷みて松が枝を結ぶ歌、万葉集巻二にある二首である。

もしもこの身が無事でいられたら　もう一度ここに帰って、この浜松が枝の結びを見ようとの気持ちで詠んだ。

磐代の浜松が枝を引き結び真幸くあらばまた還り見む

そんな願いと一縷の望をかけた若き王子の悲しい歌であった。旅の安全や命に障りがないことを祈るまじないとして松の枝と枝を結びつけることがよく行われた。

家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

湯水で戻した干飯をいつものように器を使って大韓神にお供えできないのを有間が嘆いた。家ではいつも笥に盛っていた飯を旅の途中にある身にあって椎の葉に盛って供えている。死の覚悟をした旅で、自分の無作法をわびながら、なお大韓神の救いを願って静かに詠んだ。死を目前にした辛さも、痛みも訴えることなく、淡々とした心情を詠んでいる。

それゆえに、魂を結ぶ浜松の枝と椎の葉の光景は周囲の者の一層の悲しみを誘った。

有間は、牟呂の湯から都に戻される途中で、藤白坂にて死を賜った。六五八年十一月十一日であった。

丹比小沢連国襲が現在の和歌山県海南市内海町で有間を絞殺したのである。王子は、帰り途に磐代を通ることになっていた。しかし、再びあの浜松を見ることはできなかった。それは何とも哀しすぎる事件であった。

ことのつまりは、純真な王子が蘇我赤兄に謀られ、謀反の罪で処刑されたの

であった。しかしこの事件は、むろん中大兄の陰謀であった。というのは、後年、蘇我赤兄は左大臣にまで昇進しているからである。

「赤兄よ、ご苦労であった」

斉明朝の重臣である蘇我赤兄が、この事件の実行の主役であった。これで、高句麗の血をひく孝徳系は終焉を迎えた。というのは、有間は孝徳王と安倍倉梯麻呂大臣の女の小足媛との間の子であり、高句麗系の扶餘の血を最も色濃く受け継いでいた王子であったからである。このとき、王子の側近は紀伊の湯へまず移送され、また守君大石は上毛野国へ、坂合部連薬は尾張に配流となり、塩屋連鯛魚と舎人の新田部連米麻呂は斬殺であった。

この話からは、乙巳の変の首謀者の一人であっても中大兄はこの時点では、必ずしも大和王になれる保証はなかったということがわかる。高句麗や百済の意向によっては、有間が王になる可能性が強かった状況にあったことを物語っている。それに対して陰謀を駆使して権力の階段を少しずつ登って行ったのが中大兄であった。朝鮮半島と大和一帯の血統と権力基盤が相互に牽制しあって、この時期には王位は王族の合意のもとに決まった。そのために、互いの諒解を得るまで執拗な根回しが不可欠であった。

このころ、大和は東方への国力拡大のために越国守安倍比羅夫に命じて、蝦夷討伐が具体的になっていた。六六〇年、安倍比羅夫が粛慎を討って、生羆二頭・羆皮七十枚を献上した。この粛慎は本来は半島北部の民族名で、『日本書紀』にも出てくる渡来民族であろう。その二年後には、〈安倍臣ヲ遣シテ、船師二百艘ヲ率テ、粛慎ヲ伐タシム〉、そして〈安倍臣陸奥ノ蝦夷ヲ以テ、己ガ船二乗セテ大河ノ側ニ到ル〉との記載が見られる。

敗戦

一

六五九年、ついに唐・新羅の連合軍は、百済の攻撃を開始した。百済は滅亡の危機にあった。しかし、これに対しては、百済が明確な救援を大和に依頼するのが困難であった。百済は善戦むなしく、翌年の六六〇年九月には、唐の大軍の前に敗れた。この結果、百済の義慈王は捕えられ、王子の扶餘隆は逃亡した。

十月になって、温祚百済系の血を引く中大兄に、

「豊璋王子を迎えて、国の王としたい」との願いがあった。

残った百済の将軍達は、九州に住んでいた義慈王の子の豊璋を百済の王に迎え、再度新羅との決戦に臨んだ。すなわち、左平鬼室福信が滅んだ国を豊璋を王として、〈南扶餘〉という国号のもとに百済を再興しようとした。温祚百済系の中大兄の後押しがあったればこそ、大和は救援のために、筑紫に軍備を集結した。六六一年、斉明女王は現在の福岡県朝倉郡朝倉町にある朝倉橘広庭宮へ遷都した。軍事遂行のためである。このとき中大兄は側近の大海人と額田姫王を同行した。瀬戸内海を航行するうちに海原には豊かにたなびく雲に光差す落日をみた。今宵の月夜は美しくなるだろうと中大兄は待して詠んだ。

わたつみの豊旗雲に入日さしこよひの月夜さやけくありこそ

目的地の筑紫への移動の途中、現在の愛媛県道後温泉付近にある熟田津に二カ月ほど留まり、さらなる船旅のために潮の流れの間合いを測った。そして、休息をも兼ねた出発準備を整え、月の満ち欠けを待っていると、ようやく潮の流れが期待通りになった。行く手に待ちうけている難儀な戦いに恐怖を感じながらも、さあ、今こその地に向かって漕ぎ出そう、というような大事な船出待ちの状況を次の歌にしたためた。

熟田津に船のりせむと月待てば、潮もかなひぬ今は漕ぎ出な

この時期に、かねてから大和で過ごしていた豊璋王子を百済（南扶餘）王に任命したのが斉明女王であった。百済が形式的には大和の下に就いた。

「何としても、我が父祖の百済の地の再興を」

そんな事情もあって百済の将軍達や大和側も、このような百済王の任命を、ことさら異を唱えずに、さほどの違和感もなく認めた。ところが、都を九州に遷し、政務を執っていた斉明女王が、病気になり、明日をも知れない命となった。

斉明より、百済王に冊封され、官位を受けた豊璋が百済に入り、新羅と戦った。一時期は志気も盛んで、戦局は有利に進み、各地の軍事的拠点を奪還するに到った。

「このまま行けば、きっと」

得意の豊璋王が自慢気に言った。

「そのとおりです。王様」

側近も喜々として、唱和した。

これに加えて、六六二年には、安倍比羅夫を将軍として百済に援軍を出した。が、やがて軍内部の紛争からうまくことが運ばず、大和にさらに援軍を頼むことになった。大和側は、二万五千人の軍隊を送った。ところが、この軍隊が朝鮮半島に着いたときは、すでに豊璋の百済軍は敗れていた。援軍は六六三年、白馬江で唐・新羅連合軍と戦ったが、軍略的な稚拙さもあって悲惨な敗戦となり、多くの大和兵が新羅の捕虜となった。豊璋はこのとき高句麗に逃亡したと『日本書紀』や『三国史記』には記載されている。ここに、百済は完全に滅んだ。同時に大和は半島への手掛かりをすべて失い、国内も戦後の処理で混乱することになった。

この戦争を指揮し、戦後の処理を担当した後の天智天皇である葛城王子は歴史の中では、多くの場合に中大兄王子と呼ばれたが、この〈中大兄王子〉という呼び名は実に奇妙な呼び名である。当時にあって王子の名は、母方の出身地か、母方の姓、または育った地に因んでつけるのが普通であった。中大兄も葛城王子という大和葛城地方の名がついているが、一般には〈長男でない王子〉の呼称である。彼には古人大兄王子という異母兄がいたが、乙巳の変後、謀反の罪で除いている。その当時は、葛城王子と呼ばれていたが、後世の歴史家が彼の将来の王位を意識した、すなわち皇太子を意識した〈中大兄王子〉という一般名詞を固有名詞のように使い、暗にその正当な血筋を主張したと思われる。すなわち中継ぎの皇太子として皇統に巧妙に挿入した形になっている。これについては後述する。

二

戦後処理にあって、戦勝国側の唐と新羅は大和に諸々の恫喝をかけてきた。このとき、大海人は新羅王朝からの意向を、種々の人脈を通じて間接的に中大兄や斉明女王の後を継いだ間人中女王に伝える役目にあった。これまでは立場上、大海人は大和の状況を十分に理解していても、新羅に対して沈黙を余儀なくされていたが、両国の事情によく通じているが故に、この時期に歴史の表舞台に登場することになった。

「大和に来てからもう何年になるか」

側近に訊ね、指折り数えてみた。

「そう、二十年以上になる」

自分の心の中は、すでにすっかり、大和の人になっていた。それゆえ、何とか両国間に上手に入って、調整を行うまでになっている。

このころ、大陸では唐が東突厥から西へ進み、現在の新疆ウイグル自治区東方の天山山脈近隣の盆地に栄えた高昌国まで征服し、領土はなおも拡大し続けていた。朝鮮では百済、高句麗の滅亡と統一新羅の誕生という変化が起きた。当然、大和にも多くの影響があった。しかし、ずっと長く尾を引いた影響は、何といっても百済支援の失敗であった。そのために財政的にも困窮し、その後、大和は直接的に唐の脅威にさらされることになったからである。

話を前に戻そう。戦後まもなく六六四年に唐の郭務■が二千の兵と共に大和にやってきた。

「郭務■の来訪の目的は何だろう」

敗戦で打ちひしがれた大和の人々はその意図をいぶかしく思った。

実際は、起こり得るべく大和攻めに備えての下見である。わずか二千人で大和を攻略できるとは、もちろん大和の誰もが考えていなかった。しかし、これは、大和に恐怖をもたらしただけでなく、政治的にも重大な影響を与えた。

「何とかしなければ」

中大兄は急遽、城を作り、九州博多湾の防備に着手した。太宰府を防御するための堀と土塁からなる水城と呼ばれるものである。そして、これに伴い防人の制度を設けた。

「ここは、即位して、体制を固める」

六六七年、中大兄は、大友王子の母である伊賀宅子娘の実家を頼って、琵琶湖畔の大津に都を移し、天智天皇として翌年に即位した。そして、唐・新羅の大和進出の脅威に備える日々を過ごしていた。

「ここなら、唐の侵略を防ぎ切れる」

このころから、乙巳の変や朝鮮半島出兵の時まで歴史の影に隠れて名前の表れなかった大海人がその政治的手腕を余すことなく発揮するようになってきた。

三

こうした状況にあって、大海人は宮廷での任務のなかで〈血筋は本当に純粋に一系に保たれるのか、他から入ってくる血はどう考えれば良いのか〉について絶えず自問自答していた。すでに、本邦では住民そのものが混血を繰り返す中で、朝鮮半島からきた当時の渡来人が相当数入り込んでいた。ことに西日本では移住者が当時の東日本に較べて圧倒的に多かったし、同じ地域の同族と考えての親近感を継続的に自然に受け入れてきた。しかし大海人が問題視したのは社会の上層部であり、王族であった。彼らは朝鮮半島の服を着用し、彼ら独自の食生活をし、言葉を話す。とくに都である近江大津の辺りでは、そのようであった。つまり出身地によって小さな集団をなし、異なる言語を話しているのを常に見聞きしていたからである。

その言葉については、自分の生い立ちもあって、大海人はとくに関心が深かった。

そもそも、高句麗以北ではツングース系の言語を話していたという。鄂倫春族や満族、靺鞨族、邑婁族などの言語がそれにあたり、これとモンゴル系、トルコ系の言語をあわせてアルタイ語族と呼んでいる。

『魏志東夷伝』によれば、三世紀には旧満洲から朝鮮半島にかけて、主としてツングース扶餘系言語が使われていたという。高句麗語にわずかに残っていた単語や数詞に一致がみられる古代の大和語に類似があるが、資料が少ないし、実際に周辺の扶餘系の諸言語が消滅してしまったので、大和語は孤立しているようだ。そんなことを、松原は思い描いては、あたかも大海人に成り変ったように、あれこれと周囲の言語を考えていた。

半島の三国時代には、それぞれ別個の言語が使用されていた。新羅で使用されていた言語は、かつて漢の四郡が存在した頃、朝鮮半島の南部に住んでいた韓族の言語で、現代の韓国・朝鮮語の祖先にあたるといわれている。一方、高句麗では、旧満州・沿海州・北朝鮮に住んでいた扶餘族言語が使われていた。百済は二重言語の国で、支配層は扶餘系の、被支配層は韓族の言語をそれぞれ話していたようだ。

しかし新羅語以外は残念ながら『三国史記』などの地名表記から推定される少数の単語しかわからない。それでも、松原は半島と列島の間の何らかの言語的関係は、今日明らかになっている古墳などの文化的関連からも、やがてその解明が期待できるのではと思っている。

とにかく、大海人が毎日見ている大和の社会では、雅で高度な文化と技術を携えて渡来してきた多くの異言語の人々が文学や芸術での手本となり同化しながら土木工事や新田開発などで大いに活躍している。彼らはその意味で大和朝廷からは文化や習慣には違いがあっても同胞に同化すべく民族として歓迎されている。そのようにして血が混じっての民族融合はむしろ生活のすべての面で好ましいことだとだれからも歓迎されている。なのに王家の血だけがなぜ特殊であらねばならぬのか、自らの地位への思いとこの矛盾を明確に見る思いであった。

それでも、やはり天高く地上を照らし、この世の隅々まで治めるには、どうしても天孫の血の尊厳による権威と権力が必要なのだ。そう大海人は自分に強く言い聞かせた。

変　貌

一

中大兄王子は百済の滅亡後に、大和の生きる道を必死に考えていた。一方、この時期に以前から新羅にも信頼されていた大海人が、文武国王から改めて大和の戦後処理を託されていた。まず、仮の王宮であった筑紫の朝倉橘広庭宮の始末が任務であった。

しかし、間もなく、半島の統治を巡って、新羅と唐との関係が変わってきた。唐が諸々の要求を新羅に突きつけてきたからである。唐・新羅の連合軍が百済を滅ぼしてから五年後の六六八年には、高句麗を攻め滅ぼし、新羅が悲願の統一を成し遂げようとするまでになっていた。

ところが、唐と新羅は連合状態にある一方で、朝鮮半島で主導権の争いが起きたのである。

「この地は当然、我が領土」

主導権争いから、今度は朝鮮半島の支配権をめぐって深刻な争いが起きた。
「新羅は唐に備えて防備を固めております」
「うむ…」
「大和も防備を固める必要がありましょう」
大海人がそう進言した。
このころは、すでに大和と新羅との関係のみならず、大海人の大和に対する見方が変わっていた。そしてそれとともに、大和がたまらなく愛おしく思われるようになった。ことに筑紫の地は、思い出の地でもあり、朝鮮半島にも近いので、王子に進言して、この一帯の防備を固めさせた。
「大和は、私にとってかけがえのない国です」
話は百済の滅亡以前に遡るが、伽耶王家の血を引く大海人は、いつしか宮廷近くに住むようになり、政治的配慮もあって、王族の身分を授かっていた。このころは、大海人は中大兄の厚い信頼を受けるようになっていたからである。そして、やがて宮廷に仕えていた額田姫王と再会した。そこで初めて、木立に囲まれた鬱蒼としたあの宇佐の地で、自分との間に十市皇女を授かっていたことを知った。戦時にあっては、朝倉橘広庭宮への遷都のとき中大兄の側近として大海人が、また斉明女王の側近として額田姫王も同行した。このときの熟田津での有名な話があるがこれについてはすでに述べた。
戦後には大和を護るための工事の指揮のために、何度か筑紫に入っていた大海人は、大和からはもちろん新羅からも信頼されていたこともあって、その任務に両国の国益に関して重い使命と責任を感じるようになっていた。
ところで、筑紫の宗像に生まれた胸形尼子娘は、大海に生きる海洋民族の娘であり、大海人との間に生まれた高市皇子はすくすくと成長していた。利発で感受性の高い少年になっていた。
この地に戻った大海人に自分の過ごした青春の思い出が鮮明に甦った。かつての友人にも出会った。海洋氏族との交わりを深めた。強い日の光のもと、海で働く海女子らの姿が眼中に飛び込んでくる。故郷の奄美をも連想した。自分の大海人という名の由来も思い、この間に海洋や外来の氏族と自分との一層の親密感を確認した。
大海人は大和が新羅とともに生きることを、愛する人々の住むこの美しい土地で真剣に考えていた。その点で、即位から間もない天智帝とは国際関係について本質的に異なった見方をしていた。
都では、唐と新羅の情勢変化のアドバイスを大海人から絶えず受けていた。にも拘わらず、天智帝は唐への恐怖もあって、侵略に備えると同時に、唐側に着いて新羅に敵対することになりかねない状況にあった。
「自分の国だけで生きたいものだ」
「どういう意味でしょうか？」
大海人が天智に丁寧に尋ねた。
「外国に手を貸すことのおろかさよ」
かつての事態の反省に立って天智が語調を強めた。しかし、そうばかりいってもいられなかった。
「唐とはしっかりとした和平の道を」
天智帝が傍らに居た大海人にそう言った。国を思う二人の考えの違いであった。
「わたしは、何よりも大和のため、そして半島のためにここに居るのです」
大海人がそう答えた。
「とすれば、どうするのがよいかのう」
「今は、そのためにも、新羅と共同して、唐に当たるべきでしょう」
この時期、六三〇年から六六九年まで六回に亘り遣唐使を送っているが、そのうち大和国王としては、舒明が一回、孝徳が一回、斉明が一回、天智が三回派遣している。ところで、一回目から五回目までは、百済、高句麗の領海を通って唐に至っている。しかし、六六九年に天智が送った六回目の遣唐使は、奄美大島経由で、今の上海付近に上陸している。これは、六六九年には、すでに百済と高句麗は、新羅によって滅ぼされていたので、従来の航路は、すべて新羅の支配下に入っていたからである。
「新羅とともに歩むには大和にも条件があるがのう」

「何なりと仰せください」
「ならば、将軍よ、頼むぞよ」
大海人が、そのために、そして大和の安全保障にどれほど影響力をもつ、重要な人物であるか、自らもすぐれた政治家の天智は十分に知っていた。
「どうか、わしの片腕として、いつまでもな」大海人に語りかけ、
「新羅にはよしなにのう。それにしても、唐とはどうしたらよいものか」と続けた。
朝鮮半島の情勢には暗雲が立ちこめ、新羅は、旧百済、旧高句麗の武将を駆り立て、唐を朝鮮半島から追い出すように画策した。
〈半島は、唐に支配されてはいけない。何としても、新羅を護る〉大海人は固く、自らに言い聞かせた。
「大和はどうしたらよいのか」と天智帝が苦渋に満ちた表情でつぶやいた。
このころの朝鮮半島での唐と新羅の覇権争いの影響は、大和においては新羅と唐のそれぞれの同盟関係を主張する勢力の対立構図に連なり、百済系の天智は間に立って大きな苦境にあった。
「何とか、大和を護らねば」大海人も心の底からそう思った。
しかし、目立つ行動を繰り返し各所で示す大海人が、いつしか宮廷でも注目される存在になっていた。

二

新羅と唐との対立はついに抜き差しならぬほどに深まり、衝突は決定的になった。
「どうすれば、いいのか」天智が腕組みをした。
「唐とくめば、大和は安泰かも知れません。が、半島は滅びます」
「新羅とは敵対しないほうが」
「我々の王国は皆血の縁で結ばれています」
大海人がおもむろに答えた。
「いや、大海人どののやり方では大和がほろびる」
「そんなことはございません」
「いや、唐の実力を考えないと……」
実際、唐は全盛期を迎えようとするほど力が充実し、首都長安は国際性豊かな世界都市になっていた。街は賑わい、珍しい技芸や音楽を奏でる碧眼の異邦人に満ちていた。
このやりとりが、新羅の王に伝えられた。
「世論をまとめよ。大海人」
すでに、武烈王に代わって、その子の文武王の時代であった。
「何とか大和を味方にするのだ」
新羅からの命令が繰り返し大海人に届けられた。
「いや、まとまりません」
「ならば、親新羅で固めよ。山背のあたりには秦氏などの新羅系が多いと聞く」
焦る新羅から、ついに天皇を廃する手段が示唆された。
「やむをえない」
国内外の世論に従わなければならない。大海人は覚悟を決めた。
「もし、首尾良く行けば。場合によってはそなたが王に」
文武王の密書が大海人に届けられた。
これまで、自分は王位にはもちろん関係ないと思っていた。自分は、確かに扶餘の血は受けている。しかし、それは王家の直接の血筋ではない。伽耶の王家の血を受けている傍流に過ぎない。しかし、高句麗と百済が滅亡した今は、この血に天智帝の女を経て、百済の血の合体により、王家の血の濃度を一定の水準に戻せるかもしれない。かつて天智との間に繰り広げられた心理的葛藤を天武は記憶のなかに甦えらせていった。
「わしが王になれなくとも、次の世代に」

「出自が明らかな、百済の血をひく蘇我の血を合わせれば」
と心の何処かで思った。
何度もそう考えているうちに、天智、蘇我の血だけでなく、中臣の血をも譲り受けることになっていた。血の濃度が高まる。扶餘の王族は基本的には男女の血を同等とみなしたからである。
「わたしは、いつも帝の御心のままに」
どんなときも、大海人はそう答えるしかなかった。
「でも、もしかしたら……　大海人は……」
天智は、新羅の信頼を背景にした大海人をとにかく恐れていた。そんな不安をもっていたので、彼の宮中内での地位や自分とのあるいは高官との人的関係を閨閥を含めていつも真剣に考えていた。そんなことが、かつて天智との間になにかと繰り広げられたことを天武は記憶のなかに甦らせてらせていた。

三

眼前では、即位の御大典の儀式が滞りなく進行していた。それはあたかも絵巻物を見る思いであった。
〈紆余曲折があったものの、天智の子の大友皇子を武力で除き、天智の他の皇子を味方に組み込むことにも成功した〉
こうして、王位を完全に自分の手中に収めた大海人は、即位の礼の中のこの場で大和の統治者として諸般の事情を思い起こした。
「唐は、かつて新羅の味方であった」と心のうちで静かに呟いた。
「なのに、いまや互いに敵対している。国際関係とは、そういうものだ。そのように動くのだ」
〈でも、これからは、唐と新羅と友好関係を保てるようにし向ければ、大和も同時に安泰になる〉とも思っていた。
しかし、天智即位後、さらなる唐の攻撃により六六八年には高句麗が滅亡した。直ちに唐は悲願の安東都護府を平壌に設置した。それゆえ、六七三年天武即位後には期待に反して大陸と半島との関係が緊迫の様相を示してきた。これに不安を抱いた新羅が六七五年に百済の旧領を併合し、唐の野望に備えることになった。勢いにのって六七六年になると、文武新羅国王は朝鮮半島より唐を駆逐して統一新羅を実現した。そして、この半島は新たな独自の歴史を歩むことになった。敗退後の唐は六七七年、平壌から遼東に安東都護府を移設し、半島から後退した。
その後は、幸い、唐と新羅との関係も以前よりは安定に向かっているようであった。あとは、自らの天皇としての正当性だけだ。「王侯将相いずくんぞ……」それがわかっている。そして再び、心の中で呟いた。
「しかし、それでもやはり血が……」
王位の正当性に関する素朴な疑問が、大和の各地から吹き出していた。

相　剋

一

大海人は胸形尼子娘との間に生まれた高市皇子を伴い、共にこの飛鳥の地に入り、将軍として宮中で政務に携わっていた。こんな環境の中で、額田姫王にとっては、大海人との再会後の生活はとてつもなく嬉しかった。昔と変わらないおおらかで優しい大海人であった。近くに住むことになった。そんなこともあって、十市皇女が異母弟の高市皇子とやがて恋仲になった。
これよりしばらくして、大海人と共に宮廷に出入りする額田姫王を中大兄が見染めた。帝は当時、宮中で大海人の助言をもとに政務を執っていた。極めて頭脳明晰であるが故に、近寄り難い人であった。しかし、中大兄にとっては公務で忙しい激動の日々の中にあっても、美しい才女の額田姫王の存在が気になっていた。艶やかなその姿と身のこなしは、彼の心を捉えて離さなかった。思い立つと大海人に対する遠慮と躊躇があったが、時を移さず、彼女に文を送った。密かな交際が始まった。最初は大海人も見て見ぬ振りをしていたが、やがて権力者の意図のもとに、大海人と額田姫王の間柄は変貌せざるを得なかった。かつての甘い生活が身を包む。大海人の心が動揺した。自信は揺らぐことはなかったが、権力者の前では、なすがままの行為を黙認するしかなかった。
このころ、鵜野讃良皇女は、父の中大兄の命にしたがって、姉の大田皇女に次いで大海人の許に嫁いでいた。父から拝受した華麗な宮殿の離れで一緒に過

ごしていた。夫は、すべてに通じた希代の優れた大宮人であった。彼は公には大和と新羅の間を取りもつための大和の将軍であったが、中大兄とはずっと親しく交わっていた。彼は中大兄より年長であったが、すべてにわたって、前に出ることは控えていた。

しかし、猜疑心の強い中大兄は決して心を許すことはなかった。隙あらば、大海人を除きたいと思う、政治家としての習性をもっていた。それゆえ、前述の二人の娘だけでなく、さらに二人の娘を大海人に縁づかせた。これは権力の絡む政治の世界での話である。

私的な生活では、おおらかな大海人は、すべての妃と睦まじく交わり、加えて額田姫王とも笑顔で語らっている。傍目は平穏であった。しかし、妃たちの女心の微妙な動きは、表面上の平静さとはまったく違ったものであった。それでも、大田皇女は蘇我の百済の血を残すべく、大伯皇女と大津皇子を生み、穏やかな性格も手伝って、円満に暮らしていた。しかし、才気溢れていた同母妹の鵜野讃良皇女は様子が異なっていた。額田姫王はたかが豪族の娘。それにひきかえ、自分たちは天智の百済王家と百済の八大姓を通じて扶餘の血を受けている。もちろん、そんな意識から、その意味での安心感はあった。しかし、女としての安心感はまた別であった。

六六七年に近江大津へ遷都し、中大兄の天智帝への即位という、慌ただしい動きの中にあって、この年に額田姫王は大海人から別れて天智の許に移った。これと同時に、娘の十市皇女が大友皇子の妃となった。額田姫王にとっては十市皇女は自分の手で育てた愛娘である。娘の輿入れに合わせて自ら進んで、大海人と別れ、かねてから声の掛かっていた天智帝の許に移った。

そして、その翌年には、十市皇女と大友皇子の間には、額田姫王にとっては孫に当たる葛野王が生まれた。

二

桜井市の三輪山の麓に神社がある。拝殿前には、杉の老大木が聳えている。ご神体はもちろんのことであるが、別の霊験があるというのがこの神木である。その根本にある洞穴には神の使いの蛇が棲んでいると云う。暖かくなると時々顔を出す。蛇は古来小鳥と共に神の使いとして人々から敬い信じられていた。この麓一帯に広がっていた大和王朝にとって、三輪の祭祀権は大切なものであった。例えば、疫病の流行に悩む崇神王の夢に三輪の神が現れて〈自分を祀れ〉と告げたと伝わっている。『記紀』には、この神と神憑りする巫女との不思議な物語がある。

念願の即位を果した天智天皇は新しい国家体制を整えるため、近江大津を都しながら、この三輪の神山を宥める必要があった。大物主は国造りの神で、この神を怒らせてはいけなかった。そこで、国境の奈良山で額田姫王は神の坐す三輪山との別れを惜しんで詠ったという。その調べには惜別の感情が溢れている。

味酒三輪の山あをによし奈良の山の山の際にい隠るまで
道の隈い積もるまでに つばらにも見つつ行かむを
しばしばも見放けむ山を心なく雲の隠さふべしや

途中には幾重にも折れる道と曲り角があるので、奈良の山の間に隠れるまで、何度も眺めつくして、心ゆくまで別れの名残を惜しみたい三輪の山であった。なのに、無情にも、雲がこれを隠す。そんなことがあってよいはずがないのだが……そんな感慨を詠んでいる。

これに対する反歌が

三輪山をしかも隠すか雲だにも心あらなも隠さふべしや

せめて、雲だけでも情けがあっていいだろうに。そんなにも三輪山を隠さなくとも…

そんな思いのなおも微妙な心の動きが窺える。

大海人との間にかつて皇女までもうけた額田姫王は、こうして時の人の天智天皇に召されて近江大津へ向かった。そのような事情を考えるとき、歌の底には、一人の女としての追憶と哀惜がなお見えた。

『万葉集』に二人に宛てた額田姫王の恋歌からみて、しかし、彼女の本心は、大海人に向いていた。

三輪山は神代の大和の象徴で、額田姫王はその地で大海人との恋い慕う日々を想い起こした。彼女が宇佐八幡で巫女をしていたとき、筑紫に向かう大海人がその地に逗留していた。そこで異国の文化をよく知る大海人と出会った。その情景が目に浮かぶ。もともと宮廷で暮らしていた感受性の高い華麗な額田姫

王の心を大海人が強く捉えた。二人は恋に落ちた。そして、あれから時を経てここ宮廷内で繰り広げられる甘美な生活が続いた。しかし、どちらの場合も、つかの間の短い愛の交流であった。

ところで『日本書紀』では、天武帝は鏡王の女の額田姫王を娶して十市皇女を生んだ、と記すのみである。鏡王は鏡の作り部であり滋賀県蒲生郡が郷であろう。先ごろ、宇治市に鏡王の領地があったとの記事の中に、宇治の三室戸の辺りが額田姫王の出生地だということが語られていた。

秋の野のみ草刈り葺き宿れりし菟道の宮処の仮廬し思ほゆ

菟道の名はは宇治の地名に通じる。応神大王の王子の菟道稚郎子が自分よりも年長の大鷦鷯（仁徳大王）に王位を譲った話がこの地に伝わる。宇治生まれで宇治育ちの額田姫王が後に皇極女王のもとに仕えた。この時、彼女は十代後半であった。美人で聡明で明るい性格の彼女は宮廷に戻ってからも前にも増して、誰からも愛された。

あの別れた時の憂いに沈んだ大海人のことを思い出す。しかし、時が、次第に記憶を曖昧にしていく。これとともに、天智との愛が次第に育まれた。そんな素直で明るい性格の額田姫王であった。

額田姫王とともに在った天智天皇が春山にさえずる鳥と咲く花の陰を彩る緑の草木を思い描き、また秋の紅葉の山を想いながら、腹心として常に側に仕える藤原鎌足に、

「春山に活ける万の花の艶色と、秋山にたたずむ千もの紅葉の彩色、いずれが優さるか競わせよ」

と半ば命じるように促した。

即座に、額田姫王が歌を以って次のように判じた。これが万葉集巻一に載っている。

冬こもり春さり来れば鳴かざりし鳥も来鳴きぬ咲かざりし花も咲けれど
を茂み入りても取らず草深み取りても見ず秋山の木の葉を見ては
黄葉つをば取りてそ偲ふ青きをば置きてそ嘆くそこし怜し秋山吾は

冬が去り、春が来れば、鳥が来て鳴き、花も咲きましょう。春は、とても素敵な季節です。でも、木々が繁る山へ入っても花を手にはできないし、草深く、花も手折れません。ところが秋の暮れには、草木も枯れて、山のなかでは色づく木の葉や紅葉を楽しむことができます。とすれば、私にとっては、どちらかというとやはり秋の山が良いのです、というようなのどかなやりとりを三人が楽しんだ。そんな平和なひとときを思い出させることであった。

そして、必ずといってよいほど語られるのが蒲生の里での天智天皇と大海人皇子の額田姫王との間のロマンスである。

額田姫王は、近江の湖畔の蒲生野の絢爛たる宮廷薬猟りの日の饗宴で交わされた歌を想った。

それは、六六八年五月五日に天皇が〈薬猟り〉の年中行事を蒲生野で主宰し、この地の豪族、鏡王が二人を接待したときのことであった。そこは紫草を栽培する禁園で、天智帝も、大海人皇子も群臣等も一緒であった。すこし霧に霞んだ日の光の中に紫草の花と咲きならぶ額田姫王の美しい姿があった。円熟した三十代半ばの夏の日の情景であった。紫草の根から採る紫は赤味に輝くものであり、この物語は華やかな宮廷の野遊びの中でのできごとであった。

男は鹿を狩り、角をとり、女は薬草を摘んだ。実際に薬効の高い素材を集め、同時に野遊びをすることであった。鹿狩りも野遊びもどちらも遠く扶餘に起源がある。

このとき天武が無骨な舞を舞って袖を振ったのを鏡王の女の額田姫王がからかった。これに対して、即座に示した機知的反応のそこでのやりとりは、あまりにも有名な話である。実におおらかで機知に富んだ宴であった。

暗躍

一

念願の即位を果たして天皇になった中大兄は、亡命した百済の人々をたくさん抱えた近江大津において、唐のような帝王を夢みながら、六七〇年には、律令制のための懸案であった戸籍として庚午年籍を導入し、翌年には近江令を制定し、これを治世の基礎として、天皇中心の中央専制政治を推し進めようとした。しかし、国家の防衛上不可欠であった近江遷都にも拘わらず、民衆からは反発を買い、都には火災が頻繁に起こり、巷には風刺の童謡が流行した。

唐・新羅に敗れて以来、新羅からも信頼を寄せられ、伽耶の血を引く王族として遇されている将軍の大海人を、天智帝は心ならずも受け入れざるを得なかった。したがって、外交上、意に添わない影響を彼を通して受け入れてきた。表面上は、姻戚関係にもあり、親しく付き合えていても、心底、思いどおりにならない、いらだたしさと、大和の将来を案じる毎日であった。

天智天皇には伊賀の采女が生母の大友皇子がいた。聡明な皇子であった。本邦最初の漢詩集『懐風藻』に、この皇子のことが記述してある。唐の正使の劉徳高が、〈大友皇子は常人と異なる人相を表していた〉と語っていたとある。この書は大友皇子の孫の淡海三船の撰になる。

父天智帝は、有能で文化人であった皇子に後事を託すべく皇位を譲りたい一心であった。このころは、折りにふれて、権力志向を疑わせる行動が窺える大海人には、自らの四人の女を娶せ、警戒するようになっていた。それほどこの有能な大海人に対する警戒心が強かった。

そして、長年にわたる謀略の限りから、やっと手にした皇位の継承問題が、帝にとっては、何よりも大きな関心事になってきた。とくに健康を害してからはそうであった。そうした情勢の中で、天智帝は即位後十年の正月、遂に大海人を押しのけて、二十四歳の大友皇子を新設した太政大臣に任じ、権力を付与し、さらに皇太子に立て、譲位することを決意した。

「扶餘の血は大友に」

ところで、大海人は天智天皇とは血縁関係がなかった。しかし、天智の器量から、宮廷での厚遇からいっても、兄とも師とも慕っていたのは事実であろう。天智の娘を妃として娶っているだけに、婚姻上では大海人にとっては義父にあたる天智に、系図上で彼が上位に立てる筈はなかった。ところで、『日本書紀』では大海人を天智天皇の弟と設定した。が、年齢からいってどうしても無理がある。

大海人は本邦の皇子ではなかったし、半島の王子でもなかった。つまり、その昔、半島から九州を経て大和に移って、この地に根付いていた扶餘の血を引く王族であっても、戦勝国の新羅からも信頼されていた極めて有能な将軍であるだけであった。もし半島の純粋な血脈にある王子であれば、当時の慣習からいって、大和王になることができる可能性があったが、そうでなければ大和王にはなれない。それでも、大海人は辛うじて扶餘の血を受けており、王族に準じていた。

大海人は後に『日本書紀』の中で、自分が正当な皇位継承者であることを連綿と述べさせている。皇位継承の有資格者なら特別に何も言う必要がない。ということは、彼が大和王になれる血筋ではなかったことを物語っている。

あとは自分の亡き後に皇太子の安泰を願って、大海人を葬る必要があった。病気がちな帝はそれだけを考えていた。

「なんとしても、これだけは、やらねば」

自分の健康状態がかつてのように十分でないことを悟っていた天智帝は焦りを感じていた。

二

天智は大和の危機的状況を脱して、政界のバランスの上に立って、近江大津で政務を執っていたが、唐からは新羅征伐に参加するように再三催促されていた。天智にとって新羅は、祖国百済を滅ぼした敵国ではあったが、当時の大和は、親新羅派の大海人が勢力をもっていた時期であり、天智一人には、決断が困難な提案であった。そうこうしているうちに六七一年、太宰府に唐の使節・郭務■が、再度二千人の軍隊とともにやってきた。大海人が必死に天智を説得しようとした

「帝、唐と組んではなりません」

天智天皇としても、唐か新羅かどちらに付くか最終的な決断をしなければならなかった。悩んだ。心が痛んだ。しかし、彼の政治的判断は唐とともに新羅を攻めるのが結論であった。

ここに至っては、新羅派の皇子を名を許されていた大海人は新羅擁護のため、天智天皇と戦う決意をせざるを得ない。この上は、大海人側の作戦は、天智天皇が唐に返事をする前に、何とか天智天皇を除くことにあった。そのことは、唐の使節が来てから、ほぼ一ヶ月半後、京都山科で天智天皇の身をどこかに確保し、命を奪うという形で現れたのである。

「やむをえない、帝を亡き者に」

これは、十一世紀ごろに僧皇円が著した史書『扶桑略記』に三井寺（園城寺）の伝承として今に伝えられている。六七一年の八月、帝は病に倒れた。以前か

ら口渇を訴えていたが、急激に病状が悪化したからだ。天智帝はこの事態に動揺し、十月十七日、大海人皇子を呼び、自分の意を告げた。

「そなたに譲位する」

大海人皇子は一瞬沈黙した。帝の心底を知っている細心の大海人皇子は固く辞退した。

「私はその器ではありません」

その任に耐える人物にないとして、重ねて丁寧に断わった。

『日本書紀』によると天智天皇は枕元に大海人を呼び、事後を託したという。大海人皇子は身の危険を感じて、次期天皇に天智帝の皇后の倭姫を、そしてその後に太政大臣の大友皇子を推薦した。大海人への遣いとなった蘇我安麻呂が、皇位は倭姫皇后に授け、大友皇子をその皇太子とし、大海人自らは出家して仏道修行を希望することを直接に助言したからである。

「大友の皇太子を補佐け、国を盛り立てます」

「皇位は皇后か、皇太子に渡すべきものです。自らは出家して、吉野にこもって修行したいと存じます」

天皇はこれを許した。帝の安堵の表情が大海人の眼に映った。内裏の仏殿で頭髪を剃り、僧形になった。かくて大海人は吉野に移り、僧として隠遁生活を装う決心をした。

そして、十月十九日、僅かの供を連れて、都を後に、吉野へ向かった。朝廷の重臣等が宇治まで見送った。壬申の乱勃発の半年前である。

だれよりも大海人は帝を恐れていた。僧形に身を変えた彼は、大津を出て木津川に沿って南に下り、大和の盆地にでた。途中、腹心を筑紫に派遣した。胸の内では、自分がこの地で生き延びることを考えていた。

「新羅も王が替わり、もはやそこにも自分を生かす場所はない」

「大和だけが、自分が生きる国である」そう思っていた。

世の人は〈虎に翼を着けて野に放った〉と云った。追手を警戒しながら、大海人の一行は道を急いで、その日夕刻、木枯らしの吹く中、飛鳥石舞台の近くの蘇我氏ゆかりの嶋の宮に着いた。翌二十日は、山道を越え、吉野へと向かって歩を進めた。皇位継承のこと、骨肉の相剋、額田姫王との甘美な思い出などを胸にひたすら行進した。芋峠の辺りには灰色の空から絶え間なく雪や氷雨が降り続いていた。

み吉野の耳我の嶺に時なくぞ雪はふりける
間無くぞ雨は降りける　その雪の時なきがごと
その雨の間なきがごと隈もおちず

この歌が壬申の乱直前の大海人皇子の心の内の苦悩の歌と云える。吉野の谷間では、大海人は、供の舎人等に、近江大津に帰りたいものには帰郷を促し、真の味方のみを残した。

「本当は大和のために、帝とともにありたかった」

「しかし……」

小鳥が音を立てて梢を低く掠めて飛んだ。面を挙げると川を挟んで山が眼前に迫り、自らの心を映すような谷間の濁り水が目に映った。大海人はこの吉野の深い谷間に分け入った。

吉野離宮があったと伝えられる吉野町宮滝遺跡を目にすると、何故か心が沈み込む。

みぞれが止むと光が差し込み、濡れた杉の木立が光をもとに返すような様相である。立ち昇る霧と涙に視界が霞む。この行く先には不安の霞のために何も展望がないのだ。

飛鳥から吉野への道は、いろいろあった。しかし、近江側の追跡を避け、なおかつ逃亡を急ぐために、その最短距離である芋峠を越えようとしていた。そして石舞台から南渕、栢森の部落を後にして、流れの速い飛鳥川の源流へ通じる森の奥に入り込んで行く。つづら折りになってやや歩きにくい山道を行けば、不順な天候に一行は暗い思いに閉ざされる。来し方行く末を思いやるなか、心が一層沈みゆく侘しい行程であった。

み吉野の吉野の鮎鮎こそは島へもよきえ苦しゑ
水葱のもと芹と吾は苦しゑ

近江大津では大海人皇子を鮎に喩えて、人々は彼の苦境について、同情と同

時に風刺をもって語っていた。その様子を織り込んだ歌が『日本書紀』に残っている。

三

話は遡るが、天智帝の病は日を追って篤くなっていった。この時期には額田姫王は近江の地で帝の本復を祈っていた。

「今は、帝のことだけが」

詩人の彼女は自らの来し方を振り返ると、ともに行く末を思った。国家の体制が少しずつ整う中で、大陸の美麗の詩文とは別に、朝鮮半島の吏読の影響を受け、大和でも歌文学に目覚めた額田姫王はそれに通じる宮廷歌人として華やかな存在であった。

天智は持病の病床にあったが、この間、やや安心したからであろうか、奇跡的に回復の兆しを見せていた。帝は側近の従者とともに山科に外出し、天下の様子を窺っていた。残り火が燃え尽きるときに見られる、一時的な元気さであった。しかし、帝の周囲に、そして何よりも側近に喜びの色が広がった。

「これで、安心である」

病気ならともかく、健康を一時的にでも回復した天皇からは、いつ何時難儀が降りかかるか分からない。天智天皇は目的のためなら何でも行う怖さを大海人は知っていた。この様子を伝え聞いて身の危険を感じた大海人は、さらに吉野の奥地への逃亡を決意した。同時に諸般の情勢から判断して天智帝の皇統からの排除の止む無きを思った。そして、新羅とも通じていた筑紫大宰の栗隈王と隠密に図り、密命を実行すべき彼の配下が近江大津に潜入した。

帝は体のだるさが少なくなっていた。側近と周辺を歩けるまで快復していただけでなく、政務も行えるほどになっていた。ところが、その年の暮れ、天智帝は山科で何者かの手により、不覚の大事件に遭遇することになった。山科には新羅系の渡来人も多く、できるだけ新羅との関係を維持するために、天智は病をおして、また危険を冒しても、新羅の意を受けた要人と会う必要があった。それほど国際関係は緊迫していた。また唐の使節とも直接、謁見し和睦と協力の条件を探っていた。

「山科に行かねば。誰ぞ案内せよ」

「御身に差し障りが」

「構わぬ」

天智妃の栗隈黒媛娘らとともに栗隈王は天智とは縁が深い。これを利用して、栗隈王の懐刀が天智を山科まで誘いだすことに成功した。実は、これは大海人側の陰謀であり、天智側への挑発でもあった。

『扶桑略記』によれば、天智天皇は、ある日、山科に馬で出かけた。ところが、いつまで経っても帰る気配がなかったので、山科一帯を探したところ、天智天皇の靴のみが落ちていた。天智天皇は、この地で供の者と一緒に拘束されて命を奪われたと見られる。

「御免、みかど」

当て身を素早く食わせた。即座に命を奪った。草むらに隠して置いた小舟に載せた。

後になって、靴が落ちていたところに墓を作ったという。帝の行方が知れない事態が生じ、しばらくの間それが続いたからであった。この伝承の墓は、今も、旧東海道線山科駅の近くにある。

「帝は病のためにお隠れになった」

建前上、最高権力者の帝の崩御をそう公表するしかなかった。その後、若い大友皇子が皇位を継いだが、戦争の準備のために、即位の儀式の遂行は不可能であった。このことが後の歴史家に巧妙に利用された。

宇治市小倉町天王には、江戸時代まで〈天智天皇〉と書かれた石碑が建っていたという。近くの寺の言い伝えでは、天智天皇が運ばれてここで埋葬されたというのである。地名である〈天王〉と言う名も、〈天智天皇〉の石碑から来たとされている。この地は、当時は山科とは〈やましな川〉で結ばれていた。したがって、拉致した天智天皇をここまで小舟一つで運ぶことができたという。

「いそぎ、下流にお運びするのだ」

夜陰に紛れた隠密の素早い行動であった。

天皇亡き後、大友皇子は即位の儀式の暇もなく、践祚後直ちに前帝の政策を継承した。かねてより計画していた半島への出兵のために、いまや国内の安定

を守るのが何よりも優先された。それゆえ、父の天智天皇の除去指令を与えたとされる大逆の大海人を放置しておくことは、立場上許されることではなかった。それは社会の不安定に連なる要因であったからである。

「これで、何とか時間を稼げるか……」

そう思ったのも、大海人の本来の狙いは帝にあるのではなく新羅出兵の阻止であったからである。

四

鵜野讃良皇女は十三歳で大海人皇子に嫁ぎ、十七歳で草壁皇子を生んだ。それに比べて、大友皇子は采女の宅子娘の子である。自分の息子の草壁皇子こそ天智帝と自分を通じて百済の血を引く、つまり扶餘の血の拡散の少ない収束度の高い皇統にあり、天皇となるべきであると思っていた。となれば、まずその父であり伽耶の血をひく大海人が皇位を継承しなければならない。大海人が父帝より病床によばれたことも、帝が政務を彼に託すという申し出を断ったことも吉野への行程のなかで鵜野讃良皇女が真に信頼を寄せる大海人からつぶさに聞いていた。

「これでよかったのです」

父帝の気性を知る鵜野讃良皇女はそう言いながら、大海人の傍に寄り添った。高市、草壁、忍壁、舎人と女孺の数十人がその周囲を取り囲んでいた。逃亡では折からみぞれがふる、暗くわびしい行程が続いていた。しかし大海人には人望があった。途中、各地で有力者が少しずつ合流し、いつしか大きな集団となった。

それからまもなく、天智帝のが山科で刺客によって襲われたことと崩御の知らせが、かねてから整えておいた連絡網により、すぐに大海人に届いた。

「本日、首尾良く」

「さようか」

大海人は、天智の禅譲を辞退し、表だっては隠遁生活を表明していたが、彼を信奉する側近は非常手段をもって、天智天皇を排除したわけである。

一方、近江では、天智の不慮の崩御が大友皇子の周囲にも伝えられていた。

「何としたことか」

宮中は箝口令を引いたものの、噂が飛びまわり、宮中は大混乱の様相を呈した。側近はどうして良いか分からず、あわてふためいていた。この非常時のなかで、大友皇子は悲しみの践祚をしていた。

「亡き父君の御心を第一に」

この知らせを同時に配下から受けた大海人皇子は朝廷側が混乱にあるのを聞き及んだ。

「ここぞよ」密かに吉野で兵を募った。

そして、この機を見て、新羅との密接な人脈の動きに呼応して、大海人側が戦いを仕掛ける決心をした。蒲生野の饗宴の四年後の六七二年、遂に吉野を発った大海人皇子は関ヶ原に進み、そこで、地方豪族とも合流した。近江の都からは、高市皇子や大津皇子等が脱出、合流して、近江大津を攻めた。これには、高市皇子が先頭に立った。

「どうか、わたしに先陣を!」

もちろん、大友皇子がこの動きに対して直ちに討伐軍の編成を図った。東国と吉備および筑紫には兵力動員を命じる使者を派遣した。しかし功を奏せず、近い諸国からの兵力に頼らざるを得なかった。しかし、いずれにせよ、大友皇子が天智天皇の政策を遂行する限り、戦闘は避けられない。壬申の戦乱が勃発したのである。

不満をもつ皇族や地方の豪族が大海人皇子に味方した。戦闘は近江や大和を中心に起こった。帝に関する謀略に加担した皇族の栗隈王や新興豪族の村国臣男依がその例であった。とくに後者は大海人が本格的戦闘に備えて、吉野を脱出する時、先行して美濃を押さえて本陣となるべく根拠地を確保した。戦闘では琵琶湖東岸をいち早く攻撃し、大津の都を陥し入れ、味方を勝利に導く功績をあげた。

大海人から見て、大友皇子が戦を仕掛けてきたので、やむをえず挙兵したという形を作った。天皇に対する大逆を歴史の闇に巧妙に埋没させ隠蔽し、一般に言われているような形式で『日本書紀』を書かせた。つまり、大海人皇子が天皇と戦禍を交えるのを避けるために、大友を皇子のままで壬申の乱に登場させたのである。天智後の皇位については、歴史編纂時に、これを空位にするこ

となく中継ぎの天皇を暗に登場させて天武につないでいる。つまり天智からの禅譲の辞退時に中継ぎに皇后の倭姫を推薦したことを巧みに利用した訳である。

戦いは圧倒的に朝廷側が不利に展開した。敗れては、後退、また敗れては、また後退の連続であった。ついに、瀬田韓橋が陥落した。

天智の側近であった百済衆が激励した。践祚して間もない二十五歳の大友皇子が覚悟をきめて、すべてが終わったことを側近に言った。敗残の大友皇子にとって僅かに七ヶ月の無念の天下であった。ここ琵琶湖岸にまで後退し、湖岸から一隻の小船に乗り込んだ大友を一堂涙ながらに見送った。

この時期、大海人は新羅と、近江朝廷の大友は高句麗と百済の残党と密に提携していた。したがって、実は国際的な関係が絡んだ戦いでもあった。細心大胆で決断実行型の父と比べて、大友は文化的教養が大き過ぎた。父の死後、彼は痛切にそう感じた。聡明なだけに、自分の器が父帝にも大海人にも及ばないと思っていた。

┼┼壬申の乱は、一カ月ほどで終わるが、乱の結末は東国、美濃、大和地方の多くの豪族から支持を得た大海人の勝利となり、大友は自害した。

五

天智帝の宮廷に、華やかな彩りを添えていた額田姫王が遠い昔大海人皇子との間にもうけた十市皇女は大友皇子に嫁いでおり、いまや、幼い葛野王の母であった。この乱は額田姫王にとって、いわば昔の恋人と娘の婿との争いであった。額田姫王には、大海人と情を交して燃えた、遥か遠い年月が懐かしく顧みられた。でも、それ以上に女にとっては、時の経過とともにその想いがより身近な存在に変わっていた天智帝との間柄である。　彼女は帝が自分を訪ねてきたときの情景を思い出した。亡くなってはじめて近江天皇と呼ばれる天智の優しい一面がたまらなく懐かしく思われた。その愛の深さが偲ばれて、切ない胸のうちを詠んだ。

君待つと我が恋ひ居れば我が宿の簾動かし秋の風吹く

早くのおいでをこころ待ちにしていると、家の簾を動かして秋の風が吹いてくる。あのお方、愛しい帝のお出ましかと思ったが庭にはお姿はない。

かからむとかねて知りせば大御船泊てし泊に標結はましを

かくも帝が私のもとを去ってしまうのを知っていたならば、帝の御船の泊まったわたしの港に標縄を張り巡らして、出られないようにしておいたのに。

天智天皇の殯の間に詠んだ歌である。さらに、その天智陵の造営時にあたって、宮廷の人々がその陵を去るその日に、額田姫王が詠っている。

やすみしし我ご大君の畏きや陵仕ふる山科の鏡の山に夜はも

夜のことごと昼はも日のことごと哭のみを泣きつつありてや

百敷の大宮人は行き別れなむ

畏れ多くもお仕え申し上げる帝の御陵のある山科の鏡山でのこと。夜を通し、昼はずっと泣き続けながら宮廷にお仕えした大宮人もやがて別れて、皆が散っていく。そんな彼女の万感の思いがこめられた歌である。

しかし、額田姫王は、愛しい天智の死を悼みながらも、世の変革の希望の光を大海人の頭上に見た。それは、これまでの皇室には見られなかった、大きな威厳に満ちた輝ける姿であった。

あの倭姫から正式に皇位を受け継いだとして、ここに到り大和の実権を掌握した大海人皇子は天武天皇となり、親新羅政策を柱として政権を発足させた。華やかな即位の式典のさなかに大海人の晴れ姿を見て、額田姫王が女心の赴くままにそんなことを思い出していた。

正当化

一

〈中〉という形容詞がつくと、臨時の、あるいは中継ぎを意味する。歴史上〈中〉がついたと思われる古代の女王が何人かいる。その例にあたるのが飯豊王女、春日山田王女、間人王女、倭姫王女であろうか。そのうちの一人である間人王女は斉明女王亡き後の天智の称制までの中継ぎであった。そして、天智天皇亡き後で、倭姫皇后は、実質は弘文天皇（大友皇子）のもとで、天武天皇即位までの形式的中継ぎであったと考えられる。

ところで、日嗣王子についても〈中〉のつく中大兄王子が似た立場であった。中大兄王子は乙巳の変に功があったことから、後の皇位継承に矛盾がないよう

に葛城王子の名に替わってその身分を後世に与えた名であろう。正当な日嗣王子はあくまでも古人大兄王子であり、その名の示すとおり中継ぎではなく正式であった。

葛城王子は、最初は日嗣王子ではなかった。中大兄王子の名は、この古人大兄王子と共に同時並列的に、過去に遡って挿入されたいわば〈次席〉の日嗣王子を指す一般名詞である。その後の周辺の権力構造が徐々に変わっていくのを矛盾なく、自然に見せるための操作であったろう。その過程で、中大兄王子が自分にも孝徳にも不都合な存在であった古人大兄を謀略をもって排除しただけでなく、さらに有力な後継者であった孝徳の子の有間王子を抹殺した。すなわち葛城王子は王統に連なる重要人物であったのは確実であるが、本来王統の後継者とみなされなかったにも拘わらず、最終的に王位を嗣いだ。それゆえに、権力の掌握過程のつじつまを合わせるために、ともかくも、後世に中大兄、そして皇太子の名が与えられたのである。それは、この王子が権力を徐々に掌中に収めた過程が後世から見て即位の正当性の主張を巧妙に行うための方便であった。

中大兄王子と間人王女との間は親密ではあったが、世に言うような関係にあったわけではなかったし、むしろ系図上で操作されたことによる憶測の域にある。ただ、孝徳王と自分を離反させる理由にそうした関係を利用することが目的の、後世につくられたいわば噂であり、世論操作であった。もちろん、その点では間人には非情な役割を強いることになった。それを前提に、通常は公にしない私情を全面に出し、孝徳王との離反をはかり、妃を傀儡にすれば大和の実権が握れる。つまり、世に言う大化改新以来、ずっと中大兄王子が政権を掌握し続けることができたように見せかけるために、後世の歴史家がその関係を利用した史実の操作であり脚色であろう。

その理由は、王室の血筋にあり、孝徳王の妃であったいわば傀儡の間人が、同じく斉明女王の亡き後に中継ぎとなるのは、王位を窺う中大兄の立場からは好都合であったからである。この布石により、当時の大王の基準から見て血の濃度と王室への貢献度からいって、即位が不可能であったのを形式的に少しでも百済の血に引き寄せ、実質的にも補ったことになったからである。これによって、後世から見て、王統継嗣が正当化されることになる。

ところで、間人妃の名は丹後国竹野郡間人郷に因んだもので、この地に住む間人連と云われた豪族の娘が彼女の乳母であった。乙巳の変後に皇極が孝徳に譲位したが、孝徳は間人妃からみて系図上は叔父にして夫である。古人大兄と孝徳の没後には、本来有間に譲るべきところを中継ぎとして皇極を斉明女王としての重祚を画策した。というのは、孝徳の子の有間を亡き者にしてそのあとは、中大兄が斉明後の権力掌握と即位をもくろんでいたからである。しかし斉明が予想に反して早く亡くなり、間人妃を急遽、中継ぎとしなければならなかった。そして中継ぎの日嗣王子が中大兄とすれば、天智を正当とみなすための深遠なつじつま合わせであり、同時に謀りごとでもあった。後の世の天皇制から見て日嗣ではなかった中大兄が王位継承の正当性を主張するために、後世の歴史家が過去に遡って、その時点から、いわば臨時に日嗣王子に仕立てていたからである。これも次の天皇である天武帝の正当性の主張の遠い布石である。

斉明女王の崩御の後、これをつないだ間人が没して、なし崩し的に中大兄王子が即位して天智天皇となった。中大兄王子が二十三年間も日嗣王子のままでいたこと、また孝徳の没後、斉明が重祚したこと、更に、斉明の没後なお七年間も中大兄が日嗣王子のままであった理由はここにあった。

間人は孝徳の妃で、中大兄王子とは長い間、同母兄妹の恋愛とされ、周囲から非難の的になったという。しかし、政治はそんな私情で動くような生易しいものではない。その実は、権力争いであり、その話は後世になって孝徳と中大兄王子の〈離反すべき理由〉に巧妙に利用されたものであろう。つまり、間人は斉明没後、自らが死ぬまでの四年間、中大兄王子に擁立されて、政治的に女王として王位に就いたとされたからである。

その説をほのめかすものが万葉集の中に見られる。万葉集巻一に中皇命の歌とするものが五首載せられている。中皇命とは、中継ぎ的に皇位を踏んだ人物の意味である。この中皇命に相当する三人の女王が考えられる。間人王女、宝王女、倭姫王女である。それらの歌のうち舒明王が野に遊猟の時、主従関係に近い親密な間柄にある間人連老が中皇命のために歌の奉献を取り次いだ記述がある。間人連は間人王女の乳母の出身豪族であることから、中皇命は間人王女と考えられる。「連」は古くから天皇の周囲にいた王家の血をひく同族であり、後に王家と密接な婚姻関係をもった土着の豪族や新参渡来の豪族の姓の「臣」とは本質的には異なる家柄を表している。

『記紀』は間人が王位に就いたとは記していないが、彼女が女王になった可能性は極めて高い。古人大兄の娘で天智天皇の皇后になった倭姫皇后も同様である。つまり、女王として即位したことも、しなかったことも、後世の権力者

が歴史の編纂時にうやむやのままで主張できることが重要であった。

天智天皇は六七二年十二月崩御したが、その翌年の六月二十二日、壬申の乱が始まり、約一ヶ月の戦闘の後、近江方は敗れ七月二十三日に大友皇子は自害した。天智崩御から七ヶ月と二十日、その間、大友皇子が践祚したが記録は都合で抹殺された。

大海人が天智の病床で提案した〈継ぎの天皇には皇后さまを〉の言葉がある。

ふと、松原がそれを思い出して、

「この言葉が伏線で、極めて巧妙に利用されたのでしょう」

と言うと、全教授も合点のいったように眼でうなずいて、残りのビールを飲み干した。

「壬申の乱に勝利した翌年の二月、大海人が即位の儀式を挙げるまでの一年二ヶ月の間は、巧妙に、倭姫を帝位につける方法をとった ……と考えています」

「なるほど」

「天智崩御にまで遡って、そして少なくとも壬申の乱の終了時まで、倭姫を帝位につけたわけですね」

人々の記憶に新しい大友皇子の践祚の記録を残さずに、また自らの即位の儀式においては、倭姫皇后から大海人へ皇位が譲られる形式が踏まれた。そうすれば、皇位簒奪にはならないからである。

なお、倭姫が皇位にあったことを裏付けるものに『西大寺伽藍縁起并流記資財帳』がある。この中に仲天皇と云う言葉が出てきて、これが倭姫皇后と考えられる。万葉集巻二には倭姫の歌が四首記されており、天智天皇が薨去する前後の作で、大后による和歌と記している。こうして見ると、天智の後の混乱期を継いだのは倭姫であった。この辻褄あわせと皇太弟という曖昧な言葉の使用が、天武への皇位禅譲の布石であった。

二

天智は権謀術数を駆使して権力を握った百済系の指導者であった。天武は親新羅の朝臣であったが、血は伽耶の血を引く天孫の血の濃度の低い将軍であった。天武が天皇になれる血筋ではなかった。

「天武はたしか天智天皇の娘四人、藤原鎌足の娘二人を妃としていますね」

全教授が戦前、日本の歴史教育で教え込まれたことを思い出して、松原に尋ねた。

「持統女帝はその内の一人です」

システム工学を専門とする二人は、かつて中国の敦煌で行った国際会議で同席したとき語り合ったことを思い出した。実は、専門の話そっちのけで語り合ったものである。

そのときに、全教授は〈日本人は新羅に言及した歴史を余り語らない。百済ひいきなのはどうしてか〉と不満を漏らしていた。

「ところで、ふたりが真の兄弟であるなら、兄の天智天皇が弟の天武にこのような婚姻の気遣いをすることはあり得ないでしょうね」

そう全教授に言われて、松原が続けた。

「中臣鎌足も天智には娘を后に出していないが、天武には二人の娘を妃に出しているのですよ」

「これは、戦勝国である新羅から信頼されていた大海人に対するご機嫌取りの人質か、将来を託したものでありましょう」と丸顔の全教授が目尻にしわを寄せ深い思慮をみせた。

因みに、天武天皇の妃を『日本書紀』より列挙すると以下の通りである。大田皇女、鵜野讃良皇女、大江皇女、新田部皇女の四人が天智の娘である。また、氷上娘、五百重娘は鎌足の娘であり、大蕤娘が蘇我赤兄の娘である。それに蘇我姪娘、蘇我常陸娘、蘇我造媛、阿倍橘娘、伊賀采女宅子娘、栗隈黒媛娘、鏡姫王と、かの有名な額田姫王である。

ところで、騒乱に終始した天智の代まで伝わったとされる草薙の剣は皇統を乱す原因でもあったので、将来に禍根をもたらさないことを願って、次の大王である天武天皇の正統性を未来に正しく伝えるために、熱田神宮に奉納したことが『日本書紀』に記されている。天武天皇の不当性を窺わせるようであるが皇室に争いを招く内容を敢えて述べ、その真実性と天武の正当性を逆説的に主張したのであろう。

また、一二三四年頃から四条天皇より天皇家の菩提寺とされた京都・泉涌寺には天武王朝〈天武、持統、文武、元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、（称徳）〉の八人の位牌がなく。ここには天智、光仁、桓武……と天皇の位牌が祀られている。このことは、天武王朝は、天智天皇の後胤の光仁天皇以降の天皇とは、直接的には関係ないということを示している。

しかし、天武は王家を継続するために、少なくとも自分の子や孫の代に、扶餘の血の濃度を上げることができると考えていた。蘇我氏もかつてこれを利用しようとし、同様に考えていたが、乙巳の変でその手掛かりの総てを失った。これを連想させるようなことでもある。

以前から、家系の一系と言うよりは、扶餘の血の一系に関心をもって、学生時代から数々の書を当ってきた松原がそんなことを改めて考えていた。

実際には、天武天皇以降、天智天皇の血筋は、天智の娘で天武の后であった持統女帝の子孫によって保たれた。しかし九代目の称徳女王に皇子女がなかったため、天武天皇とは血のつながりのない光仁天皇によって引き継がれた。光仁天皇は天智天皇の孫である。そして光仁天皇の子が桓武天皇である。こうして百済系の天智天皇の血筋は、桓武の母の高野新笠が受け継ぐ百済の血筋とともに今に伝えられたのである。

想像の跡

一

即位の御大典が済むと、問題はすぐに内外から起こった。大海人を天皇として認めないという勢力である。もともと、即位にあたって、はじめから予想されたことであった。大和の王制は、崇神以来、天孫の血を引く王家の血筋でなければ、王位につけないという掟があった。そして王家の血がより濃度の高い扶餘の血に連なることが条件であった。これが半島を含むこの一帯で最も重視される王家の誇りでもあった。したがって、扶餘の血を引くとはいえ大海人は、当時の人からみれば皇位につけるような身分ではなかった。これが、大陸や他の国の実力本位の王や皇帝と異なる底流の思想であった。

しかし、ともあれ、即位して正式な天皇となった天武には人望があった。この当時は既存の近江朝側近の豪族以外には、社会の中枢で活躍できないのが大和の実状であった。またそれらの有力豪族同士の権力争いとそれに伴う謀略を世の人々はいやというほど見てきた。そんな中で、不満な勢力は、血統よりも自らの現実的な利益に関心があった。

「良き伝統を受け継ぐ勢力こそ、新しい世の中のためには」

自分に利益をもたらすことや都合のよいことは、誰もが素直に受け入れる。天武はこれらを手段に、巧みに彼らを自らの陣営に組み入れてきた。これが壬申の乱に勝利を得た大きな理由でもあった。それにかつて白馬江で大敗を喫した苦い記憶から、人々は先の朝廷の体質や政治に数々の恨みを抱いていた。その上に、豪族にとっても再び新羅に出兵し、また人命を失うことは耐えられないことであった。

「新羅とは仲良く、唐とも仲良くする」

切実な思いであった。そのようなごく自然の気持ちを天武は巧みに徐々に吸い上げた。

「そのためにも、大和は強くならねば」

「まず、人心の一新を」

飛鳥浄御原を都として、天武は盤石の政権を築くために準備に取りかかった。

日本の国家建設へ立ち向かう天武の勇姿に、在野で奮闘する歴史家の松原は自分の姿を重ねて想像逞しくのめり込んでいった。

二

「松原さん。どうかしたのですか？」

全教授から声をかけられて、ふと松原が想像の世界から我に返った。

「ちょっと古代のロマンの世界に」

この場違いに、狼狽したように、

「先生、これは、たしか、米からつくる濁り酒ですね」

眼前の盃を傾けながら、松原が確かめるように全教授に聞いた。

「ちょっと、酸味がありますね」

白く濁ったマッコリの入った銚子のような容器を撫でながらそう言った、
「その昔、農民がよく飲んだのですよ。作業の合間に飲んだと言うことですよ」
顔を上げると、松原は思い詰めるように、疑問を投げかけた。
「先生、もしかして、天智は皇位継承の原則を残していたのでは」
「そう、わたしもいまそれを考えていたところです」
二人は、濁り酒を飲み干しながら、期せずして同時に頷いた。
「先々を見越した天智ほどの為政者が、それに抜かりがあるはずはない」
「……」
「そうでなければ、後に天武皇統が称徳天皇で断絶したとき、すんなりと……」
「……」
「いやそうではないでしょうが、割合単純に天智系に代わる必然性はなかったと思いますが」
「松原さん、たしか天武には、たくさん子孫がいたはずですね。
その彼らがどうして、皇位を嗣げなかったのですかね？」
「だからですよ、先生。旧勢力が、この原則をもち出したからではないかと思いますが」
「……」
「つまり、いわば皇位継承に関する取り決めが、人々の記憶にあったからでは……」
「……」
「天智の直系にこそ皇位を継承させるにふさわしいと考えたからだと思うのです」
やや思考が定まらないものの松原は、顔を赤くしてそうつぶやいた。

〈聖徳太子の象徴的偉業や蘇我討伐の歴史からみて、未来の皇室には蘇我の血を残さず百済の血の一系を保つことが、良き伝統のみを皇室につなぐ基盤となる〉そんな原則を天智は鎌足らとともに残していたのではないのか。
全教授から受けた濁り酒を手に取り、松原は続けた。
「その後の支配階級にとっても自らの存立の基盤には、天武系の中で受け継がれてきた蘇我の血であっても、政治的・文化的にいって、《血の美しさの観点》からは、天武系皇位は必ずしも好ましいわけではないと考えられるからです」
「なるほど、そう言われてみれば」
「先生、そうでなければ、すでに力を失って久しい血筋が皇位を回復する見込みはないと思いますが」
「だから、天智の孫の白壁王が光仁天皇になれたというのですか」
「はい……」
「なるほど、そうか、そうかも知れない。藤原氏がねぇ…、歴史を創った彼らの意向も関わるのか……」
「えぇ…そうですとも」
「そして結局、山部王が桓武天皇に、さらにその血が今日の皇室に繋がったのか……」
ソウル大学の全名誉教授が感情を抑えて独り言のように口を開いた。
「しかし、先生、それにしても口当たりが良いので、この酒は結構よく効きますね。
日本で言えば、どぶろくかな」
「きっと、昔は食べ物もよく似ていたのでしょうね。松原さん」
「そういえば、いまでも、韓国の宮廷料理はなんとなく日本料理に通じるところがありますね」
「そのようですね……」
「あの韓国独特と思われるキムチも案外歴史が浅いと聞いていますが」

「……」

「それに、材料の芥子なんぞは、元はといえば唐からでなく日本からのいわゆる逆輸入と聞いていますが」

「わたしもそう聞いていますよ」

「なんとも不思議な気がしますね。　キムチなんぞは韓国・朝鮮そのもののような気がしますのに」

「そう、歴史も同じですよ。松原さん」

「真偽はともかく、誰かが最初に造り上げ、誰かがそれを書きとめた」

「そして、それがあたかも、ずっと前から存在していたように」

松原もそれを聞いて、〈時代を経るとともにそれが当たり前のこととして人々の間で語られる〉という梅原猛氏の言葉を思い出した。そして、やや酔いが廻って赤くなった全教授の目を覗き込んだ。

〈歴史を造ればよい。矛盾のないように。本当のように〉

そんな大海人の声がどこからか聞こえてきた。

「そうであったにちがいない」

酔いのまわった松原はその夜、教授が予約してくれた韓国式ホテルの布団の上に横になってぼんやりと歴史について考えていた。

三

原則を貫き、仮にそれに合わない事態が生じれば、歴史編纂の主導権をもつ為政者が、それを繕えばよい。所詮、王侯将相には種となるべきものはない。権力者があとでその種を尤もらしく提示すればよい。偉大な大王達の辿った道を、天武は若き日に旅の道すがらそう考えたことを思い出した。

即位の式次第が厳かに進む中、天武新天皇は心の内に国家の建設を思った。

「これからは、そのためにも自らの皇位の正統性を明らかにする」

まず過去との血の連続性が皇位の正当性に直結するので、これを主張するためには、国史を大陸の史書に倣って編纂する必要があった。そのために『日本書紀』の史書編纂を発案した。そこで、我が血脈が天孫の一系にあり、それが紆余曲折のあるものの、遠く、明確に扶餘の血に辿り着くことを連綿と叙述する必要があった。そうした自らの皇統の血脈の連続性と正当性を自分に代わって正確に代弁できる身内の舎人親王らにその編纂を命じた。

「我が正史、我が皇統史の編纂を命ずる」

最も重要な国家としての体裁と自らの皇位の正統性を盛り込む準備に時間をかけて、人々の記憶と矛盾しないように、現在に連なる人々に都合の良いように歴史的事実の担い手を滅亡した家系に集積したり、別の家系に移してその体裁を整えた。それは、多くの知識と論理性を要求される極めて高度な知的作業であった。

実は、『日本書紀』は、公式には舎人親王が編纂したことになっているが、藤原不比等による影響が大きく、推敲に推敲を重ねた結果、やっと元正帝の御代の七二〇年に完成した歴史書である。

「しかし、なんとも難儀な書の編纂であることか」

正当性の主張については、実に、天智の皇位継承とよく似た状況と形式を匂わせ、天智の皇位の正当性を一方で納得させた上で、天武が自らの正当性を主張する手筈である。実に巧妙な論述である。

ところで、真偽はともかく『日本書紀』には、神武から持統まで四十一代の天皇の出生や年齢など記述されているが、天武にはこれらが欠けているにもかかわらず、他の記述が多い。種々の考察から大海人の年齢は中大兄王子より四、五才年長と推測されるが、『日本書紀』の著者は、敢えて天武の出生に関する記述をしなかった。

壬申の乱が終結してから二年後の六七四年、唐と新羅はついに全面戦争になった。唐と新羅との戦争は二年間続いたが、六七六年に、ついに新羅は朝鮮半島から唐を駆逐し、統一新羅を作りあげた。このころには、あの春秋王子こと武烈王も亡く、子の文武王が跡を継いでいた。

唐帝国にとっては新羅の存在を無視できず、その力を抑えるために大和の重要性を再認識していた。そもそも新羅を自らの傘下に治めたい唐は、ついに新羅への再侵攻を目論み、天智政権とは手を握る当面の政策を採用した。したがって大和とは敵対することは避け、政治的圧力と軍事的圧力から融和の途を模索することにした。

「大和を味方に付けるのだ」

しかし、それも新羅が滅びるまでのことで、新羅が滅亡した後には、大和が侵略される順序である。大和にあっては誰もが同様に考えていた。

「唐と戦っては国が滅びる。新羅との敵対も国を危うくする」

「だから両国との関係は良好に、しかし、やはり大国の唐との関係を優先しなければ」

このことは、この時期に少なくとも唐との融和を装うためにも、大和の制度を大きく唐風に近づけ交流を深めようとしたことからもわかる。

すなわち、唐の律令制度を本格的に導入することにより、天武朝が文明国であり親唐政権でもあることを示したのである。

表面上、反唐、親新羅勢力として誕生した天武天皇の政権であったが、唐の軍事力の脅威に心ならずも唐に協力する形で生きなければならなかった。しかし、この事態の変化に対して新羅は、これまでの一途な反唐政策から、内外の問題を外交的手段で解決しようと動き始めたのである。すなわち、唐に対しては形式的には臣下の礼をとり、大和に対しては、重要な伽耶の任那との交流を復活させた。

「孤立は避けなければ」

ここに到って、唐、新羅、大和の三国の相互関係は安定を見ることになった。結果的には、天武の政策がこの地域で効を奏した。

治　世

一

六七二年七月二十三日、近江京は陥落し壬申の乱が集結したが、戦後処理のため大海人は現在の岐阜県関ヶ原町にあった不破の本営にとどまった。八月下旬、近江方の五人の重臣に対する処分が下された。彼らは天智の病床で堅く朝廷に臣従を誓った人々である。

瀬田韓橋で大友皇子と共に戦って敗れた右大臣の中臣連金は死罪になった。左大臣の蘇我赤兄と大納言の巨勢臣比等は流刑になったが、紀臣大人は無罪となった。戦後処理としては、実に寛大な処置がとられた。それは対外の情勢を鑑みて、国の融和を急務としていた天武の意図であったに相違ない。なお蘇我果安は大海人側に内通していた石川王らを殺害してはいたが、大軍を率いての混乱を招いた自らの責任をとって、すでに七月二日には自害していた。

勝利を博した大海人皇子は同年九月に飛鳥へ凱旋した。かつて慣れ親しんだ岡本宮の近くに新しい飛鳥浄御原の宮殿を造営し、年の暮れにはここに移った。そして、六七三年の二月になって、大海人が天武天皇として即位した。

「ついに鷲は地上に舞い下りた」人々は口々にそう言った。

この時代は大和の基礎が整い、新羅の影響もあって、優雅な白鳳文化が花開いた時期であった。

武勇に優れていた天武は気象天候の観測に詳しく、占星の術を用い、農業神事を司り、斎宮を復活し、天皇を中心とした国家体制の基礎を築こうとした。戦法も統治も巧みだった新帝はほどなく国家を統一し、ついには神と仰がれるほどの絶大な権力者となった。一方では、この体制を侵す者を容赦しなかった。これに伴い、皇后となって権力第二の座にすわった鵜野讃良皇女は蘇我の血を引くわが子の草壁皇子が次代の帝位を継ぐ日を心待ちにするようになった。人々はみな、大王の功徳を口々に讃えた。

大君は神にしませば赤駒の 腹這う田井を都となしつ

この歌は大君すなわち天皇は全能であることをいっている。直接的には〈馬が転ぶほどの泥田でも整えて、都として繁栄させること〉ができたといっている。内外の不安定な政治情勢の荒波の大海の中に天武帝は邑を造り、そして都である飛鳥浄御原宮を築き上げた。国を統ろぐ優れた真の支配者を賞讃えた歌であった。

宮廷歌人の柿本朝臣人麻呂は、天高く地上を照らし、この世の隅々まで治める、天孫の血を引く大王として、〈吾が大王〉〈高照らす〉〈八隅知し〉などの言葉をもって、その姿と徳を寿いだ。このころから、大王の称号としての《天皇》を用い、さらに大王の神格化が行われるようになった。

ところで、皇祖とされる天照大神を祭る伊勢神宮の背景には日の神の崇拝があり、天皇の即位後のその年に収穫した稲を神前に供える儀式である大嘗祭や斎宮も伝統にしたがったとはいえ、この天武治世に整えられたものであった。

大嘗祭は今日の皇室の大行事に連なるものである。

苦しみの末に勝利を得た天武天皇は世が安定するとともに、やがて心に余裕をもてるようになった。

都に雪が降った。帝は早速大原の里に住む藤原夫人に、こんな戯れの歌を贈った。

わが里に大雪降れり大原の古りにし里に落らまくは後

我が里には大雪が降った。でも大原のような古びた里に雪が降るのはもっと後になるだろう、と降雪を喜ぶ歌である。夫人とは、皇后、妃、嬪などと共に天皇の後宮に仕えた女人である。藤原夫人は鎌足の二人の娘を指すが、ここでは大原の大刀自と呼ばれた妹の五百重娘である。そこで彼女が歌を帝に返した。

わが岡の龍神に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ

大原の里に降った雪の残りが、飛鳥浄御原に降った雪でありましょう、そこの雪は私の住む岡の水神が降らせた雪のかけらなのです。

そんな機知に富んだ歌のやり取りがあった。これを問答歌と云い、実用の歌として役割が強く、ユーモアや、哀感の歌として、親しい個人の間で交換される慣わしであった。雪が降ったのを機会に、自分が住んでいる土地に愛着をもつふたりがこうした歌で心の遣り取りをした。

こうして相聞歌などとともに和歌の形式も種々宮中の人々の間にできあがっていった。

現在の明日香村小原の飛鳥浄御原宮跡から、飛鳥坐神社を経て、一キロメートル足らずのところに、鎌足の誕生地と伝えられる木立に囲まれたのどかな雰囲気の大原の里がある。

二

天武朝の政権構造は、過去の柵の弊害を根本的に取り除くことにあった。近江朝廷の重臣の出自は、中臣氏、蘇我氏、巨勢氏、紀氏などで、みな古くから大王家とともに大和政権を支えてきた有力豪族であり、彼らの合議制により運営されてきた。したがって大王家の権勢も相対的なものであった。天武にとっては、唐や新羅と同様に、絶対的権力者として大王の地位を確立することが最大の眼目であった。それが国家を創り上げることであると天智も同様に考えていたが、彼の場合には権力闘争に明け暮れ、あまつさえ唐や新羅の干渉により、実をあげることができなかったからである。

天武は即位後直ちに、古くからの有力豪族の大部分を意識的に行政から排除した。大伴吹負を除けば、地方の中小豪族の殆どが天皇の傍らに在った。結果的には、この壬申の乱を通じて天武は天智の目指した中央政権からの有力豪族の排除を成し遂げたことになる。

大王と共に長い歴史をもつ大伴氏の処遇は考えた末に、軍事を束ねる高官である兵政官大輔への任用であった。しかし天武はその上に兵政官長という位を設け、それに腹心の皇族の栗隈王をあて、巧妙に軍の勢力を抑えた。

天智天皇に対する大逆の実行犯は、栗隈王の配下のものであり、計画したのは天武天皇であった。栗隈王自身は筑紫大宰として、現地におり山科にはいなかったので、表だって天武の加勢をしなかったし、むろんできなかった。これもかねての周到な打ち合わせの通りである。

ところで、六七五年、栗隈王は四位の身分で兵政官大輔の大伴御行の上兵政官長に立ち、翌年亡くなったが、右大臣に相当する従二位を追贈されている。この処置は壬申の乱であげた、公にできない特別の功績に対する行賞であった。なお、『日本書紀』には天智天皇の陵の所在地、埋葬年月日、殯の期間が敢えて記載されていない。この理由は前述のような形での天皇の崩御は、建設中の国家の体面上、公式には書けなかったからで、敢えて曖昧にしたのであろう。

ところで、大海人は一時出家し僧侶になったが、それとは別に仏教には関心が深く、即位の年から大官大寺の建立発願を行った。舒明が手掛け、建立した百済大寺を飛鳥に移し、これを復興した。また薬師寺も皇后の病を期に天武が発願し創建した。

このように、仏教の振興につとめ、僧正・僧都・律師に任命制度を導入し、僧職を国家の管理のもとにおく手筈を整えた。さらに六八五年には、諸国の政庁には仏舎を整え、仏像と経典を置いて仏教普及の詔を出した。また、写経を護国のための国家事業として行った。経典としては金光明経、仁王経を重視し、川原寺には『一切教』の写経を納めた。法華経と並んで国家鎮護の三部経として、後の奈良時代に重んじられた経典である。

その一方で、長く途絶えていたが、天皇の代理として未婚の皇族の女性が伊

勢神宮に仕える斎宮も復活し、伊勢神宮を重視する姿勢を明確にした。『日本書紀』によると六世紀初頭の継体朝から斎宮の制度が始まり、欽明、敏達、用明、崇峻そして推古と伊勢神宮に代々王女が下行する慣わしであった。しかし、それが長らく中断していたからであった。

「十市よ、そなたに」

最初に天武から選ばれたのは、額田姫王を母とする十市皇女であった。

乱の直前、吉野を脱出した大海人は、伊勢神宮に戦勝を祈願した。そして、地方の中小豪族からは多くの支持を得た。伊勢神宮は、五世紀末ごろからの大王の勢力拡大の経過と密接な関係があり、大和から東国へ向かう太平洋沿岸の海路の根拠地であった。それゆえ、大王家の氏神であり皇祖神の天照大御神が祀られていた。その起源は崇神王まで遡り、これが海洋民族の太陽信仰とも合致し融合した。継体朝から続いた斎宮の制度も、大和政権の国家経営の一環にあった。そして、何よりも伊勢神宮が壬申の乱で天武側についたことが、この神宮の優遇を決定的にし、大王家の神社という地位を獲得し、今に至っている。天武は伊勢神宮以外の神社も手厚く保護した。このあたりは古来の伝統を尊重する卓越した彼の行政手腕であった。

天武は遷都早々に、国家最高の大社として前述のように伊勢神宮の諸事を整え、同時に大官大寺を発願して国家最高の大寺による仏教の国家管理を志した。蘇我氏と聖徳太子らの手厚い保護により興隆を見ている仏教勢力の天皇の統制と支配を意図した。それは伝統重視に基づく壮大な天武の演出であった。すなわち、崇神大王に遡る古来の伝統的神々と自らのつながりと併せて、皇統の正当化と新しい国と都の建設への天武帝の強い意志からであった。

「帝が仏教や神道を巧みに政治に織り込んでゆく」

みな、その手法に感心した。

「なるほど、前の帝より、為政者として優れておられる」

戦乱から解放された人々は、希望に満ちてそう言った。

欽明朝のころ、仏教を基礎とする大韓神を支持する蘇我氏と、古来の国津神を祀るすなわち神道を支持する物部氏の争いがあった。それがこの時期には仏教と神道のいずれも国家の保護を得て、さらに応神朝に起源のある八幡神と融合して、今日の神仏混淆の基礎とした。

天武は、かつて影響力の強かった大豪族を政権から排除するだけでなく、宗教をも巧みに操り、大王中心の政治体制を少しずつ固めていった。

政治体制

一

天武帝は自らの治世十五年の間に、国家としての行政機構の整備と数多くの改革を行っている。〈八省・百寮〉と呼ばれる中央官庁と、そこで執務する官僚体制を整えた。記録によれば、この時期には七つの中央官省が設けられた。法官、理官、民官、兵政官、刑官、大蔵、宮内である。そして次の持統朝で中官が新設され、合計八省になった。これは後に忍壁親王や藤原不比等らによって大宝律令で正式に制定され、官僚制度の完成を見た。これによって、自らの死後に、不測の事態になっても行政が十分に行き届くことになるはずであった。これは指導者の優劣に拘わらず、如何なる状況にあっても国家が円滑に機能することを目論んで秦の始皇帝が創った制度がその源であったという。

天武は半島で学んでいた頃から考えていた国家統治のための官僚組織の意義を思った。

天武朝では豪族の子弟を、まず大舎人に採用し、予備の期間を経てその後適当な官職に任用することにした。かつての氏姓制では豪族が官位を世襲したが、能力に応じて地方の豪族の子弟にも任官の機会が与えられ、有能な官僚が行政に携わることが、制度上可能になった。

古くからの豪族は既得権を大幅に削減され、実状に合わせて姓を再編した。六八四年、新旧豪族に新しい姓が与えられ、天皇と豪族間の主従関係を明確化した。真人、朝臣、宿禰、忌寸、道師、臣、連、稲置の八姓である。これを八色の姓といった。

その一方で、天武は前述のように歴史書の編纂を決意した。天智帝の子の川嶋皇子と自らの子の舎人親王を核としてその編纂を命じた。天智と天武の皇統の正当性を明確に表現することが最重要課題であった。

「前帝の正当性をもって、我が皇統の末まで」

それが、天武の皇統観であった。しかし、六八一年より始まった正史の編集

作業は内容が膨大すぎたことと、論理的整合性の確保の困難さから、遅々として進まず、結局のところ天武在任中には完遂されることはなかった。しかしながら、この流れは後代に受け継がれ、元明天皇の御代の七二〇年に『日本書紀』として完成した。

また、当初の正史の編纂とは別に、天武は記憶力に優れた一人の官吏に、神代以降の大王家に纏わる家系の伝承や来歴を暗唱させ、その保存を命じた。このための官吏に任命されたのが当時二十八歳の稗田阿礼であった。そして、阿礼の記憶するところを太安万侶が整理し編集したのが『古事記』であり、その完成は『日本書紀』より八年前の七一二年であった。

現存する我が国最古の書物は、『古事記』であり、そして『日本書紀』であるが、支配者の史書の編纂は、自らの正当性を主張するためであり、また支配・被支配関係を明瞭にする意味があった。

これ以前にも歴史書の編纂の記録がある。推古朝の頃、厩戸皇子（聖徳太子）が『天皇記』と『国記』、それに『臣連 国造 伴造百八十部幷公民等本記』の三部構成の歴史書の編纂に着手したという。この歴史書は馬子が私蔵していたので、後年の乙巳の変の際に、蘇我蝦夷とともに炎の中で灰燼に帰したといわれている。また、これ以外にも現存しないが史書に類する『帝紀』および『旧辞』が古事記の序文に登場している。天武はこれらを原典として、前述のように稗田阿礼に記憶させたという。しかし、実のところは、不都合な史実を削除し種々の事柄を織りまぜ、極めて巧妙に論理的な画策を施しながら、説話的に大海人に有利な事蹟を本文に挿入したと思われる。

二

天武は天智の理想を引き継いで、新しい国家体制の整備を着々と進めてきた。その大方針が六八一年二月の飛鳥浄御原令の制定の詔である。

〈天皇、皇后共二大極殿二居シマシテ親王、諸王及ビ諸臣ヲ喚シテ詔シテ曰ク。朕、今更律令ヲ定メ、法式ヲ改メムト欲ス〉

これにより、大和政権は律令国家の基礎を形づくろうとした。大王家を中心とし臣・連・君など有力者の合議によって行う狭い地域内での治世の時代はすでに過去のものとなっていた。この時代、大和政権の勢力範囲はすでに、九州南部から関東北部におよんで、ますます拡張していった。優れた軍事力を用いて、力の差が大きな東北地方に支配地域を拡大していった。こうして得られた新しい地域を多数の地方官を用い、中央から支配するために、成文法を必要とした。

「律令の制定を。新しい世のために」

「すべてを、制度化するのだ」

天武は高らかに理想を掲げ、それを実行に移した。

「この日の本に美し国を」

「我が民の子々孫々の楽園を」

ひとびとは天を仰ぎ、帝を仰いだ。そこには神々しい天武の姿が大きく投影された、明るく白く輝く光の輪を見た。

〈律〉は刑法を、〈令〉はそれ以外の法律を意味する。先進国の唐の制度に倣っての制度であり、律令官人制だけでなくこれを支える公地公民制を推進した。

これ以前の試みには、天智による近江令が挙げられるが、実際に存在したかどうかは疑わしい。それに対して『日本書紀』や大宝律令にも記載のある飛鳥浄御原令は現存してはいないものの、我が国最古の律令とみなされる。例えば、それをもとにして新しい冠位制度が六八五年に公布され、前述のように実施されたことが知られている。それによれば、これまで官位をもたなかったような草壁皇太子に浄広壱位、大津皇子が浄大弐位という具合に皇族にも位を与えたような新規のものであった。

大　王

一

これまでは皇族またはそれに準じた人々は官位制度から超越していた。天武は大王、すなわち天皇を頂点とする支配構造を作り上げ、そこに朝廷と関係を持つ全ての人々を組み込もうとした。天武の描いた絶対的権力者としての天皇のイメージを実現する具体的な方策として、兵政官大輔のみならず宮内卿など中央省庁や筑紫太宰、吉備太宰など出先の長を皇族で固めた。それと同時に、

六七五年に豪族の私有する領民である部曲の制を廃止し、豪族の勢力削減を図った。もっとも、この件は白馬江の敗戦後の六六四年に天智が行おうとしたものであったが、天武の処置は徹底しており、豪族のみならず皇族にも部民の所有を禁止し皇族の力も削減した。その結果、豪族の力を皇族が監視し、その上には超越した存在として大王家を据えた。

「大王は、すべての上にある天帝、すなわち天皇なのだ」

もちろんこのような改革には反発も多く、すべてが、決して順調に進行したわけではなかった。しかし、命令違反に対しては、容赦なく政府高官でも官位の剥奪や、皇族の流刑もあった。それでも、天武は着々と体制を固め、安定した世の建設に邁進していった。

「これでよいのだ。きっとうまく行く」

「これこそ、大王を頂点とする統一国家のためである」

そうはいっても、これらを保証する飛鳥浄御原令の全てが天武時代のものというわけではなく、整った順に実施されていったようだ。こうした構想は次の持統に引き継がれ、最終的に六八九年に完成したと思われる。

このように天武は律令制度に基礎を置いて、自分の理想とする中央集権国家の体制を着々と整えていった。少しずつではあるが、その実現過程に天武は未来の朝鮮半島の王家の利害や大陸の支配の及ばない、独自の国家の成立と成長を夢見ていた。

「大和は、日の御子の朕が愛する日の本に輝く祖国である」

と声高らかに宣言した。しかし、そんな天武にも大きな悩みがあった。当時としては老齢になって即位した自分の後継者問題であった。

「朕の後はどうしたものか」

これまでに大王位が平和裡に継承された例がほとんどない。いつも心に懸かった悩みごとであった。

二

天武には鵜野皇后の他に九人の妃・夫人があり、子供は皇子が十一人、皇女が七人であった。正式な皇位継承には周囲の後見人や本人の実力など諸々の条件からみて、結局は壬申の乱で天武と共に闘った高市皇子、大津皇子、それに草壁皇子に限られた。このうち高市皇子は天武の長男であり、壬申の乱で中心的な皇族であったが、母が胸形氏の娘という地方豪族出身であった。

「高市は、力量、器量からいって、大王にふさわしいのだが」

天武は悩んだ。

「しかし、血がのう」

血統は、自分にとってのジレンマでもあったが、結果的に、高市皇子を血統という理由で大王候補から除外した。

一方、草壁皇子の母親は鵜野讃良皇女、大津皇子の母親は大田皇女で、どちらも天智の娘であった。年齢的には草壁が一つ上であった。天武八年の時点で十八歳と十七歳である。草壁は皇后の息子であり、年齢的にも上であったので、皇太子になって当然であった。

「して、どちらにしたものか」

どう思案を巡らしてみても皇太子が決まらなかった。その理由は、大津皇子が才覚にも器量にも優れていたからである。

「なんとか、争いにならないように」

その年の年五月、悩みの深い帝は鵜野皇后と六人の皇子を連れて吉野に行幸した。そのうち二人は天智の皇子、四人は母違いの皇子である。忍壁の母は豪族の娘。川嶋と志貴は天智の皇子であった。彼等はそれなりの年齢に達しており、天武の死後、後継ぎ争いが発生するとすれば、彼等の間についての危惧こそ大きかった。

「天智の血こそ、皇統の血である」

天武を尊敬する人々の間でも、古来守られてきた天孫の血統は容易に人々の脳裏から離れはしなかった。自らの経験からも、皇統の血脈の乱れからくる内乱を何よりも恐れていた天武はこの吉野行幸の際に、草壁・大津・高市・川嶋・忍壁・志貴を集めて、これまで協力関係にあった六皇子が争うことのないように重い口を開き、次のように語りかけた。

〈朕ガ男等、各異腹ニシテ生マレタリ。然レドモ今一母同産ノ如ク慈マム〉

互いに母親が異なる兄弟や近い密接な間柄でもあるが、今日からは同じ母から生まれた兄弟のように相扶け、仲良く事に当たるように願いを込めて諭した。というよりは、天皇は皇子達に今後、異心や離反をしないように約束をさせたのである。わざわざ、この誓いを求めなければならなかったほど、天武の迷いと憂慮は深かった。

「どうか、ご懸念なく」

皇子たちが心を一つにして、互いの助け合いを帝の前で誓いあった。

「そちたちには、平等の扱いを約束しようぞ」

天武は、六人を同時に胸に引き寄せたのであった。この盟約がこの地において交わされたのは、吉野川が禊の聖地でそれに相応しかったからでもある。

来し方を省み、深い思いと願いを込めて天武天皇が心のうちを詠んだ。

よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見

ここは、かつての戦いの拠点となった地でもあり、団結こそ、国防の要であることを一行が知った場所でもあった。

三

ところで、宮中では身分制度を改め、八色の姓、冠位四十八階を制定し、公式の朝服の色も定めた。さらに、礼法のうち過剰と思われる伏礼、跪礼、匍匐礼を取りやめた。例外は認めるものの、高句麗の流れにあった孝徳時代に行われていた立礼に概ね簡素化と能率化を図った。こうして、自分の血を意識する政権の基盤を周到に整えようとした。

六八一年、天武は、草壁皇子の立太子の準備を執り行った。

「しかし、他の皇子をどのように」

いったんはそう決めても、天武はまたしても深く悩んだ。そして、二年後の二月には、皇室内の権力均衡を意図して、帝は一時的に大津皇子に朝政を委ねることにした。有力で有能な皇子への政治的配慮であった。

これが鵜野皇后に大きな不安をかき立て、やがて争いの火種になっていった。

六八五年になると、天武は日頃の無理がたたったのか、ついに病を得た。病状は日々次第に悪化した。

「朕の理想も、もしかして一代限りか」

「いや何とか受け継いでほしいが」

翌年七月に、帝は〈天下ノ事、大小ヲ問ハズ、悉ク皇后及ビ皇太子ニ啓セ〉と詔した。

自らの死が差し迫っていることを自覚したからであった。しかし、どうしても国家にかけた夢を一代で終わらせたくはなかった。

「遺言を皇后に託したい」

鵜野皇后を枕元に呼んで、行く末を託した。医師が尽くした諸々の手当てや連日の祈祷の甲斐もなく、六八八年に帝は崩御した。

血の絡み

一

話を六八〇年に遡ろう。この年、鵜野皇后が病に倒れた。自身も病に伏せった天武天皇は薬師寺建立を発願した。その甲斐あってか、やがて二人とも本復した。

その頃、い独自の美しい文学的境地に立つ大和の詩歌を詠む歌人が宮廷で活躍していた。柿本人麿である。この天才が宮廷で天武天皇や鵜野皇后と親しく交わっていた。まさに、天武の意志と新羅文化の影響を強く受けて花開いた白鳳文化を謳歌する宮廷であった。

そんな中にあって亡き姉、大田皇女と天武天皇との間に生まれた大津皇子の人望が日増しに高まってきた。身の丈すぐれ、性格は奔放、武道も詩文もともに才能豊かな貴公子を人々は愛するようになっていた。ことに宮廷の若い乙女たちは胸の思いを熱くした。そのなかでひときわ艶やかな石川郎女との仲にはうわさが立ち、宮廷の社交界を彩っていた。

ある夜、密かな逢い引きを約束した。人目を避けて人通りのない山の麓で互いを待った。しかしながら、果たせなかったことへの言い訳が遣いを介して大津皇子のもとに届けられた。急な事情のためであるという。見え透いた石川郎

女のいなしにあった大津皇子は夜を通して待っていて、樹々の雫と下草の露にすっかり濡れてしまった。その恨めしさを歌にして、翌日になって彼の心を彼女に伝えた。

あしひきの 山のしずくに妹待つとわれ立ち濡れし山のしずくに

すると、貴方を濡らしたその山の雫になればお会いできたのに、そうありたかったものでしたと、石川郎女は駆け引きにわざとらしい言い訳の返歌を遣わした。

吾を待つと君が濡れけむあしひきの 山の雫にならましものを

まさに大津皇子との愛の駆け引きが繰り広げられた。

一方、草壁皇子もまた石川郎女を恋していた。温和であるが、ひ弱な草壁に対しては、石川はさほど心の動きをみせなかった。草壁も大津も父は同じで母は姉妹同士であるが、二人が帝位を争うとしたら、人心がどちらに傾くかは、母である鵜野皇后には女の目から十分に想像できた。どうやら一人の女性の奪い合いが象徴している力関係を皇后は察したようであった。しかし、石川郎女自身はその実は、権力の動きを二人の皇子の人脈のなかで注意深く窺っていた。

才智に優れ、近江朝との戦いを指揮した高市皇子に比べれば、鵜野皇后の子の草壁皇子は血筋が本家に近い。それゆえ天武の継嗣は当然草壁皇子である。母の鵜野皇后はそれについては、はじめから何の疑いももたなかったし、考えることもなかった。しかし、鵜野皇后には以前からずっと気がかりなことは、天武天皇が近年病弱にあることと、自分の姉の大田皇女が天武の間にもうけた教養と風格にすぐれた大津皇子の存在であった。次第に鵜野皇后の心に暗雲が広がって来た。

しかし何と言っても自分は皇后である。草壁は天皇と皇后の間の子である。だから、実際に皇位継承も約束されている。

「でも、もしかすると姉の産んだ大津皇子が後継に」

彼の血の濃さからいってそうなるかもしれない。不安が彼女の脳裏を何度も行き交った。だとすれば、何とかそれを妨がねばならない。

「何か手を打たなければ」

二

天武天皇が手当ての甲斐なく、無念の思いで崩御した。そして崩御から約一ヶ月が過ぎた。しかし、気丈な鵜野皇后は、時を移さず、皇后の身分のままに称制として自ら政務を執る手筈を着実に整えた。かねてからの不安に心休まらなかった皇后の周囲は大津皇子を排除する決心を固め、その段取りを周到に整えた。

大津皇子と親しかった、天智の子の川嶋皇子らにも隠密に手を廻した。

「血を、そして権力を護るには、お父様、これでいいのですね」

鵜野皇后は、幼いころ姉の大田皇女と遊んでくれた父の天智帝を思った。そして、同じ父帝が自らのひざに抱いて可愛がっていた姉の子と我が子の姿を思い浮かべた。

大津皇子が朝廷より謀反の嫌疑をかけられて、姉である伊勢斎宮の大伯皇女のもとまで逃れてきた。姉が占った。凶の結果に手を取り合って、一晩中泣き明かし、明け方、彼女が歌を詠んで逃亡する弟を見送った。しかし、皇子は捕らえられ、辞世の句を残し、宮廷のほとりの磐余池の堤で二十四歳の生涯を終えた。霊魂の保持者と信じられていた鴨が雲間に隠れるのが見られた。

大田皇女の子で、有力な皇位継承者の一人である大津皇子が、皇統から消えた。

天武天皇の二年半の殯を済ませた六九〇年に、鵜野皇后は自ら即位した。そして、四年後には都を藤原京に定めた。それまでは、天皇の即位ごとに新たに宮殿を定めるのが慣わしであったが、畝傍山、香具山、耳成山の大和三山に囲まれた風光明媚なこの地に造営した本格的な都城であった。大極殿を備えた統一国家に相応しい都である。

宮殿の庭に立ち、澄んだ空遠く、天の神に通じる香具山を望んで女王は歌を詠み、晴れやかな気持ちで天武の遺志を確かめた。

ところが天武天皇崩御後、未だ三年にも満たない時期に思いもかけなく草壁皇子が急死した。母鵜野皇后の嘆きは尋常ではなかった。しかし、嘆きながらも草壁皇子の跡を何とかその子の珂瑠皇子にと、鵜野皇后は心の内で必死に考えていた。

「どうすればよいのか」

天皇となるべき日皇子の地上支配権については、その母である自分を天の支配者の天照大御神になぞらえて、祭祀権を一定期間保有することを側面から正当化する必要があった。鵜野皇后が即位するために、自らが論理的にも天孫の日嗣であることの正当性を主張した。それをこの時点で、理論的に支えたのが側近の柿本人麿であった。

日並皇子尊と呼ばれた草壁皇子の殯宮の時、理論的支柱のための長歌と哀惜の感が溢れる反歌が詠まれた。そして、〈天照日女命は 天をば知らしめし、葦原の瑞穂の国を治める〉それらを許されるのは日並皇子尊の母である自分であることを公の前に宣言した。これらの詠歌は、明らかに、政治的意図そのものである。

「ならば、それまで皇位は私が預かって、時期が来たら確実に譲り渡しましょう」

そう言いながら、〈草壁皇子と阿閇皇女の間に生まれた珂瑠皇子に〉と、鵜野皇后は心の内で密かにその決意を固めた。

「そのためには、如何なる手段も厭わない」

ところが、この時点で血の濃さでは以前には問題にならなかった高市皇子の立場が浮かび上がってきた。太政大臣をつとめ、人望があった高市皇子については、大津皇子と草壁皇子の亡き後にあっては、

「次の皇太子に」と多くの大宮人が進言していたからであった。

壬申の乱をともに戦い、勇猛で知的な高市皇子こそ、自他共に女帝が譲位すべく、それに相応しい人であった。「皇統は高市皇子が嗣ぐべきであります」人麿はことある毎に詩歌とともに奏上した。

しかし女帝には自分の扶餘の血の意識とそれを越える女としての血脈の執念があった。

ここに至って、かつての盟友であり、側近の柿本人麿と彼女との対立が表面化した。その結果、この宮廷詩人の理想は持統にとって、いや皇統にとって、そして自分の血の正当性の維持にとって、もはや有害無益な存在に変質していた。

この事態になって、持統は、父天智天皇に関わる寵臣鎌足の子で律令に精通し、権謀術数に長けた藤原不比等を自分の権力構造の維持のために、自らの側傍に引き寄せた。

三

皇太子の急逝にあってもなお、天武の遺言を自分の血統のなかで推進し、発展させるために、鵜野皇后は自ら即位の意志を徐々に固めていた。

「亡き帝のご遺志を、そして亡き日嗣皇子の御心も、何としても孫の珂瑠皇子に伝えなければ」

天武と草壁の遺志をすべて引き継ぐ決心のついた鵜野皇后は、繰り返しになるが、ここに至って自らの治世を真の意味で開始した。鵜野皇后は、六九〇年一月、自ら持統天皇として即位した。もはや、単なる中継ぎではなかった。飛鳥浄御原令の内容を知ることはできないが、この年から新しい制度による政治体制の変革を行った。

「まず、国力掌握のためには戸籍が不可欠です」

不比等が助言した。

持統の治世は六九六年までであり、称制の期間を合わせて十年間であった。即位の庚寅年には、天智が六七〇年に作らせた庚午年籍以来、実に二十年ぶりの庚寅戸籍と呼ばれる戸籍を作った。この後は、奈良時代の終わり頃まで、大宝律令の規定により全国の戸籍はおよそ六年毎に更新されることになった。今でいう国勢調査を兼ねていた。おそらく、飛鳥浄御原令がその更新間隔の基礎になったのであろう。

大化の改新以降、公地公民制が原則となり、割り当てる耕地に対して租税を課す制度が受け容れられていた。これは耕地の面積、または戸を単位とする課税であった。

「朝廷の財政基盤を確立するために」

この年以降に、調や賦役を各個人に割り当てる税制が始まった。

「庚寅戸籍を課税の台帳として用いるのぞよ」

天智朝が戸単位で管理を行ったのに対して、これを個人の管理体制まで持統が拡張し、租税の基礎を整えたわけである。

「して、不比等、地方の行政は？」
「地域ごとの行政単位も整備しております」
各地に国司を置き、全国でこれを実施した。
これができたのは庚寅戸籍を基礎としたことによる。というのはこれを基に、各々の国を統治する国司を朝廷から派遣し、その下に郡、さらに五十戸をもって一里とする里制が採用されたからである。
この結果かつて地方豪族に委任された国造は国司の下で一地方官の郡司になった。
「もはや、筑紫の磐井による叛乱のような事件が起こせないように」
地方豪族は中央政府に組込まれた下級官吏となり、中央集権化が進展した。しかし、東北地方や南九州にはまだ十分に力が浸透せず、大和の政権がこれらの地域への支配を一応手中に収めたのは桓武天皇以後の九世紀の頃であり、そしてそれが安定するまでに、さらに一〇〇年ほどの時間を要することになった。

苦　悩

一

大きな権力闘争のなかにあってこれとは別に、幾つかの身内同士の葛藤、愛の苦しみがあった。その中で高市皇子を巡る恋愛とその悲劇を語ろう。
十市皇女に纏わる悲恋である。彼女は天武天皇が大海人と呼ばれていた若き日に、額田姫王との間にもうけた皇女である。彼女は母の額田姫王のもとで育てられ、その傍らにはいつも年下の高市皇子がいた。二人は幼なじみであったからである。
そんな二人が成長していき、やがて物心がついた頃、お互いに恋する仲になった。しかし、十市皇女は好きな高市皇子を残して、天智帝の子の大友皇子の許に嫁がねばならなかった。
「大友皇子さまのもとに参ります」
思いを込めた文を愛しい高市皇子に送った。
悲しみの涙の政略結婚であった。やがて天智天皇が薨じ、そして壬申の乱が始まった。壬申の乱は十市皇女が二十歳過ぎの時に起こったのである。子の葛野王はこの当時三才の可愛いさかりであった。
大友皇子は、教養深く『懐風藻』の漢詩で知られる詩人で才能と名声があった。壬申の乱はこのように入り乱れた人間関係の絡みのなかにあった。壬申の乱は十市皇女にとっては夫と父の戦いでもあった。時代の流れに逆らえなかった悲しくも哀れな女の一生がここにあった。
「大友皇子の動きはどのように……」
「鮒の腹に、これを……」
「父君によしなに」
というように、吉野からは父大海人の側近が密かに出入りしていた。
『扶桑略記』や『宇治拾遺物語』などには、十市皇女は鮒の腹に密書を入れて、これを大海人皇子に送ったというような諜報活動をしていたと伝わっている。
乱はほぼ一ヶ月で大海人皇子の圧倒的勝利で終わった。額田姫王は十市皇女と葛野王とともに救出されて父に引き取られる形で、大海人のもとに戻ってきた。十市皇女が挨拶した。
「父上様、ご健勝で」
このときの心境は複雑なままであった。それ以上の言葉に詰まった。
「お祖父様、お久しゅう」
幼ない葛野王が両手を拡げて天武に駆け寄った。しかし、同行した額田姫王には、言うべき言葉が見つからなかった。
「……」
というのも、大海人皇子の側には妃としての鵜野讃良皇女がいつもいる。娘はともかく、母の額田姫王が元の夫のところに戻ったとしても居所のない状況であった。
六七五年二月に、十市皇女は天武天皇の命で阿閉皇女（天智の女で後の元明

天皇）とともに伊勢神宮に参詣している。伊勢神宮へ参る道すがら、供の者が幸せを祈って十市皇女の心境を詠んだ。しかし、そこには何か暗い将来を暗示する悲観的な気配が感じられる。

河上の斎つ岩群に草生さず　常にもがもな　常処女にて

流れの早い上流の苔や雑草の生えない岩々のように、清らかな心のままで永遠にありたいものだ。そんな意味のこの歌である。

それが詠まれてから、数えて四年後の四月に宮中で皇女は急死した。天武帝が斎宮参りに出発しようとした朝の彼女の死であったという。『日本書紀』では病気による急逝となっているが、三十歳の若さでありながら、夫の大友皇子が父の大海人によって死に追いやられ、精神的に深い傷を受けただけでなく、諸々の人心の重みを背負って、この世を嘆きながら自らの命を絶ったという。

十市皇女が亡くなった時、天武帝の第一皇子として、壬申の乱にも十九歳ながら軍を率いた高市皇子は彼女を想い、切々たる挽歌を三首したためている。恋仲であったこの純粋で気立ての優しい一人の女性を心から讃えた。

三諸の　神の神杉　夢のみに　見えつつ共に　寝ねぬ夜ぞ多き

三輪山の大きな杉の木のように神々しいあなたをいつも夢に見ていました。しかし、共に夜を過ごす機会があまりなかったことに心残りの想いを巡らすばかりでありました。

山吹の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく

そして、清らかな山吹の花とその姿を映す澄んだ水と美しい彼女の水を酌む姿を訪ねるというはかない望みを神に託しても、十市皇女の居所に辿り着ける道がどうしても見つからない。山吹の花の咲く泉は黄泉を想わせるが、ここは高市皇子と十市皇女の密会の場所であったのだろう。二人はそんな美しくも深く哀しい仲であった。

しかし、愛する十市皇女の死を悲しんだ高市皇子の周囲にも、妃の但馬皇女の秘めた不倫の恋の漏れる香がほのかに漂い始めていた。

二

壬申の乱の後、十数年、世の中は天武の治世で、次第に落ち着きを回復してきた。天武天皇の皇子や皇女を巡る多彩な恋は、そうした時代にあっても、その背後に隠れた人々の駆け引きに潜む心の動揺の見え隠れを如実に表す物語でもあった。

天武の子である但馬皇女は異母兄である逞しい高市皇子の妃であった。当時、母が違えば他人であって、何ら男女の関わりに心理的な障害はなかった。しかしそうはいっても夫のある身で、異母兄の穂積皇子に想いを寄せて、密かに通じた但馬皇女の行為は許されないことであった。高市皇子に比べて、彼は地位も名声も遥かに及ばなかったが、女にとっては、自分を優しく包む今眼前にある男の姿こそ心を捉える。それこそがもっとも重要な要素であった。但馬皇女の胸の中では炎は激しく燃え、夜昼となく身を焦がした。

しかし、そうはいっても人のうわさを気にしての但馬皇女は人知れず冷たい朝の川を渡って家路を急ぐ不安の中にあった。

人言を繁み言痛みおのが世にいまだ渡らぬ朝川渡る

高市皇子の宮をそっと抜け出し、川を渡って穂積皇子の許へ通い、逢瀬を楽しんだ。そんな女の一途な気持ちがこの歌から伝わってくる。

そして、穂積皇子の近江への旅立ちに際しては

秋の田の穂向の寄れるかた寄りに君に寄りなな言痛くありとも

秋の田の穂が決まった方向になびく。たとえ世間から噂されようとも、そのように、ただひたむきに寄り添いたいのが私にとっては君なのです。そんな気持ちを但馬皇女がかの皇子を慕って詠んだ。

その歌に続けて詠んだ歌がある。

後れ居て恋ひつつあらずば追ひ及かむ道の阿廻に標結へわが背

後に残されて恋い焦がれることのつらさを思う。それよりはあなたを追いかけて行きたい。〈どうか、そのためにも道の分れ岐ごとに、標を結わえておいて下さい〉と言葉の裏で訴えている。そんな心遣りが目に見えるようである。

奈良山を越えて現在の近江方面へ抜けるには、いにしえより歌姫越と奈良坂越の二つの方法があった。このころは歌姫越が人々に慣れ親しんだ道筋であった。別れを惜しみ想う人を後に残し、遠くへ旅立つ。振り返りながら歩を進める。次第に遠ざかる光景が小さく霞んで眼に入る。峠を越えると、こんもりとした添御県坐神社の森と重なるやや朽ちた家並みが続く。その間と丘陵地を縫

うように路地が下っている。万葉の面影が僅かながら残っている道すがらである。但馬皇女の熱い恋の眼差しに、後ろ髪を引かれる思いの穂積皇子は、この淋しい峠の道を辿って近江へ向かう旅路にあった。

元明女帝の世に変わってまもなく、世が銅の発見で湧いている頃に、但馬皇女は亡くなった。高市皇子の妃でありながら、穂積皇子に一途な想いを寄せ、女の心を歌に留めながら、不倫の恋を貫いて冥土へ旅立った。現在の桜井市の山里の山隠のあたりの吉隠の猪養の岡に葬られたという。

それから、約二十年の歳月が経った。伊勢へ抜ける道が谷底に刻まれるように曲がりくねって走っている。雪が降りその道も埋め尽くすほどの積雪の様子が眼前に浮かぶ。すでにあの世に旅立った愛しの但馬皇女を想い、穂積皇子が雪のこの情景を詠んだ。

降る雪はあはにな降りそ吉隠の猪養の岡の寒なさ（寒から）まくに

もっとも、どれが猪養の岡で何処に但馬皇女の墓があったのかはもはや不明であるが。

遺　志

一

吉野川は古来多くの歌に詠まれている名所である。季節によっては水量が少なく、川原が拡がって見える。上流に遡ると、水の色が変化する。そのさまはこの地に展開した歴史に特別な感慨をもたらす風光である。川が大きく迂回する場所の岸は縄文式土器が出土したところであるという。さらに近隣には奈良時代前後につくられた寺跡や敷石などの遺跡が見つかっている。遺跡の周辺から見下ろす川の岩の奇勝が印象的である。川原には岩を刻む水の流れの痕跡とその美しい模様が見られ、往時を思い起こさせる。持統天皇が度々行幸した吉野離宮はこの付近であろうか。ともかくも早くから開けた吉野川の流域には古くから数多くの建物があったといわれ、この辺りは心なしかその雰囲気が漂っている。

山川も依りて仕ふる神ながらたぎつ河内に船出するかも

〈この吉野の山と川とが共に仕える偉大な神である帝が、この渦巻く河のなかをいま船出なさろうとしている〉と柿本人麿が詠ったのは、この地への行幸の折である。

河岸の段丘から見える静な山と渦巻く川の流れに潜む神秘性が、たたずむ人の心に迫るものがある。

「これこそ、神々と帝との一体感である」

森に纏わるように流れる水を介して神々への愛と信仰を確信していた宮廷詩人の柿本人麿はかつての天武天皇の行幸に際してこの歌を詠んだ。

〈天皇が神であるべきだ〉という人麿の全身からの強烈な願望を、和歌の中に織り込んでいる。水流に浸食された川壁の岩の在りようは、水の流れとともに大宮人一行の舟遊びの光景をも彷彿させる。

見れど飽かぬ吉野の川のとこなめの絶ゆることなくまたかへりみむ

この歌も同じく、天武天皇にとっていわば、政治の原点とも云うべき禊の聖地である吉野川の様子を力強く詠んだ歌である。

六八五年九月、再び病気に倒れた帝は、病気平癒を祈願して、元号を朱鳥に改めた。同時に、全国の主な寺院や神社に命じて天武の平癒を祈らせた。しかし、その甲斐もなく、六十六歳の波乱に満ちた生涯を閉じた。そして後継者問題は天武の心配した通り、複雑な展開になろうとしていた。

北山にたなびく雲の青雲の　星離れ行き月を離れて

北の山の周りにたなびく雲がちぎれては星から離れ、そして月から離れる。そんな風に私や皇子を残して帝は逝ってしまったのだ、と鵜野皇后は、その悲しみの心を詠んだ。

天武帝の死後、称制として跡を継いだ鵜野皇后は、亡き帝を偲ぶためであろうか、忘れ得ぬ想い出のある吉野の離宮を訪れた。持統女帝は六八九年から九年間に三十一回も吉野に行幸している。弓削皇子は幾度か吉野行幸に随行しているが、この時彼は二十才ぐらい、同行の額田姫王は六十才ぐらいである。

この地でその昔、大海人皇子は、皇子らとともに天智勢への反攻の機会を待っていた。

時を経た今になって、持統帝に随行した弓削皇子にとっても、世捨て人のよ

うな日々を送っていた亡き父帝の面影をこの地に見る思いであった。そして、父君が若い頃に思いを寄せたと聞いていた傍らの額田姫王に、憧れの気持をこめて次の一首を贈った。

いにしえに恋ふる鳥かも弓弦葉の御井の上より鳴き渡りゆく

この鳥は、あの頃のことを懐かしんで鳴くのであろうか、弓弦葉の茂る思い出豊かな井のほとりを鳴きながら飛んでゆく。そんな意味の歌である。

このときに、額田姫王が若き純真な弓削皇子に返して一首を詠んでいる。

古に恋ふらむ鳥は霍公鳥けだしや鳴きし我が思へるごと

遠い昔を恋い慕うというのはきっと霍公鳥でしょう。あのころのことをわたしがどれほど懐かしく思っているかわかるように、悲痛な声で鳴いていたのですね。

これとは別に若い貴公子の弓削皇子が美しい白髪の詩人の額田姫王の長寿を願って、思い出を秘めた歌の遣り取りによる心の交流が伝わっている。そんな興味深くさわやかな物語もあった。

二

高市皇子は壬申の乱のときに大海人側で指揮をとり勝利を導いた人である。後に太政大臣となり、天皇を補佐し、政治を司る最高責任者になった。持統女帝が開き、繁栄を目の当たりにした藤原宮廷においては、彼はその中心を為す有能な人物であった。が、その有能さが結果的に彼の命を縮めた。すなわち、これが持統に警戒される要因であった。そうしたさなかに高市皇子が謎の死を遂げた。

正当な皇統を自らの手で確立しようとした天武帝の血を引く有能な高市皇子を慕っていた柿本人麿は『万葉集』最長の挽歌を捧げて嘆き悲しんだ。その長歌に続いて詠われたのが次の歌である。

埴安の　池の堤に　隠沼の　行方を知らに　舎人はまとふ

人麿だけでなく、亡き皇子の周りにいた人々の途方に暮れた気持ちを表している。それは埴安の池の堤の草むらに隠れて水の行方が分からない様子になぞらえている。その地は香具山の麓、啼沢の杜の近くであろう。長い年月に自然が変えた地形には今では何も痕跡が残っていない。香具山の中腹付近まで畑で覆われており、埴安の池らしい跡は見当たらない。

皇子の死が周囲に与えた衝撃は大きかったが、それとは別に彼の死は、律令国家が整備されて、新しい時代が到来していた一つの象徴的な意味をもっていた。というのは、このころ、共同体的社会はすでに、過去のものになっていたからである。人麿はそうした転換期に生き、神代から連綿として伝わる祝詞や大陸や半島の古典の知識を基に、大和の人の心情を歌い上げた詩人であった。実際に、彼はこの地で育くまれた人々の生命と感性の豊かな大和言葉に加えて、身近な人に心情を訴えるべく和歌に独自の新しい表現をあみ出し、宮廷内に大きな文学的影響を与えた天才詩人であった。

予期せぬ死に遭遇した皇子を敬愛してやまない人々が彼の偉大さを改めて偲び、その気持ちを人麿への歌に託した。ご神体が湧水である神の社がある所が啼沢の杜である。きっと草木が周りを囲んで深く生い茂った埴安の池とおぼしき沼があったのであろう。

啼沢の杜に神酒すゑ祈れどもわが大君は高日知らしぬ

檜隅皇女が大きな存在であった父の高市皇子の死を心より悼んで詠んだのがこの歌である。高市の墓は、王寺町の新木山古墳がそれと伝わっている。

やがて、持統天皇の意を受けた不比等の策略により高市皇子を敬愛した人麿は流罪となり、宮廷から遠ざけられることになった。不比等は、父の功から、かつて同家に賜っていた藤原の姓に続いて、女帝より数々の恩顧を賜わった。

「そちは、王族に準ずるものぞよ」

ここに、遠く百済の出自で、後の日本を支配した藤原氏が名実ともに誕生した。というのも、持統の権力の象徴たるべき藤原京の〈藤原〉の姓とともに、それを保証する権力と地位を賜ったからである。ところで、百済王子禅広の子孫が百済王の姓を賜ったのは、ほぼこれと同時期であった。

「百済は扶餘の一系なるぞよ」

女帝のその言葉と厚い処遇に、不比等も、百済からの亡命王家の子孫の人々も涙ぐんだ。

自分がもつ、強烈な天孫の血の意識が持統女帝にそうさせた。

「我が家系はこの天地を統べる、神から授かった王家の血を受けている」

すべての障害を排除した女帝が自ら建設したこの藤原京で、翌年に孫の文武に念願であった譲位を果たすことができた。十五歳の初々しい天皇である。

「何とも神々しい御姿よ」

新天皇の晴れ姿をみて持統は自分の重い血の責務の完了を確信した。

「血を護った。扶餘の血、王家の血を！」

そう、安堵と満足の言葉を漏らした。喜びと満足感でいっぱいであった。

その持統上皇が五年後に、二十歳の文武天皇と文武の母である阿閇皇女（後の元明天皇）に看取られて、崩御した。

「後は主上が、すべてを主上が」

持統は自らの詔書に従い、現在の奈良県高市郡明日香村檜隈大内陵に天武天皇と合葬された。波乱に富んだ女帝の人生であった。

しかし、皮肉なことに彼女のそんな願いと思いは、永くは続かなかった。それから五年後の七〇七年に、文武が若くして崩御した。思いもかけないことであった。そして、今度も、血筋を護るために、文武の母の阿閇皇女が即位しなければならない事態になった。皇后でもなかった阿閇皇女の即位はこれまでになかった異例のことであったが女の凄まじい血の執念がそうさせた。

阿閇皇女が元明帝として即位してからまもなく、七〇八年に武蔵野国で銅が発見された。これを祝って元号を和銅に改元した。そして、和銅開珎が鋳造された。子を失った母としての深い悲しみの中で、先に見えた明るいできごとであった。国中が沸きあがった。

そして元明は、七一〇年になって、唐の長安にならって築城した平城京に遷都した。百済のかつての都の公州に風光の似た、美しい奈良の都は人々の憧れの都になった。

奈良とは〈ナラ〉、国の意味である。天武が礎を築いた政治の中心が持統を経て、元明に至って確固たる国の都に発展した。

宮廷のだれもが、美しい伝説のクダラ、百済の再現を寿いだ。しかし、それは懐古的な言葉や気持ちだけでなく、いまこそ、真の大和の国を造る気概に満ち溢れていた。

青丹よし寧楽の都は咲く花のにおうがごとく今盛りなり

そして七一五年になると、草壁皇子との間に生まれた氷高皇女が元正天皇として即位した。何としても自分の血筋に皇位を繋ぎたかったのだ。とにかく血を護るための政治闘争の連続であった。とはいえ、文化的には仏教美術が盛んになり、白鳳文化を経て華麗な天平文化の開花の時期を迎えた。

『古事記』『風土記』『日本書紀』というように、天武天皇の念願であった歴史・地理が編纂され、天皇自らが正当に天下を神から預かる者として、本邦を対外的にも国家として形成していく時期に入った。皇室が支配する限定した地域の意味の〈大和〉が名実ともに日本を意味するようになったのはこのころである。

やがて、文武の子の聖武天皇が即位して、自分たちの血、いや百済の、そして扶餘の血を正しく護ったとの思いを確かめることができた。元正帝が安堵の胸をなでおろした。

「お祖父さま、お祖母さま、血を護りました」

亡き天武と持統の墓前に報告した。

ところで、大宝律令が文武天皇の時に制定され、大和は律令国家の建設に着実な一歩を踏み出していた。一方、この頃は朝鮮半島の新羅が勢力を増長し、東アジアの緊張が高まった時代でもあった。

大和は、過去の経緯とは別に、唐と外交関係をもち、国の建設にそれを積極的に活用した。統一新羅とは民間での貿易が盛んであった。高句麗王朝の流れをくむ渤海国との関係には大和の宮廷は他国とは異なり、積極的に交流を進めたことも知られている。

〈そこには、やはり、血の伝統の意識が……〉

松原は、そう思った。そして、この期の偉大な三人の女帝についても、繰り返して想いを馳せた。

〈持統は国家そのものを意味する血統を自らの手で保持したこと〉また〈元明は陰陽道に基づき、先行する天皇の血統と在位の紀元を明確にしたこと〉、さらに〈元正は皇統の血の元を正しく維持し、後世に伝えたこと〉への思いが、絡み合って、彼の思考の中で溶け合った。松原にはそれがすべて真実のような

気がしてきた。そして、血を護っただけでなく天武の遺志を継いだ女帝に対して、そして遠く政治の中で同様の役目を背負わされ、歴史の陰に埋もれた中皇命の女帝に対しても、彼の心の中にとめどもなく深い感慨が満ち溢れてきた。ついでその感は、今自分が住むこの地を国家として創りあげた祖先の営みへの遠大な想いに拡がっていった。

三

太政官制が布かれて、地方の政治と行政が整備される一方で、政権中央の機構も改革された。『日本書紀』には、これが記されている。

〈庚辰ニ、皇子高市ヲ以テ太政大臣トス。正広参ヲ以テ丹比嶋真人ニ授ケテ、右大臣トス。併セテ八省・百寮、皆遷任ケタマフ〉

神祇官と太政官が並立したのが当時の中央官制であった。祭祀を司ったのが神祇官で、行政は太政官が担当した。この政治機構を太政官制という。天武朝以降、天能を神として崇め奉り、側近に皇族、実務には官吏が携わった。朝廷の最上位にある太政大臣を政務の最高責任者とした。そして、この太政官制を超越したすべてが天皇の権威を一層高め、やがて人麿らの和歌に見られるように神格化に移行した。

この制度は朝廷の機構として、累々受け継がれ、後世の武家の世にあっても、形式的にはその上に立ち、官位の任命もこの制度によった。

王政復古で明治の世になって制度が復活し、これが中央集権を目指す国家運営に採用されて政治の前面にたった。そして、それが天皇主権の明治憲法の発足の一八八八年まで続いた。第二次世界大戦後、主権在民の憲法のもとで世の中の在り様が変わったが、この太政官時代の伝統は形式的に受け継がれ、いまも縦割りの行政機構と官僚優位の観念の中に色濃く残っている。

〈日本〉という国号が定められたのはこの時代である。『日本書紀』によれば、六七四年三月の条には、〈三月ノ庚戌ノ朔丙辰ニ対馬国司守忍海造大国、言ワク「銀、始メテ当国ニ出タリ。即チ貢上ル」……凡ソ銀ノ倭国ニ有ルコトハ、初メテ此ノ時ニ出エタリ〉とある。この時点では日本という国号は使われていない。また『古事記』には我が国を「倭」と表記しており、「日本」の表現が存在しない。もちろん『やまとのくに』と読んだ倭国が全国を意味したのであるが。

ところが文武天皇の御代の七〇一年に不比等により制定された大宝律令には「日本」という国号の使用が確認されている。なお、同年に派遣された遣唐使が唐の役人に対して〈日本国の使者〉と名乗ったことが、唐の史書に記録されている。したがって、この時期にはすでに「日本」の国号が定められていたとみられる。

日の出を敬う観念や行為、それに鮮やかな朝の様子を礼賛する風習は扶餘に伝統的に伝わる概念であり、朝の鮮やかさを象徴する朝鮮という言葉は朝鮮半島でも同様に使われてきた。これらを受けて、それより「日の本」を意識し、朝鮮半島よりも早い日の出が来る大和について「日本」という国号を対外的に朝廷が頻繁に用いるようになった。現存はしないが、飛鳥浄御原令には、国号を「日本」とするという条文がおそらくあったのであろう。

天武と持統の国に懸けた夢がこの時代にあって巧妙な政策を通して実現することができた。そして大陸と半島とに肩を並べるまでに日本の国力が増し、この地に独自の文化が花開く基礎が創られた。そして、やがて日本が優雅な文化を生み出し、さらにそれが大きく発展する力をも生み出すことになった。まさに、《大海の人》が若き日に夢見て、自らの手で実現した《大海の都邑》が時代を経て、さらに緑豊かな大地の《美し国》に変貌していくのであった。

旅の追憶

宿に戻った松原はこれまでに見聞きしたことを元に再び日本の原点と権力の構造を考えてみた。史実に理不尽さを感じてぼんやりと夢見ごこちのまま、あの時、天井をみながら、とりとめもなく経験した、不思議な、いわば時空間の旅を思い出した。

天武は自分の身に連なるすべてを知っていた。なぜ、王家に諸々の争いがおこるのか、すべては支配階級の妄信とも言うべき「天孫の血の一系」から来ている。そこに生じた社会が生み出す愛憎を見る思いであった。その昔、奄美で、いや筑紫で、明るい日の下で暮らした頃の自由闊達な生活を大海人が思い出した。しかし、漂流しても失わなかった血の一系を証明する父の形見をもって都に上ってから、幸か不幸かやがて自らの身に天孫の意識が芽生えてきた。

「私もその一員、いや自分こそは少なくともそれにふさわしい力量を備えて

いるはずだ」
天智のもとで働くうちにそう思うようになった。
「自分なら、こんな国を作りたい」
天智にも何度か進言した。しかし、圧倒的な力の差はそれを許すはずはなかった。
「ならば、この私が」
初代大王が伽耶から移ってきた崇神王とすれば、伽耶は日本発祥の原点である。欽明の〈任那復興〉への異常なほどの関心も、任那地域の伽耶宗主国が父祖の地であるからであろう。欽明王は伽耶の最後の王であった仇衡王が、継体の後継を巡って生じた混乱の中にあった大和に渡り、ここを足がかりにして、五六二年に滅亡した伽耶連合の再建を志したのであろう。とすれば、後世の本邦の人々は父祖の地の歴史を含めて、それらも大和の歴史として扱ったのであろう。それが、朝鮮半島の奥深くには力が及ぶはずのなかった大和がそこでの出来事をあたかも経験し、大きな戦いを行ったという記述になり、後世の人々の歴史認識に混乱を与えたのであろう。
それまでの大和の大王も、多くは父祖の地の伽耶に寄り沿った政策を行っていたが、欽明王の場合はそれが際立っている。もちろん同族の百済の聖王との親密さが見られるのは新羅の圧力を意識していたからであろうが、何と言っても極めて近い親族であることが大きな理由であったろう。
後に祖国を失った百済の亡命貴族が日本発祥前後の歴史の連続性とその知識のよりどころとして、伽耶の宗主国の歴史を描き、執筆に関わった百済の人々が自らの歴史を織りまぜて『日本書紀』としてまとめたと思われるのは、当時の支配者が行ったことで、ある意味では当然の成り行きの所産であった。
そんな風に松原は考えるようになった。
「なるほど」
全教授がそれを聞いて、軽くうなずいたことを松原が天井を見ながら思い出した。
そもそも、応神王朝を継いだ継体王は大和に長く住んでいた百済の昆支王子の弟であったこともあって、政策は百済寄りで何かと伽耶を軽視することがあった。もちろん、伽耶、百済、大和三国は家族同様の親密さを保っていた。しかし、同時に王位については血の一系を受け継いだ熾烈な執念を内に秘めていた。また王の側近にいた新旧の貴族にも立場の違いにより争いがあった。そんな中で新羅に勢力基盤をもつ磐井の反乱が起こった。こんなところにも、大和とだけの関係からだけでなく、争いの原因を内に秘めていた。
伽耶は連合国家であって、そのなかで、最も有力な地域は任那であった。そこから、渡来してきた人々は、父祖の地として宗主国をいつも心に抱いていた。もちろん百済とも扶餘の血縁の中での関係を保っていたが、そこに王位継承と国際関係と利権の争いが絡んでいた。
「なるほど、そう考えれば　……」
その近い関係であるが故の争いが、とくに王位継承についての争いは血を重視する支配権の中では最重要課題であった。そこに介入し定着したのが、欽明王であることは前述の通りである。
こうしたことは、乙巳の変で中心的人物であった葛城王子の即位を巡って、前後に生じた混乱と主導権争いにも見られた。葛城王子は百済の血を受けていたので、一時は高句麗系の有力者が彼の勢力拡大を政治的に阻んだ。その妥協の産物は高句麗系の孝徳と百済系葛城王子の鼎立であった。葛城が中大兄として太子でありながら即位できなかったことは皇極の実子でなかったことを示唆し、伽耶に連なる天武を敢て形式的に天智とともに皇極の系図に組み入れたことも後の操作の一環であったろう。そして、天武は血の濃さでは天智に及ばなかったが、一系の血を主張するために、年齢が上であるにも拘わらず系図上、後に皇太弟扱いとしたのであろうし、頷けることである。このことを考えれば、葛城王子と姉の間人皇后との恋愛関係も一般に言われている状況とは異なるようだ。
天智の即位後も、そこに有力な天武の存在が依然として皇位継承を脅かすものであったので、これに恐れを抱いた天智は四人の娘の天武との婚姻による懐柔政策をとったのは周知の通りである。いわば、天武は天智とは血統、思想とも対立する立場にあった。敢て『日本書紀』のなかで、壬申の乱近くまで、表だって登場しなかったのは天武の天智への血の連続性の確保のための操作であろう。そうした皇統の歴史を巧妙に矛盾なく表記し、血統の一系の辻褄を合わせたのは、稀代の天才政治家の藤原不比等であり、そして最終的には舎人親王

にその編纂を委ねたことによるものであったろう。そして時として意味不明の形で表面に現れた事象の記述は、歴史を作り出すための布石でもあったのであろう。

天智にとっては出自からいって亡命貴族による百済の再興が大きな目標であった。それを考慮すれば、敗戦後に、今で云う行政担当の閣僚に多数の百済からの亡命貴族を採用し彼らにその行政を託すという、一見理不尽な理由がはっきりする。これ以後、伝統的に大きく百済の血の重視が始まった。それゆえ、やがて天武系には持統、元明が百済の血を明確に導入したとしても、また数多くの子孫がいたにも拘わらず、称徳天皇を最後に、再び持統、元明の父系に連なる天智系の光仁天皇が皇統に強引に戻され、桓武天皇に連なったのであろう。ここまで思いを巡らして、長年の疑問に対して、納得のいった松原は、安堵の気持ちから深い眠りに落ちていった。

終　章

日本が古代の部族国家に別れを告げ、統一国家になるきっかけは、唐と新羅の連合軍に敗れたことであろう。王家の血筋と経済的権益を守るために、連合し協力する形式がこれを機会に変化したからである。もちろん、隋や唐王朝がアジアで前面に押し出した国家観がそれ以前にも本邦での支配階級に影響を与えることがあった。実際に、解明派の支配層が王としての資格と資質を実質的な力に求める国家建設の方向を一時的に見たこともあったが、過去の権益と伝統を守ろうとした勢力に阻まれ、一定の枠内での変革に留まった。そして対外戦争や内乱を経て、大和の柵の少ない海外の状況を良く知る天武が、自らの立場を強調し、調和を求めながらも権力の基礎を固めて、後世にその発展を託すことができたと言えよう。

国土の統治領域にしても、国名にしても、国家としての統治原則と機構の体裁とこれらを裏づける真の実力は、困難な国際関係の時代に多くの努力と権力争いから生まれた。そして、紆余曲折の末に約百年後の桓武天皇や嵯峨天皇の時代になって、概ね整えられ、それを基にやがて大陸や半島とは異なる発展過程と独自の文化をもつに到ったのであろう。しかし、天孫という特別な意味を血筋のうちに求めた、古来強固な伝統は以後も連綿として受け継がれて、その中に諸々の社会的要素をかかえ込んで、巧みな融合の過程とさらに化学変化を経て、文化の核となって発展していった。そしてそれが日本人の行動原理として、歴史のなかで時代とともに少しずつ変化して、永く受け継がれ、今日の我々の眼に映るものになったのであろう。

第三章　祀らた昔日

海を経て陸をわたり来しはるか昔のたけき人々のもたらした物と心。
それらの融合と進化が起こった。そして遺跡や人の営みが文化の流れに映しだされて伝承の中に見出せる。

序　章

本邦には、古くシベリアからポリネシアにわたる広範囲の地域からの多くの民族の血を受けながら、長期間にわたる混血により形づくられた原日本人が、特徴の違いがあるものの先住民として各地域に分布していた。そして、彼らは日常的な活動の中で、自然崇拝または祖先崇拝を基本とする風土に適合した諸々の原始宗教を時とともにゆっくりと育んできた。そして、さらに時代を経て、大陸や半島や諸々の状況変化にあって、この活動に大きな影響を及ぼしたものが、朝鮮半島から本邦にもたらされた異質の文化的要素であった。しかしながら、いわゆる弥生時代後期までは新天地を目指した人々の往来は先住の人々とともに原始宗教から生活の底辺に深く関わる独自の自然宗教を整えていった。そして後続の古墳時代にかけては、独特の死生観の形成と今日、目にする神道の原型ともいうべき調和に満ちた日本文化の底流の思想を創り上げてきた。それは、分立抗争を繰り返していた半島諸国に見られた五世紀ごろからの諸事情の変化のために、血縁と地縁によって、移動を強いられた人々やこれとは別に自由な人々の移動がもたらした以前とは様相の異なる先進的な文化の本邦への継続的影響のことである。そのなかで在来文化との融合過程で先住民の自然観やそれと不可分の宗教観とそれらを扱う形式が神道の形に次第に整えられていったことである。それらに関わる基本的な文化的活動については、今なお各地で目にする歴史的遺産からも次第に確かなこととして裏づけられようとしている。そしてさらに仏教や朝鮮半島とのより密接な政治的、経済的関わり

合いを反映しながら、諸処、重層的文化構造として、矛盾なく調和した新しい独自の世界観を創り上げていったことである。こうした日本の黎明期における渡来人が及ぼし、その後に見られた政治・経済・軍事・産業・文化などの分野での目立った影響については、七世紀を挟んで物語風に描こうとした。その中で、かつて書物から得た諸々の知識とそれまでに胸の奥で培ってきた思いは、歴史の諸々の想像の場面と自らの眼で確かめた情景が脳裏で融け合って、あたかも当時のありさまを見る錯覚としての複雑な体験に変わっていったものである。かくして入り乱れる歴史の挟間で、人々の諸々の活動を想像の中で綴ったのが第一章『王家の祠』であった。そこでの時空を超えた経験を何度か回顧しているうちに、いつしか次の歩みを模索するようになっていった。その歩みのなかで、唐・新羅の連合軍に敗れた後に壮絶な権力争いを経て、日本の国の基礎を形づくろうとした当時の人々の思いと営みにロマンを挟んで綴ってみたのが第二章『大海の都邑』であった。そして著者の祖先への思いが前述の動機と相俟って、奥深い歴史との関わりに向かわせることの過程でこれまでにも増して、本邦と朝鮮半島との密な関わりに驚きの感を深めることになった。

その中で、あまり語られることのなかった高句麗由来の渡来人の役割には、今日の日本文化の底辺に根付く深い精神的影響はもちろんのこと、さらにその背後には、時代をさらに遡った新羅やその前身、または伽耶地方からの色濃い文化的影響が随所にみられることである。しかし、現実にはそれらの歴史的事実と目される事跡は、これまで、我々の日常のなかで積極的に取り上げられることが少なかったようである。それゆえ、当時の国際情勢の変動と人的交流の足跡への想いからは諸々の事柄がイメージとして膨らんでいく。その背景のひとつが、当時の王家に連なる扶餘の血統の正当性はもちろんのこと、継続的で純粋とみる血統の美意識を主張する支配者階級の歴史の認識と意図的操作があったことがある。すなわち、古代の歴代王家が同根の扶餘の血統にありながらも、歴史編纂時の王家の直接的な血統以外の王族に対しては、形式的にも実質的にも血と権力の薄まりを求めてきたことが推測されるからである。このことに関しては筆者の独断の誹りを免れられるものではないが、それを背景として辿りついた未熟な著者の歴史の認識について本章で述べてみることにした。

高麗川

一

小高い丘をなす山肌に寄り添いながら、草木が風にそよいでいる。ふもとのなだらかな地は緩やかに波打っている。そこをゆっくりと土地の人の影が動いていく。それを遠く眺めながら山を下った一人の男は、窪みを背にして、荷を降ろし、額の汗を腕でぬぐった。日の光と動く梢の陰影の中、くっきりと浮かんだ表情と眼色は、何かを真剣に追う様子であった。

ふとしたことから朝鮮半島の百済王家の血に連なる鬼室集斯の跡と呼ばれる祠に、その昔、運命的な遭遇をした、あの時空の旅人、その人、松原であった。当時のことは、今となってはもはや遠い過去になってしまったのを感じる。というのも、彼はやがて齢が七十に届かんとする、ややかつての精悍さが薄れた様子が見えるからである。しかし、それは体躯のせいと思えるだけで、その実は、なおも意欲に溢れているのであった。

ここ日和田山から、しばらくふもとの景色を遠目に窺いながら、さらにゆっくりと歩を進めると、先ほど山腹の金刀比羅神社の鳥居付近から見晴らした目的の地が眼前に広がってきた。川が囲む巾着状の景勝の田園である。やがて、その景色の細部がはっきりと見えてきた。そのあたりを独特の調和をもって流れているのが、この物語のモチーフとなる高麗川である。

初秋には、たわわに咲き誇る華麗な曼珠沙華に囲まれたこの地の周辺と川の形を自らの足で確かめると、松原は留まることのない興奮を覚えた。

というのは、それから呼び起こされる朝鮮半島そのものの連想から、遠い昔の人々の生業の声が聞こえるような気がしたからである。そして、それが今の自分の境遇に絡む深い因縁を呼び起こす誘いでもあったからである。

事実、心の震えとして、全身で共鳴する感動の波を起こすこの響きは、過去から未来に続く、長い時間を歩んできた本邦の皇室に連なる気高く麗しい象徴的血脈を自らの深層に同時に、意識させてくれたのである。

そして、それはその根拠となる過去の時間と広く関わる空間のなかで、人々の長き営みを胸に強く抱き、その時空をひとり旅する松原自身に血が大きく沸き立つ思いを再び与えてくれたのである。

伝承では、唐と新羅の連合軍に滅ぼされた高句麗の後裔が駿河・相模・甲斐などの地に住んでいたという。そして、当時の大和朝廷は百済の滅亡後に渡来してきた人々の処遇に倣って、同様に祖国高句麗滅亡の憂き目をみた人々のために、高麗郡を設置し、渡来した人々を一緒にここに移したという。

そんな、史実でもある〈高麗の伝承〉を松原が思い浮かべた。
「これからは、ここが我々の国なのですよ。王家も民もみな一緒なのです」
「……」
「百済も高句麗も元はといえば、同根なのだから」
「……」
千三百年前の百済と高句麗の人々のささやきが風の音に混じって、道中の松原にはそう聞こえたような気がした。

二

翌日、彼らの歴史を垣間見るために、いったんこの地をあとにして、松原は神奈川県の大磯町に足を向けた。朝鮮半島から渡ってきた人たちの跡が残っているという。この地に高麗山と高来神社があると聞いていたからである。
まず、目に入ったのは海のそばの二百㍍に満たない低い山である。これが西洋の軍用帽の形に見えなくもない、相模平野のどこからでもよく見える高麗山である。相模湾からも目立つ山である。渡来人たちが、これを目印に上陸したという。
後に、武蔵国に高麗郡を開いた高麗氏とよばれた指導者は、伝承では最初に大磯の海岸に上陸したことになっており、相模国とは深い縁がある。サガミの《サガ》とは《私の家》の意味の古代朝鮮語であるといい、相模国も北から南に流れる相模川もその中に同様の意味を含んでいるという。その西側が大磯町で、この高麗山の麓の下の国道一号線に面して高来神社がある。
高来神社は、もとは高麗権現社とも言われていた。権現というのは、仏が衆生を救うために神の姿になって仮に現れたといわれる一種の神仏習合の思想から出た概念である。それゆえ、江戸時代以前にはこの神社は高麗寺として人々に知られていた。明治になって、国家神道の神社重視のために、仏教や寺院を分離したことが今のような事態を招いた。そして神仏分離に合わせて、《たかく》神社と読むようになった。音読みの《コウライ》を高来に変えたからだという。今でも地元の人たちからは《こま》神社と呼ばれることもあり、その名残りを周囲に漂わせている。
高来神社から足を延ばし、花水川と相模川の下流を横切り、北に向かうと寒川神社に辿り着く。この神社は高句麗ゆかりの高座郡寒川町に位置し、門前町をなしている。延喜式神名帳にも名神大社、式内社に列せられた古代の社格制度からいって、相模国では別格の神宮であることが知られている。祭神は寒川大明神であるが、古来祭神が一定していない不思議さがある。
ところで、山形県に《サガ》由来といわれる寒河江市がある。近くに寒河江川が流れている。現在、サクランボが特産の地である。確かなことはわからないが相模国のサガや寒川神社も元は同名であったと言い伝えられている。高麗と呼ばれた高句麗にゆかりの人々は関東一帯やこのように東北地方へ進展するだけでなく、東海方面にも徐々に広がっていった。
丹沢山地と高麗山の北に続く丘陵の間には秦野盆地が広がっている。秦野という地名も渡来人の秦氏と関係があるのか。少し、考えが過ぎるのではと感じたが、勝手に松原がそんな思いを巡らした。その秦野盆地の水流を集めているのが花水川である。高麗山のまわりを流れて相模湾に注いでいる。道中一緒になった地元の人が河口付近を《唐ヶ原》と教えてくれた。
そんな伝説を聞いては、一つ一つ松原は自分の想像に合点がいった。
そして、高来神社の一帯が《高麗（こま）》といわれることを知って、この地と高句麗からの渡来人たちとの深い《えにし》をしっかりと感じながら、はやる気持ちを抑えて歩を進めた。

三

この高麗山の西に小高い丘がある。この地は王城山と記されており、地元の人は一般に《おうじょうさん》と言い、《みこしろやま》ともよぶ。近くに横穴古墳が見られる場所である。名前からいって、山全体が朝鮮式の山城をなしていたようだ。景行大王の王子の倭タケルが東征の帰りに休息をとるためにしばらく滞在したという言い伝えに因んで王城山と名付けられたという。
海に面して景色の広がる、見晴らしの良い高台に出てみた。とてもすがすがしい気分である。
松原は学生の頃に口ずさんだ、あの《みはるかす青海原に、……》そんな歌詞の一節をふと思い出した。歴史に本格的に興味をもったのは、この歌を覚えた十代後半のことであった。と、同時に、自身に感じた孤独の中に、何故か啄木の悲しみを思った。

《東海の小島の磯の白砂に……》

そして再び高台の足場のよくない足元に目を移した。

そこには切石と呼ばれる大きな石を使って、造り上げた伝統的な高句麗の墓の様相を示す釜口古墳がある。幅二・五㍍、奥行き三㍍、高さ二㍍の古墳である。一枚の岩が石室を覆っている。この造り方からいって、有力者の墓に相違ない。ところで、この古墳には伝承がある。その昔、狩りに出た源頼朝と従者一行が、途中でかまどに使ったという。古墳の名の由来はそこにあると地元の人々が言うのだが、真偽のほどは誰にもわからない。埋葬品は、とうの昔に盗掘され、ほとんどの副葬品がなくなっていたが、それでも、新羅のものと考えられる青銅器が出土したという。

こうしてみると、近隣の秦野の地名からいっても、この地では新羅・高句麗からの朝鮮半島の同胞として、人々が共に生活していたのであろう。それとも何らかの必然性をもって連続的に今の姿を我々に示しているのであろうか。そんなことを松原は考えてみた。

この地では、高来神社の祭に合わせて、隔年七月に催される大磯港近くの照ヶ崎まで飾り船を引く御船祭がある。海洋国家の日本では、こうした祭が今も各地に見られることは周知の通りである。ところで、長野県では、安曇野市の穂高神社の船祭りをはじめ熊野神社、下諏訪町の諏訪大社、松本市の須々岐水神社でも同様の祭りが見られる。内陸であるのにこのような祭りが催されるのはやや驚きでもある。他にも各地に、背景は異なっても、海に面した土地では御船祭が見られるが、それらの祭りの謂れについては容易に合点がいく。夏の祭では、御神酒所や神社など一定の場所毎に、古くから伝承されてきた飾り船を引く船子たちが歌う木遣歌や舟歌が披露される。

遠く、応神大王の治世には、異国の船が八つの帆を揚げてこの地にやってきたという。八幡神の由来に当たるのか。そんなことを松原はひとり考えてみた。

それから時代がくだって、半島の情勢が大きく変わった戦乱時に、岸辺に流れ着いた大きな船に、漁師が近づくと、やおら現れ出できたひとりの老爺の言った《我々は国が荒廃して、ここにきた高句麗の王族である。この地と子孫の繁栄ともに努力をしたい》という言葉に感じ入った地元の人たちは彼らを快く受け入れたと云う。そして、神仏習合が行われる時期になると舳先に観音化身の龍頭をもつ権現丸と高句麗王族の鷁首をもつ明神丸の二艘を用いて神仏を敬い祀り、さらに状況の変遷とともに飾り船行列が陸路を巡行するように変っていったとのことである。

そんなことが、今もこの地の人々に代々語り継がれている。

ゆかりの地

一

武蔵国賀美郡には《イマキ》という音がつく式内社がいくつかある。これを聞いた松原はすぐにこの語句に思い当った。イマキとは、その元とみられる《今来・今城》からいって、おそらく後から来た渡来人を呼んだものであろう。新来の渡来人が多いため、大和の高市郡を今来郡と呼んだことが欽明紀に見えるが、言葉の成り立ちから言っても味わい深い。

関西では、淀川沿いで近年発掘された今城の大きな前方後円墳が、いわゆる当地に新しく来たという意味から、継体大王自身の呼称を含めた彼の古墳といわれている。古墳は高句麗によく見られる内装を施されているが、金官伽耶系の畿内住民が、彼ら住民の立場の強化のために、百済を含めた自らの縁に連なる朝鮮半島の扶餘集団を一緒に呼び寄せて造ったという。

現在の日本人は、皇室との関係から、武寧王に連なる百済の興亡に関心を示すことが多いが、朝鮮半島からの影響を考えるにはどうしても百済王家の父祖地でもある高句麗王家の歴史とその支配地域にも関心をもたざるを得ない。

中国東北部から北朝鮮が支配する朝鮮半島北部は扶餘の発祥に縁深い地域である。不幸なことに、現在の北朝鮮と日本との関係には憂慮すべきものがあり、調査が難しいことがある。しかし、この地は、後の世に日本の社会制度を造り上げた父祖の血とその周辺の人々の故地でもあったのだ。というのも、遠い昔に民族と言語が別れたこの地の文化が脈々として、今日の日本に息づいているからである。確かに、百済の関連史跡は朝廷との関係からみて西日本に多く分布している。かつて、時空の中の旅人としてその足で史跡を確かめたことを松原が思い出した。

しかし、調べていく中で、秩父や相模、山梨の地域だけでなく広く関東には、おびただしい数の朝鮮半島ゆかりの歴史的遺構が存在することがわかった。それも、百済の支配階級が唐・新羅の連合軍に敗れた後に、亡命の形で多くの人々

が倭国に逃避するずっと以前に、渡来人により造られた建造物の話であることに意義がある。

したがって、五世紀から六世紀にかけての石を積んで造る墓、すなわち高句麗式積石塚が長野県に多数分布していることは、百済の歴史に比較的通じていた松原にとっては少なからず驚きであり、とても興味深かった。

二

現在の福岡市東部の筑前国糟屋郡阿曇郷に古くから大陸や朝鮮半島とも交易などを通じて活躍した代表的な海人族が住んでいた。本拠地の志賀島一帯から離れて、後に全国各地に移住したという。六世紀頃は、すでに信濃の安曇野にまで中心勢力が浸透していた。実際、彼らの墓の様式からいって、高句麗の渡来人と密接な関係が推測されている。そして、彼らの日本の各地への移住の理由の一つに、朝鮮半島の勢力を巻き込んだ磐井の大乱が関係しているといわれている。

ところで、舒明大王の時代に、安倍比羅夫は使者として百済に派遣されていたが、六四一年に舒明が崩御すると、その翌年には百済の弔使を伴って帰国して、その案内と接待を行っている。また、このときに政情不安な百済から追放された王子の翹岐を自らの屋敷に迎えて保護している。

その意味で、彼らの勢力範囲は朝鮮半島との外交や交易からみて重要であった。翹岐は六六一年の百済に対する唐の攻撃に際して、救援軍を指揮したといわれている。一説に、中大兄王子と同一人物と言われることがある。そんな興味深い、謎の人物である。

ともあれ、その翌年には百済の旧臣らが在日の百済王子の豊璋に王位を継がせようと図り、豊璋には斉明女王より大錦中の官位が与えられた。武将でもあった安倍比羅夫は大和にあって百済王とみなした豊璋とともに水軍一七〇隻を率いて百済に渡った。一時は鬼室福信らと共に戦い、祖国の再興がなって、かつて苦境の時に用いた歴史的な国名の《南扶餘》を名乗った。しかし戦況は悪化し、比羅夫は六六三年八月の白馬江の戦いで敗れて戦死した。

その後、比羅夫に縁の深い、現在の安曇野市の穂高神社に《安曇連比羅夫命》として祀られた。毎年九月二十七日に同神社の《お船祭り》が行われるが、この日は安曇比羅夫の命日とされている。この地域は到る所から清水の湧き出る流れが集まる河川のなす扇状地である。

海人津見が転訛したのが安曇（安倍）とされ、その中の津見は《住み》を意味するので、安曇族は《海に住む人》であるという。

安曇族の足跡は阿波、淡路、播磨、摂津、河内、近江、出羽など広範囲に及んで、列島各地に分布しているが、例えば音の通じる阿曇・厚見・厚海・阿積・安曇・渥美・泉・熱海・飽海などの地をおよそ比定できる。そして、出雲もそうであるという説がある。

ところで、積石塚式の墓が古墳時代に存在したのは、長野、山梨の両県の一部の地域と香川県から徳島県にかけての地域である。他にも、長崎県、宮崎県、山口県、さらに、愛知県、静岡県、群馬県などにも見られる。なかでも、たくさん見られるのは長野市大室古墳群である。また、高松市の石清尾山古墳群に見られる積石塚は、前方後円墳・方墳・円墳というように種類も多く、加えて全国的にも珍しい双方中円墳の形をしているものもある。山口県萩市に属する日本海の小島の見島には、玄武岩からなる独特の様相のジーコンボ古墳群が見られる。

以前、この種の古墳が気候との関係から論じられたことがあるが、そうとは限らないようだ。むしろ、力をもった海洋民族が全国に広めたと考えればよいし、それを行い得る有力な豪族がいたに違いない。

これとは別に、東京都の狛江市は狛江百塚といわれるほど、高句麗式古墳が沢山あったところである。残念ながら、人々がその価値に無知で保存が悪く、破壊されたものが多い。惜しいことをしたものである。残った主な古墳に兜塚古墳と、戦後に発掘された亀塚古墳がある。前者は直径約三〇㍍、高さ約四㍍の円墳で、後者は全長四〇㍍、高さ六㍍の帆立貝式古墳である。これらはその様式からいって六世紀初めに築造されたものである。松原はそのありさまを嘆き、ため息をつかざるを得なかった。因みに兜塚と亀塚という名の古墳は全国各地にある。興味深いのは、高句麗では馬のことを《駒》といったことである。実際に高句麗のことを漢の時代には〈高句驪県〉と記していた。彼らの生活の中で馬が重要であったことは、これからも推測できる。

東京の駒沢・駒込・駒場などは馬に関連した集団が残した地名であることにほぼ間違いはないし、山梨の甲斐駒もきっと同様であろう。もともと日本原産ではない馬を東国に広げたのは、本邦へのもち込みを含めて、騎馬民族による

ものであったといわれ、容易に高句麗との深いつながりを想像できる。川崎市にある古墳群についても、馬絹古墳、早野横穴と呼ばれる古墳は高句麗系といわれており、名称が馬に縁のあるのも、まんざら偶然ではないようだ。

諸々の遺跡

一

ところで、《こま》と発音される狛、巨麻などの古代地名は日本各地に分布している。先述の地名の他に、たとえば、甲斐国巨麻郡、武蔵国多磨郡狛江郷、河内国大県郡巨麻郷・若江郡巨麻郷、山城国相楽郡大狛郷・下狛郷などが挙げられる。そんな想いを巡らし、改めて朝鮮半島の影響を考えた。

その《駒の連想》から、松原はふとかつて訪ね歩いた和歌山県の古墳を思い出した。

ここにある大谷古墳から出土した馬面マスクは金銅製で、同様の副葬品が現在の中国吉林省輯安市の高句麗の古墳に埋葬されているという。また、河内の古墳からも同様に金製や金銅製の武具と馬具が出土している。これらは少なくとも、それまでにはなかった騎馬民族の進攻がこの周辺にあったことを示す品でもある。

本格的な進攻は古くは崇神大王の頃であろうか、それとも応神大王の時代であろうか。そんなことを考えながら、古代史の研究家で、松原の歴史の見方に何かと有益な批判をしてくれる同窓の中川雅夫と語り合ったことを思い出した。中川は、あの懐かしい《みはるかす》の一節を一緒に歌った同窓生である、

その時の会話が次のようであった。

「松原さん、あなたは確か、九州は応神大王の通り道と言ってましたね」

中川が静かに言った。

「しかし、なぜか関連する遺品が九州北部に少しも見られないのですよね」

と続けた中川の疑問に松原は言葉が詰まった。

「……」

「だとすれば、すこしおかしいではないですか」

と、やや執拗に中川が食い下がった。

ところで拙著『王家の祠』に書かれた応神に関するくだりは、およそ、つぎのようである。

ホムタという名の王族の長が半島から対馬を経由し、まず現在の唐津に着き、そこから大牟田に辿り着いた。最初は外地の主として蕃主となり、東方へ向かって勢力基盤を固めていった。そしてやがて彼は武力で新羅系の大王の仲哀を廃して、自ら大和地方で即位した。その史実が神武東征として、神話に投影されたものであったに違いない。

「応神は大牟田から、敵の少ない路を辿り、宇佐に到達し、そこから瀬戸内海を摂津までというわけでしたね。そしてやがて河内王朝に連なるのですよね」

「……」

「そう言ってましたね、松原さん」

「……」

「つまり、応神が九州北部を通過しただけであったからだという一応の説明がつきますよね」

「……」

久し振りに中川と席をともにした松原はちょっと苦しい様相で、やや思案に暮れて、目の前のグラスの底に梅干しを沈めた焼酎を口にした。

「しかし中川さん、いずれにせよ、応神については議論の余地がありますね」

どんなきっかけから、この話題になったのかわからないが、以前から松原が応神大王の実在性を主張していたことへの中川の素朴な疑問であった。

「ところで、彼には、仁徳大王の叙述に重ねた、不可解な類似の表現が見られますね。このことは、応神大王の行動と後継者にもたらしていますよね」

そう言いながらも、中川は批判的な感想をにこやかな表情で語った。

確かに、《徳》のついた諡号をもつ仁徳大王の業績については、何か継嗣問題が複雑に隠されているようだし、それに沸流伽耶系とも云われる応神大王は

八幡神との関連からいって、新羅系の血も入っていると考えた方が自然でもあるからである。

そんなことを考えながら、《丘の上から炊ぐ煙が昇るのを見て農民の生活を推し量った》という仁徳大王の《仁と徳》の伝説と巨大な彼の陵墓を思い浮かべた。

というのも、応神大王と併せて次の仁徳大王についての記述の混乱の原因を松原はいつも胸に抱えていたからである。すなわち、新羅系の仲哀大王からの緩やかな離脱を意図して、沸流伽耶系扶餘の血統とみなす応神大王に接続する伏線として卑弥呼女王と重ねる神功王妃の説話やまた都怒我阿羅斯等を必要としたのであろう。それが松原の考えでもあったし、それには、さらに応神五世の子孫とした温祚百済系扶餘の血統の継体大王が仁賢大王の手白香皇女を通じて、繋いでいったことへの布石があるからでもあろう。しかも事情を知る新羅系の大伴氏や古く物部氏の影響力を考慮しながら、血の一系を構じた後世の歴史編纂者の巧妙な意図も見られるからである。

そんなことが血の一系の説明にどうにも避けられないこととして、結論の出ない思考をいつも松原はあれこれと巡らせていたのである。

二

ところで、四世紀末から五世紀にかけては、土着と渡来の豪族の連合体の倭国は朝鮮半島諸国と高句麗との間の情勢の変化を巡って、何かと争うことが少なくなかった。とくに、鉄の利権を巡っての争いが多く、限られた範囲内での移動を繰り返していたのは支配者間の利害関係からであった。しかし、一般の人々の往来には制限を設けようにも、実際にはできるはずはなかった。したがって、当時の新羅や伽耶の地の不遇な人々が混乱を避けて次々と新天地を求めて列島に渡来することができた。そして、彼らはそこで懸命に働きながら定着し、やがて現地の人々と融和してきたことが容易に想像できる。

六世紀になると、王室や支配階級にとっては、古い相互の姻戚関係が信じられていた百済と高句麗の間にも、国際情勢の変化と共に状況の変化が見られた。それとともに大和国の前身である倭国と高句麗とが友好的な関係になり、相互の人的交流が王家を中心に盛んに行われた。高僧の慧慈は聖徳太子が高句麗から招来し、自らの師となした。このことは当時の大和国王室と高句麗王室との密接な血縁関係を示唆している。『新撰姓氏録』の記録からは、渡来氏族の多くが高句麗王家の血を引くことがわかる。そして、蘇我氏もこれまでの認識以上に高句麗との関係が密接で、王家の血を引く家系でもあることが松原には想像できた。

このように、高句麗からの人物や文化は、百済からの流入よりは時期的には早かったが、本邦での百済の影響が際立って見えるのは、沸流系金官伽耶と温祚系百済の扶餘の血筋を強調すべく王室の直接の祖を意識せざるを得なかったからである。つまり、元正期までの歴史編纂者の意図的記述による理由からであった。それゆえに、大和国にとっての高句麗の重要性が敢えて強調されることがなかった。ましてそれ以前の新羅から影響は、歴史を編纂した時期にあって、敵対関係が直接的であったこともあって、できるだけ公式には言及したくなかった。

百済の扶餘の正統な血を引くとみなした本邦の後の王家にとって、新羅系はともかく同じ扶餘の血統にある高句麗王系の後裔をどのように後の世に残せばよいのかは大きな課題であった。したがって、どうすれば歴史の構成と記録のなかで不都合のない形に彼らの事跡を収めるかを当時の支配階級が熟慮してきた。その上で、高句麗王族の家系の存続や渡来貴族が巧妙に遇されてきた。そう松原は自らの想いを幾度か巡らせた。

高句麗からの渡来人に関する記録によれば、たとえば、狛人は河内国に住んでいた高句麗朱蒙王の子孫である。また、山城国諸蕃の狛造は夫連王の後裔であり、それに狛首は右京諸蕃に住んでいた安岡上王の後裔であることが知られている。

そして、河内国狛染郡にも、朱蒙王の子孫が住み、また高句麗の溢士福貴王の子孫で河内国大県郡巨麻郷と若江郡を本拠地として大狛氏が住み、さらに高句麗人の伊利斯沙礼斯の子孫で和泉国諸蕃の住民の大狛氏が居住していたという。

彼らの子孫は王族としては遇されてなかった。しかし、残ったのは地名を通した家名または伝統文化などの特殊分野の維持集団や後述の高麗神社に伝わる宗教を司る家系であった。同根の扶餘の子孫であっても、百済系王家の美麗な血統からできるだけ遠ざける方向へ導き、歴史の動きで明確な形の表出を避けながら、当時の歴史編纂家が一方では後世に彼らの事跡を残す意図をもっていた。それゆえ、血の濃度が薄くなっても、古くは斯盧や伽耶の王室に絡む《連》

とよばれる扶餘の王族の近親家系を極めて巧妙に神話に関連づけて、格式高く記述した。が、それでも百済王家の扶餘とは絶対的に、一線を画す血統でなければならなかった。したがって、そこから外された血統と権力を備えていた豪族を神代の話と巧妙に絡めて、古来の自然神道の形成過程の中で丁寧に祀りながら、さらに《神道と神社の形》を創り上げ、長い時間をかけて彼らの和魂をその中で育んできた。そして、同時に巧みな誘導もあって、結果的にそれが百済王家に差し支えのない宗教的名跡に徐々に変わっていった。

高麗の縁

一

久し振りに、ソウルで再会したソウル大学名誉教授の全氏と《コマ》についての話が始まった。というのも、このところ松原が《コマ》に大きな関心を寄せているからである。

「前からそう言っていたではないですか、松原さん」

にこやか表情で好きな焼き肉を摘みながら松原にもそれを勧めた。

「そういえば、そうでしたね、先生」

松原は、あれから、時がたって先生のすこし変わった容貌を気にしながら、そう答えた。

「松原さん、日本には高麗という単語があちこちにたくさんあるのですよ」

「地名のことですか。それなら…」

「いや、生活のなかですよ。《こま》は、一般の人々の感覚的な言葉なのです」

「そういえば、古くは《こま》という言葉には異国からの渡来、そのものの意味がありますね」

「そう、たとえば、狛犬ですかね、これも高麗という名に関係あるのです」

「むろんそうでしょう。そして、同時に《こま》は外国をも意味したのですよね」

思わず、松原の声にも力が入った。

狛犬は想像上の守護神獣であるとし、その起源も名称が示すように渡来の信仰に基づくことであろう。諸説あって明確ではないが、高麗犬の意味で、獅子と同様に一対とする説もあり、邪気を祓う意味があるといわれている。

「松原さん、独楽もそうかも知れませんね」

「いくら何でも、それはちょっと違うでしょう。日本では古くは古末、都玖利といい、後に、《こま》の短い音があてはめられたのでしょうよ」

「独楽は中国語表記ですね。これは世界各地でいろいろ見られ、それぞれ呼び名がありますね」

「いや、しかし、それももしかしたら……」

笑いながらも、そんな話が続けて口からこぼれ落ちた。

ふと、松原が、

「高貴で麗しい高麗、祖国の高句麗」

そんな言葉を発した。すると、

「コリアの原型であるこの言葉を韓国人はとても大事に、誇りにしているのですよ」

目を細めて、全教授はそれを確かめるようにいった。

「多分、ずっと後になるでしょうが、朝鮮半島からのものを、例えば高麗人参、高麗茶碗、高麗青磁などとよんで日本では珍重したようですよ」

「……」

「それに、《とうもろこし》のことを関西では《こうらい》と呼ぶことがあるとのことですよ」

と全教授がかつて聞きかじったことも披露してくれた。すると、それを追うように松原が言う。

「そういえば、畳の縁の材料に、高麗縁という呼び名が古くからありますね。全先生」

「松原さん、よくご存じですなぁ」

「それが遠く父祖の住んだ大国（クンナラ）の高句麗に原型があったというわけですね」

松原が全名誉教授をたてて、一応この言葉で結んでみた。

というのは、かねてから、日本で百済を《クダラ》と発音することに対し、松原の《故国のクナラ》説とは異なる《大国のクンナラ》という全教授の意見があって、互いに譲らなかったからである。

二

前述のように《コマ》とよばれる高麗、駒、狛、巨摩や狛犬のように日本語にはこの音がよく聞かれる。《コマ》のもとは熊であるという。古代半島のトーテムであり、今にその伝統が息づいている。

半島の天孫降臨神話の中に、熊が百日の間日光にあたらず、人間に生まれ変わり、檀君王倹の母になったというくだりがある。熊は古代朝鮮語で《コム》、《ウム》という。後にこれが《カム（神）》になったという説がある。現在も日本国内の到る所に見られる熊野神社の由来については、前記の事柄と無関係ではないし、それに《野》は古代には《ヌ》と読み、国土の意味があったという。しかも、熊野の名を冠する神社は権力者の移動の歴史に密接に絡んでおり、代表的なものは出雲の熊野大社や紀伊の熊野神社である。それこそ日本の歴史に絡む神話に直結する。『古事記』によると神武天皇が熊野に上陸し、そこから太陽の化身である八咫烏の道案内で大和国に入ったという。

《コムナラ》は、《惟神》に通じる神（カム）の国であり、祭祀の聖なる場の意味をもつ。そして概念的にはごく自然に神道へ通じるものである。

そして、《カムナム》は神の木、《カムナビ》は神体山を表すことも知られている。今も各地にこの縁に連なる名が見られる。たとえば、島根県に神名火山（朝日山）があり、それからいっても、限りない自然と神に関する日本人の心を強く感じないわけにはいかない。

ところで、天孫降臨を意識する高句麗の政治構造は比較的明確なものであった。初期には、大加と呼ばれる大首長が領域内の村落共同体を中間の首長を介して、累層的に統率する機構がみられた。そして、各地域の首長層が王都に集団で居住する形態を保ちながら、一般の村落民は、首長層への貢納制の支配にあった。時代が下っても有力な地縁的集団である五部族からなる支配者は部族連合国家を形成し王都に居住した。後の成熟した時代にも支配層は五部・五族に区分され、国土は五大行政区・軍事管区として、中央からの派遣層による支配構造をなした。そして、その基底に存在した村落共同体が前記と同様に首長層を媒介として統治されていた。因みに、高句麗における官名が倭国でも用いられていた。前記のように、古人大兄や中大兄の《大兄》はその例である。

信濃地方には多くの渡来人がいたことは先にも述べたが、高句麗の官名である上部、下部、前部、後部をつけて自らを区別していた。後の王権への従属、朝廷の仕事分掌を定める部民制における部と同様に氏として名乗ったことが知られている。そのような意味でも先進国であった高句麗からは制度的にも影響を受けていた。山梨の巨摩郡でも同様で、高句麗のこうした上級官名をもっていた人々たちが、後に改姓願いをしている。

このことは、彼らの倭国社会への同化の反映であった。彼らは主として五世紀頃に渡来してきた人々の子孫であった。奈良時代までは、日本の社会はこんな按配であったようである。

もちろんこれに百済の人々の間の伝統的制度が後に重なってくるのであるが……。

麗しき血脈

唐・新羅連合軍により滅亡に追い込まれた百済の王族は、大和国の王族との姻戚関係を頼って亡命の渡来を余儀なくされた。程なくして、さしもの軍事強国の高句麗が、唐や新羅の圧迫から滅亡すると、この国の王族も一族郎党を伴って渡来し、大和国の各地に住みついたことが知られている。

しかし、不思議なことに、高句麗からの人々のその後の消息は百済の人々の消息に比べて不明瞭な記述が多い。それでも、後に高麗郡大領となる高麗若光には朝廷が同族の証として、七〇五年に王の姓を与えた。

これに先だって、歴史的に自らの王家の血脈に近い、百済からの亡命王族の子孫にも王の姓が贈られていた。

《やはり、同じ天孫の血なのか。しかし、そうであっても血の濃度が……》

《それは王族として彼らを遇するためなのか、それとも……》

扶餘の血の濃度では、大和王家より元々優位にあったと考えていたのが高句麗や百済の王家であった。しかし、百済の王族は大和王族により近い血縁にあった。

大和朝廷は先に百済や高句麗から渡来して、住民に同化が進んでいた人々のために、武蔵国に高麗郡を設置した。そしてこの地と比定される現在の日高市新掘には、高麗王若光を祀る高麗神社が今も鎮座しており、地元の人々から愛されている。

日本では、高句麗を《句》を除いて表記することが一般的であった。六六八年に滅びた高句麗は、古代文献では高麗と書くことが多い。混同され易いが、統一新羅の後の高麗国とはもちろん別のものである。《何故、そのように混同されるのであろうか。こんなに単純であり、しかも著名な国の名を……》と考えながら、どうにも、松原には解らないことであった。それは、もしかして血の連続性に敬意を表するためであったからなのかも知れない。古来、高句麗と高麗に《狛》の字をあてて、日本では《こま》と呼び慣わしている。何とも、不思議なことであるが、前述の狛犬も多分にその類であろう。

以前、ソウル大学の全名誉教授と会食中に高句麗の話が出た。すると次のように彼が言ったことがある。

「高句麗は《高氏の句麗》という意味なのです。《高》は王の氏なのです」

松原が黙って聞いていると、全教授が続けた。

「同時にそれは《ク》の写音であり、《広大》の意があるのです」

お酒のせいか、いつもよりやや饒舌になっていた。

「《句麗》は溝婁（コル、クル）」から転化した写音で、また《城邑、都城》の意味もあるのですよ、松原さん」

「だから、全体としては大いなる国、すなわち大国という意味になるのですか？」

彼の持論を思い出して松原が先手をとって、疑問形でこれを補足した。

これとは別に、中国からの呼び名の中の《句》にやや侮蔑の響きがあるから、敢えてこれをはずして、朝鮮半島では高麗と呼ぶようになったともいうし、本邦でもこれと同様に考えて高麗と呼ぶ習慣があるという。倭国についても、同様に侮蔑の意味があって、この国名を嫌って時に《やまと》と呼んでいたし、《倭》を《和（やまと）》に、さらに《和（わ）》に置き換え、尊称の《大》をつけ、《大和（やまと）》または《大和（だいわ）》とした。松原は、以前からそのように考えていた。

古くから、朝鮮半島より扶餘の血を受けていた大和の王家は、周囲の豪族の力をまとめ、権威を保つための理論的根拠と実力が必要であった。それが、乙巳の変を境に、徐々に高句麗系を排除して権力を掌握してきた百済系の王家が目指すところであった。

思想的には、現在に連なる王統の祖先にあたる百済の一系の血脈と天から与えられた地上支配権が重要であって、地下の支配権は別として、天上の神との契約による天下の占有権を確立することが重要であった。この思想が後々まで王統にも周囲にも、永く受け継がれてきた大きな原則となった。これについては前章までに述べてきた。

そんなことを考えているうちに、松原はどうしても、いままで比較的遠い存在であった高句麗のことを、そしてその周辺の歴史を無性に知りたくなってきた。そうなると、朝鮮半島の人々が共通にもつ歴史に関する意識を知る必要を感じて、松原は『三国史記』を頼りに韓国の歴史を考えてみることにした。

大学近くの神田の古本屋で立ち読みをしていると、ふいに後ろから声をかけられた。在日韓国人の朴義明からであった。すぐに親しくなった。というのも松原が『三国史記』を手にしていたからであった。そしてはからずも松原は、三国の建国伝説のあらましを文字を通してではなく、朝鮮半島出身の感情の籠った同胞の解説を交えた生の音声で聞くことになった。

朝鮮半島の曙

一

今日、なおも多くの朝鮮半島の人々が熱心に語る建国の説話は、『三国遺事』のなかの檀君に関する伝説である。まず、太伯山の頂上に天から降臨した桓因の話がある。そしてその子孫の桓雄と熊から転生した女性との間の子の檀君王

倹が朝鮮を建国したという話が続く。その時期は紀元前二三三三年であるという。太伯山とは現在の白頭山のことであり、この国の都についての地理的場所はともかく、古くから平壌であるとされてきた。

このときから数えて、韓国では西暦二〇〇〇年をカレンダーに檀紀四三三三年と記している。これは丁度、戦前日本で紀元二六〇〇年（西暦一九四〇年）と称していたのと同じである。

ところで、高句麗は《北扶餘》の出自の卵をもとに誕生した神の子である朱蒙が始祖であるという。

伝説では、朱蒙の父は天帝の太子の解慕漱であり、従者とともに天から熊心山に降ってきたという。これは天孫降臨説そのものである。すなわち、彼は熊心山から地上に降りて《北扶餘》を建国したということである。また、《解》は扶餘の王族の本来の姓である。

鴨緑江の河神の女の柳花を解慕漱は呪力によってとらえて娶ったという。その後、柳花が日の光を感じて懐妊した。彼女の生んだ卵から誕生したのが朱蒙であり、扶餘王金蛙の王子として育てられた。弓の名手の朱蒙は降りかかる多くの試練を跳ね返し、解慕漱の果たし得なかった大業に挑み、高句麗を建国したとの伝説がある。

しかし、扶餘王の太子に妬まれ、生命の危機に晒された朱蒙はやむを得ず、密かに南方へ逃亡した。そして、従者とともに辛うじて渾江の畔まで辿りついたという。因みに、渾江という大河には別の名がいくつかあり、古くは塩難水・沸流水・婆猪江・冬佳江などの名称が伝えられている。

扶餘の追手の兵が迫ってきたとき、朱蒙と従者には河を渡る何のすべもなかった。途方に暮れた朱蒙が天に救いを求めると河面に魚や亀がたくさん現れて、彼のために急ぎ橋を造った。朱蒙の一行が河を渡り終えて、しばらくして、追手の大方が橋の半ばに差し掛かったとき、忽然としてその橋が消滅し、橋上の追兵は残らず河の流れのなかで溺死したという。

その後、時期を見はからって母の柳花の使者が二羽の鳩と穀物の種子をもたらした。それらをもとに、朱蒙は高句麗国の建設を始めたという。

この期は、以前からこの地方を支配していた兄の松譲と朱蒙が統治権を巡って争った。その末に、朱蒙が神の意志を示しながら松譲を追放した。そして、この地を逃れた松譲の子孫が、後世にそう呼ばれることになった手薄の伽耶地方に沸流王家を建国したという。これが斯盧や金官伽耶など有力な国々の前身となったと言われる。そして、やがて伽耶の血筋のもとに任那地域を父祖の発祥の地として、後世の倭国の王家が象徴的にこの地を扱うようになったのであろうか。

こんなことを朴義明の言葉に重ねながら、松原はさらに時間の旅を続け、今なおはっきりとしない、日本の建国の歴史を思った。

朱蒙は髑嶺の上に、城廓と宮殿をつくり、四十歳で没するまで十九年間天の加護のもとに高句麗の王位にあったという。その伝説を朴が微笑みながら松原に丁寧に語った。

ともかく、この地方の建国伝承には一般にアジアに共通のモチーフが流れている。その特徴は、日光感精伝承と卵生伝承が複合して表れているところである。また《魚の橋》のいわゆる非常時の説話は遠くツングース的説話に遡れるし、本邦でも受け継がれていた。たとえば、因幡の白兎の中のワニとウサギの話でもそうである。もちろんワニは古代には鮫のことを言っていたのであるが……。

二

紀元前八〇〇年頃には、中国東北部から朝鮮半島北部にかけて、ツングース系民族の国が栄えており、周の武王時代には箕氏が封ぜられて阿斯達に都を構えたと伝えられている。場所は山東（遼東）半島であるという。当時の封土は、琵琶形の銅剣が使われていた地域と重なって文化的にも高い水準にあったという。しかし、この時代は、殷の流れをくむ箕子朝鮮と呼ばれる古朝鮮の時代のことと伝えられる。史実としては、これに代わって紀元前一九五年から前一〇八年までの八十数年間に、この国を衛満が支配していたことが衛氏朝鮮と呼ばれる確かなこととして記録されている。

その後に行われたこの要地に対する漢の侵入と支配に対抗して、紀元前一世紀頃から国家形成の真の意味での歩みを始めたのが高句麗であり、一世紀中ごろ太祖の時代に至って国力が大きく充実してきた。そして、遂に三一四年には漢の勢力を完全に駆逐したことが記録されている。この時代の支配地域の交代の攻防のあたりが、異なる歴史書をもとにした、現在の中国と韓国との間の領土の歴史的認識に大きな差をもたらしている。

「松原さん、近頃アジアの三国で歴史認識という言葉がよく言われますね」
「そう、こうした異なる歴史認識はどう扱えば良いのでしょうか」
「いや、このようなことは、現在の領有関係で主張することではないと思いますがね」
「だったら、松原さん、民族の広がりからいえばよいのでしょうか」
「いや、それも、しばしば、争いのもとにもなるね」
「だったら、共通のものとして扱うべきでしょうね」
次々と二人の間で言葉が交わされた。
国を接する、たとえば、ポーランド、チェコ、ドイツ、ロシアでの著名な偉人をそれぞれが自国民として主張していることを、かつてのドイツ留学時代に松原は友人から聞いたことがある。
このことを振り返って、松原は《東アジア共通の歴史の動向としてみることができないものか》と想いを巡らした。その中で、《ナショナリズムの一方的主張ではない知恵があって然るべきである》とのことから、傍から見て、順当な会話が二人の間で続いた。
「著名人であれば個人としての活動の偉大さからいって、人類の遺産のことになりますね。だったら、共有の誇りと考えられるのにね…」
「そうですね」
「でしたら、特定の集団が自分の所有物と考えるべきではないですね」
考えがやや足りないかもしれないが、そんなことを松原は朴に言っては、自らの周囲で取り沙汰される昨今の領土問題をも考えてみた。
ところで、半島中南部では、高句麗とは別に、紀元前一世紀頃から徐々に勢力を増強して成立した、いわゆる《馬韓・弁韓・辰韓》の三韓時代があるが、これは中国や日本の客観的な歴史認識である。
ところが、これに関する韓国の認識は全く異なり、三韓時代の存在を認めず、歴史上の新羅の優位性を損なわないように、一世紀前半に朝鮮半島が三国時代に入ったとしている。
この日中両国が認める三韓時代を経て、朱蒙の流れを汲む温祚王が始めた百済、それと隣接して力をつけてきた新羅による三強の時代が訪れる。すなわち、百済と新羅の両国は三～四世紀頃には高句麗に対抗できる国力を備えて、半島東南の伽耶諸国と済州島の耽羅を別にして、いわゆる三国時代を迎える情勢になっていた。
そして、この朝鮮半島三国と伽耶小国群がともに、特に鉄の利権を巡って争っていた四～五世紀に、沸流系の流れを汲む扶餘王族とともに朝鮮半島の混乱を避け、伽耶の諸国から本邦に多くの人々が活路を求めて渡来した。そのなかにあって、斯盧の渡来人を先陣として、またこれに混じって渡来してきた高句麗系の人々が倭国の発展に重要な役割を果たすことになった。すなわち、本邦では、これらの人々が古墳時代とよばれる頃の大和王朝成立の基盤醸成とその後の大きな発展の原動力になった。
時代が下って、大陸に隋が出現するに及んで、隣接する高句麗はその圧力を露骨に受けることになった。しかし、その間三度にわたる攻撃を撥ね返して、自国を必死に守った。逆に隋は自らの国力の弱体化を招き、滅亡の途を経て、結果的に唐に取って代わられることになった。
この時期に徐々に力をつけたのが前述の半島東南の新羅であったが、この国は常に高句麗と百済に圧迫されていた。しかし、積極的に唐の制度と文物を取り入れて唐に倣って国政の近代化を行ない、唐との結びつきを強めながら徐々に力をつけていった。そして、結局のところ、覇者である唐の巧妙な政策と、大和を巻き込む朝鮮半島の三国間の争いの中で、唐と軍事同盟にあった新羅は、六六〇年には百済を、さらに六六八年には高句麗を滅ぼして念願の事実上の朝鮮半島の統一を果たした。
この軍事的バランスの大きな変化は海を経て、本邦の指導者層と国家の形態に大きな影響をもたらし、その結果、本邦は新しい国家体制の確立に向かって進んでいった。ところが、朝鮮半島が統一されるに及んで、次は唐と新羅の両国間に緊張が走った。
もともと朝鮮半島の直接支配を目指していた唐は《朝鮮半島は、歴史的経緯からいって、我が領土として統治する》として、太宗李世民の言葉の意を強引に通そうとした。
これに危機感を抱いた新羅は、唐との友好関係から一転して、統一した国土

の保全を目指して、滅亡した高句麗と百済の遺臣とともに、唐軍を朝鮮半島から追い出すために、六七六年まで戦いつづけることになった。《我が国を死守する》という、こうした伝統的独立心は今に連なる韓国の特徴でもあろうか。

ところで、朝鮮半島西南一帯に四世紀前半に成立した扶餘族の国である百済は新羅と比べて、高句麗とともに、大和朝廷との関係が深い。ことに、乙巳の変以後の王位継承を巡っての争いは、高句麗系とこれに対する沸流系の伽耶諸国と温祚系百済の複雑な姻戚関係のなかで起こった事件の連鎖であったことが推測される。

このことは、乙巳の変前後の権力闘争、そして半島を巡っての争いからも分かる。また、さらに大きく見て、唐と新羅連合軍によって滅ぼされたあとの百済が、大和の援助を受けて豊璋が復活を目指したが、六六三年の白馬江の戦いで連合軍が敗退して百済再興はついに叶わなかったことにも見られる。

すなわち、そうした経緯とその後の本邦での熾烈な王位継承の様子からも推測されるように、その国際的影響は権力争いを通じて、後々の大和国家の形成と発展の大きな推進力となった。

諸国の攻防

一

ここまで話して、ひと息ついた朴の表情は明るかった。日本人がこのように関心をもって聞いてくれることは、いままでになかったからである。

「とにかく、当時の国際情勢は今とあまり変わりませんね」

と、すっかり打ち解けた松原が口を開いた。

すると、なぜか朴からは話題を変える言葉が突然発せられた。

「松原さん、以前にした私の話は、日本でいえばいわゆる神代のことが主で、やはり史実をお話すべきでしょうね」

「いや、なかなかおもしろかったですよ」

「ところで、松原さん、高句麗のことを……どのくらい？　……」

遠慮しながら尋ねた。

「いや、正直言って、あまり……でも、国土を拡大した好太王のことはもちろん知っていますが」

「……」

「まあ、一般的な歴史は今までにも学んできたね。でも、断片的な半島と日本との関係しか知りません。だから、知っているとはいえないかもね」

すでにくつろぎ、和やかな二人の間で

「いや、松原さん、ご謙遜を……だったら、少しですが私の知っていることをお話しましょう」

朴は、おもむろに、話し始めた。話はやや微妙な部分があり、松原の見解とは相容れないことがあったが、それを含めて、会話をまとめると以下のようであった。

高句麗は中国東北と朝鮮半島の接する地域である鴨緑江の支流の渾江の畔の桓仁付近を中心に建国されたツングース系扶餘貊族の国家で、朝鮮半島の三国時代に栄えた王国の一つである。

『三国史記』によると、前漢の孝元帝の前三七年に東明聖王すなわち朱蒙よって建国されたという。

この国が力をつけ、飛躍的に領土を拡大したのが、三九一年から四一二年に在位した好太王すなわち広開土王の時代であった。この王の業績を記念して建てた石碑が《広開土王碑》で、現在の中国吉林省輯安市に建っている。この碑文には《倭の記事》が刻まれている。その読み方に関して諸説があるのと、碑文そのものの改竄説など問題の多い石碑であるが、五世紀初頭の東アジア諸民族の貴重な資料であることに間違いない。

輯安市の位置は現在の中国吉林省南東部の長白山（白頭山）の南麓である。北は通化市及び白山市と接し、南西は遼寧省寛甸県及び桓仁県と、そして東南は鴨緑江を隔てて北朝鮮と接する。高句麗発祥と中国の当時の領有範囲を巡って、今日では歴史的解釈の異なる軍事的な要所でもある。

二

記録によれば、高句麗の歴史は大きく三期に分けて見ることができる。

第一期は遼寧省桓仁付近に国都を置いた卒本時代（前三七年頃〜二〇九年）であり、第二期が輯安に国都をおいた丸都時代（二〇九年〜四二七年）である。そして、第三期は平壌時代（四二七年〜六六八年）である。

高句麗の名称が中国の歴史書に現れるのは、前一世紀前半の前漢の時が最初である。そこには、現在の遼寧省永陵付近にあたる第二次玄菟郡の《高句驪県》として記録されている。

漢が遼東半島から日本海に出る交通路の支配を目的として、現在の北朝鮮の咸鏡道方面に最初に設置したのが玄菟郡である。しかし、貊族・濊族の勢力の増強とともに、漢はそこからの後退を余儀なくされ、七五年に遼東山地の蘇子河上流域に退かざるを得なかった。

この玄菟郡の移動が高句麗の建国に直接関連しているし、卒本時代の当初がこの時期にあたる。そして、中国で王莽の新の時代に至って高句麗王《スウオウ》の名が史籍に最初に現れる。この王は朝鮮史に現れる始祖の朱蒙と推測されるが、周辺郡の紛争に関連して、将軍の荘尤のために謀殺された経緯がある。しかし、宮王の時代には遼東方面に侵攻し、第二次玄菟郡を攻撃して、一〇六年には遼東山地から撫順方面にこれを移動させた。さらに、半島の東沿岸に進出して、沃沮族と濊族を自らの支配下に置いた。

二世紀後半に、後漢の力が衰えると遼東に自立した公孫氏が高句麗を攻撃するようになった。高句麗は王位継承の内紛から一時的に分裂に見舞われたが、その危機を回避して、山上王伊夷模が、二〇九年に卒本から鴨緑江中流域の丸都に遷都した。

中国の三国時代には、二三八年に公孫氏を滅ぼした魏が将軍毋丘倹を派遣して、二四四年に高句麗の国都の丸都を占領した。このとき東川王は辛くも沃沮の地に逃れた。しかし、魏が占領地から引き揚げた後には、丸都に復帰して艱難辛苦の末に国を再興した。

西晋の末、四世紀の初頭、華北は五胡の侵入で混乱していた。これに乗じて三一三年に美川王が楽浪郡を攻略した。

こうした華北の混乱に乗じた、いわば《許せぬそのやり方》に含みもっていた鮮卑族慕容氏の前燕王が三四二年に故国原王の治世下の丸都を陥しいれ、これを占領した。その際、美川王の陵墓から、遺骸をもち去っただけでなく、王母及び王妃を拉致する屈辱を味わせた。翌年、父王の遺骸の返還を許され、征夷大将軍・営州刺史（長官）・楽浪公の称号のもとに、故国原王は臣下として入貢し、冊封関係に入った。

《ここは涙を呑んで……　致し方あるまい》

高句麗王の苦渋の判断であった。というのも南方の百済とは礼成・臨津の両江で対峙するような難しい状況にあって対応に苦慮していたからである。

《百済に対する防備もせねば》

三七〇年に前燕が前秦の符堅に滅ぼされた後は、高句麗は前秦に入貢するようになり、継続して臣下の礼をとらざるを得なかった。

《耐えるのが我々の宿命なのか》

こうした高句麗の政情のなか、歴史的にも事跡が明確であるが、三七一年には百済の近肖古王は平壌を急襲した。このとき、高句麗の故国原王は戦死して、一旦、慈悲嶺付近にまで後退せざるを得ない状況に陥った。

しかしながら、四世紀の小獣林王の代になると、前秦との文化面の交流が盛んになり、僧の順道が派遣されて、同時に仏像・経典が伝えられてきた。これを契機に、国都の丸都には尚門寺・伊弗蘭寺が建立された。高句麗仏教はこうして始まり、やがて隆盛に至った。そして、これが本邦にも後の世になって、派遣僧を通じて伝えられた。

《われわれは、力よりも、文化を》

やがて律令が公布された。大学が創設され、国力が充実してきた。そして好太王の治世に至り、高句麗の国勢は一層伸長した。勢いに乗った高句麗は、後燕と戦い、現在の撫順である新城と遼陽である遼東城を占領し、四〇一年には東扶餘を併合する勢いになった。

《これで、我が父祖の扶餘の地を回復できた》と国中の誰もが思った。

ところで、百済は馬韓諸国のなかの伯済国が前身であろう。建国神話をはじめとして、系譜の上で扶餘とのつながりを主張しており、支配層は扶餘族というのも、聖王が五三八年に泗沘に遷都した後に国号を《南扶餘》と自称していたこともあるからである。百済は温祚王を経てその子孫といわれる近肖古王の

頃に、実質的な建国が行われたと考えられている。
「日本人はどうも新羅についてはあまり語ろうとしない。いつも、百済のことばかり」
話題を転換するように、また、ちょっと不満そうな顔で朴がつぶやいた。
「……」
「新羅は後に朝鮮半島を統一した、歴史的には評価が高い国なのに……」
と、朴が続けた。
ところで、三世紀ごろには、半島南東部には辰韓十二国があり、その中に伽耶諸国の前身や斯盧国があった。これが新羅の前身であろう。
「でも、朴さん、韓国人は中国の歴史書に従った、この地方の古い歴史を認めていないね」
松原が文献に基づいて歴史認識の誤りをほのめかした。
もちろん朴にはそれがわかる。そして、辰韓とは斯盧を中心とする近隣の国々の意味であることも承知である。
「その通りです。でも、三つの国は半島では同格なのです。したがって、時期をほぼ同じくして建国されたとみなしています。新羅は半島を統一した後の朝鮮の大きな基盤だからなのです」
朴が朝鮮史の立場を述べた。
「いや、新羅は、この斯盧が基盤となって、周辺の小国を併せて発展していき、国家の態をなしたものでしょう」
松原はやや冷静に反論し、話を続けた。
「いわば、新しいネットワークなのですよ」
「……」
「朴さん、《羅》はネットワークを意味します。だから、新しい連合国家が新羅なのでは…」
「なるほど、そして新羅は国家として成長してきたというわけですね」
と、朴義明が明るい表情で頷いて見せた。
しかし、四世紀から五世紀にかけての新羅は、高句麗に比べて、国力は未だ奮わず弱小であった。当時の新羅領土の広さは北九州と同程度で、百済の半分程度であった。それゆえ、新羅にとって、自国の近くの伽耶諸国との血縁が強い倭国は、この頃にはすでに列島の南部の支配を巡って大きな脅威であった。
高句麗は南方の百済にもしばしば侵攻し、百済・倭国の連合勢力に大打撃を与え、漢江以北をすべて版図とした。また、新羅の奈句王を服属せしめ、勢いは留まることがなかった。
《突破せよ。勇躍するのだ》そんな雰囲気が高句麗全土にみなぎっていた。
高句麗の長寿王は好太王時代の快進撃の後を受けて、一層の国土拡大に努め、四二七年に丸都から平壌に遷都し、西方は遼東平原を完全に自らの版図に組み入れ、遼河を挟んで北魏と国境を接するまでになった。
まさに、国力は絶頂期にあり、当然のことながら当時の倭国にも強国として映っていた。
《我らは大国である》高句麗自らは、そんな誇らしい思いであったろう。
この時期の高句麗の版図を想い、人々は大国（クンナラ）と呼んだ。そのことがその感情を受け継ぐ百済を《クダラ》とよぶ理由になったと、かつて全名誉教授が何度も言っていた。
そうかも知れない。その場面が松原の脳裏によみがえってきた。

三

松原の専門は生体システム工学である。研究室では、吉林省延辺の朝鮮族出身、そして遼東半島の南部の遼寧省大連出身のどちらも中国国籍の女子留学生を受け入れて、研究指導したことがあった。
実は、哈爾浜と長春で行われた第九回アジア太平洋計測制御会議へ出席のための旅行が全名誉教授と一緒であった。松原が議長を務めていた国際会議である。その日程には、日本からの参加者が多いこともあって、中国が言う《偽満州国》や新京（長春）の様子を含めて、少しでもこの地の歴史を正確に知ることにあった。同時に、この地域の世界遺産や中国と朝鮮の文化が接する黒竜江省、遼寧省を古代朝鮮史の展開の場として、韓国人研究者の学術会議への参加

にも意味があった。そんな計画を中国の南京航空航天大学のスタッフとともに立案していた。

大学の講義を済ませた松原が職場から自宅に戻り、旅支度を終えて、あわただしくソウル経由で中国東北部哈爾浜に向って旅立った。ソウルで一緒になった全名誉教授とは道中でいろいろな対話があった。そして、学術会議の後には、韓国側では白頭山と呼ぶ長白山に会議参加者が一緒に登ることになった。

山頂からみた青い湖が雲の合間に見え隠れした。風の息に吹かれ追い立てられるように見えた湖面のさざ波は、清楚で神秘性を醸し出す、まさに聖地にふさわしい光景であった。

《ああ、この先が北朝鮮なのか》聖なる指導者の誕生の地と言っている国境の山を見て、松原は不思議な感慨にとらわれた。

ところで、白頭山から西の方に延びる長白山脈の分枝である千山山脈が遼東半島の背骨をなしている。山脈の西側の遼河を挟んだ地域は、古くから黄河周辺の中原とは異なる文化圏でいわゆる東夷族が住む処と言われていた。

「我々は決して蛮族ではなかったのに、それどころか全く正反対だった」

いつもの全氏の言である。こうした言葉のあたりに、中華思想を批判する原型があるのを韓国人に強く感じたし、松原も上海や他の大きな街の大通りには、古代の王朝の名を冠した大夏という名のついた大きなビルを目にして、そうした印象をもったことを思い出した。

この地域は扶餘、鮮卑、契丹、女真などの攻防がみられた先進的地域であった。その中でも強大な国家を建て、長きにわたってこの地を支配した高句麗は遼河東側に堅固な城を築き、国防の要としていた。途中、朝鮮族の住む村を訪ねた。さすがに韓国と同様の民族服をまとっていた。同一の民族にとっては複雑な感情が渦巻く地域でもある。

全氏の説明があった。

「現在の西豊が屑夫婁城、撫順が新城、瀋陽が蓋牟城というように、こうした城郭は朝鮮の活躍の歴史そのものの跡なのです」

松原が、

「そうですね。この辺りは間違なく、当時の高句麗でしたね」

と即座に肯定した。

「それに、白岩城、遼東城、安市城、建安城、龍潭山城、卑沙城というように拠点が分布しています。これらは……」

全名誉教授が繰り返して主張するところであった。

「つまり、朝鮮史において高句麗はわたしたちの大きな誇りなのです」

以前にも朝鮮の歴史書を手渡しながら、熱弁を奮って松原に説明してくれたことがあった。

四

ところで、高句麗は五七五年に百済の国都の漢城に侵攻し、百済の蓋鹵王を捕えて殺害した。

《百済はもともと我が分家である。当然、我が領土とすべし》

次の文咨明王の時代を含めて、三代にわたって一二〇年間、高句麗は全盛期であった。そのように、領土的関心が南下に集中したので、高句麗の侵略に耐えきれなくなった百済は熊津に余儀なく本拠を移さざるを得なかった。

しかし、これに怯まず、《そのうち、必ずや、我が父祖の地を回復して、北を含めて統一する……》

苦境にある百済の誰もが心の中でそうつぶやいた。それからも高句麗は攻撃の勢いを緩めず、さらに南下し続けた。これに脅威を感じて、五五一年には百済の聖王は新羅の真興王と連携した。

竹嶺に登ると、西に丹陽、東に栄州が見える。ここから半島南部の小白山脈の竹嶺を越えた新羅との国境に近い漢江の上流域に広がる、高句麗の支配地を首尾よく百済がその領有に成功した。

しかし、その後、新羅は百済の占領地を武力で併合し、漢江下流域の黄海への出口を獲得した。次いで日本海に面した沿岸地方の高句麗領をも併合した。この事態になって、慌てた高句麗は逆に百済へ接近して、新羅と対抗する道を選んだ。

《考えを変えねば》それからはまさに、攻守を変えての抗争になった。この間、大陸に対しては、安全保障上、高句麗はやむをえず大陸の南北両王朝に入貢し、親善関係を保っていた。

大陸では、五五〇年頃からトルコ系の遊牧民によるチュルク帝国、中国での音訳名の突厥が中央ユーラシア地域に勢力を大きく広げてきた。

しかし、隋が五八一年に中国を統一すると、隋の侵攻に危機を感じた高句麗は、突厥との連携を模索していた。隋は文帝から煬帝の時代に、高句麗には、前後三回にわたって侵攻したが成果もなく失敗に終わった。隋王朝に代わった唐王朝も同様に、分裂後なおも強大な突厥と強敵の高句麗との提携を極度に恐れ、両国の動向を警戒していた。太宗の治世には三度、高宗の治世に至っては二度にわたって、高句麗を侵攻した。しかし、結果的には攻略に失敗するような状況であった。

その後、政変により泉蓋蘇文が権力を奪う時代を迎えた高句麗はもっぱら新羅の攻撃に精力を傾けるようになった。

《このままでは、高句麗については埒があかない》そう判断した唐は方針を変更し、新羅と結んだ。

そして、高句麗を背後で支援していた百済を攻撃して、六六〇年に国都の扶餘を陥すことに成功した。勢いづいた唐は、今度は包囲体制を形成して、六六一年に高句麗に陸路・海路から侵攻して、平壌に迫ったが、その陥落を見ることができなかった。しかし、六六三年には百済は唐により占領されて滅亡した。このとき、百済の王族や高官は倭国に数多く亡命したことが知られている。

その後、高句麗では泉蓋蘇文が病没し、一族の内紛が生じると、唐はその期をとらえて大軍を派遣し、新羅もこれに援軍を寄せて、六六八年にはついに平壌を陥しいれた。ここに、宝蔵王は降服し、およそ七百年続いた高句麗王朝の歴史の幕を閉じた。

任那を中心とする伽耶がすでに五六二年に新羅によって滅ぼされ、ついで六六三年に百済が、そして、高句麗もついに滅びた。残ったのは、統一新羅と高句麗の一族がやがて再建した渤海だけになった。

歴史の編纂

一

三世紀には、邪馬台国が魏に使者を派遣した。その後、国内統一を巡って紆余曲折があったが、大和国は五世紀に南朝の宋に使節を何度か派遣している。中国の王朝から官職を授けてもらうこと、すなわち冊封によって朝鮮半島や日本列島の対立勢力の中で有利な立場を確保しようとしたからである。それは小国の生きるための重要なすべであった。ところで、『宋書』の倭国伝には、いわゆる《倭の五王》の讃・珍・済・興・武が宋に朝貢にきた記述がある。そのうち、四人の倭王が爵号を宋の朝廷に求めている。

「古代の日本のことですが、朴さんは随分ご存知なのでしょうね」

「いや、ほんの聞きかじりですよ」

松原は昨今、急に親しくなった在日韓国人の朴義明といつの間にか、この時代の話にのめり込んでいった。

ところで、神武—綏靖—安寧—威徳—孝昭—孝安—孝霊—孝元—開化が歴代九天皇として古来『古事記』・『日本書紀』・『風土記』に著されている。ここまでの大王は実在と伝説が混在している。というより、むしろ同時代の有力な地域の王の事跡をここに集約・投影したものであろうが……。さらに、十代以後の崇神—垂仁—景行—成務—仲哀—応神—仁徳—履中—反正—允恭—安康—雄略—清寧—顕宗—仁賢—武烈までの歴代大王のうち、崇神は任那から入った実在の王といわれるが、これについては、第一章で述べてきた。その中で、ほとんど史実として知られていない大王については言及しようにも十分な資料がないが、《倭の五王》については、前記の中国史書に幸運にも伝えられている。しかし、この頃は倭国には諡号はおろか漢語の王の呼称など存在しない時代の話を扱わねばならない。

「なぜ、讃・珍・済・興・武なのでしょうか？

王の名を、一字で記述しているのには何か理由が？…」朴が尋ねた。

「いや、それが大陸の国家では普通だったと思いますが」松原が答えた。

たしかに、漢語の王の呼称は。発音のし易さからいって、一字がふつうであったろう。二人の話は澱みながらも、ゆっくり進んでいった。

ところで、話は若干主題から逸れるが、先頃、四世紀ごろの奈良の古墳からの出土品と同様のものが、新潟地方から発掘された。このことは、東海道に先駆けて、この地は大和王朝の支配が及んでいたというよりは、この地方で大和王家に関連深い有力者の存在とそれらの関係を示すものである。これには、系図上で沸流伽耶系とも言われる応神大王の流れにある王位を六世紀前半に継体大王が継いだ経緯が関係する。越国出身で温祚系の継体に関する後世の歴史編纂時の叙述との関連が見られるからである。というのも《継》の字には血縁関係の意味合いは無く、ある場合なら《嗣》になるので、継体大王の場合はたとえ扶餘の血統の繋がりは維持されていても王家の系統の移動が推測される後世の意図的操作が見えてくるからである。

いずれにせよ、後世の倭国から見て温祚系扶餘が王位を継ぐ正統であり、沸流系をそれに準じた扶餘の血統として、それが好ましい王統を構成するとしたかった。そして、王統の維持にとって、純粋と考えられる範囲内で血の濃度を形式上保つことの重要性をずっと主張してきた。

それが長い歴史の中で、時に滅ぼされ消えていった王族や豪族の血統への畏敬と慰霊の中で進行していった。古くは、戦いに敗れて滅んだ有力な氏族や祖先を神話の中で重要な役割として集約し祀ってきた。その典型が出雲の地に多くの滅亡した氏族が祀られたことにある。それゆえ、皇室よりも古く遡れる家系が今日なおも神社の宮司として、この地方にその幾つかを見ることができる。

二

系統から抹殺された悲運な王位継承の有資格者を神々として、丁寧に祀ってきた歴史は神道の形成と無関係ではない。松原は、これまでの調査のなかで知ったことを思い出し、そう考えるようになっていた。

この例のひとつが、崇神大王の系統から仲哀大王を経て応神大王への王位の移行と扶餘の血の連続性保持に必要な系図への操作である。具体的には、王位の移動の必然性を匂わせ、その経緯と血統の関連のなかで正当性を記述したことである。引き続いて、応神五世の子孫とした継体による王統の一本化を併せて事実とみなしたことにもある。すなわち、沸流系といわれる応神大王の存在と王位継承を主張した温祚系の継体大王の存在によって、後世の歴史家が系図上で巧妙に扶餘の一系の血統で新旧王室を結ぼうとした。そのために、王統のなかで辻褄あわせのために事実から離れたことを巧妙に当てはめたり、大王を特別に丁寧にまたは逆に扱う手法が不可欠になった様子が見受けられる。

かつての崇神王統への慰霊の意図からか、景行大王や倭タケルの偉業を配したこと、また応神とその子とされる仁徳大王の治世の正当性を強調するためにその名の示す伝説的善行や讃辞を併せて大きく記述したことである。言い換えれば、こうした慰霊と讃辞は神道の形成に決して無関係であり得ず、それどころか大きく関連している。そして、これが後世の歴史家の編纂、著述の都合による常套手段として引き継がれ何度か用いられた。

《とくに奪い取った王統には、後世に異常なまでに讃辞を与えた。その手法は、聖徳太子とその子孫に関する過大な称賛の記述に明確に見ることができる》

梅原猛らのそうした説にも影響を受けた松原は、改めて瞑想、沈思した。

とにかく応神大王の五世孫と自ら名乗ったとする継体大王が曲がりなりにも即位できた。しかし、そのことは当時にあっては、まだ特定の集団から王を出す構造になっていなかったことと、いわゆる空位を出さないように、より近い血筋の扶餘系とみなす説明の可能な王位継承があったことを示している。

倭の五王の治世に関する歴史編纂はそういう背景で行われた。高貴な血の一系保持のための操作的記述のなかで、大陸の王朝からの冊封は必ずしも望ましいことではないので、この時代の血統の記述を『宋書』との対応からあからさまにはできない事情があった。すなわち、『宋書』での倭の五王と呼ばれる事実を採用すれば、それが事実であるがゆえに、王家の一系の継嗣を主張できないことになってしまう場合がある。したがって、必ずしも遡って血統を明らかにできないことが、『宋書』の言う、倭の五王について、正史である『日本書紀』に記述されなかった大きな理由であったかもしれない。松原はそのように考えるようになっていた。

倭王の記録

「ところで、松原さん。いったい、倭の五王をどう考えていますか」

そういわれて、朴の含みをもって取り上げた話題に移ることになった。

「そう、朴さん、だからこそ、中国史書だけに名前を残す倭王たちは、本邦の真の王統を知るためにも、大和国の誰に相当するか比定する必要とその価値

がありますね」
「……」
「しかし、倭国と大陸との関係は、理由は明らかではないが、それ以後も隋の時代まで、関連記録が出てこないのです。それが不可解ののです。」
「そうですか」
「ですから、これについて多くを語ることは残念ながら難しいのです」
「……」
「もしかしたら、隋の時代にあった、やや不自然な大和国からの大陸への対等性の主張の布石であるからかも……」
「だからこそ、わたしも、本当のことを知りたいところです」
朴がかねてから抱いていた興味をにわかに露わにした。
ところで、倭の五王についての記述は主として『宋書』と『梁書』に見ることができるが、『晋書』や『南斉書』といった文献にも見られる。それゆえ、松原は前述の考えがあっても、あまり深入りはせずに、これまでは静かに遠くから観てきた。ところが、『宋書』の著者の沈約は、史実に沿って、また明確でないものは空白として記載したということが世に知られている。だとすれば、『宋書』はは王の血縁の判断に重要な要素となるであろうと松原は深く考えるようになった。
「倭の五王にはいろいろな説があるけど、私は宋の史書を信じてみたいのです」
松原はやや自信のなさそうに、しかし思い切って、朴に続けて説明を始めた。
「しかし、結論から言って、讃は履中、珍は反正、済は允恭、興は安康、武は雄略の対応関係を考えます」
「……」
「もちろん諸説あることを承知していますが」といいながら、以下のように持論を語った。
歴史編纂時は国際的高揚の時期にあった。このとき『宋書』の資料は国内にも存在したはずである。ところが、倭国と呼ぶ大和国に関する記録が『日本書紀』にはない。おそらく『宋書』を無視したのであろう。それに後々の国内史書を持統天皇時代に抹殺したという話がある。ところで、当時から見て二百年を超える昔のことであっても、また、仮に冊封を求める不本意の立場を差し引いても、大陸の認可を受けるこは、倭国にとってそれ以上の便益もあったはずである。しかし、それを犠牲にしてまで、古来の扶餘の血を重視せざるを得なかったのであろう。つまり、倭の五王の明確な記述は麗しき血の連続性を乱すものでしかなかったので、扶餘の血の純粋性維持のために、種々の証拠との兼ね合いから対応関係を明確に記すことができなかったのであろう。
それを主張したい松原の真剣な眼差しを見ながら、
「ならば、是非とも倭王を比定する推論をきかせてください」
朴義明が先を促した。
「『宋書』によれば、どの倭王も宋への朝貢をしていますね。その様子を『日本書紀』をもとに、まず本邦の王家の系図に引き移して考えます」
「……」
「すると血統の連続性を絶対的なものと考えれば、王があてはめられない場合がでてきます」
「でも、それではここでの議論が進みませんね」
「それは、血の直系の継嗣を考えるから無理なのです」
「……」
「その前に、私が言いたいのは、応神、仁徳の王統は伝説ではあっても彼らの巨大な陵墓を含めて、その権力を内外に誇示したいことなのです」
「……」
「そんな訳ですから、大陸からの冊封は必要ではないことを少なくとも国内的には主張しなければならなかったことなのです」
「だから、当時の王を当てはめたくともできなかった。それで『宋書』を無視したのですね」

「でも、今は、資料が誰の目にも触れますね」
「したがって、我々にとっては《讃》をだれにするか、たとえば仁徳にするか、履中にするかの推論の問題になります。このあたりが当時の歴史家と我々は根本的に異なるのです」
「……」
「さぁ、始めましょう。朴さん」
「……」
「まずは、《讃》は仁徳が良さそうですが、諸々の理由から難しさが生じます。結論から言うと、宋に四二一年と四二五年の二回にわたって朝貢した倭王は《讃・履中》だとするのです」
「……　ところで、『梁書』では《讃》と《珍》は《賛》と《弥》という倭王の名前で記述されているが、それぞれが対応し、このこと自体は問題ではありませんね」
朴が確かめようとした。
「そのとおりです。そうすると、四三八年には、宋に朝貢して冊封された《珍・反正》が、安東将軍・倭国王の爵号を受け、《珍は讃の弟》となります」
「ところで、つぎに登場する倭王については《讃》・《珍》との血縁については『宋書』は何も記述してないですね」
「しかし、朴さん、血縁についての記述がないことが、実は『宋書』と『日本書記』との関係では重要なのです」
「……」
「したがって、《珍・反正》の次が《済・允恭》であって、この場合血縁の直結がなくとも、扶餘の血を受けていれば可とします」
「なるほど、真の姿ではないが虚偽にはならない表現ですね。大和国の歴史家の常套手段ですね。」
「そのとおりです。しかも四四三年と四五一年の二度にわたって、朝貢しています」
「これには論理的に矛盾がないどころか《済》の継嗣の《興・安康》が四六二年に朝貢の後、その弟の《武》が後を嗣ぎ、四七八年に宋の順帝に上表して、父祖以来の功績を述べているという具合になり好都合です」
「……」
「しかも、在位が四五六年から四七九年の雄略王の名が『古事記』によれば《大泊瀬幼武》で、年代も矛盾しません」
「なるほど、その《武（たける）》をとって《倭王・武》としたとみて、四七八年宋に朝貢した《武》は雄略大王であることを主張できますね」
「そこで《…東は毛人を征すること五十五国、西は衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平げること九十五国…》という有名なくだりが語られます」
「……なるほどそうですか」
「というわけです…」
当時、南朝の宋は山東半島まで領土を拡大しており、百済を経由して日本列島の情報の収集ができたことが十分に推測できる。その正しい歴史の記録に矛盾しない雄略大王を最後にもってくれば、辻褄がよく合うことになる。
しかし、この期の倭の王家に対応させるとすれば、日本から見た曖昧で賛美の記述が多すぎるようだ。ふと、後に歴史から遠ざけられたこの時代に北九州にあった別の有力王朝の幻影が松原の脳裏をかすめた。同時に、隋の時代に倭国の対等性を主張したという聖徳太子の言を借りて、歴史家の意図したことが何となくわかったような気がしてきた。

隠された意図

一

隋の時代には、倭国も他の国と同様に使節を遣わした。そして、隋・唐の対外遠征や高句麗・百済・新羅の国際関係の中で、本邦は内政改革を行なわざるを得ない逼迫した状況になっていた。
これが、後の六四五年の俗に大化改新といわれる《乙巳の変》であったのか、それとも単なる権力争いであったのかわからないが、いずれにせよ、この時点

にあっても未だ本邦は国家としての明確な体制にはなかった。《日本》という国号を使い、自らを明確に主張するのは天武天皇治世の頃で、七世紀後半からである。それまでは不本意ながらも国外からは倭国と呼ばれ、前記のように国内では自ら良しとした《和》に敬称をつけた《大和》と呼んでいた。それが、誇り高い意識に働く人々の声であった。そして、また朴と一緒の旅の中にある松原の思いでもあった。

この時代には、すでに斯盧や伽耶から日本の後の精神構造に重要な影響をもたらした多くの先駆けの渡来人がいたはずである。本邦の歴史から渡来人物を含めて、重要人物がやんわりと除かれたというのも、ひとつには北畠親房によれば、持統天皇の治世下で、豪族に伝わる家伝に類する書の収集と焼却が命じられたとあるからである。また、これとは別に、蘇我氏と共に消失したといわれる大王家周辺の資料がもし存在していれば、大王家の真の系図のなかに架空の系図を混在させたことに起因する、それゆえ、後世から見ていろいろな不可解な論理的矛盾が起り得たことは容易に推測されるからである。

その関連からみて、倭の五王に絡めて松原が次のように考えて、朴に補足的に語った。

それは、和名が雄朝津間稚子宿禰である允恭王の叙述のことである。宿禰は、天武期になって、王家中心の支配体制確立のため、定められた氏姓制度の身分である八色の姓により歴史編纂時に与えた名称である。したがって歴史編纂時の諡号には何か隠されたメッセージが感じられる。

つまり、名前としても用いられた宿禰が同時に、臣下の姓ともみなせるような和名の一部をもつ允恭大王は、仁徳大王の王子でなく、何かが裏に隠されていることが推測できる。しかし、血の一系を貫く『日本書紀』では、この記述は許されなかった。それゆえ、允恭を反正の弟とする方法で血を繋ぐ方法を採用したのであろう。それは天智と天武との兄弟関係の記述に類似している。松原は天武について思いを巡らしたとき、そう考えたことを思い起こしながら話を続けた。

「なるほど、天武については、血筋に納得できないことがあまた在りますね」

朴が相槌をうった。

これに関連して、朴の言葉とは無関係に、《応神大王に関する歌や説話に、仁徳大王に関する記述の内容が重複する》のは、血統の連続性を維持するために論理的に無理のない想定による説話であろうと推論したが、それも中川の応神大王に関する疑問に対する小さな答えになるかと松原が考えていると、はからずもそのことを朴から急に訊ねられた。

二

「松原さん、応神大王の生母を神功皇后として架空と思われる人物をもち込みましたね」

そう言われて、松原はすぐに傍にいる朴に顔を向けた。

「朴さん、それは沸流系扶餘の血統の連続性の維持のために、何かをしたということですか」

「そう、景行大王の孫で仁徳大王の養父といわれる品陀真若王がいましたね。彼の名前からいって、誉田別ともいわれる応神大王とこの養父を重ねるか、人物をすり替えたのでしょうね」

「……」

「とすれば、血統維持の体裁を整えるために、仁徳の実在の養父を祖として応神とした。そう考えてもいいですかね？」

「そう、だから、仁徳の行動の一部は応神の行動に重ねて記載したのだということにもなりますね」

「松原さん、顔色がいいですね」

「朴さん、親友の中川の疑問にも一部だが、少し答えられるのですよ。ほら、君に先日紹介したあの中川のことだよ」

「ハァー、優しくしかし鋭い中川さん。ところで、松原さん、『日本書紀』には記述がないのを『古事記』でわざわざ補うようにした部分もありますね」

「よくご存知ですね」

「……」

「いや、朴さん、通説に反していますが、それは『日本書紀』より『古事記』のほうが諸々の観点からいって成立年がより新しいからではないでしょうか。

だったら、『古事記』に大王陵の記載があるのは、歴史家が六世紀後半にその時点で存在していた巨大古墳に大王陵を比定していたことにあるからですかね」

「……」

「そういえば、『記紀』の成立年代について、そんなことを聞いたことがありますね」

「たしかに、『日本書紀』に《陵墓》の記載はない。言い換えれば、『古事記』の記載は、応神大王の存在が不可欠と考えた後になるからでしょうが」

「そういう意味からいったら、現存の応神陵といわれるものは、仁徳の養父の陵墓として有力でしょう」

「でも、朴さん、だからと言って応神大王が実在しなかったわけではないと思っていますよ」

ここまで来て、前に中川に語った応神大王の出自が斯盧・新羅や伽倻に関連した沸流系に矛盾しないとしたと言えたようだ。これより、このことへの確信のなさから感じる心の苛立ちから、やや離れることができて、松原はようやく安堵の胸をなでおろすことができた。

国際環境

一

長い分裂の混乱を終わらせて中国の統一を実質的に行ったのが、その源を拓跋氏の北魏に遡ることのできる隋である。この大陸国家とその後の唐が高句麗や倭国に及ぼした影響を述べておく必要があろう。

北魏は鮮卑系北方民族などと同化した漢族が渾然一体となっていた国であった。しかし、孝文帝の漢化政策に反対の辺境地帯の駐留軍人たちが反乱を起こしたことによって北魏は東西分裂に向かった。しかし分裂後の西魏と北周の質実剛健の風を保ち続けた。この中で、北周は地理的にも優雅な南朝の貴族文化に疎遠であったので、その影響が少なく伝統を維持することができた。

その後、北周皇帝の外戚であり、その皇帝と北魏時代の盟友でもあった楊堅が帝位の禅譲を受けて五八一年に隋を建国した。したがって、隋王朝の基本的施策に変化はなかった。その後、楊堅は周辺諸国を滅ぼして統一を成し遂げ、文帝となったが、漢民族と伝えられる彼の生活はかなり北方民族化していた。実際、彼の妃は鮮卑族の独孤氏が出自であった。それゆえ、北方民族の活力と接した文化を巧みに吸収、消化して、この統一王朝の随は独自の形に成長することができた。

中国文化は、常に《自らがそう呼ぶ漢民族》が《自らの文化を中心》に据えて、変化に富んだ周辺の異民族の《異質の文化》を取り入れながら発展してきた。もっとも、漢民族といっても、中華の座に位置することを自認した民族が、周辺民族を取り込んでその範囲を広げたいわゆる多民族の混血からなる。これは、今でも、中国の民族の定義のなかに見られる考え方でもある。漢の崩壊から隋の統一まで、国内が分裂と対立の時代にあっても、その意味で、漢民族は最初は周囲を蛮族と見ていたが、実は五胡の文化を取り入れ大きくなった漠然とした大集団である。因みに、胡は外国を意味する単語である。

北魏、西魏、北周という歴史の流れの中で、いわゆる漢人と北方民族が融合していった。その流れが隋、唐という国の基本を構成した結果、民族性を問わない世界帝国として完成の域に達する。

隋の都は大興城、後の長安であった。土地制度は北魏より引き続いて均田制を採用した。この制度によって農民は国家から土地を支給された。彼らは土地の支給の代わりに、国家に納める租庸調税を強制された。租は穀物による納税で、庸は年に一定の期間、労働で奉仕する税である。そして、地方の特産物などで納める税が調であった。さらに農民には兵役を伴う府兵制が設けられた。これが、班田収授、衛士・防人の制度として日本の奈良時代に取り入れられたことは周知のことである。

というわけで、前記のように、均田制、租庸調制、府兵制はそれらの同時実施によって国家の力を充実できる制度であった。これによって、王朝は直接的に農民を把握し、経済力のみならず軍事力を確実に維持することができた。こうして、北魏時代からの国家の体制が徐々に整備されて隋の時代に結実した。

官僚の登用には選抜試験制度が設けられ、宋の時代に科挙に発展した。隋の時代は官僚の試験による採用はまだ少なかったが、出身の家柄に依らず有能な人物の選出の方法が導入されたことは画期的なことであった。今日の日本では試験を通して国家公務員を採用している。十分とは言えないが、同じことをは

るか昔の六世紀にすでに行ったわけである。因みにこれをもとに十九世紀にヨーロッパでバカロレア（ドイツではアビトゥアと呼ぶ）の制度が生まれ、現在、大学入学の資格試験になっている。

隋のあとを継いだのが唐であり、さらに広い範囲を包み込んで大唐文化圏を創りあげた。このころ多くの詩人が長安の街中を闊歩した。

日本から送られた遣唐使節の阿倍仲麻呂は唐にとどまった。彼には当時の大詩人である李白・王維・儲光羲らとの親密な交際が知られている。科挙に合格して諸官を歴任し、玄宗皇帝にも気に入られて、最高の官位まで出世した有能な官僚であった仲麻呂は、望郷の念にとらわれて美しい月を見て詠んでいる。

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも

二

隋の時代からは貴族出身の官僚は地方官への任命を避けるように促されていった。彼らが地方に地盤をもち、勢力の拡大を図るのを懸念し、中央にこれを削ぐような高度な意図があった結果である。こうして貴族は次第に皇帝の権力の統制下に組織化されるようになった。長い分裂時代を経て、南朝による農業生産力の拡大の施策で大きく発展していったのが長江南方や江南地方であった。隋王朝は、穀倉地帯から北部における食糧や兵站を大量に賄うための輸送路として運河の増設に力を尽くした。とくに、現在の杭州から北京近くまでの重要都市間を結ぶ千五百キロメートルにおよぶ大運河の建設は、以後の社会の根幹に関わる大動脈として、唐以後の大陸の繁栄を支えることになった。

文帝の後継が煬帝である。日本との関わり合いで馴染みの深い皇帝である。日本では帝という字をわざわざ縁起の良くない意味で《だい》と呼ぶ。暴虐で贅沢な皇帝であるという評価と非難が一般的で、隋に代わって建国した唐にとって自らの王朝の正当化に好都合とみなして、そう言ったのかもしれないが、もっと他に理由があったのかもしれない。

「南朝では贅沢三昧の皇帝はいくらでもいたし、煬帝が決して暴君とはいえないのにね」

と、朴が言う。なるほど、暴君としての評価は一面的で、実際には煬帝は敬虔な仏教徒として、海外からも人道的皇帝として評価されている。

これを念頭において、松原が補った。

「ただ、煬帝が労働や軍事に過剰な徴発したことは人民の恨みを買ったでしょうね」

当時にあっては、通常は農民男子のみを土木工事に徴用したが、女性も大運河の工事の労働力として、徴用したからである。

「それに、三回もの高句麗遠征の試みでは、高句麗の実力や作戦の見通しが甘く、ことごとく失敗に終わったわけですからね」

松原の顔を見ながら朴は当たり前のこととして頷いた。続けて、

「それに、対外遠征で財政困難、重税の上に多くの人々が命を落としたからね」

と言うと、

「大運河の工事の労働とあわせて、とにかく人民はたまったものではなかったね」

松原は、ややぞんざいな言葉でそれに応じた。

この当時、高句麗は、中国東北部から朝鮮半島北部まで版図を保持していた軍事大国であった。煬帝は国内遠征や対外戦争のための兵站としての拠点を現在の北京付近に置いた。そのために、前述のように南方の穀倉地帯から物資を輸送する運河の造営に民衆の負担の増加を強いた。その結果、各地で農民の反乱や有力者の謀反が起きて、六一八年には遂に隋は滅び、唐の時代を迎えることになった。

諸国の主張

一

大陸では中国の南北朝時代に、トルコ系の遊牧民族の突厥が北方辺境で大きな勢力を誇っていた。この突厥は隋の建国からほどなく、五八三年に国内の権力争いから東西に分裂し、東突厥は隋に従うようになった。しかし、依然として強大な勢力の西突厥は隋にとっては脅威であった。

高句麗は自国の防衛を固めて、隋に臣従しないどころか、突厥に密使を送り、意を通じていた。それが隋の知るところとなり、怒った煬帝は高句麗遠征を決

心した。その第一回目が六一二年であった。一一〇万を超える隋軍が出動し攻め込んだが無理な作戦が祟ったこと、高句麗が国家の存亡をかけて果敢に戦ったことから、隋は敗北し軍は撤退せざるを得なかった。

これに関する《薩水の戦》の絵を松原は目にしたことがある。兵士たちの装束は古墳の絵からとったのであろう。領内深く侵入した隋軍を高句麗軍が破った様子を描いたもので、韓国の歴史教科書に載っていた。

現在の朝鮮半島の人たちが高句麗人の直系の子孫かどうかを別にして、三度にわたって隋の侵略を撃退したことは、《民族の栄光の戦》であると韓国人が強調している。

「そのとおりです。松原さん」

「わたしもそう思っています」

「そう、その意味ではわが朝鮮半島から見たら、歴史は絶えず外敵との戦いだったわけです」

「それでは、日本も外敵に入りましたね。朴さん」

「そうですね。しかしそれにもまして、歴史的には、中国との敵対関係に留まらず、直接的な侵略が朝鮮半島の人々の絶えざる関心事でした」

「……」

黙って松原が頷いた。

「そのすべてをはねのけてきたのです。それが我々の誇りなのです」

「……」

第二回目の遠征は六一三年に行われた。隋の政権内部の乱れから、この時には、後方支援で物資輸送の将兵が反乱を起こした。そのため、やむを得ず撤兵した。

六一四年の第三回遠征時には、大規模な民衆の反乱があって、戦争どころではない状況になったので、煬帝は高句麗側と和睦して撤兵した。しかし、各地で相次ぐ反乱は、ますます拡大して大混乱を招き、その中で煬帝はこともあろうに親衛隊長に殺され、六一八年になって結局のところ、隋は滅亡した。

二

扶餘の王家の血を最も意識していたのは、自らもその血を引く厩戸王子その人であった。仏法を基礎に国家の建設を夢見ていた王子は推古女王の摂政として、高句麗の人々を招請した。倭国からみれば先進地帯の朝鮮半島の国々から、とくに高句麗から積極的に知識の広い仏僧を受け入れていた。

そのなかにあって、厩戸王子が師と仰いだ僧慧慈は、同時に高句麗の国家を動かすほどの実力をもつ官僚でもあった。来朝すると直ぐに、彼は王子の住む斑鳩にやってきた。

「されば、我が師よ。百済の上に位置する高句麗こそ我が手本である」

「大韓神こそ、大和国の発展には不可欠です」

慧慈がそれを聞いて、ややその場にそぐわない発言をした。

「でも、新興の隋は周辺諸国を自らのものとする野望を抱いていますよ」

「……」

無言の王子に代わって慧慈が言った。

「ですから、我ら扶餘の血をひく者こそ、団結して」

すると、これに合わせて、王子の側近がいった。

「されば、如何に?」

「……」

そんな無言の摂政の王子の様子の動きを、松原が想像してみた。

推古女王の世にあって、摂政の厩戸王子は六〇〇年に朝貢の形式は採らず隋に使節を派遣した。その後、六〇七年には小野妹子が遣隋使として渡航したとある。煬帝に渡した国書の冒頭が以下のようであった

《日出ずるところの天子、書を日没するところの天子に致す。つつがなきや……》

この国書を読んで皇帝煬帝は非礼の倭国に対して激怒したという。

「二度と倭国の使節を通すな」

大和国王が大陸の大国皇帝と同格で扱われているこの文面は中華帝国を自認する隋にとって容認できるものではなかった。自らが世界の中心を自認する煬帝は無論、到底我慢ができなかった。周辺民族は蛮族であるという皇帝の認識からである。

「東夷の奴めが、そもそも西絨、北荻、南蛮と同類の蛮族ではないか」

「御意、仰せの通りです」

《蛮族は中華文明への憧憬と礼節をもって来朝して然るべきである》

官僚のだれもがそう思った。倭国の書簡の文面は、大国の隋にとって外交的儀礼から外れた無礼なものであった。

にもかかわらず、煬帝は六〇八年には使者の裴世清を倭国と呼ばれる北九州西国の王朝に派遣して友好関係を続けている。

『隋書』と『北史』には倭国への使節の記録があり、この時に使節は倭国王と、その妃、王子に会ったと記録している。この使節を応対したのは、倭国を代表する縁戚でもあった勢力が北九州に在った多利思比孤王であったとも考えられる。これについては当時、大和の倭国ならず北九州の倭国が本邦としての代表を務めていたことが主張されている。というのも、そのような勢力と家系の存在が推測されるからである。

この時期は、高句麗、新羅、百済、倭国など、東アジア諸国の緊張感が高まっていた。隋は高句麗遠征の準備を進めており、倭国との外交関係を隋が損なえば、高句麗が倭国と同盟を結ぶかもしれない危惧を抱いていたのである。そうなれば、難しい局面にある軍事上のバランスに影響を与えるかも知れない。

《これは避けなければ》と皇帝の側近もそんな意見であった。したがって、煬帝の個人的な怒りと大国の面子とは別に、高句麗の孤立をもくろみ、外交上は倭国と提携しようとしていた。すなわち、煬帝は、先の大和倭国の非礼に怒りながらも、この国を高句麗側にいたずらに追い込まないように、注意深く対応して、容易に挑発に乗らなかった。

なお、問題の国書を出したのは聖徳太子といわれているが、太子はこの文面が隋に対して礼を欠いたものであっても、国と国との対等性について理性をもって、本邦代表の名のもとに敢えて主張したのであろうか？

大和倭国との外交関係では誰もが知る有名な記録に残る話であるが、やや不可解のことでもあるし、当時血縁のある王国との連邦からなる国家のその時の支配権が、代表を名乗った王国にあったようである。これについては、拙著『夢路の倭の影』で詳述する。

ところで、前述の慧慈が例の国書を立案したという別説がある。その理由に、国書は《日の出ずるところ》と書いているが、西側の国の高句麗からみて倭国は《日の出ずるところ》であるからである。しかし、隋を《日没するところ》とするのは東側の国の観点から、記述に論理的不都合はない。そう考えると、倭国と隋の間にある視点をもつ人物が国書をしたためたのではないか。もしかしたら、高句麗の視点からの記述かも知れない。そんな推理が松原の脳裏をもかすめた。倭国と高句麗とが政治的な協力を行うことは、高句麗の使節でもある高僧の慧慈にとっては望ましい。言いかえれば、倭国と隋の間に不協和音が入るのが自国にとって都合がよい。当時の随と高句麗との関係からは《少なくとも、楔を打ち込めば》と、厩戸王子の信任が厚い慧慈はそう思って国書の草稿を書いたのではないか。松原は宿に帰って、出されたお膳の料理に無意識に箸をのばしながら一人ぼんやりと思考の深みに入っていった。

国書の僅か数行の文面から、当時の多国間の国際関係が推測されるとは少々思いこみが過ぎるのかも知れないとしたが……

床の中で寝がえりを打ちながら、松原は、昔から変わらぬ自分の疑念を、歴史に造詣の深い友人の中川といつの日か語り合ったことを思い出していた。翌日、朴との話題が継続した。松原が

「後世の歴史家が史実のなかに埋めた込んだ真の国王は？」

と言いかけながら、倭国の仏教の受け入れを考えて、

「高句麗と百済の血筋にあり、後世に悪名を被せられた蘇我が……もしかして」と続けた。

「……」

「そもそも厩戸王子は王ではないし、推古は女性であるし……」

と、朴は怪訝な顔をしてさらに不自然に言葉をつなぎながら、沈黙した。

「じゃ、一体誰に会ったというのですか。松原さんの言うように北九州の王国の多利思比孤王でしょうか」

朴は、やや混乱して松原に答えを求めようとするありさまであった。

とにかくこのことは不可解であるし、謎になっている。正式な隋の外交使節を倭国政府はあざむいて聖徳太子または蘇我馬子を王と紹介したのであろうか。また、この時に帰国した小野妹子は隋の国書を途中で紛失したということになっているが、意図的に王家の役割を操作したその痕跡なのか、どうも妙な記録である。このあたりの倭国での記録には謎が感じられるし、いつも疑いをもって悩んでいた。

しかし、松原は納得がいかないながらも、やっと自分なりの答えを出したような気がした。とにかく、隋が真実を隠す理由はなく、やはり、日本側の政治的な理由による人事の巧妙なすり替えが感じられるからである。このような記述が、古代の日本史には少なからず見受けられる。嘘ではないが、真実が見えないようにする作為的な操作である。

渡来文化

一

話をもとに戻そう。朝鮮半島の伽耶諸国や斯盧からの渡来に続いて、四〜五世紀に高句麗からやってきた渡来人の多くは、土師器に替わって須恵器という固くて美しい焼物や種々の道具、なかでも最新式の鉄器を倭国にもたらした。とくに韓鍛冶による韓鋤や鉄のU字型農機具は、開墾や農作業の能率をあげ、渡来人の秦氏や東漢氏が広い地域を支配する基礎になった。この頃には、乗馬技術の伝来とともに馬の飼育がはじまり、鉄製の甲冑等の武器が使われ、各地に古墳がつくられた。すなわち、この時代に力を増強していく後の大和国になる倭国の支配階級のほとんどは伽倻諸国系か斯盧・新羅系か、またはそれに続く高句麗系の渡来人であり、彼らは徐々に有力な豪族へ成長して行った。

ところで、四世紀ごろの新羅と百済の抗争のなかでは、いわば乱立していた小さな伽耶の国々が分烈や併合を繰り返していた。元来、伽耶地域に本拠を置いて、海を隔てた列島に進出していた倭国にとっては、朝鮮半島の情勢の変化とともに、自らの故地との往来が困難になっていた。この時期から五世紀にかけては、高句麗系よりも古く渡来してきた金官伽耶国の秦氏、安羅国の東漢氏らの子孫は、後発の渡来人である蘇我氏が行う新しい本邦の政治、経済・文化の基盤を大きく支えてきた。

それから百年ほどの間には、その本拠を徐々に列島に移し、定着していた大和国は、半島では力を失いながらも父祖から受け継いだ伽耶の権益を主張してきた。とくに隣接の新羅に対してはそれを護ってきた。そのためにも、そうした利害を共通にした小国家の連合体を目論んでいた。しかし、五六二年には、高霊伽耶国など十ヶ国が新羅に併合された。これが任那の日本府と後世になって代表的に呼ぶようになった周辺諸国の滅亡の様子である。これで、大和国はいわば父祖の故地であり、本国でもあった伽耶の地の権益を完全に失った。しかし、この時期に伽耶や高句麗から折に触れてやってきた渡来人の多くは、文字・暦学・医学・儒教・仏教・政治制度等の新しい知識や技術を携え、この国を徐々に変えていった。

その中にあって、朝鮮半島から渡来人たちがもちこんだ氏神の概念を古来の自然宗教に取り入れ、それに付随する施設や思想に関して、融合の道筋にあった神道が緩やかな影響をうけていた。

そしてさらに、時代を経て、仏教の影響が及ぶような環境が次第に見えてきた。その端緒となる高句麗からの仏教伝来や飛鳥寺とも呼ばれる法興寺の創建時には、高句麗僧による法要があった。

繰り返しになるが、東日本には渡来人に関する遺跡、特に、高句麗の墓の建造習慣による積石塚は長野県や山梨県、群馬県に多く見られるが、香川県、徳島県などにも見られる。そのなかでも長野県の大室古墳群は積石塚の大きな集積地である。

そうした遺跡がある東京の狛江の地名も高麗から来ているとされ、調布市深大寺周辺には高句麗にまつわる伝説が数多く残されている。そして、西多摩地域のあきる野市の瀬戸岡古墳群にも同様に積石塚系の古墳群が見られる。また、時代はやや不明であるが鳥取県には高句麗系石塔とされる岡益石堂がある。さらに、山陰から北陸にかけては四隅突出型墳丘墓があることも知られている。そして、六六〇年以降には、大和国が白村江すなわち白馬江から完全に敗退したことにより、百済から支配階級とその随行が亡命の形で、大和国に渡来してきた。

その折りに、今日では考えられないような異例なことであるが、亡命者に土地や貴族の地位を与えて、大和国は双手をあげて、彼らを迎え入れた。

「頼むぞよ。そなたらの力が新しい世を作るのです」

その中には、大和国の中心となる役職である今日の言葉で言う大臣や次官、そして軍隊の将軍に就く者も数多く見られた。ことに朝廷は温祚系百済の王族には、自らに近い扶餘の血の観点から、特別な待遇を与えて歓迎した。それから若干遅れて滅亡した高句麗についても同様に対応した。その表向きの理由は学術文化を伴った国力の充実のためであった。当時の大和朝廷の見識がこれを可能にしたが、実際は関係各国の支配者同士の血縁がこれを可能にしたことを見逃してはならない。

大和朝廷から命ぜられて渡来人が開墾したところは東日本に多いが、埼玉県には高麗郡があり、高麗神社、若光の墓のある聖天院が見られる。また、その高麗若光が上陸したとされる神奈川県には高麗山、高来神社がある。関東南部の古墳からも高句麗系の遺跡が多く出土する。

因みに渡来人の居住地のあらましに関しては、繰り返しになるが《六六六年に百済人二、〇〇〇余人を東国へ、六八五年に百済人二十三人を武蔵へ、六八七年に新羅人二十二人を武蔵へ移した。そして、七一六年には高麗人一、七九九人を高麗郡へ、七五八年には新羅人七十四人を新羅郡へ、七六〇年には新羅人一三一人を新羅郡へ移した》というような記録が見られる。

「我が父祖の血を受け継ぐ人々よ。皆の与力を感謝するぞよ」朝廷からの言葉であった。

七二二年に書かれた『続日本紀』の前書きによると、飛鳥地方の住民のうち、八～九割は百済からきた渡来人の一族で、その他の人は一～二割であったという。都に住む人の八～九割が百済人というのが、当時の倭国の姿だった。いくら何でも、この人口比はとても尋常とは言えなかった。

大和国には、こうして、《これから強くなるのだ。強くならねば》という意気込みに満ちた社会建設の準備が整ってきた。そして、国家としての発展が約束されたかのように、それまでの部族国家が律令国家に向って、着実に歩み始めた。

二

ところで高句麗古墳文化を特徴づける二つのキーワードがある。前記の《積石塚》と《壁画古墳》である。後者について、資料をもとに若干述べてみよう。

高句麗で壁画古墳が築かれるようになるのは四世紀の後半以降である。平壌地域の南浦地区の龍岡郡や江西郡の古墳群は世界遺産であるが、そのなかの壁画は多くの場合に、石灰塗布後の壁面に描いたものであった。いわゆるフレスコ技法によるものであるが、他には石壁に直接に描いたものもある。

石灰の塗布後に施した輪郭線の中に鉛白を塗り、描いた壁画を納めたのが雙楹塚である。その技法は、高松塚古墳壁画の方法と同様とのことであり、描かれた人物や服装などの様式は高句麗だけでなく百済の影響をも取り入れているという。なお、この時期に渡来人が騎馬戦闘図や様々な文物をもたらしたことが各地の古墳の出土品からも確認できる。

因みに、鳥取市国府町岡益にある前述の石塔は地元では製作の時期不明の謎の石堂と呼ばれているが、雙楹塚と同じ形態で作られているといわれ、興味深い。

いずれにせよ、高句麗で見られる古墳壁画の技法は高松塚の製作時よりも早い時期に日本に伝わっていたと考えられている。しかし、それに対する異論もあるようであるが、松原は素直にそう考えて、未だ見たことのない高句麗の壁画にあれこれと逞しく想像を巡らせた。

神々への介入

一

ここで古来から日本人の心底に脈々と息づいてきた自然宗教を祖とする神道について述べておこう。そのために、本邦の到る所で語られる神々と目にする神社の関連も念頭に置いて考えてみる。広く一般に認められているように、仏像が置かれるようになった寺院に対して、日本に古くからある神社の祭神の多くは、南方ポリネシア系の自然や祖先に起源をもつ神々であり、自然発生的信仰が源である。その実態は種々のご神体と独得の儀礼である《祓い》と《禊ぎ》を基本とする。それが後に渡来人一族の護り神を祀る儀式と施設が融合して出来上がったものが、我々が目にする神道と神社の姿と言えよう。

日本で神道の原型ともいえる自然宗教が前述の自然や祖先の崇拝を基本と

する風土に適合した原始宗教から形づくられたのは三世紀頃であろう。そして朝鮮半島から倭国へ渡来人たちが新たにもち込んだ天上神（天津神）や地上神（国津神）の融合的概念が崇拝的儀礼や作法を伴う自然宗教に結びついて思想的に育まれたのが次の段階でみられる《自然神道》と考えてよいであろう。森羅万象に神が宿ると考えながら、祭祀により祖霊を崇めることが最も重要なことであるが、これを眼に見える形で表現する高床式と特別な屋根や千木を備えた神社の起源は、一体どこにあるのか。それに、荒ぶる神や現世で漂う悪霊をも時間をかけて慰め、やがて自分たちにご利益をもたらすように導く祭祀を同時に行ってきた人々がどのように考え、どのように行動していたのか、松原には以前から興味があった。

二

祭祀のための明確な教義や戒律はないが、生活や人の感情に根差す行為によって、穢れや悪を祓い、自らを浄めるというわかり易さが神道の特徴である。それゆえ、良きも悪しきも《霊》のすべてが、繰り返す丁寧な祭祀により《隣人としての神》に徐々に変化していく。それがいわゆる他の宗教と大きく異なるところである。したがって教典もなく、論理化と体系化は『古事記』・『日本書紀』・『古語拾遺』というような古典、さらに『宣命』とか日常生活の道徳などを規範とし、後世の国学者がこれらを人々が長く共に育んだ神道における《聖典》とした。

神道の根本にある生き方は《浄らかなこと》、《明るいこと》、《正しいこと》、《実直であること》を徳目として人々が自らに対して示すものである。

他の宗教が神と信者との絶対的地位や権威の差を強調するのとは異なり、神々との差も現実の世界のなかで種々相対的に決まる融通性を保ちながらも、人智を超える崇拝の対象とみなしている。したがって、祀られる神と祀る人々、また特定の神の性格と異なる種々の神々との関係も含めて、広く概念的に捉えている。

すなわち、人々は神々との間に連帯と共生の意識を共有しているなかで、通常は譲り合って相手の領分を侵さない暗黙の了解をもって自らが行動する。そこでは、尊敬すべき神の行動を優先するし、自らの神への奉仕の対価として禍いからの加護を求め、自身への利益を願うことが根本にある。

このことは例えば、神在月に松江大橋川の塩盾島の手間天神社の境内で神々の儀式が開催されるときには、周囲の人々が注連縄を張ってその中に足を踏み入れるのを遠慮することにも現れている。そして、行事が終わるとそこが聖域ではあっても、人々が足を踏み入れ、自らの目的に使用できる日常的な生活の場所に変わることに明確に表れている。

このことは日本の神々に対して抱いていたドイツ人哲学者のカルシュ博士の言葉を通じて拙著『朝霧の瀬』でも述べてきた。

三

また、神話からも類推できるように、神々の間にも人間的な愛や争いの意識が入り込んでいるので、人々は親近感をもって神々に接することができる。つまり、神々は人々の営む現実の生活や世界を概ね肯定しながら、日常に絶えず密着した存在として人の到らぬところを補って、いつも頭上から、見守ってくれる存在であるという人々の意識が根底にある。

すなわち、神道とは生きるすべが《惟神の道》であることを日常的な行動で示す実践哲学であり、人為を加えない世界の御心のままに、ただあるがままに現実を認めることがその思想の基本にある。つまり、人の世には人智の及ばぬ神々の大局的計らいとそれにしたがった現象の流れと動きがあることである。

それゆえ、それに逆らわずに、畏怖の心をもちながらも、人の手を加えることなく、ただありのままに生きることこそがすべてに勝ると考えられている。繰り返しになるが、その根底にあるものは日常経験する森羅万象やその感覚からの祖霊への畏敬や、穢れとみなした死者や悪霊への恐怖の念とその鎮魂・和魂の行動である。このあたりが死して、なおも罪を追及する海外の思考と相容れない、精神の在りようを伴う自然との一体感の思考なのであろう。

それゆえ、神社に祀られた人は時と共に、すべてが邪悪や穢れから離れた神としての存在になる。

つまり、日本人の精神と行動には、いわゆる《人の道》よりもはるかに高度で善悪を超えた自然法則としての導きとして、《物・事の在り方の本質》をその中心に据えた《神の道》ともいうべき思考があった。そして、それが時代と共に、仏教の教義と混在しながら融け合ってきただけでなく、日常的行動規範や倫理として積み重ねられて大切に子孫に伝承されて来た。

それゆえ、日本古来の伝統的な農業神事、祭事、花鳥風月、季節感を取り入

れた生活にも《神の道》が現れているし、そこに常に美的感性を重ねて、併せて多くの詩歌も詠われてきた。

四

永きにわたって皇室やその周辺が行ってきた諸々の儀式や儀礼に関して、いわゆる有職故実についても同様で、その積み重ねが独特の文化を生み出してきた。したがって、後の密教的な仏教教義の神道の精神との無理のない一体化、すなわち神仏習合は、むしろ多くの人々が望むところでもあった。

そうはいっても、神道は、神話に登場する神々に通じるような部族や集落のような血縁や自然を基礎とする地縁などで結ばれた村落共同体を人々が強く維持することを念頭に、自然に根差す諸々の神々をその地で生活のよりどころとした共通の信仰としてきた。それに対し、仏教は本来個人の現世の安心立命を求める目的で小乗的に修行され、後には人々の魂の救済を説く大乗的に変化したものが本邦に入ったという点で相違するようである。しかし、どちらも哲学であり、根本には人々の共通の生き方を追究するための信仰への道であったので、両者が結びつき自然に人心に受け入れられてきた経緯がある。が、長い歴史の中で、この本質から外れた時期もあった。

今日、朝鮮半島には、聖なる場所とそうでない場所に区切りを入れる禁縄という注連縄に類するものが残っている。また、一族の先祖の墓地を礼拝するための入り口には鳥居の形に似た門が見られる。このことは、日本の古来の宗教と大陸の陰陽説、半島土着の宗教が融合して、さらに仏教と接して神道が形成されていった過程で、相互に十分な関わりがあったことを推測させてくれる。

神社の姿

一

代表的な日本の神社と言えば、稲荷神社があるが、全国に存在する約四万社の本宮は京都の伏見稲荷である。このあたり一帯は渡来人の秦氏が五世紀ごろから開発し、どうやら八世紀初頭には稲荷神を祀りはじめたようである。

稲荷神とは食を司る穀霊神であり、多くの家々に屋敷神として祀られている。日本中で最も広く信仰されているまさに生活に密着した神である。その中で、笠間稲荷神社の祭神は宇迦之御魂神で、正一位という最高の位をもつ神で皇室との関わりが深い。

因みに李氏朝鮮時代にはこの位を正一品とよんでいる。新羅の骨品制の血筋、家柄を示す《品》と同源であろう。しかしこれも元々は扶餘族の伝統的身分制であった。骨は王族、品は貴族で、君主たる王は聖骨であった。それは、遊牧民族的な血統主義を維持するために存在した厳重な身分制度であった。

また、八幡神社も全国に約四万社あり、その本宮は大分の宇佐八幡神宮で、応神大王と密接な関連をもつことが知られているが、それに纏わる話には、神々を通しての百済系と新羅系、さらに伽倻系の血統の連結の正当化が感じられる。松原はこれまで、ずっと考えてきたことをひとり静かに考え直してみた。

実際に八幡神は、渡来人の秦氏の氏神として祀られたともいう。というのも、福岡県の一部と大分県にかけての古代豊前は人口の八五％が秦氏一族だったといわれるからである。源氏の守護神が新羅神と八幡神であったことや後の神々の習合の思想はこのあたりに遡れるのかもしれない。

ところで、八幡神社と趣を異にする神社がある。それは前述のように、自然崇拝を基礎とするアニミズムに遡れるいわゆる民族的で原始的な自然宗教が朝鮮半島の影響を受けて、自然神道へ整えられて行くなかで導入された信仰のシンボルともいうべきものであった。言い換えれば、それは、本来、自然宗教とは直接的関係がなかったはずのいわば《祠》であったし、それが形を整えながら各地に広まったものであった。

二

ところで、原型を保ちながらも、今に伝わる新羅神社についていえば、歴史的には、新羅の前身とも考えられる斯盧からその思想を支える牛頭天王を渡来人が本邦にもち込んだことが挙げられる。その後、その自然神道への発展形式と実質的習合は十分に時間をかけて行なわれてきたが、それに関する諸々の背景がおよそ推測できる。

すなわち、新たな宗教観を形成するための祭神として、須佐之男や他の関連の神々を併せて天日槍と同一視したことがあげられる。このことは、すでに滅亡した豪族の投影でもある神々の魂を受け継ぎながら、祭神として渡来人の子孫が牛頭天王と天日槍をともに祀るための《祠》としての神社にその伝統的様相と性格を徐々に与えて形を整えてきたことと関連がある。

松原はかつて韓国で前述の禁縄による境界標示法と一緒に《祠》を見たこと

を思い出しながら、そう推測した。そして、さらに渡来人で有力な支配者であった天日槍や本邦土着の大国主の国譲りが語られるように、後世の歴史家が神代の登場人物の活動を国家の歴史として、『古事記』や『風土記』に投影しながら記述してきたことを改めて考えてみた。

これとは別に、滅亡の憂き目に会い、その恨みを残しながらも、封じ込められた古来の支配層の霊魂の集団が時の権力者や支配者に災いをなさぬよう、永きにわたって大切に祀られてきた経緯もそこかしこで見てきた。

その代表的なものが古代では熊野神社や出雲大社であり、そこに集約された恨みの霊魂が和魂に変わることを後の支配者が心より祈念するとともに、そのことと支配者自らの行動を正当化する狙いについても、松原には心底に深く刻み込まれた思いであった。

三

そうした中で、新羅系渡来人は、小規模ではあっても数々の国譲りを強制された後に、余儀なく本拠地を移動し続けた。その先々で、権力者とのある種の合意のもとに、天日槍を祀るための《祠》を造り、今日全国各地で眼にするような形の新羅神社の基礎としたのであろう。

それゆえ、後世の神社の祭祀対象から推測される諸々の因果の土壌には新羅の文化がいつも土台の根を張っていたし、高句麗とそれに続く百済がその実態を巧妙に覆ってきたことになる。もちろん、長い歴史を経た今はその形態と形式が変わってしまっているが、なおもそれらが松原の眼前に見え隠れしたのが高麗に纏わる伝承としてであった。そんな中にあって、継続的な強い心への働きかけと底知れぬ歴史への想いが着実に松原の深層に根づいていくことになった。

このように、新羅からの渡来氏族と神々が習合して生まれた《自然神道》と《氏族の祠》としての神社の形式が徐々に出来上がるが、やがて古代国家の介入もあって継続的に仏教との習合が緩やかに進んだ。

その頃の歴史と神仏不可分の形で成熟して行く姿を、実は高麗に関わる史実を尋ねる中で松原は幸運にも垣間見ることができたのであった。

因みに、江戸から明治時代にかけて、その神道が国学としての意図的な政府の誘導にあって、全く別の国家神道に変貌し、そして明治時代からは政治に利用されてきた経緯がある。それが戦後には、宗教不介入の原則から、戦前の国家の意図は公的には否定されている。

とはいっても今日にあって、神道の伝統は現在も依然として儀礼や習慣として民衆のなかに溶け込んでおり、日本人の日常の生活に影響を及ぼしている。

したがって、神道では《自然神道》の姿から離れて途中で大きな変遷を遂げているとはいえ、それが斯盧からの渡来人の影響にも遡れることと、その後の高句麗から伝来した仏教と習合し、発展し脈々と現在に伝わってきたことが重要なのである。

それゆえ、文化的遺産を含めた高句麗からの渡来人のその後の足跡こそが、物語からも辿れるような新羅系渡来人の造り上げた基本的な人間観・宗教観を探る手がかりとなったのである。

それが、すなわち時空の旅の中で松原が折に触れて脳裏に刻みこまれた高句麗に関する強い印象であり、いわば《高麗に絡む縁》の松原の認識がここに至って一層明確になったのである。

四

《自然神道》への経過のなかでの渡来人の関わりを示すものが神代の話として、『古事記』や『風土記』に見られるだけでなく、日本の民話にも、種々見ることができる。

その一つに、兵庫県北部の豊岡一帯の伝説がある。その話は、《鉄》の道具を使って、新羅からの渡来王子である天日槍が豊岡の辺りの泥水を日本海に流し、稲作農業を勧め、人が住めるように環境を変えたというものである。それゆえ、このあたりでは神として天日槍を祀るようになったという。天日槍を祀った神社は日本各地に見られ、同じような話が伝わっている。この近くでは、福井県敦賀市にある気比神宮についての伝承がよく知られている。

また、天津神としての意味の天神のほかに、後の世になるが、これとは異なる全国の天満宮や天神を朝鮮半島からの渡来人の子孫である菅原道真を神として祀った極めて日本的発想の反映による後世に良く見られる独自の《神道信仰》もある。

とにかく、そうした違いに拘わらず、いわゆる神道と結びついたものには、言葉や習慣の面にも見られる。例えば、御神輿をかつぐ時の《ワッショイ》と

いう若者のかけ声がある。《おいでになった》という朝鮮語の《ワッソ》が変化したものであるという。その意味や祀礼そのものが、時々人前に姿を現わす神々と人々が共に暮らすということも、畏れ崇める神の道の成立に深く関わるものと考えられる。

生活習慣に関して、同様のことを言えば、地域の男女が会して天を祭り、日常的な神々との間に横たわる制約のすべてを取り払い、そこで起こる無礼を容認して昼夜を問わず、歌舞飲食する。これはもともと扶餘族の習俗であった歌垣のことである。現在も盆踊りとして神道や仏教との結びつきのなかで人々の生活に受け継がれている。

シベリアからウラルに至る北方地帯でも同様にそれが見られたという、神々の降臨が伝わる神聖な山岳に特別な立て木を用いて人々は獣や鳥類を捧げたという。祭や神社のトーテムとしての神札の絵がこれにあたるのであろうか。《神道は祭天の古俗》という言葉によって、明治中期の久米邦武は神道の本質をついていた。すなわち古代神話にも伺い知ることができるように、《自然神道》は遠くポリネシア海洋文化やそれ以前のシベリア系移民文化を底流にもつ構造になっていて、歌や踊りと密接不可分の関係が出来上がってきたことが重要な視点となっていることを彼が端的に語っているからである。

折に触れてそんな風に考えてきた松原には、前述のカルシュ博士が日本の神社仏閣に関して残した約九十年前の写真とともに『四ツ手網の記憶』にも叙述している青木繁の大きな発想から来る仮象の古代観が見えてきたような気がしてきた。

神仏と王家

一

六世紀のはじめに、百済の武寧王は知識人の代表である五経博士を大和国に送り、国づくりに協力していた。また、武寧王の子の聖王が、六世紀の中頃には仏像と経典を大和国に贈っていた。そうしたことを背景に渡来人の蘇我氏がこれを大韓神として自宅に祀ったという。

その後、しばらく仏教の受け入れに関する熾烈な争いが物部氏との間にあった。結局は、百済とも友好を保ち仏教を受け入れる態勢にあった蘇我氏側が争いに勝ち、《大韓神を我らにも》との思いから、本邦で最初の本格的な寺である法興寺または飛鳥寺と呼ばれる寺院を創設することになった。平安時代になって、建造物は大部分移築され元興寺となり、さらに現在は安居院とよばれるようになった。また、元の法興寺は本元興寺と名を変えて区別するようにした。

飛鳥寺建立のために、朝鮮半島から僧侶や寺院を建てる技術をもつ者を招来した。

当時、本邦には僧侶どころか寺の雛型もなく、先に渡来していた人たちの技術だけでは、とうてい新しい寺を建てることはできなかった。

《でも、彼らの技術があれば……》そんな思いで寺を建立した。

推古女王の治世の頃は、高句麗との関係は良好で密になっていた。

厩戸王子が推古女王の摂政の位に就いた五九三年には飛鳥寺の塔に仏舎利を安置する儀式が行われ、蘇我馬子ら、大和国の中心となる人々は全員が礼服を身にまとい荘厳な出で立ちで参列した。

《これで、半島諸国や金官伽耶国と同列になる》そんな参列者の晴れやかな姿が見られた。

二

飛鳥寺に続いて、斑鳩に法隆寺が建立された。そして難波には、念願の四天王寺が創建された。

《この寺院は、四天王への私の誓いなのだ》厩戸王子は新羅神を奉じる物部氏とのかつての争いの時にした誓いを思った。

蘇我氏の血脈にあり、高句麗と親密な厩戸王子が仏教布教に鋭意努力した。寺院の儀式は百済風の衣服で催されたという。

「しかし、百済風の衣服といい、本当であろうか」

松原はふと、この史実といわれていることにも疑いをもって、独り言を漏らした。

高句麗から派遣された高僧から王子は仏教を学んだ事実があるからである。

「高句麗の僧が王子の周囲に少なからず現れており、学んだのは主として高

句麗仏教ですね」
松原の言葉に対して
「そういえば、そうですね」と、朴がやんわり応じて、次ぎに続けた。
「でも飛鳥寺が完成すると百済僧の慧聡が来朝して、やがて、高句麗僧の慧慈と交替しましたね」
「そうですか、もしかしたら、それは百済の影響を強調するためとおっしゃるのですか」
「でも、仏像など百済の仏教に連なる王子の業績は実際、素晴らしいですね」
「いや朴さん、実際は誰かモデルになる人の功績を王子や周辺に被せたのですよ」
「……」
「このことは、実はかねてから思っていたことですがね」
やや話が、脇道に逸れてしまった。しかし、そういう松原の言葉に朴義明が頷いて、次に続けた。
「確かに、王子の業績や行動には過剰な讃辞が眼につきますね」
「そうなのです。何せ、後世に聖徳太子という諡号がなされていますからね」
「でも、なぜこうしたことが、これまでに、疑いをもって取り上げられなかったのでしょうか」
「それは、きっと後々の王室の血を美しく語るための布石からでしょう」
松原は第二章での中で巡らせた太子や彼の家族、それに蘇我氏への複雑な思いを回顧していた。

三

ところで、この時期に、厩戸王子の影響のもとに新羅系渡来人の秦河勝は京都の太秦に広隆寺を建立した。
《我らもまた、独自のものを》そんな先人らの、祈りと願いも松原には、聞こえてくるようだ。
朝鮮原産の木材を彫刻した広隆寺の弥勒菩薩は、日本の国宝に指定されている、同様の半跏思惟像が韓国にも存在する。多くの寺院は、遺跡からいって柱を礎石の上に立て、屋根は瓦でおおった大規模なもので、朝鮮半島の様式に従っている。それには、寺院をなす門、講堂、五重塔などの配置だけでなく、建築の内装や壁画にも渡来人の技術が不可欠であった。そして、こうした背景のもとに、国家の保護もあって後の文化に連なる核になる技術と環境が整えられていった。
すなわち、渡来人や子孫たちの影響下に広範囲に手掛けられた事業のなかで、その芸術性を高く誇ることのできる円熟の域にやがて達する飛鳥文化の基礎が形成されていった。しかし、そこで話題になる芸術性については、百済の影響が強調されることが多かったようである。
当時は大王の宮殿でも板屋根の建築であった。そんな時代にあって、仏教寺院などの高層で華麗な造りがどうして可能であったか、その理由を松原は子どもの頃から考えていたが、どこから受けた影響かをとくに考えたことはなかった。
先頃、法隆寺の夢殿の八角円堂の起源が高句麗にみられ、その起源が百済以前にあったという興味深いことを知ることができた。他にも、高句麗文化を偲んで聖天院の高麗王若光像の近くに、近年、檀君、王廟、慰霊塔とともに完璧を意味する八角亭が在日韓民族の手で建造されていたことが仏教寺院の建築を考える糸口を松原に提供してくれた。

内なる朝鮮

海に隔てられた倭国にとって、伽耶や斯盧、それに高句麗からの遠い昔の渡来人の果たした役割には、大きいものがあった。彼らの伝えた技術や文化が広範囲にわたっていたからである。具体的には、渡来人の足跡が、神話、伝説、地名、神社、寺院などの形で西日本だけではなく東日本にも残っているからである。そんなことを聞いた松原が、高句麗との関連からいって、まずは埼玉から神奈川を旅したことは前に述べた。
そして興味を引かれた彼は、さらに山梨、長野に足を伸ばし、朝鮮文化の跡

を訪ねることにした。

この地域には遠い昔から、多くの渡来人が住んでいた。甲府盆地の周囲の山には、多くの《積石塚古墳》がある。これは石を積みあげてつくった古代の高句麗に見られる古墳である。墓が《盛土墳》に変化していくのは五世紀初頭からであるが、本邦では渡来人がこれらの墓を五世紀後半から六世紀にかけて造ったといわれている。そこには彼らの遠い故郷への深い思いが息づいているように松原には思えた。

このような古墳とは別に、山梨県大月市に朝鮮半島ゆかりの奇橋の一つ《猿橋》がある。伝説によれば、七世紀頃に百済からの造園博士の芝耆麿が、猿の群れが蔦をつかって川をわたるのにヒントを得て橋をかけ、その名もこれに因んだと言われている。

時代は前後するが、法隆寺や四天王寺、そして東大寺といった建造物はもちろんのこと、渡来人の技術は、古代の日本各地で橋、ダム、港湾、運河、貯水池などの土木建設に大きな力を発揮した。これらのことから類推して、渡来人たちにとっては、半島の混乱の地を避けて、はるばる渡ってきたこの日本列島こそ、存分に活躍できる新天地だったのである。

《この地でこそ、我らの能力が認められる。この地に、我々の理想を!》

そうした天からの声を聞きながら、松原はこの地から、一気に西に足を向け、馴染みのある近江へ向かい高句麗のゆかりの遺跡を期待して、さらなる歩を進めた。

すると高句麗の遺跡と言うよりは、それよりさらに時間を遡る天日槍の伝承説話が見出される滋賀県伊香郡余呉町で鉛練日古神社に出会った。この周辺は歩くにはとても重厚な趣きに満ち、その雰囲気に深い味わいと風情を感じることができる。

時空を縦横に旅する松原は高麗に関する本来の期待とは異なるが、より時代を遡る様相を映す神社を見て、改めてこの地と新羅との因縁とその歴史に深い思いを巡らした。

街道沿いのこの神社は式内社として古くから名を残している。主祭神は大山咋之命である。『古事記』に日枝山に座す神として登場するが、その相殿神に、新羅王子の天之日槍之命が祀られていると聞いた。

とにかく、近江には記録されている式内社が大和・伊勢・出雲の地域に次いで多く見られる。そして、この地には天日槍を祀る神社が多く見られる。それは、前述のように、先進技術、とくに鉄の技術をもたらした渡来集団の伝説が、日槍伝説と一体化してこれらの地に多く残されたことを意味する。このことから、淀川から宇治川を経て琵琶湖岸を開拓しながら、渡来人は若狭を経て、但馬国出石に一旦定着して、さらに広がったことが容易に推測される。

同じ地域の余呉湖畔に衣掛柳の伝説がある。天女がそれに飛翔するための羽衣を掛け、水浴を楽しんでいるうちに、大切な羽衣を男に隠されて、途方にくれた天女がやむなく隠した男と一緒になり子までもうけた。しかし、羽衣を見つけるとすぐに天に戻ったという。誰もが知っている羽衣伝説である。この種の伝説は、日本だけではなく朝鮮半島にも見られ、その意味では渡来伝説と考えられる。

《高麗》の伝承からやや思いつきに近い動機から、久し振りに、再びこの近江の地を踏むことになった松原が、昔、自らの行動の起点となったこの地には限りない縁を感じた。というのも、あの第一章の起点が近江日野であったからである。ところで、生まれた子とかの男はその後、どうしたものであったろう。松原はふとそんなことを思った。

これからさらに足を延ばすと、この高島郡新旭町と安曇川町、それに今津町にかけて広がる台地にある熊野本遺跡にたどり着く。この地は古くは熊野山とよばれ、山麓には当時の北陸道が南北に通じ、東西方向は饗庭野台地を経て若狭方面へ延びる交通の要所をなしている。そこには、弥生墳丘墓と集落の跡や前方後方墳などの古墳群がある。なお、付近には、稲荷塚と呼ばれていた鴨稲荷山前方後円墳や湖北・湖西に残る朝鮮文化の遺跡が見られる。この様式には、丹後・出雲の影響も窺えて、この地に日本海と内陸部を結ぶ要所を確保した有力者の存在が示唆される。

ここでは、三十点以上の鉄器が出土しており、これらは、この地で大陸からの鉄挺を使っての鉄器の加工・製作が行われていた証拠と考えられている。

環濠で囲まれた集落の中で、仰ぎ見ると大きく見える古墳の概観が権力を象徴していると道すがら土地のひとが語ってくれた。丘陵から足下に見る沃野が連なる琵琶湖の雄大な眺めは、時空の旅人としての松原に様々な思いを与えてくれる。

《ここは、日本文化のゆりかごなのだ》

朝鮮半島南部については《鐵を出し、韓・倭など争ってこれをとる》と史書にもあり、それを巡っての争いは、神話にも反映されているし、実際に朝鮮半島内の勢力関係の変化と本邦の製鉄文化は技能集団の渡来を抜きにしては語れない。

ところで、一九〇二年における改修工事の際に、前述の全長六〇㍍を超える前方後円墳である鴨稲荷山古墳の傍で石棺が発見された。この古墳は、埴輪・葺石を備え、横穴式石室の中の家型石棺に金銅製品など多くの副葬品が埋葬されている。二上山の凝灰岩で造られている石棺は、六世紀前半の築造のものと推定されている。

二上山と聞いて、ふと、持統称制のころ、死に直面した大津皇子が詠んだ想いや哀切の情とそれとともに人の魂の宿るといわれた二上山を詠った大伯皇女の和歌を松原は思い出した。悲しい響きを伴う胸を打つその情景が脳裏に浮かぶ。

ここに被葬された首長の副葬品の金銅製広帯二山式冠、金銅製沓は朝鮮半島の伽耶や新羅の意匠の影響を受けているといわれる。高島町歴史民俗資料館の管理にある石棺はこの地方の辰沙の生産を支配した三尾族長のものであろう。以前、全教授と訪れたソウルの国立博物館の展示が副葬品のルーツを暗示するものであった。このように心がさまざまに動くなかで、伝承から示唆されるそれ以前の時代に繰り広げられた朝鮮半島と列島との諸々の関わり合いに、松原はより強く惹かれるようになっていた。

定着と同化

一

大陸系移住者を含めシベリアや南方ポリネシアからの人々の混血からなる、いわば日本先住民の間に、朝鮮半島からきた渡来人は、すでに相当数入り込んでいた。そして相互の争いの中にも融和と混血による同化が進んでいた。とくに東日本に較べて渡来者が多かった西日本では、先住民とよく同化し、彼らの社会に、より大きな活力を与えていた。

そのような意味で、最初に抱いた《高麗》についての伝承への興味は、百済よりは古いが、実は日本の古代歴史のなかで比較的新しいことであることに実感として向き合えるきっかけを与えてくれた。それも、第一章を手がける契機になったあの近江への旅なかでのことであった。

奈良時代ごろまでは社会の上層部は朝鮮半島の服を着用し、同様の食生活をし、同様の言葉を話したのであろう。とくに近江日野の近辺では、そうであったろう。『記紀』や『万葉集』についても部分的には当時の韓国式漢字表記が残っている。こうした状況は、関東においても遺跡の分布からも見ることができる。とくに、百済と高句麗の滅亡後には、大勢の百済人と高句麗人が渡来した。当時の日本にはない、雅で高度な文化と技術をもっていた渡来人は、文学や芸術での手本となり、土木工事や新田開発などでも大いに活躍したことが知られている。彼らは、文化的側面から、また技術的側面からいって、朝廷からは喜んで迎え入れられたことが容易に想像できる。

話は若干逸れるが、渡来人文化の痕跡を知る重要な遺跡の三昧塚古墳が茨城県行方郡玉造町にあった。ところが、一九五五年に霞ヶ浦の防波堤工事のために貴重な前方後円墳を残念ながら破壊してしまった。そのときに、馬が三頭ずつ中心で向き合った装飾の施されている金銅製の華麗な王冠が石棺から出土している。

『続日本紀』には、元正天皇の御代の七一六年には、《駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野の七ヶ国の高麗人一、七九九人を以て武蔵国に移し、はじめて高麗郡を置く》とある。JR高麗川駅からほどないところに前述の高麗神社があり、隣地には高麗山聖天院がある。

高麗神社に掲げられた縁起には、《高麗神社は、唐・新羅連合軍に敗れて滅亡した高句麗国の王族若光を祀る神社である。高麗郡の大領に任命された若光は武蔵野の開発に尽力し、この地で没した》とある。隣地の聖天院には若光の廟所があり、今なお参詣が絶えることはない。しかし、高麗神社は一二五九年に失火し、貴重な高麗氏系図を焼失した。そこで一族が集まって家系図の再編を行ったことが知られている。

ところで、その高麗郡で育った高麗王族で従三位に昇任した福信が知られている。後に、彼は姓として高麗朝臣を、さらに高倉朝臣を賜った。

因みに、前述の神奈川県相模の高座郡は高倉郡といった。当初、高倉はコウクラと音が高麗に通じる命名であったろう。大和朝廷が高麗氏の名跡を時と共

に巧妙に薄めて行くような施策のなかで、高句麗王家の血の余韻を小さくしていったような印象がある。

近くにある飯能は、《韓（ハン）の村（ナラ）》ということである。ここには後述する新井という姓が残っていたことが確かである。飯能の近くの場所を土地の人は《コクリ》と呼ぶという。それから、後に新羅郡が置かれた爾比久良郡がある。ところで、《新羅》が《新座》となり、その読みが変じて《新倉》の地名が生まれたという。この周辺は朝鮮半島諸国からの渡来人がたくさん居住していたし、志楽・志楽木・志羅木、志木などとも表記したこともある。また、《白子》も《しらぎ》が転じたものという。それらを聞いて松原もそのように合点した。

因みに、《駒井・高麗井・岡上・岡登・井上・新・新井・神田・本所・和田・吉川・大野・加藤・福泉・小谷野・阿部・金子・中山・武藤・芝木》が系図などから得られる高句麗系の名前である。

また、群馬県の上野には木暮の姓が多いということである。この理由に高句麗から《コクレ》に音が変化し木暮となったことが挙げられるという。松原が学生の頃、同名の人にこの話を聞いたことがあった。とにかく、五世紀半ばには、すでに広く高句麗系の人々が各地に住み着いていたらしい。

ところで、東京都と埼玉県で高麗神社の分社の数が一二〇を超えているが、それらは、奇妙にも多くの場合に白髭神社といわれる。《白》は新羅の前身と言われる古代の斯盧国につながる。

これは伽耶・新羅系渡来人の居住の上に高句麗人も住み着いたことを物語るものである。伽耶に近い斯盧からは、古くから渡来があっても不思議はない。そう考えれば、辻褄があう。

《後の国交との関連から、高句麗系と百済系の渡来の後に、新羅系の人々は、本邦に入ってきた》という、何とはなしの先入観があった。というのも上代の記述に明確に斯盧や新羅の名が出てこないからである。これは温祚百済系の大和王家から見たときに、新羅の影響は後世に本邦に入ってきたとする方が史書編纂に携わった権力者側にとって血統の構成上、好都合であるとの見方からいつの間にか、人々に植え付けられた先入観であったようだ。

二

白鬚神社といえば、かの藤原仲麻呂（恵美押勝）が祀られている高島市鵜川の琵琶湖西岸にある神社が有名で、全国に在る白鬚神社の総本社として近江では最古の神社とされる。当時は人の住まなかった沖島を背景として、琵琶湖畔に浮かぶ鳥居が現在も美しい景観をなしており、拙著の裏表紙にはこの写真を用いた。

ところで、白鬚神社の祭神は新羅明神（比良明神）である。繰り返しなるが、この名の神社は日本国中にあり、高麗王若光を祀った神社も白髭神社を名乗ることがあった。これに類似のことは、全国到る所でみられるが、このことは祭神が同じで、新羅と高句麗が重層をなしていることを物語っている。

松原が思い立って、白髭神社について書物で調べてみると、確認されただけでも想像以上の膨大な数になることがわかった。実際に、この名と同じ名の神社は全国各地に多々分布しているのである。

その中で、印象深いものは、埼玉県鶴ヶ島市に伝わる雨乞い行事の脚折雷電社に関連して、天孫降臨の道案内をしたといわれる猿田彦命が祭神で比良明神をも祀る白髭神社である。それに、北九州市門司区の白木崎という新羅からの人々が住み着いたといわれる場所に在る白木神社である。

金達寿らは著書のなかで白髭神社は、古代の新羅系渡来人の集団が彼らの祖先を日本的に祀った新羅明神によるものであり、現在この名の神社のあるところは新羅系渡来人の中心集落であったとしている。

ところで、神社は通常南向きあるいは東向きに位置しているが、山梨県北東部の旧塩山市の白髭神社は珍しく西を正面に鎮座している。その理由は想像の域を出ないが、祭神は猿田彦命と天宇受売命として倭国の風土に適応させながら、はるか遠い新羅の故郷を思って祀ったからであろう。また、山梨市笛吹川の西岸に須佐之男命を祭神とし、源義光と因縁深い、古くは《唐渡の宮》と呼ばれ、慶長年間に改称された唐土神社がある。この神社も同様に正面が西向きである。きっと、白髭神社は、新羅の発祥元と言われる斯盧に遡れる地域からの渡来人がその原型をもたらした祖神のための《祠》であったのであろう。

琵琶湖の北に位置する余呉湖畔の衣掛柳からほどなき場所に白木森がある。その中に神社旧跡の碑と名残りの石で組まれた階段の跡がある。元々は《新羅城神社》、後に白木神社と呼ばれて明治の世に至ったものである。

なお、福井県敦賀の気比神宮は祭神を天日槍とし、伊奢沙別命として祀っている。近江の佐々木源氏の祖神を祀っているのも新羅神社である。それに、ここには信露貴彦神社があり、白木浦が敦賀半島の先端部にある。近くの辰砂で有名な丹生から山を越えて、峠から眼を移すと集落が絶壁の下に見える。そんな情景の記述が『日本書紀』にも見られる。大宰帥の大伴旅人に丹部王女が贈った歌が『万葉集』巻三と巻四に収められている。そんな恋心が脳裏をかすめる地域でもある。

ここからそう遠くないところで、いにしえから京の都と北陸を結ぶ交通の要所であった福井県越前町の今庄にも新羅神社・白鬚神社がある。

出羽弘明は新羅神社について、古代の日本と新羅との深い関係を論じている。その中には、新羅明神、白髭明神、比良明神、都怒我阿羅斯等、天日槍、伊奢沙別命、素戔嗚尊、白日神、新羅神などの言葉が出てくるし、そこからは高句麗との関係よりもずっと古くて深い、斯盧との重要な関係がはっきりと見えてくる。実際、新羅に通じる白髭神社や白木神社は繰り返しになるが、全国では数千社を数えるほどであるともいう。

最上川上流の山形県東置賜郡高畠町には山裾の東西にわたって八幡神社・賀茂神社・新羅神社があるし、近江から招いたと伝わる白髭神社も近くに見られる。この祭神の白髭明神は近江を開墾した氏族の祭神が猿田彦に転じたものとされているが、新羅神社とともに、近江出身の人々がこの地に多く移住してきたといわれている。

三

さらに福島県の《相馬野馬追》の《神旗争奪戦》の神旗の中に《須佐之男命新羅大明神、三井寺鎮守》、すなわち須佐之男命は三井寺鎮守とあり、さらに家紋は武田源氏と同じ《割菱》であるということである。

また、前述の東置賜郡からさほど離れていない、宮城県柴田郡支倉には《新羅の郷》と呼ばれる地域がある。《前九年の役》の折、源義光の引率のもとで、新羅からの渡来人三十七人がこの地に住んだという。彼らは砂鉄を精錬して農具と武器を造る優れた技術をもって戦役に供したと伝えられている。

源義光は、大津市の園城寺三井寺の鎮守の一つである新羅神社で氏神の新羅明神の前で元服して、新羅三郎義光と名乗ったことが知られている。知謀に富み、弓馬の名手で、笙に長じた左兵衛尉の任にあった源義光は、一〇八七年八月の《後三年の役》においては、兄の義家のもとに、馳せ参じた有名な話がある。乱の平定後、義光は刑部丞、常陸守、甲斐守を経て、刑部少輔にまで到った。義光は常陸国を一族の勢力拠点として、後の常陸国久慈郡佐竹郷の佐竹家、信濃国の武田・安田・小笠原等の祖となった。実際、武田を甲斐源氏または新羅源氏とも呼んでいた。

他に、新羅大明神という神社が浜松市の江ノ島にある。これは小笠原源太夫がここへ移って、埋め立て工事により、この地を開いたことが知られている。

話をもとに戻すと、近江は古くから天日槍を神と仰ぐ新羅系渡来人集団の居住する中心地であったことは間違いない。ところで、近江高島町の鴨稲荷山古墳には美濃・越への交通の要地を支配する息長氏の影響があったことが窺える。そして、息長氏族に関連して、安曇川町には中山王塚と呼ばれる彦主人王の墓の伝承がある。彼は越の三国から振媛を迎え、その間の子で後の継体王になった男大迹をその地で育てたと伝えられている。天日槍の集団から出た氏族の投影としての神々の数は限りがないが、他にも先に述べた宇佐八幡や稲荷神社などを祀った大きな氏族の秦氏も天日槍集団から出たと考えられ、応神大王の隠された出自との関連もどうやら類推できる。また谷川健一も、物部一族は、まさに天日槍から出たと述べている。とすれば、日本の底流文化の発祥は遠く、斯盧であり、建国途上にあった新羅や伽耶の国々であったのであろう。そんな中で松原はさらに、シベリア系と南方系の混在した原日本の姿と生活がどのようなものであったかを想像しようとした。

高句麗仏教

厩戸王子が瞑想した法隆寺夢殿の《完璧を意味する》八角円堂も蒲生の石塔も、もともと高句麗の影響が先んじて、百済は後発である。そんなことを明治大学の歴史セミナーで朝鮮半島の歴史学者から松原は聞いたことがある。

仏教の伝来に先駆けて、古くは継体朝の五一七年、百済が高句麗使節安定に副えて使節将軍と倭国の斯那奴阿比多を同行させて、大和に来朝させ友好の絆を結んだという。そのことが『日本書紀』による高句麗使節に関する最初の記事である。文章はやや不明な点があるが倭国が高句麗使節を迎えるのに、百済王が百済人と倭人にわざわざ倭国に案内させたことを言っているのであろう。

また、『続日本紀』には、太刀を帯びて大王の警備の任に当った授刀舎人の

狛造千金が姓を改めて、同年の五一七年に大狛連となったとある。仏教は五三八年に、または五五二年に公式に百済から伝えられた。この頃には仏教を巡って、いろいろ百済との交流があった。

しかし、実際は、高句麗からの渡来人による仏教伝来が先駆けてあったに違いない。というのも、仏教が大陸から半島に最初に伝わったのが高句麗で、文化的に先進地帯であった高句麗からの使節の渡来が前述の公式の仏教伝来の時よりも時期的に早かったと思われるからである。

しかし、高句麗からの公式な仏教伝来と言えるのは、平原王の命を受けて僧の恵便が五六五年に来朝したことによるものであった。彼の任務は、崇仏派の蘇我馬子に接近して、高句麗との関係を強化するためだったとされている。当時、恵便は、廃仏派の物部守屋らの迫害から逃れるため、同行の尼僧・法明と共に、還俗して、播磨、現在の兵庫県加古川市に身を隠したという。この間、厩戸王子が教義の受講のために、播磨をわざわざ訪れた。その縁に連なる刀田山鶴林寺があるが、寺の縁起によれば五八九年に創建されたという。後に秦河勝がここに精進者のための精舎を建立し、刀田山四天王聖霊院とした。

これと前後して五八四年には、鹿深臣は、百済から弥勒菩薩の石像一体をもたらし、また、佐伯連も仏像一体を持ち帰った。蘇我馬子は、この二体の仏像を請い受け、これを崇めて祈ったと『日本書紀』にある。

恵便が育てた我が国最初の尼僧である善信尼は、その後、五八八年に百済へ渡り仏教を学び、五九〇年に帰国したとの記述がある。

これとは別に、慧慈は五九五年に高句麗より来朝し、厩戸王子の仏教の師となった。五九六年法興寺が完成すると百済僧の慧聡とともに居住し、六一五年高句麗へ帰国した。また、曇徴が六一〇年に高句麗王の命を受けて、法定とともに来朝した。厩戸王子から信任され、法隆寺に住んだという。このとき、墨や絵具の製造技術と蔡倫による蔡侯紙を日本に伝えた。併せて、紙すきの方法と紙の原料である麻クズの繊維を叩き解す石臼も伝えたとある。

ところで、姫路市白国の増位山随願寺は厩戸王子の命により開山した高句麗ゆかりの寺で、後に行基が中興した播磨六山の一つである。一五七三年に全山焼失の憂き目にあったが、江戸時代に姫路城主の榊原忠次が菩提寺とした。この寺には重要文化財としての薬師如来坐像・千手観音立像。毘沙門天立像がある。

神仏習合

そもそも、《高麗》について語られる伝承に松原が興味をもったのは関東に分布する高句麗ゆかりの地を知ったことからであった。そして、眼前に映った遺跡の高句麗古墳が彼の心を動かしたからであった。そこで、これを皮切りに歴史に造詣の深い朴義明を誘って高句麗に関係のある伝承の神社仏閣を一緒に巡ってみた。するとこの地だけではなく、およそ高麗か白髭というような名前で呼ばれる朝鮮半島ゆかりの箇所が全国各地に点在し、百済の名がつく遺跡の数よりもはるかに多いことが分かって、何とも妙な感慨にふけるようになった。

まず、関東では先に足を運んだ高麗神社の祭神が高麗王若光で、没後に高麗明神として霊廟に崇められた。当初は若光のみを祀っていたが、後に、猿田彦命・武内宿禰が合祀されている。この神社は若光の子孫が社家を代々務めてきた。その過程で神仏習合が起こり修験道すなわち密教の寺にもなった。しかし、実際のところ高麗神社と称したのは明治になってからである。ここは出世明神という別名があり、日本の著名な政治家が多数訪れている。ところで、高麗神社の近くに高麗山聖天院がある。高句麗僧の勝楽上人が若光を弔うために高句麗から携えてきた聖天歓喜仏を本尊とする寺を建立しようとした。しかし、七五一年に死去したので、この遺志を継いで、上人の弟子でもあった、若光の子の聖雲とその弟子弘仁が師の冥福を祈り、聖天院勝楽寺を建立し、この境内に若光の墓地を定めたことが知られている。

その後、本格的に高句麗の跡を追って、松原と朴の二人はさらに関西に足を延ばし、かつての相楽郡山城町、現在の木津川市の高麗寺を訪ねてみた。この頃から、何やら神仏習合の概念がそこほかに垣間見られる遺跡に大いに興味が湧いてきた。高麗寺の跡については戦前から何度も発掘調査が行われた。金堂・塔などの土壇・礎石や瓦は飛鳥寺と同一のもので、伽藍配置は法起寺方式であり、塔と金堂の位置が法隆寺とは逆である。この寺は六世紀後期に高句麗僧の恵便により開基された我が国最古の寺の一つで、七世紀中頃、狛氏により建造され、永く狛氏の氏寺であったと伝わっている。白鳳期に整備され、平安時代末頃まで存続したことが知られており、一九四〇年になって国の史跡に指定された。

ところで、話は若干、本筋から逸れるが、祇園祭で有名な京都市東山区祇園

町の八坂神社は、六五六年に創建され、以来祇園神社、祇園社、感神院祇園社と称し、明治時代まで続いた。この神社は高句麗からの調進副使の伊利之使主が新羅の牛頭山で崇められていた牛頭天王を山城国愛宕郡八坂郷に祀り、《八坂造》の姓を賜ったことに端を発するという。因みに『新撰姓氏録』では伊利之使主は八坂造氏だけでなく日置造氏らの祖であることが知られている。

そして、八七六年になると播磨国広峯から僧の円如が祇園精舎守護の習合神である牛頭天王の分霊を遷した後に、精舎を藤原基経が建立して観慶寺（別名祇園寺）とも称するようになったが、明治時代に神仏分離令により、感神院祇園社から八坂神社と改称した。旧官幣大社で祭神が須佐之男命・櫛稲田姫命・八柱御子神・牛頭天王などからなり、社格の高い別表神社である。

ところで、各地で疫病や災厄が起こった八六九年に、当時の人々の切なる願いと鎮魂の祈りから神泉苑で催された御霊会が契機となり、祇園社の祭礼として九七〇年ごろから民間の手で毎年行われるようになったのが祇園祭である。

高句麗系の渡来氏族で皮革染めの技術をもつ集団に大狛連氏がいた。大阪府柏原市、当時の河内国大県郡巨麻郷には大狛連祖神・大山咋神・木花咲耶姫命を氏神として祀る大狛神社がある。

ところで連姓の多くは直接の王族以外の氏族の子孫としている。ここにも血を百済系と区別する意図が感じられる。継体大王の即位が大伴連の支えと時間を要したのは王家相続に密接に連の権力が関係していたからである。天武天皇の治世に八色の姓により、連の姓の地位は格下げとなり、その後は朝臣が、有力氏族の姓となって、明確な臣下の形に組み込まれていった。

また、八尾市久宝寺、当時の河内国渋川郡巨麻郷の許麻神社は高麗王霊神、牛頭天王、須佐之男命、許麻大神が祭神で、社格は大狛神社と同様に式内社である。神社の名からいっても高句麗人の祖を祀っていた。近くには他にも巨麻郷と名がつく場所がある。いずれにせよ、このあたり一帯は、高句麗系渡来人の居住地であった。どうやら、こうした神仏の関係を併せて見聞していくうちに、高句麗だけでなく、朝鮮半島の相互関係が列島に及ぼした影響をよく知るには、その基本から学ぶ必要があることを朴とともに痛感した。

そこで、具体的に資料を基にして外交関係をつぶさに調べてみることにした。

高句麗の史実

十二世紀半ばの高麗王朝時代に金富軾らが編纂した古代朝鮮に関する最古の史書『三国史記』の記録に基づいていろいろと調べてみた。しかし、この書は中国の古書の記述に基づいた歴史認識とは異なり、史実性については、疑問が少なくない。特に百済、新羅関連ではその認識が基本的に全く異なる。

朝鮮半島での新羅優位の立場で書かれたこの史書では、前五七年にまず新羅が建国し、次に、前三七年に高句麗が建国し、その後、前一八年に百済が建国したとしている。中国の史書ではこの部分に大きな食い違いがあり、高句麗の建国の時期は一致した記述であるが、三四六年に百済建国と三五六年に新羅建国を記述している。すなわち、この件では、《馬韓・弁韓・辰韓》の三韓時代の存在を認めていない『三国史記』の歴史的立場を、今日の韓国も強く内外に主張している。

ところで、前漢時代の前一〇八年に樂浪・玄菟・臨屯・眞番の四郡を朝鮮半島に武帝が設置したことは歴史的には重要である。これがその後の朝鮮半島の政治・経済・社会・文化に、間違いなく多大な影響を及ぼしたからである。

現在の中国遼寧省本溪市桓仁に卒本を首都とした高句麗が前三七年に建国された。北方騎馬民族扶餘出身の高句麗国の初代王の朱蒙によるものである。その裏づけは、前三二年に高句麗王が後漢に朝貢してきた中国側の記事にある。ところで、『三国史記』では初代の百済王とされる温祚王を通して、百済と高句麗の王家は血脈が相通じる縁戚であることを伝えている。次の瑠璃明王の治世に現在の輯安市の丸都城に本拠を遷し、三世紀にはその周辺に強固な本拠を築いたとある。その後、太祖時代に北九州にあった奴国に漢帝から《金印》が贈られたことや卑弥呼が帯方郡を通じて二三九年に、魏と通交したことが記されている。

美川王の時代の高句麗は三一四年には、四世紀以上にわたって中国の進出の拠点となっていた樂浪郡・帯方郡などを滅ぼした。その後、小獣林王の時代の三七二年に、繰り返しになるが、仏教が伝えられた。そして、三九一年に広開土王といわれる好太王が即位すると、対外進出により、それまで低下しつつあった国威を大きく発揚した。

彼の業績に関する《高句麗好太王碑》が一八八〇年に発見された。一八八四年には、一八〇二文字からなるその碑の記述の拓本を日本帝国陸軍砲兵大尉の

酒匂景信が参謀本部に持ち帰って解読した、いわゆる酒匂拓本がある。この碑には朝鮮半島・倭国の四世紀末から五世紀初頭の関係がかなり詳しく語られている。

三七二年に、百済の近肖古王から応神大王へ献上された七支刀は現在、国宝として石上神宮に保管されている。その銘文記録が『記紀』と併せて重要であることはもちろんのこと、本邦では好太王碑の記述はこの時代を知る重要な史料である。

『日本書紀』には半島と倭国の交流の記事だけでなく、仲哀紀・神功摂政紀には半島に倭国が軍を派遣した記事がある。これと好太王碑の内容を照らし合わせると、歴史を遡って日本の優位性の主張と後世の朝鮮半島と満州支配の正当化の根拠として、これらが日本にとって好都合であったとの朝鮮史学者による『記紀』批判の論述がある。また一方では、こうした記事は朝鮮半島諸国に対する、その当時の倭国の大王家の威力誇示のための『日本書紀』の編纂に携わった任那、伽耶諸国や百済出身の要人らの意図的記述であるというような主張があった。

そして、一時は、酒匂拓本だけでなく碑文そのものも日本軍のもとで改竄・捏造されたといわれた。しかし、二〇〇五年になって、その拓本作成以前の一八八一年に製作された現存最古の墨本が中国で発見された。その内容は酒匂拓本と完全に一致しており、中国社会科学院の徐建新により、そのような改竄・捏造の事実がなかったことが証明され、翌年発表された。それにもかかわらず、その後も依然として朝鮮史学者の李進熙氏は、それを認めなかった。

碑文の内容に関しては、《……そもそも新羅・百済は高句麗の属民であり、朝貢していた。しかし、倭が三九一年に海を渡り百済・任那・新羅を破り、臣民となした。……》の箇所の解釈について、歴史学者間ではなおも論争がある。

以後の好太王の活躍記事として、王は四〇〇年には五万の大軍でもって新羅における倭軍を破り、四〇四年には海上でも倭と戦火を交えたとある。この碑は好太王の子の長寿王が四一四年に建立したもので、この近くにある世界遺産に指定されている将軍塚・王陵も含めて、日本と半島との交流の重要史料であることには疑いがない。少なくともこの碑文から三九一年前後に倭が《海を渡って》朝鮮半島に軍を送っていたことが分かるという。しかし、倭の位置関係の考察に問題があることに言及する必要があろう。それは、この倭が一般に言われている《五世紀前後の倭国》であるかどうかである。一説では後の歴史の推移からみて、《九州王朝》の存在の証であるともされている。また、山形明郷らの説による朝鮮半島内での伽耶地方の《倭》と呼ばれる国々の連合軍であったとの説がある。

『日本書紀』の朝鮮半島への出兵記事の真偽はともかく、四〇〇年前後の製作とみなせる大型古墳が幾つか見出せるし、朝鮮半島から新羅系の渡来人が見られるのも、この頃からである。秦氏・東漢氏などはその例である。

『日本書紀』では高句麗が登場するのは高句麗人が本邦に渡来してきた応神紀七年の記事による。この国は好太王・長寿王時代が最盛期であり、四二七年に王都を平壌に遷した。しかし五世紀末の文咨王時代になると新羅の力が増し、高句麗は対抗上、百済に接近したとある。さらに、六世紀前後のことであろうが、次々と、半島出身の豪族の渡来に関連する記事が『新撰姓氏録』に載っている。しかし、事実上国境がない時代にあっては、渡来したというよりは、自由に相互に行き来した人々が数え切れないほど多かったと考えるのが自然である。

主なところでは、応神紀では高句麗から倭国に使節が来訪したとのこと、また次の仁徳紀でも同様な記述がある。それから半世紀後、平原王の治世に、高句麗人が筑紫を来訪したとあるし、さらに使節が高志国に漂着したともある。とにかく、五世紀末頃からは高句麗の倭国との親交の意図が各所に窺われるが、これは新羅との関係及び大陸情勢の変化に対応したものであった。そして、それ以降も栄留王の治世に到るまで、倭国には僧だけでなく特技をもつ者を送り込み、倭国もそれに答え、高句麗の先進性文化の吸収のために歓迎した形跡がある。

五八一年に建国した隋に高句麗は激しく対抗した経緯があるが、その隋も六一八年には滅んだ。とはいえ、その後も唐から絶えざる侵略を受けた。また新羅との間では、敗戦が続き、苦境にあった。しかも内紛により、栄留王は六四二年に臣下の泉蓋蘇文により殺され、傀儡である宝蔵王が擁立された。

そして、六六〇年には新羅・唐連合軍のために友好国の百済が滅亡し、さらに六六八年には遂に平壌が唐の攻撃による陥落の憂き目に会い、約七百年間も続いた高句麗王朝が遂に滅亡した。

血脈の継承

高句麗が滅亡するとこの国の人々が多数本邦に亡命した。この頃には、すでに大和国は新羅との国交を一応回復していた。

その後、渤海が六九八年に、満洲から朝鮮半島北部とロシアの沿海地方にかけて、高王が高句麗の再興と言われる国家を建設した。高句麗滅亡後にその血の流れを汲むとされる大祚栄が建国したからである。遼東半島と山東半島が囲む湾状の海域が渤海と呼ばれ、この国は後に、唐からは《海東の盛国》と呼ばれるほどの繁栄をみた。『新唐書』によれば、渤海は粟末靺鞨であり高句麗に従属していた大祚栄が創始者であるが、『旧唐書』では本来の高句麗の別種としている。

渤海の建国に携った人々は、隋唐時代に現在の中国東北部からロシア沿海地方に居住した、人種的には粛慎、挹婁の後裔である。農耕漁労民族でツングース系言語を用い、その風俗は高句麗・契丹と類似したという。主な部族は二つであった。ひとつは、後に女真族といわれ、金や清国を建国した北部の黒水靺鞨である。他は、渤海国を高句麗の残党とともに建国した南部の粟末靺鞨である。

一時的ではあるが、六九〇年に武周朝を名乗った武則天女帝の時期には羈縻政策と言われる周辺異民族支配による厳しい収奪があった。そのため、現在の遼寧省朝陽市付近に居住していた契丹が暴動を起こした。この混乱の中、高句麗の残党と共に粟末靺鞨は松漠都督府の支配を脱し、やがて、大祚栄の指揮で吉林省延辺の東牟山に拠点を据えて、後に《旧国》と呼ばれた振国を建設した。

その後、武周朝の討伐を凌いで勢力拡大に努めた大祚栄は、玄宗が即位した翌年の七一二年に、唐より現在の河北省南部に位置した渤海郡王に封ぜられた。これが後に国名となった。次の大武芸は独自の元号を用いて唐と対立して、一時は山東半島の登州を占領した。その当時は黒水靺鞨が新羅や唐と親密な関係にあったので、唐と対立していた渤海は国際的な孤立を深めていた。

したがって、渤海は新羅を牽制するために、七二七年に通好を求めて、初めて高仁義らを日本に派遣した。使節の到着後間もなく、当時蝦夷と呼ばれていた人々によって殺害された。しかし、高斉徳の他、生存者八名が辛うじて出羽国の海岸に漂着し、その翌年には聖武天皇に拝謁できた。そしてその結果、同じ年に、朝廷は引田虫麻呂ら六十二名を送渤海客使として派遣して、軍事同盟的な交流をもつことになった。

その後、大欽茂が対立政策を改めて、唐へ使節を頻繁に派遣し、唐文化を積極的に受け入れ、同時に留学生をも送り出すようになった。これらの友好政策が実って唐は大欽茂に《渤海国王》を冊封した。

両国の好関係と相俟って、渤海と日本とは文化交流と交易の相手国に変化し、その友好的関係は約二百年間、渤海の滅亡時まで継続し、合計三十四回にわたって渤海使・遣渤海使が往来した。

渤海は東牟山から現在の黒竜江省牡丹江市の上京竜泉府へ遷都し、唐の制度を参考に地方行政を整備していった。こうして国家発展の基礎が築かれたが、大欽茂の没後、王位継承を巡って内紛が生じ、続く六代にわたる短命な王により、混乱の治世が二十数年間続いた。しかし、その後中興が成った渤海は、大仁秀の時代には、黒水靺鞨もその影響下に組み入れ、周囲の国々からもその繁栄が称賛されるようになった。その子の大彝震の時代には、文治政治への推進により、唐との関係の強化と大量の留学生を通じて文物導入を図った。安定した社会状況にあって、経済と文化の発展が続き、これが大玄錫の代まで続いた。

日本との関係が深く、周囲との交易で栄えたが、十世紀になり、唐が衰退するに及んで、大玄錫、大瑋琪、そして大諲譔の治世の時代に権力抗争が繰り返され政治が不安定になった。そして、唐の滅亡後に耶律阿保機が建国し、後に遼を名乗った契丹の侵攻を受けて渤海は敢えなく、九二六年に滅亡したが、故地に東丹国を設置してここを支配した。渤海再興を数度にわたって遺臣が試みたが、すべて失敗に終った。

ところで、黒水靺鞨に属していたといわれる完顔阿骨打が一一一五年に建国してから一二三四年まで続いた金王朝のもとにあっても、渤海ゆかりの人々は厚遇されたという。実際に渤海の制度は、遼や金の制度に影響を与えたといわれる。そして、元の時代では、華北に住む粟末靺鞨の人々は《漢人》として支配を受けたが、その後、黒水靺鞨の女真族は清として大陸で再び台頭し、繁栄した。

高麗の家系

朝鮮半島の歴史といわば血の連続性の認識に誤謬があるにしても、当時の支

配階級や歴史家と同様にそれらを強く心に思い、少なくともその因縁を踏まえたところで、松原ら二人は本邦の様子に立ち戻ることにした。

前述のように高句麗王家ゆかりといわれる高麗王若光の家系は埼玉県日高市の高麗神社に代々伝わってきたが、高麗朝臣家系と類似性が見られる家系でもある。しかし、一二五九年に高麗神社が火災に遭遇し、歴代系図が焼失したので、現存するその家系図は高麗氏一族による再編版である。

神社の伝承では《若光の故国を去って我が国に投化するや一路東海を指し遠江灘より更に東して伊豆の海を過ぎ、相模湾に入りて大磯に上陸せり。邸宅を化粧坂から花水橋に至る大磯村高麗の地に営む。そこに留まり住みしが間もなく朝廷より従五位下に叙せられる。……（『高麗氏・狛氏考』より）》のようである。これは『続日本紀』に七〇三年に従五位下であった高麗若光が王の姓を文武天皇より賜ったことに直接に連なる記事である。王姓を賜った年代のことから考えて、高麗若光の大磯への渡来は、これより少し前の時期であったろう。武蔵野の一部を下賜された若光は、大磯を去ったが、その後も大磯の住民は彼の徳を称えて、高麗権現社（後の高来神社）に祀っている。

朴とともに日高市の高麗神社に再び足を運んだ松原はこの地を見て、遠く学生時代の友人を思いだした。宮崎の日向市に住むこの地と同名の日高氏である。それに日向は天孫降臨に密接にかかわっている。誕生祝いに「童面の埴輪」を彼から受け取ったことがある。その頃から神話にも興味をもったし、何故かこれまで自分が考えてきた日本の歴史に彼のこうした好意が密接に絡んでいるような因縁をふと感じたものである。

出世開運の霊験あらたかな高麗神社と文化財の高麗家の旧居を訪問してから神社を出て一〇分程歩くと高麗山聖天院勝楽寺に辿りつく。高麗神社の入り口でも見かけた守護神としての《天下大将軍》《地下女将軍》と書かれたチャンスンがこの地にも建っている。トルハルバンともいわれるこれらは済州島で見たのが印象的であったが、普通は、村の入り口や道端に置かれた長い木や石に人の姿を彫ったものである。ぎょろついた目、むき出しにした歯を特徴とする見かけの奇妙なものが多い。

若光は高句麗からの亡命者とともに武蔵国高麗郡地域の指導者として、荒野を開墾し産業を興し、民生に大いに寄与した。また、死後は広く民衆に崇められ、高麗明神・白髭明神として祀られた。若光王廟のある聖天院勝楽寺は真言宗寺院として、高麗郡地域の中心寺として現在も法燈が継承されている。この間、一五八〇年に円真上人が本尊に不動明王を勧請し、別壇に聖天歓喜仏を守護とした。この寺の境内に見られる高麗殿の池や井戸などの史蹟は往時を語るものであり、今日なお多くの参拝者を迎えている。

二〇〇〇年（平成十二年）には、新本堂が建立された。同時期に造られた在日韓民族無縁の慰霊塔や八角亭は檀君、高句麗王廟、若光像などとともに、高句麗文化を偲ぶものである。

ところで、王の姓の授与はこの時代までは本邦の王族に限られていた。後世にあっても海外の王族では百済王氏、高麗王氏と後述の背奈王氏以外に例を見ない。ところが、若光が高麗王姓を賜っているにもかかわらず、その祖の高句麗王族の名前が伝わっていないのは如何にも不思議である。それに、没した後は高麗明神の社家の祖とされ、直系の子孫が名跡を継嗣したにもかかわらず、そのような有様なのである。つまり、公的な記録に若光の名前が登場するのは王姓下賜の記事だけであり、高麗王氏としての記録は『新撰姓氏録』にはないのである。しかも、若光の後を継いだ子は高麗家重であり、もう一人の僧聖雲については聖天院勝楽寺を建立しているのである。家重については、高麗明神を創建した伝承があるにもかかわらず、没年が七四八年と記されている以外に記録がないのである。そしてまた若光の二人の子は高麗王姓ではなくなっている。

そんな疑問が松原の心からどうしても消えさらないのであるが……。

しかし、四代目の清仁以後については、すべて系図に明記されており、宗家の妻女は宗純に至るまで高句麗渡来の氏族の女であったことがほぼ確認されている。

どうやら、かつて滅亡に追いやった有力な豪族を朝廷が神々として出雲の地に慰め、後々まで崇めたことと同様に、歴史の表舞台から宗教の世界に高麗氏を移して祀ったのであろうか。そう考える松原であった。

因みに、高麗神社は平安時代に《大宮》号を許され、十三代の一豊からは自ら高麗大宮司と名乗って、高麗大宮明神として祀り、十九代の純丸までこのまま続いた。その後は修験道を取り入れて、高麗寺または大宮寺と称した神仏習合の寺院でもあった。

鎌倉時代には社家は御家人となったが、二十五代永純の時、高麗氏の系図が焼失した。鎌倉武士としての敗戦から一族廃絶の危機に見舞われたが、それ以降は不戦を誓い、子孫は高麗神社社家としていまも存続している。

調査のさなか、高麗家六十代当主の高麗文康氏との交流があり、高句麗王家に纏わる著書『陽光の剣 高麗王若光物語』を戴いた。

薄れる血筋

一

古代の渡来豪族は歴史的にも重要な役割を果した人物を数多く輩出してきた。しかし、百済出身以外の渡来人で歴史上著名な人物や氏族はさほど多くは知られていない。高麗氏は歴史の中でその代表的な渡来氏族である。なぜ、そうなのかを改めて松原は考えてみた。

大きく見て、高麗氏系図に関しては、高句麗の栄留王の子といわれている《背奈福徳》を祖とする高麗朝臣系と、《高麗王若光》を祖とする高麗神社社家系の二つが存在するという。

多くの高句麗系氏族の渡来が『新撰姓氏録』に記録されている。その幾つかは高句麗王族の出自であるが、国内で血統を含めて王族である記録は高麗朝臣についてだけといってよく、その他の場合はややもすると、明確な証明を見出すことができない。その中で、唐の侵略により平壌が陥落した時に、後に高麗朝臣となる者の祖が倭国に亡命したとあり、その後に、武蔵国の豪族として《背奈公》の姓を賜っているとある。確かに、《公姓》は氏姓制のもとでは国内では王族の後裔氏族だけに与えられた稀な姓である。

「高句麗出身の氏族で公姓を与えられたのは背奈氏だけですよね」

松原の眼差しを感じながら、朴が思慮深げに言った。

「そう、それも朝臣姓も背奈公氏にだけに与えられたはずです」

確認するように松原が頷きながら答えた。

「だとすれば、このことは高句麗出身の渡来人の中でも最も高貴な血筋の一族と朝廷が認めていたことを意味するのでは……」

「そうですね。血筋は順位を決めるもっとも重要な要素でしたからね」

そんな会話が二人の間で交わされた。

聖武天皇時代の功臣で、歌人でもあった背奈公行文の出身が武蔵国の高麗郡であることが知られているので、その父の福徳は当然この地に縁があったはずである。

「ところで、高麗郡が新設されたのは七一六年のことでしたね」

「でも、福徳がその年まで生存していたかどうかは疑問ですね」

朴と松原が順に言葉を継いだ。

福徳の子には、他に福光がいた。福光の子である背奈公福信は若年時に叔父の行文に連れられて高麗郡から上京し、公卿になったことが『続日本紀』に記されている。

「少なくとも福信の子供時代から、背奈公は武蔵国を本拠地としていたことが確認できますね」

歩きながら、松原は自らの考えを確かめるように言った。

「それに、実際に、七四七年に聖武天皇より背奈公一族は背奈王姓を賜っているのですから」

「実際、聖武天皇に行文が重用されたことは有利なことでしたね」

「とにかく、行文はきわめて教養の高い人であったということですね」

「確かに、『万葉集』にも『懐風藻』にも作品を残していますね」

「そして、朴さん、七五〇年には孝謙女帝のもとで高麗朝臣姓を賜り、臣下の道を歩むのですよね」

「しかし、一体どのような理由があって、すぐにも朝臣姓を賜ったのでありましょうね」

松原の言葉に対して、歴史に詳しい朴義明が訝しげに訊ねた。

「いやそれが、理由はよく分からないのですが、多分天皇の交代がきっかけだったのでしょう」

松原もそんな疑問をもっていたので明確な返答ができなかった。
「とにかく、朝廷は背奈一族をそれまでより、扱いやすくなりましたね」
「ほら、朴さん、実際に行文の子である大山が七六一年に遣渤海使に任命され、その子の殿継が七七七年にやはり遣渤海使に任命されていますね」
「とすると、きっと、福信も当時の大陸と半島の国々との外交など実務に精通していたからなのでしょうね」
「とにかく、福信は、朝廷内でも他に代え難い人物となっていたのでしょう」
そんな会話をまとめてみると、次のようになる。
背奈公福信（七〇九～七八九）は聖武天皇から桓武天皇初期の頃まで朝廷で活躍した人物である。背奈王から七五〇年に臣下の高麗朝臣姓となったが、七五六年には武蔵守に任ぜられ、その二年後には武蔵国に新羅郡を設置した。そして七六五年には造宮卿兼武蔵守となり、高麗朝臣に代わって七七九年には高倉朝臣姓を賜った。

二

ここで、松原は百済系渡来人出身で従三位以上の位に就いた人物を比較のために、併せて挙げてみた。
まず、百済の義慈王の子孫で、備前守に任ぜられた百済王南典（六六六～七五八）や黄金の発見と献上などの功績のあった百済王敬福（六九八～七六六）である。それに、征夷大将軍としての功績があった、正三位大納言、参議を歴任した坂上田村麻呂（七五八～八一一）、彼の父で従三位まで到達した坂上苅田麻呂（七二七～七八六）などがいる。
また、現在の皇室と関係深い、和史乙継の孫で、桓武天皇の生母の高野新笠の甥にあたる和史家麻呂は参議中納言であった。さらに、平安遷都に関与し、『続日本紀』を編纂した業績があり、参議になった菅野真道（七四一～八一四）などがいる。これらのことは、大和国の王統が百済系であることのひとつの傍証でもある。
このころの渡来人優遇策の社会的背景を考慮しても、これらの有力者と並んで福信の一連の処遇は異例のことである。ところが、高麗朝臣福信の子である高倉石麻呂が七八九年に美作介に叙任された公式記録が残っているにも拘わらず、この直接の流れにある子孫の事跡について言えば、これ以降の様相は不思議なことに不明になっている。

三

こうして、目にした系図や諸々の情報からは《背奈福徳・高麗若光らは高句麗の国家滅亡前後に渡来したほぼ同世代の人物であり、高句麗では高貴な氏族の出身、つまり、王族であった》ことが確かであるが、資料の不足のために詳細を明らかにするのを半ば諦めながら、松原がつぶやいた。
「他に玄武若光がいるが、高麗若光と同一人物かどうかですね」
「……しかし、松原さん、関連資料が全くないと聞いていますし、ここで、それを考えるには、どだい無理ではないですか。それに、玄武若光は滅亡以前の高句麗の正式使節でしたし……」
朴がたたみかけるように、自らの意見を言おうとした。
「……ですから、滅亡以後に渡来した高麗王若光とは別人でしょう。私は、それを言いたかったのです」
滅亡以前の六六六年に、正式使節が相模国大磯を訪問したとはどうしても考え難い松原であったからである。
一方、背奈氏の方も孫の背奈福信の薨伝の中でのみ祖父福徳が語られ、解っているとはいっても、子の行文と福信の行状に併せて記録されているだけのことである。
「ところで、松原さん、高麗若光と背奈福徳を同一人物視する人がいますが、これは　どうでしょうか」
「朴さん、それも無理ですね」
「……」
「理由は、福徳が高麗郡設置の時、生存していたかどうか不明なことですね」
「それに、高麗若光の七一六年当時の年齢とかみ合わんでしょうから」

「高麗神社家系では、自らの祖先を間違えることはないとして、そのようですね」

「系図の中で似た名を意図的に他の名に置き換えることも考えられますが、それもないようですね」

背奈公氏・高麗王氏が高麗郡に入植した時には、一方で若光は形式的には高句麗王族として一代限りではあるが、実力的存在であった。他方、その後に、背奈氏は中央に出て歴史に残るような活躍をする存在になっていった。

このことからは背奈氏を王族としての血脈的上位の名門と考えていたし、実際、七四七年には背奈王姓を賜っている。しかも七五〇年には高麗朝臣姓となり、臣下としての明確な身分を示している。その一方で、高麗王氏の次代は単なる高麗家重と呼ぶだけで王姓が除かれている。

すなわち、朝廷としては高句麗国の王族として処遇する氏族を敢えて高麗王若光一代限りとした。そして、背奈公を背奈王とし、さらに高麗朝臣とし、王族の身分を薄めていった。そう解するのが妥当ではなかろうかと松原は思った。

その背景には高麗王氏も背奈公氏も共に高句麗王族で大和朝廷と密接な扶餘の血縁にあることが考えられるからである。それゆえ、血縁を主張できないように福信に関する高句麗王族の流れを中央貴族のなかに入れて臣下とし、他方、高麗王氏を一代限りの王族として宗教に絡めた地方豪族として遇し、家重以降は高麗神社を継ぐ環境で、皇室の血統から遠ざける方向へ巧みに誘導しているからである。

百済王氏ついても時代の前後はあるにせよ、王姓を後に返上してからは同様に王族の血が薄まった。この血脈にあるといわれる三松家の後裔としての主張以外には、ほとんどが不明確である。これについては、第一章で若干の言及をしている。

当時の朝廷や歴史家のそうした意図を感じ取りながら、在野の歴史家として朴と松原の二人は一層の親交を深めていった。

家系の謎

高麗王若光の高麗神社に纏わる社家系について資料をもとに、松原は朴とともに、当時の状況を参考にいろいろと考えてみた。

「ところで、当時の平均寿命を考慮すると背奈王系と高麗王系の構成はよく似ていますね」

松原がかねてからの思いを寄せて、話の口火を切った。

「なかには両方の系図に少なからず登場するような人物もいますね」

朴が補足するようにそれに合わせて軽く言った。

実際、高麗神社系図に入る女性の多くが高句麗出身の渡来人氏族であることに松原は注目していた。

「ところで、背奈王の系図では新井、新、勝、吉川、井上、などと派生氏族名が記されていますね」

「朴さん、これらは総て高麗神社系図では親族として掲載されていますね。つまり、背奈王氏と高麗王氏は非常に近い血縁にあることを敢えて強調しているようですね」

「だとすれば、高麗神社社家を一系として血脈を嗣いできた王族でもあることを、宗教を通して主張するためでしょうか」

「その通りです。宗教は大和王家の血統にとっては無難だからですね」

「……」

「つまり、高句麗王族の高貴な血をもち身分が高い背奈王族の主張が、朝廷から見て形式的に支配階級に明確に入らないようにしたのです」

朴の問いかけに松原が自分の考えを述べた。

「ということは、力で滅ぼした、または支配した古代有力豪族を神社に祀り、社家系を今につないだ出雲大社の家系の場合とよく似ていますね」

「その通りですね」

「しかしいずれにせよ、分派一族とともに高麗郡の中で高麗氏族を形成していたことは、疑いのない重要な事実でありましょう」

「そして、高麗氏族の名を社家系として、歴史の中に明確に血筋として残したわけです」

したがって、この両家系はいつでも合体できるような作為がはじめから入っていたのかもしれない。二人はそんな結論に到達した。

しかし、残念ながら高麗神社系図は、後に一族が古い記録を再編したもので、その真偽は推測の域を出ない。

「少々腑に落ちないのは、高麗神社系図には、背奈氏についての言及がないことです。あくまで高麗氏が高麗王若光の後裔であり、宗家であることを主張していることですが」

「いや、それこそが朝廷の本来の狙いであったのだと思います」

高麗王家の血は一系を守りながらも、百済王家のような婚姻を通した王統への介入がほとんど許されなかったのは注目すべきことである。しかし、祖国が滅び、異国の地で民族の血と文化を護り、その子孫の繁栄を目指してきたこと、そして誇りに満ちた高貴な王族の血を脈々と維持してきたことは特筆すべきことである。

ここで、繰り返しになるが、高句麗滅亡以前に別系統の高句麗人も多数渡来していたことに言及する。氏族ごとの詳述は不可能であるが、関西ではその代表的な例として狛氏が挙げられる。山城国、河内国、大和国、摂津国などに残る氏族の多くに、狛首・狛造・狛人・狛染部・大狛造・大狛連など、氏族名に《狛》が付いているのがその特徴である。さらにそこから派生した氏族も知られている。

『新撰姓氏録』をもとに、高句麗の滅亡以前から活動の本拠地が山城国である高句麗系渡来人の主な氏族に注目してみた。すると、相楽郡では何といっても狛造、さらに出水連・後部・長背連・福當連などが、また、愛宕郡では八坂造、久世郡では黄文連、葛野郡では田村臣などが挙げられる。

実際に、相楽郡には高句麗系渡来人が多かった。その中でも狛氏については、域内に現在も残されている《狛》や《高麗》の付く関連地名が興味深い。例えば、山城町上狛・精華町下狛・狛田村・大狛村・高麗村・狛山・狛野荘などである。この地域でこれらの高句麗氏族の指導的役割を果たしていたのが、おそらく狛造氏や南都楽人の狛宿禰氏であろう。

そして、この狛一族から少し遅れて山城国愛宕郡八坂郷に前述の高句麗系の八坂造氏が入植し、後にそう呼ばれた八坂神社を創建した。これより八坂造の氏祖の渡来時期は高句麗滅亡前であることがわかる。また、神社に隣接する東山区清水八坂上町の八坂の塔で知られる臨済宗建仁寺派の霊応山法観寺が、五九二年に八坂造氏よって開基されたことも知られている。京都市内では最も古い寺の一つである。現在の五重塔は足利義教の時に再建されたもので、重要文化財に指定されている。寺の発掘調査では七世紀後半の白鳳期のものと推定されている。

しかし、この八坂造氏と前記の狛氏がどのような関係にあったのかはあまり知られていないようである。

因みに、高句麗の安蔵王の子である福貴王が大狛氏の祖で、福貴王の子の夫連王が狛造氏の出自であるから大狛氏と狛造氏とは極めて近い親族関係にある。

高句麗の関連記事に夫連王の出自で後の南都楽人の祖先でもある狛烏賊麻呂が六八一年に連姓を賜った。それに現在の相楽郡山城町上狛に高麗寺の国史跡がみられる。これについては、何度かの発掘調査の結果、平安時代末頃まで存続していた狛氏の氏寺と推定された経緯がある。因みに、本邦最古の法興寺は五九六年から六〇五年頃の創建とされている。

また、中世に山城国一揆を率いた国人の狛下司・狛山城守父子の名が記録にある。系図上では彼らは嵯峨源氏の流れとなっているが、狛宿禰または高麗氏の説もある。彼らは狛野荘を本拠地とし大きな勢力をもったが、この辺りは興福寺の荘園でその歴史的関係がいろいろと考えられる。

この一連の高句麗王族の扱いは、百済以外の王族の血を大和国皇室の血の関連として認めないことが原則であったが、社会的地位は臣下として重視され、厚遇された。しかし、そのように歴史を扱うことが『日本書記』を編纂した歴史家の真意であったようだ。

そんなことを松原は、旅宿の小さな一室でひとりぼんやりと考えていた。

渡来と楽人

高句麗王家の後裔が残した重要なものの一つに雅楽がある。宮中楽隊を担当したのは、百済王家の後裔の場合とやや趣を異にして、雅楽への貢献の跡が明確に見られるからである。高句麗ゆかりの楽人狛氏の《上家》が舞師の首とされ、その後になって雅楽師となり、これが興福寺に置かれたとある。こうした

ことは百済王家に先んじていたと思われる。

以下、諸々の文献を参考に、また、Wikipedia を参照すると概ね以下のようになる。

百済王家から分かれた系統の子孫により、百済王氏の雅の伝統が、代々篳篥吹、京八幡楽人として受け継がれ、現在の宮中楽人系統として存続している。雅楽に関しては、五九二年頃に四天王寺で新羅系の秦氏の楽人が誕生したことが記録にあり、また六八四年には高句麗渡来の楽人が舞楽を大極殿で天武天皇に奏したとある。これを受けて、七〇一年に設けられた雅楽寮については、聖武天皇の治世で行われた高麗舞などに関した記述による説明がある。

ところで、これらに関する演奏は、主に唐を起源とする左方唐楽とよぶ舞楽と、これとは異なる雅楽のある器楽曲の右方高麗楽に大別されている。

器楽合奏のための管弦とこれに舞を加えた舞楽の二様式が左方唐楽に含まれる。前者では楽器として笙・篳篥・竜笛・琵琶・箏・羯鼓・鉦鼓・太鼓を用いており、これらから琵琶・箏を除いたのが後者である。九世紀になって、古代の外来楽が分類され、唐楽とインド系の林邑楽がこれに含められた。

他方、新羅楽・百済楽・高麗楽や呉の伎楽が併せて整理されたのが右方高麗楽である。また、奈良時代から平安初期にかけて、日本に伝来した渤海楽がこの範疇に編入された。今に伝わる曲はすべて篳篥・高麗笛・三ノ鼓・鉦鼓・太鼓の楽器を用いる舞楽である。渤海楽に関する曲としては新靺鞨、古鳥蘇などが伝えられ、このあたりにも、王家の血の繋がりが見られるようだ。

ここで、話を前に戻すと、一条天皇の命を受けて左方舞奉行の狛光高が南都楽所を開いたという。楽所としては他に秦氏系の天王寺方と多氏らによる宮廷京都方がある。一〇九七年には京都楽人とともに南都楽人らにより春日大社で舞楽が催され、以後は雅楽に継続して狛楽人一族が関与した。こうして、宮中方（宮廷・京都）、南都方（興福寺・奈良）、天王寺方（四天王寺・大阪）からなる三方楽所が雅楽の今日までの伝承を行う基礎となった。

各々の楽所に属していた雅楽家を三方楽人と呼んでいた。江戸時代には制度化されて、現在この雅楽・舞などの古典芸能の伝統が重要無形文化財として宮内庁式部職楽部の中に残されている。

因みに、興福寺南都楽家について述べると、狛氏系には上、辻、東、奥、窪、久保、芝の家系が、また三輪山関連の大神氏系には喜多、乾、西京、新、井上などその後も続く家系が知られている。しかし玉手氏系の藤井、後藤というような楽人家は絶えてしまった。

歴史的には、山城国相楽郡上狛郷の周辺に拠点をもった狛氏は興福寺の後盾のもとに雅楽・高麗舞などの分野で世襲的名跡を継いで、今日まで至っている。江戸時代の享保の頃には朝鮮半島系統とは異なる大陸系統の左舞に優れた狛氏の子孫の辻近任が活躍した。狛氏も時の経過とともに分派を重ねて行くが、楽人家の狛氏は高句麗文化を護り、今に伝えた極めて重要な高句麗王族の後裔であることに疑いはない。

渡来の足跡

一

『日本書紀』に記されている朝鮮半島諸国との交流記事は、いつ頃から抹殺とまでいかなくとも、曖昧にされたのであろうか。歴史の裏へ松原はもう一足、踏み込むことになった。

《その起源は百済重視の頃からである》と在野の歴史家の松原は考えた。

史実に矛盾するわけではないが、すべてを百済の血脈と文化に関連づけて因果を求めている。そう思えた。それは直接的には、天智天皇の治世の頃から、日本を対外向けの姿勢の確立のために、政治的にはもちろん文化的にも権力基盤を整える必要性があったからである。とくに、天武天皇は自らの帝位に関する種々の不都合の中にあって、政治的にも社会的にも正当性を国内外に対して、主張する必要性があったからである。

高句麗との政治、経済、文化の交流は、仏教伝来より遙か以前から渡来人を介して間断なく行われていた。年代をも含めて、そのことがかなり多く知られていたのにもかかわらず、そしてその重要性をよく知っていたにもかかわらず歴史編纂者は敢えて軽視したようである。

ここで、本邦に渡来した高句麗の文化人を繰り返して挙げると、古くは五六五年頃来朝した僧の恵便が高句麗仏教を介して厩戸王子の思想の成就に影響を与えたとある。次いで五九五年に来朝した僧の慧慈が法興寺に居住し仏教の師として王子とともにあった。さらに、僧の曇徴が六一〇年に来日し、法隆寺に

居住し、諸々の技術も伝えたという。

この間、五七〇年に高句麗使の来朝の折には、山城国相楽郡に木威館、また相楽館と呼ばれる迎賓館を用意した上でこれを歓待した。これからもこの頃には既に相楽郡には高麗人の集団や技術集団がいたことがわかる。さらに高麗寺など寺院の建築では、高句麗僧らの綿密な企画と設計を支えた技術に秀でた集団も各所に見られたことが発掘調査によって、明らかにされている。

仏教の本邦への伝来には諸説あり、公式には五三八年の百済の聖王によるとしても、それから百年ほどの間に、山城国相楽郡付近には仏教文化圏が整いつつあった。

また、高句麗から仏教教義と並行して、百済・新羅からも少なからず渡来僧による教義の布教があったし、併せて諸々の雅の文化を伝えてきた。その中心氏族になったのが狛氏であり、その氏寺が高麗寺で、高句麗仏教が主たる教義であった。

そして、六二五年には高句麗王が派遣した僧の恵灌が三論宗を伝え、現在の兵庫県神崎郡福崎町の景勝地である七種山の中腹に滋岡寺を創建したことが知られている。

早くから渡来した高句麗人も高麗氏と自称していたのであろうが、音が通じたので狛氏とも表記するようになったのかも知れない。

「高句麗滅亡に伴って亡命してきた王族が高麗氏を称したので、自らを区別したのであろうか」

松原が独り言をいうと

「そう、それ以前に渡来して、高麗氏を称していた氏族は新来の王族に遠慮して狛氏、大狛氏などと氏族名を変更したとも言えそうですね」

朴義明から相槌ともいえるコメントが返ってきた。

「しかし、彼等もまさに、主たる渡来氏族と考えられるのですがね。どうでしょうか？」

「そのとおりです。朴さん」合点がいった松原は息をやや弾ませながらそう答えた。

二

さて、繰り返し取り上げることになるが、東国七ケ国に分散していた高句麗人がまとまって武蔵国高麗郡に移住した。当時、彼等は雅な文化と高度な技術をもった先進的で有能な職能集団であったので、集団移住には倭国の僻地の開拓や整備のためにも、また先住者との軋轢を避けるためにも意味があった。後にこの国の未開拓地に新羅郡（新座郡）が新設し、新羅渡来人を移住させたのも同じ目的からであったろう。

百済と高句麗が相次いで滅亡した後に、支配階級とともに多数の縁者の渡来があったことは文献上も明らかであり、彼等の多くに、またさらには新羅系の人々に対しても、関東はもちろん東北地方にまで土地が与えられ、集団で居住が保証されたのである。現在の亡命や難民とは性格は異なるが、日本がこれほど大量にいわば外国人を受け入れたことは、その理由はともかく、大きく評価すべきことであろう。

高麗郡では大宝律令によって定められた郡司の最高の地位である大領の初代として任じられた若光の周囲で暮らした人々だけでも家族を考えるとその数倍の人数になるはずである。その結果、草深い関東に産業の基礎が根付き、やがて一つの文化的拠点になっていったに違いないし、このことがこの地の有力な指導者をも生み出すもとになった。

時代が下って、中世になっても馬の名産地として、また武士団となった武蔵七党にも、その縁を誇る集団が幾つか見られたが、それもその傍証であろう。各党は互いに領地や住居が離れてはいても、社会的にも軍事的にもおそらく血族として団結し機能していたのであろう。実際に、その原点でもある相模国高倉郡の高麗寺・高来神社などは、当時の活動や事情を踏まえた様相を今日に伝えている。

関西圏では高句麗系の人々が現在の京都府相楽郡を本拠地とした居住範囲を形成していた。したがって、高句麗滅亡の頃には、彼等の後裔の数は中途半端なものではなく、倭国の発展や文化に寄与しながら、先住民と同化というよりは、共に協力し自ら日本人そのものを創り上げていたのである。

三

話は逸れるが、周防の大内氏が百済の王族血統にあることを自ら主張してい

た。それは、ともかく朝鮮半島の血を敬うのが長く本邦の常であったようである。

しかし、社会の表舞台で敢えて渡来人として活躍する利点は徐々に薄れていった。が、それでも産業の発展、文化の充実には、中央・地方の有力者になった多くの後裔の活動に負うところが少なくなかった。

実際に、建国後まもない渤海への倭国の協力関係などは、渡来人や王室の血の繋がりを窺えるものであった。高麗朝臣大山やその子の高倉朝臣殿継らが両国間の交渉役として相互に頻繁に交流が行われたが、そうした親近感が推察できよう。後世にあって、前述の有名な山城の国一揆の指導者にしても、おそらく相楽郡の有力な狛氏に血縁と地縁がに関連していたことが考えられる。

『新撰姓氏録』によれば、畿内の古代氏族数は概略一一八〇である。その内訳を見ると皇別氏族・神別氏族が併せて約七四〇、渡来系の蕃別氏族が約三二五、その他が未定雑姓氏族である。この中で明確な半島系渡来人のうち百済系が約一二〇で、高句麗系・新羅系・伽耶系が併せて約七五である、当時の支配者階級のみの出自の分類であり、決して国内全体的なものではない。しかし、それにしても、平安時代以前にあっては、支配者階級の約三分の一は比較的新しい出自がわかる渡来人だったと言える。渡来者の後裔であった彼等は、当時としての先端技術を備え、農業をはじめとする産業や人々の生活に欠かせぬ医療、美術、音楽、工芸・芸能など文化的所業に到るまで、それらの伝達と展開に大きな役割を演じてきたのである。

実際に、桓武天皇の頃までは広い意味で側近を含めて表だって渡来人の優遇策が図られて、日本の建設と発展に大きく貢献した。しかし、八三〇年には日本への《渡航》は別として、例外はあるが、明治まで日本への《帰化》が公式には認められなくなった。

朝鮮半島では、統一新羅の時代に次いで、出自は新羅系か高句麗系かは不明であるが王建が九一八年に高麗国を建国、九三六年に朝鮮半島統一してから、これに替わる李成桂による朝鮮王国の建国時の一三九二年までの歴史の中では、かつてのような血の一系の重要性が徐々に薄れてきたが、この点は日本の血統の連続性を重視する皇室の見方と異なるところである。

本稿で取り上げたのは渡来人の代表的存在の二氏を中心とした高句麗出身の人々であるが、歴史の上ではそれ以前の伽耶・斯廬を総じてた新羅系渡来人こそ、後の世の歴史家から長い間、意図的に小さき存在とされてきた。隣国とも言える新羅や高句麗が本邦に多大の影響を及ぼした様々な交流の史実があるにも拘わらず、長い歴史のなかでやや軽視されてきたその意味をここで改めて考える必要があろう。

親近の交わり

古く朝鮮半島からは、海難事故や災害難民としての漂着や積極的来訪が数え切れないほど頻繁にあったはずである。高句麗滅亡後も、七二七年から九一九年の間に三十四回の正式な、そして一回の非公式な渤海使が見られる。遣渤海使の文化的影響力は遣唐使の派遣回数から考えれば、より大きかったはずである。しかし、それが語られることはこれまであまりなかった。

一部には、渤海使を民間交易の便宜的なものとみなしたこともある。平城・嵯峨両天皇の治世の頃の重臣の藤原緒嗣がそう考えていたふしがある。

入京を拒否された渤海使でも、上陸地の日本海地域に長期に滞在し、実際に現地の人々と交わる使節もあった。また、難民かどうか不明であっても、七四六年には千百余人の本邦への来訪が、また七七九年には三五九人もの来訪が記録されている。

このことは、若干論理の飛躍はあるが、カスピ海地域での地中海出身の白人たちのスキタイ人との混血の延長として、長い時間をかけて日本海沿岸の人々との人種的混血もあったことも示唆するものである。秋田に色白が多いという。一説には白米に含まれるエストロゲン様の物質によるものという説があったが、遺伝子の交配の結果かもしれない。駆け出しの頃にかつて教授とともに、内分泌関連の研究で目にした論文の記事のことを思い出した松原であった。

ところで、時代を紀元前後に遡ると、朝鮮半島には、粛慎、挹婁、靺鞨、沃沮、《倭》、濊、濊貊などの民族が複雑に混在していた。

秦の始皇帝の課した労役から逃れてきた人々の子孫によって、時代が下ってから辰韓諸国で総称される国々が朝鮮半島に分立建国されたという。この辰韓地域の国々においては、前方後円墳を含めて、倭国に特徴的な居住跡も見出される。このことからいっても、このあたりが《倭》と呼ばれ、後世の《倭国人》とは異なる人々が居住していたといえる妥当性が山形明郷により唱えられてい

る。この《倭》によって新羅の前身の斯盧付近が支配を受けていたという説得力のある解釈もなされよう。そしてその新羅には当時の《倭人》が多数混じり、更に四世紀後半から六世紀前半にかけて、通常言われている範囲の地域からなる《倭国》に多くの人々の交流があったのではなかろうか。

すなわち、当時の《倭》の位置は必ずしも日本列島ではなかったし、むしろ《倭》は一般的な呼称であった。それゆえ、任那・伽耶地方にあった小国家連合と北九州の一部を意味する《倭》が、近くにあった新羅と百済を一時的に侵攻し占領したともいえるようだ。そうしたことが、《倭》が四世紀に新羅と百済を支配においたという《広開土王碑》の記述となったのであろう。

つまり、この《倭》と呼ばれた地域は、後の《倭国》や《大和》ではなく、沸流系扶餘の血の繋がりのある金官伽耶などと広く連合した国々の総称であったにもかかわらず、当時の歴史編纂者が《倭》の文字を都合よく自らのために用いたのであろう。そして《倭》と《倭国》とで取り合わせた事件を総合して、彼らが権益をもっていたこの地域との共通の歴史を《倭国》すなわち《大和》全体の歴史とみなしたのであろう。

そのような背景があって、時を経た四五一年に、宋から倭王《済》が《使持節都督新羅任那伽耶秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王》に冊封されたような『宋書倭国伝』になったのであろう。

すなわち、歴史をまとめた頃の《大和》の編纂者は、広開土王当時の朝鮮半島の《倭》といわれた伽耶の支配地域を含めて、本邦で確立しつつあった頃の《倭国》を意図的に一緒にして考えたのであろう。そして、この《倭国》が自らの発祥地の利権を失ったこととその回復努力の歴史認識がよく言われる任那論争なのでもあろう。そう松原は、素人ながら歴史的事実を結論づけてみた。

ところで、六世紀に新羅の真興王が伽耶国を滅ぼした後にあって、新羅の《倭》への貢納については、あり得ない虚構とされているが、前記のように考えると、《倭国》の面子をたてて、新羅の属国の代表に変じた後でも、《倭国》への窓口になった任那の地に命じて、贈与の形式を踏んで行ったこと、すなわち新羅から《倭国》へ間接的親和の意思表示の様子が『日本書紀』の記述から見えてくる。以前に統一新羅との関係でも言及したが、国際情勢が入り組んでいても、どこかで繋がりをもっていたのが朝鮮半島の国々と日本列島なのである。

そのように考える論理的飛躍についても、松原は自分の見方から朴義明に丁寧に語った。

倭国からは高句麗使の送使を名目にした派遣もあった。また、推古女王治世時には草壁吉士磐金、そして皇極女王治世時には草壁吉士真跡、高向黒麻呂などの新羅派遣も同時に行われた。これらも重要なことである。

そんな歴史的背景があるからであろうか、高句麗の滅亡後に唐が倭国を征伐する風聞や、唐から朝鮮半島全体への圧力を受けた新羅には、大和へと変貌していった倭国と共同でこの危機に対抗する動きをとった。実際に、統一新羅が本邦に使者を派遣するようになった経緯もある。これについては《白馬江の戦》において唐と激戦ではあったが、新羅との直接の戦闘が殆どなかったこともあって、本邦も新羅の受容が比較的容易であったからであろうし、実際に先進技術や海外情勢の蒐集にも関心があったからでもあろう。

ところで、渤海については、渡嶋津軽津司の諸君鞍男ら六人を風俗の調査のために七二〇年に靺鞨国に派遣したと『続日本紀』にあるが、これが契機となり、翌年第一回の遣渤海使を派遣した。大武芸は新羅と対立していたこの状況下で、《日本》を国名として使う国の存在に注目して友好を目的に、七二七年に高仁義らを派遣した。実際に、金沢、敦賀、秋田など日本海側からは渤海との交流を示す遺物が発見されている。日本を訪問した渤海使節は九一九年までの間に三十四回、このほかに渤海経由の大陸へ使節の記録が残っている。ところで、渤海が新羅との緊張関係にあった七五八年から七六三年の間には、渤海からの使者が毎年のように日本との間を往来した。七五九年には、藤原仲麻呂が渤海の要請に応じて新羅遠征の計画を立てたことがある。兵士四万七千人を軍船三九四隻とともに動員するものであった。しかし、孝謙上皇と藤原仲麻呂との不和が表面化し、しかも渤海側の事情の変化があって計画は中止された。初めは、日本では防衛協力を求めた朝貢であると判断して使節を厚遇している。その後、唐との融和を求めた文王（大欽茂）の治世になると、文化・経済の交流を中心とした使節へと変貌していった。やがて貿易の形態をとる使節の供応と返礼の経費が財政を圧迫し、日本側は十二年に一度に使節の回数を限定したが、その交流はほぼ二百年にわたって継続した。遣渤海使一行は『延喜式』によれば大使をはじめ、判官、録事、訳語、主神、医師、陰陽師、船工、水手などからなる集団であった。

一方、統一新羅との間に交わされた遣新羅使の回数は明確でないが、天智天

皇から仁明天皇の治世の間の六六八年から八三六年の間に非公式も含めて三十三回行われている。扶餘に連なる血統の意味では、新羅の積極的な評価を本邦の支配階級は避けたいとしたこともあったが、この国は貿易市場として、大和にとっては大きな魅力があった。交易の中には、金、香料および薬物が多数含まれている。たとえば、聖武天皇の治世下で東大寺大仏塗金用の金の調達は新羅に頼った交易で行われた。文化や経済という観点では、正倉院所蔵の遺物には、渤海・新羅との交易品が大陸ものよりも多いことが知られている。

昔日への思い

高麗氏（高麗朝臣・高麗王）や狛氏（狛造・南都方楽家）は共に高句麗出身の代表的な渡来人氏族である。

高句麗は前三七年に建国され、三九一年から四〇四年にかけて好太王の倭国との交戦記録が《高句麗好太王碑》として世界遺産として残されている。この時期に《倭》とみなされる国が朝鮮半島や北九州に在ったのか、それとも大和地方なのか判らない。ともかく当時は高句麗が敵対関係にあったので、高句麗人がどのように倭国に移住してきたのかは定かではない。

しかし、五世紀後半になると高句麗と倭国の関係は改善され、六世紀初めには高句麗の使節が来朝するほどまでに友好的になり、相互の往来も行われた。五六五年には筑紫に渡来した多数の高句麗人が山城国に配された。これが相楽郡狛氏らの祖となった可能性が大きいという。繰り返しになるが、五七〇年に越国に漂流した高句麗人が《烏羽之表》を携えており、これが正式な国書であると王辰爾によって解読され、初めて高句麗との正式な国交が開かれたと伝えられている。このときの高句麗正使の相楽館での迎賓記事は、この時期には既に相楽郡に高句麗人の一大勢力が存在していたことを裏付けるものである。

しかしながら、七世紀前半までの高句麗と倭国とは表向きは文化的な交流に限定されており、仏僧の活躍が目立つ。たとえば、五六五年に恵便をはじめ、五九五年に慧慈、六一〇年に曇徴が本邦を訪れたが、これらは日本の仏教文化に実質的に先鞭をつけるもので、彼らに随行したであろう多くの工人、絵師、仏師などがそのまま日本に居住した可能性をも示唆している。

このころには飛鳥寺に匹敵する規模の高句麗仏教の殿堂である高麗寺が狛氏の氏寺として山城国相楽郡上狛郷に創建されている。この寺は平安末期まで存続したが、その後に廃寺となり、現在は高麗寺跡として国史跡になっている。この付近は中世には興福寺の荘園となった。ここを本拠地とした狛氏は興福寺に保護された形で高麗舞・高麗楽などの世襲的氏族集団を形成した。そして、やがて南都方楽人として活躍し、それが現在にまで続いている。

高句麗滅亡の時期に前後して、新たに多くの高句麗人が日本列島に亡命してきた。この中に高句麗王族出身と思われる背奈福徳を祖とする集団、さらに高麗若光を祖とする集団があった。いずれもその時期は正確とは言い難いが、背奈福徳は六七〇年頃に渡来し、高麗若光は、高麗神社伝承などからほぼ同時期の渡来と推定される。しかし、六六六年に渡来したと『日本書紀』に記されている玄武若光と前記の二氏族との関係については直接的関係は考えにくい。

因みに、六八六年には、高句麗人五十六人が常陸に赴いたという。また、阿倍狛秋麻呂が七〇六年に常陸守になっているが、彼の祖父に当たる阿倍狛比等古が高句麗滅亡以前に遣高句麗使になっていることが知られている。

七〇三年に高麗若光に賜った《王》姓は一代限りであったが、指導者として東国七ケ国の高句麗人を集結させた。没後には彼を祭神・祖神とした高麗神社が創建されたことは、出雲大社の創建の場合と同様に考えて、その意義は大きかった。事実、高麗神社は現存し、若光の子の家重から現在に至るまでの高麗氏系図が再編ながらも残されている。

前述の高麗王族出身の背奈公も高麗郡新設の時に一緒に高麗郡に入植したのであろう。すぐに従三位の公卿になり、さらに七五〇年に背奈王姓から高麗朝臣姓に改めた福信の事跡が詳しく記録されている。

「この時点で高麗王若光が背奈王氏の名跡を継いだのでしょうね」

「高麗王若光も高麗朝臣福信も共に高句麗の王族で、近い血縁であったとすれば、合点がいきますね」

「朝廷から見れば実績をあげた背奈氏に高麗朝臣姓を与え、高麗王若光を一族の形式的な代表氏族にしたのでしょうね」

松原が一応の結論づけを行った。

「高麗神社の社家系譜に高麗、いや高倉朝臣の記述が残されていましたね」

「そうですね、朴さん。その中では、双方の人物が重なって現れていたようですね」

「でも高麗神社系譜には、背奈氏、福信などの記述はなかったですが……」

「朴さん、それはつまり、祭祀のための家系と朝廷から見た実利のための家系を別けたからでは？」

「松原さん、そうはいっても、高倉朝臣氏と高麗氏は非常に近い関係にあることがわかりますね」

「なるほど、高句麗王族の血脈を護るために婚姻関係を通じて非常に強く結ばれていたものと判断できますね、朴さん」

「つまり、併せて王家の血を引く高麗氏としたわけですね」

交互に向き合う二人の間にそんな会話が続いた。

大和の王家からみて血統は別扱いであった。したがって、社会的に劣勢になった古代扶餘の血を引く有力氏族であったとしても、その評価は見方によって、全く異なる。となると、高麗氏と狛氏の両氏については列島への渡来以来、果たしてきた諸々の建設的役割や当時に繋がる文化的功績からいって、彼らの大和の各分野に及ぼした影響の大きさを、血統から離れて、改めて評価する必要があると松原は思った。

話を戻すと、この時期の日本の王家にとっては、本来互いに関係の深かった百済王族でも競合関係に発展する可能性のあった血統を表舞台には出したくなかった。権力を握った過程と維持する過程を考えれば、高句麗王家の子孫だけでなく、古くは伽倻などの王家の子孫を歴史の表面に明確に出さないことも不可欠であった。

それゆえ、天武天皇が百済系でないことを彼の系列にある当時の歴史家の百済系の血を逆に重視する姿勢が王家の血統の辻褄合わせに微妙に絡んでいたようである。そんな背景があって、皇太子なき孝謙天皇の後には、百済系の光仁天皇に皇位が復帰した。その理由に、周囲の支配者階級の《美しい百済の血統》への復帰の主張があったからではないかと松原は思った。

地域区分の名称が未だ朝鮮半島になかった遙か昔の頃、斯廬やその周辺から、物部氏など当時の王家の血に連なる有力な豪族に続いて、秦氏や東漢氏らも渡来し、斯廬の王族を盟主とした権力抗争その背後にあった。

そんな思いが諸々の伝承を通して松原の心底に徐々に深く刻み込まれていった。

そして、乙巳の変以後に自らの血の一系を徐々に形造ってきた百済系扶餘王家の影響のもとに、それ以外の王家の事跡が『古事記』のなかでの人間的葛藤に満ちた説話と絡ませて、かなり詳細な歴史として記述されてきた。その半面で、『新撰姓氏録』からも解る彼らの明確な血筋を、敢えて具体的に歴史に残さなかったその意図が窺えるように松原には思えてならなかった。

言い換えれば、史書編纂時の歴史家は祖先を明らかにしたい気持ちと同時に、当時の国際関係から高句麗に限らず、とくに斯廬の影響を、時の百済系王室の血統に関わらないように深慮遠謀の末にその記録を工夫したようだ。しかしながら、その一方では、彼らの歴史的功績を極力後世からも見えるようにするために、渡来の人々の出自を明確にしなくとも差し支えない、説話として扱えるように、神別族として敬意を表しながら、表記したのが『新撰姓氏録』であったのではなかろうか……。そんな、やや論理性を越えた直感的印象を松原は心の奥に畳み込むことになった。そして、その幻影が折に触れて意識のなかで浮き沈みを繰り返し、脳裏を過ぎるたびに、かつて何気なく見聞きした《高麗》という言葉がそうした考えに辿り着く要因になっていたのをどうやら感じ始めていたのである。

いま秋風の吹く、思い出深い、かつて自分が滞在したことのある、継体大王の成長した三国の里に立ち戻った松原は、赤とんぼの乱れ飛ぶ、東尋坊の崖の上から、大海の暗緑色の荒波が白く崩れる波頭のしぶきを、かすむ歴史の幻影のなかで、時を忘れていつまでも見つめていた。

終　章

日本全国、到るところに、朝鮮半島の地名や物の名を冠する場所や建造物がある。そこには必ず自分の出身地を懐かしみ、ずっと語り継いだ故国への思いが見えてくる。日本と朝鮮半島の間の遠い過去の営みと相互交流は、尽きぬ興味で溢れるばかりである。この真の姿は、これから見出される文化遺産を通してますます明らかになるであろう。しかし、当時のことを知るには皇室に残る

資料と陵墓の公開が必須となろう。世界のどの国も支配者の墳墓は聖なるものとして、敬意をもって相対することはもちろんの前提条件ではあるが、国民の知的・物的財産とみて、誰もが満足できる形で公開されるべきであると思われるし、国民の多くが望むところであろう。それが、日本の歴史の奥深さと包容力をさらに増す力となり、周辺諸国からも尊敬と信頼を勝ち得る方法のひとつとなることでもある。

とにかく、素直に見ればあまりにも多い、朝鮮半島からもたらされた人材と文物にただただ驚くばかりである。そんな中で、古代の新羅に連なる神社が日本各地に点在して、しかも祭神が共通していることに感銘を受けて、少なくとも新羅系の渡来人と説話の登場人物と地名を通して歴史を垣間見ることができたのは、松原にとって、予想外のことであった。しかし、その地に根づいた新羅系に限らず高句麗系の渡来人も、後の百済系王統を強調する支配者の意図から巧妙な手法によって、その名跡を僅かに残すだけで、時と共に徐々にそれらの痕跡が不透明になっていったようである。おそらく、記録は存在していたであろうが、それらは歴史の裏に隠されて、彼らが行ってきた事跡のみが残り、個人名が消えて後の史実に矛盾のないような歴史の編纂が行われたのであろう。それもこれも《高麗》に纏わる諸々の伝承を見聞きする過程で知ったことで、考えさせられることであった。

日本に興味をもつ人々の多くは、後発の有力なひとつの文化がそれ以前に優勢であった文化を破壊することなく、それどころか、旧来の文化が中核となって吸収した後発の優れた要素を融合し、発展させてきたことに驚きを隠さない。そして、その象徴的な証として、日本の皇統と皇室を見ることが少なくない。皇統が続いたことにより、皇室が日本文化と一体化して、時代の変化に即して共に永きにわたって継続的に変貌してきた。その流れの中で皇室が国家の支配者からも一般国民からも大切に護持されてきたことに、彼等は重大な関心をもちながら、その本質的理由を歴史の中に見い出そうとしている。

というのは、日本そのものが、長い歴史のなかで、無数の人々の血液、智恵、文化、社会が混じり合い、それらが見事に融合・調和して、より大きく発展し今後もそれが続く可能性を秘めながら、今日、子孫の我々と世界の人々の眼前にその姿を現しているからである。そこには、日本の人々はもとより、古来、アジアの諸々の人々の間の様々な対立、抗争、融和、同化の長い歴史的過程のなかで、膨大な時間をかけて形成し、洗練してきた雅の伝統の維持を皇室が核となって担ってきたことがあげられる。そして、集約された雅の文化を皇室とともに周辺広くすべての人々が育み、展開し、共に支えてきたという確かな多くの事実を見ることができるからである。

あとがき

朝鮮半島が日本の支配下にあったとき、日本政府は朝鮮民族同化のために、国家神道を半島に持ち込もうとした。即ち国家神道のための同格の官幣神社を百済の古都の公州に作ろうとする動きがあった。このことは、皇統に最も色濃く反映された百済王家の血統が遠くは扶餘族に遡る天孫の一系であると考えて、当時の歴史学者が承知のうえでこの計画を立案したようだ。証拠はないが、そう推測される。ただ、日本を創った人々と半島の人々の間に密接不可分の人的交流と文化交流が遠い昔に行われたことと、それがずっと継続していたことを率直に認めることの重要性を主張したかったからであろう。

古代の地域文化圏の境界の形成とともに、日本も半島も大陸も今の姿になったということを認め合うことが、相互の信頼を構築するための最も基礎となることを念頭に置いていたからである。そのような観点に立って、日本の文化を大きく認識すれば、これまで日本の歩んできた大局的な歴史の歩みを日本人は誇りをもって考えることができよう。もちろん、近代史における日本の国際情勢の誤った認識と実際の行動に深く反省しながらであるが…。

本書では、王家の血筋と祭祀という視点から言って、有力者達が果たした役割と後世への文化的影響については、古来の自然観と渡来文化の融合が常に前向きの価値観の変化と発展を促してきたことを述べてきた。すなわち、日本では特定の教義や主張に囚われず、自然を媒介とし、無心で道を求める心の宗教が終始変わらず大切であった。そして、日本の風土にあった万物に生命を感じ自然に生きる。その基礎に立つ神道の精神と仏教が融合した日本独自の神仏宗教がやがて、自然と心が融合した美しい高邁な精神性を生み、生活を通して日本の芸術を生んできたのであろう。

これは、遠く先史時代から脈打つ、自然の中で生きる伝統が人々の心の中で融合した結果であり、美しさを求める宗教の心が生活の基本としてずっと受け継がれてきたからである。そして、他の国には見られない寛容な日本人の宗教観や思想の原点を自然の中で生きる伝統や死者への配慮の中に確実に見出すこ

とができるからである。そこには熾烈な戦いがあってさえ、勝者・敗者を問わず、自らの世の安寧を、滅びた者とともに今生きる者として願う行動とそのための舞台が広く社会に常に認められてきたからである。

わが国では、九州から東遷してきた崇神大王が《ひのもと日下》を本拠とした古代国家として最も重要であった祭祀権をその発展過程で巧妙に取り入れ、これを核にして近隣の勢力を糾合して成長してきた。これが血の連続性と同義ともいうべき、王権と祭祀権を連綿として代々受け継ぎ、いわゆる万世一系に近い扶餘一系の形式を維持できた要因としてきたのであろう。それらの動向は物部氏の大きな影響力を背後に控えた歴史を踏まえたものとして扱った。また、近畿大和の王国と九州の倭国の連合とは中国の歴史書に従った二つの発展的国家としての記述を基にして、前者は倭国と同義、九州の倭国連合は、《邪馬台国》の周囲との連合と同義と考えた。それゆえ、いわゆる空白の四世紀の歴史については、拙著『夢路の倭の影』思うところを述べている。

本著はあくまでも私論を述べたものであり、歴史の概要は叱責を覚悟の上で素人が書き綴った未熟なものであることを断わっておきたい。すなわち、普通に考え得る本邦の歴史を、本分野で素人の著者が素直に納得できるように、長年考えてきたことを、時空の旅の中で考証しながら綴ったものであり、著者が見聞した遺跡や書籍などから得られた知識から新に抱いた疑問をもとに、歴史をさらに遡って考えながら、観点がが変わるにつれて、新しく章を書き加えたものである。

それゆえ本邦の悠久の文化の流れの中で、日本を支えてきた人々と独自の歴史観をもってその奥深さを見つめ、巧妙にまとめあげた先人に敬意を表しながらも、他方で記録を曖昧にした時期があったことへの不満からではあるが、事実への空想的な補足解釈を各所に添えての説明への許しを願うものである。

そうはいっても、象徴的に述べた歴史家の行動だけでなく、日本人ほど多くの異質の思想や文化を取り込んで調和を求め、消化吸収し、熟成した独特の文化をもつ国は類例がないし、実際に、世界の識者の瞠目するところでもある。顕著な例の一つに、漢字という中国の表意文字からカタカナ・ひらがなという二系統の表音文字を発明して、文化の根幹をなす文字として格段の表現力を身につけたことがあげられる。それに加えて、中国の古典を《書き下し文》としてあたかも自分の古典であるかのように訓読して、自らの文化に取り込むことに成功した日本人と日本語のもつ柔軟性と汎用性があげられる。このことは他の国や他の言語では必ずしもできなかったことであるが、言語体系の全く異なる本家の中国人が一様に驚くところでもある。

日本の歴史上の偉業を誇りに思い、古代に華開いた文化といまに続く芳香を、目を閉じて胸にいだくとき、先祖や神々には、祀りや供養を捧げることによって、いわゆる諸々の怨念からも解放され、久しくして周囲や後裔からも敬意をもって参詣を受け、自らも彼らとともに天上から巷の様子を観察できるようになることを人々に示しているし、彼らの子孫も生活の中でそれを肌で常に感じながらの、周囲とともに心安らぐ思いに浸れるのである。

ところで、話は若干異なるが、統一新羅、後三国時代、高麗王朝を経て、李成桂により新たに朝鮮王朝が樹立された。明帝国からは国号命名を巡って、しばらく正式な王朝としては承認されなかった経緯があるが、このころは、おそらく朝鮮半島では扶餘の一系の血脈による天からの支配権という考えはすでに薄くなり、明との関係から言っても儒教的発想の統治が主となり、脈々と続く日本の血脈重視の統治とははなはだ異なってきたことに考えが辿り着いた。

ところで、韓国では日本の天皇を《日王（イルワン）》とよぶ。これは永く中国の王朝は盟主として、周辺はもとより朝鮮半島に代々王朝が冊封されてきたからであろう。清王朝が衰退し、朝鮮に力が及ばない時期の到来時に、朝鮮王国が大韓帝国に改名呼称したのは、大日本帝国を意識したからであろう。これは日本が六世紀以後、冊封されていたわけではないが、立場上、清王朝の影響下にある朝鮮と同格であるはずとの見方からであろう。それゆえ、韓国から見れば、歴史的には日本は帝王の存在する帝国ではないし、朝鮮王国とは同格といえる隣国の日本王国なのである。従って、やや語弊もあるが、《頂点の天皇は朝鮮国王と同格の日本国王という主張になる。すなわち、日王である》というのであろう。一方、中国は王朝は交代してきたが帝国であり続けた。しかし、日本との支配・被支配または六世紀には冊封関係はなかったので、日本が王国ではなく、帝国で使われた帝王すなわち天皇を名乗っても現在の中国人には歴史上、実際上、感覚的に抵抗はないようである。

ところで、文中用いたすべての表現は、皇室や関係者、および海外の如何なる国を誹謗中傷するものではなく、素人が歴史を一人で学びながら、これまで、多くの人々によって繰り返し言われていたことをも含めて、これらを物語風に、主観を交えてまとめてみたのが本書であって、登場する人物は史実またはそれに類する人々であるが、その相互関係の部分に、著者の推測が入っている。し

たがって、史実に関する見解が一致しないことや、諸説あって、関連する朝鮮半島の王統が通説と異なっている部分があるのも事実である。これまでの一連の著述は『王家の祠』と『大海の都邑』『祀られた昔日』をもとに、歴史に素人の著者が普通に考え得る東アジアの歴史を、やや論理的に問題があっても感覚的に納得できるように、長年考えてきた私論の雑なまとめたものであることを改めてここで断わっておき、上梓するものである。。

執筆中に、膨大な《家系と本貫》の記録《族譜》の一部と墳墓に関する貴重な資料を目にすることができた。これらは、ソウル在住の全義明氏の提供によるものである。同氏とは米国在住時にともに学び四十五年を超えて今日まで親しく交わってきた仲である。その後、大明インフォテック社の社長という多忙の中にあって、扶餘や公州での調査の協力してくれた彼の好意に、心より感謝の意を表する。なお、種々の観点から本書の内容を議論していただいたソウル大学名誉教授の安秀桔氏に深く感謝したい。

最期に、本邦では諸々の文化的行事とともに、農業神事に象徴される人々の生活の最も重要な行事を日本国民に代わって、歴史の中で絶え間なく継続的に行なってきた敬愛する皇族の末永きご多幸を願うとともに、その核となった八百万の神々を祀る皇室の役割と、世界で類を見ない家系を維持・発展させてきた皇室の日本国民の中での在り方とその歴史に心より敬意を表して結びの言葉とし、そのなかで、独特の歴史と文化の維持の核としての皇室とその周辺、そして日本人が総体として果たしてきたことを静かに見つめ、本邦の発展を願って一連の書を終えることにする。

参照文献

若松秀俊　王家の祠　道理社　二〇〇五年

若松秀俊　大海の都邑　財形福祉　二〇一一年

若松秀俊　祀られた昔日　財形福祉　二〇一三年

古事記　岩波書店　倉野憲司校注一九六三年釈日本紀の引用による

「筑後風土記」逸文

古事記　太安万侶　七一二年、日本書紀　舎人親王　七二〇年、続日本紀菅野真道七九七年、新撰姓氏録　万多親王　八一五年、懐風藻　淡海三船　七五一年、日本後紀　藤原緒嗣　八四一年、続日本後紀藤原良房・春澄善縄八六九年、類聚国史　菅原道真　八九二年、凌雲集小野岑守　八一四年、経国集良峯安世　八二七年、万葉集、奈良御集、水鏡、伊勢物語などの記述によるものである。

古代謎の王朝と天皇　別冊歴史読本新人物往来社　昭和五十七年　東京

天皇陵と宮都の謎　臨時増刊歴史読本新人物往来社　昭和六十二年　東京

豊田有恒 海神の裔　集英社文庫 昭和五十八年

松本清張『清張通史２ 空白の世紀』講談社 一九七七

松本清張 清張通史４ 天皇と豪族 講談社 昭和五十三年

松本清張 清張通史５ 壬申の乱 講談社 昭和五十四年

松本清張 清張通史６ 古代の終焉 講談社 平成元年

永井路子 歴史をさわがせた女たち日本編 文春文庫昭和五十三年

永井路子 新・歴史をさわがせた女たち日本編 文春文庫　平成元年

永井路子 王朝序曲（上）（下）角川書店　平成九年

井上秀雄 古代朝鮮ＮＨＫブックス一七二昭和四十七年

司馬遼太郎 街道を行く２ 韓のくに紀行 朝日新聞社昭和五十三年

司馬遼太郎　歴史の中の日本　中央公論社　平成六年

田相淇 日本古代天皇は百済王の後孫である 知文社　平成十二年

曺昌淳・宋連玉共訳 韓国の歴史(国定韓国高等学校歴史教科書)

明石書店平成九年

小江慶雄 琵琶湖推定の謎 講談社 昭和三十九年

新潮社編 人物日本史古代戦国 新潮文庫 平成二年

宝月圭吾監修 要説 日本史年表 山川出版社 昭和三十八年

森本治吉　萬葉集　日本文學大成第三巻　地平社　昭和二十一年

万葉集日本の古典2 世界文化社 昭和五十二年
平安京日本歴史シリーズ3 世界文化社 昭和四十三年
梅原　猛 古代幻視　文藝春秋　平成九年
瀧浪貞子 日本の歴史五　平安建都 集英社版
杉本苑子 小説「檀林皇后私譜」（上・下）中央公論新社
金谷信之 古代史の中の姫君たち(小説)百済王明信 野中ふる道(百済王明信伝)
http://www.infonet.co.jp/nobk/hime/myosin.htm
しきしまの道 歴代天皇の墓所　http://www.d1.dion.ne.jp/~zpmasasi/index.html
枚方四季のプロムナード http://www.kanko.hirakata.osaka.jp/puromu4.htm
宝賀寿男 百済王三松氏系図に関する論考・史料紹介
http://users.hoops.ne.jp/shusher/hitori/kudaminakeizu.htm
相撲の歴史 http://www.dragoncity.ne.jp/~junkun/sumo/rekishi04.html
池田雅雄 別冊相撲秋季号『国技相撲のすべて』平成八年(加筆水野尚文)
河井秀夫『昴』散歩道 百済王神社と百済寺跡 第三十四号(平成十三年四月)
木村清幸 八郎潟東岸の古代製鉄遺跡と地名
江頭光 韓国歴史探褒訪（下）ふるさとの自然と歴史 歴史と自然をまもる会
平成二年四月第二一八号
金達寿 日本古代史と朝鮮 講談社学術文庫
金達寿 日本の中の朝鮮文化 講談社文庫
平安神宮・桓武天皇を祭る。http://www.heianjingu.or.jp/06/0101.html#01
北河内古代人物誌百済王明信 http://www.infonet.co.jp/nobk/kwch/myousin.htm
紀の国の古代史　古墳時代 http://www.kannavi.net/kinokuni/historykofun.htm
山形明郷　卑弥呼の正体　虚構の楼閣に立つ「邪馬台」三五館　二〇一〇年
姜吉云　倭の正体　三五館　二〇一〇年
井沢元彦　逆説の日本史一九九二年
西村亨　王朝びとの四季　三彩社一九七二年
直木孝次郎「古代国家の成立」「日本の歴史2」中央公論社
杉本苑子（「白馬」「天智帝をめぐる七人」）
里中真智子　天上の虹　講談社　一九八三年
遠山美都男　壬申の乱中公新書　一九九六年
井上友幸　新説日本の歴史，第十四弾　天智天皇の真相
井上秀雄　古代朝鮮　日本放送出版協会　一九七二年
江上波夫　騎馬民族国家中央文庫　一九八四年
水垣　久　やまとうた　二〇〇六年
http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/
梅原猛　隠された十字架　法隆寺論　新潮社　一九七二年
亀井高孝三上次男林健太郎 堀米庸三世界史年表・地図　吉川弘文館一九九五年
高句麗王家の後裔
日本書紀・続日本紀・新撰姓氏録などの記録から挙げた高句麗王族家系
高句麗国王・高麗氏・狛氏関連系図
高麗氏系図（背奈王系高麗朝臣系図）
高麗氏系図（高麗王若光系高麗神社社家系図）
高麗神社発行「高麗神社と高麗郷」記載系譜
狛氏系図（狛宿禰、南都方楽人系）楽人狛氏別系図
狛　人 高麗国須牟祁王の後裔（河内国未定雑姓）
狛染部 高麗国須牟祁王の後裔（河内国未定雑姓）
狛　造 高麗国夫連王の後裔（山城国諸蕃）

狛　首 高麗国人安岡上王の後裔（右京諸蕃）
大狛連 高麗国溢士福貴王の後裔（河内国諸蕃）
大狛連 高麗国人伊斯沙礼斯の後裔（和泉国諸蕃）

新撰姓氏録の渡来系氏族の記録から高句麗出身蕃別氏族とその拠点の一部

高田首、豊原連、福当連新城連、長背連、後部王、御笠連（大和国添上郡）、出水連（山城国相楽郡出水・薩摩国出水郡）、高史（畿内・出雲・相模・足柄）、日置造（出雲）、福当造（山城国相楽郡）、河内民首（河内国・和泉国）、王（安房国）、仍賜名長背王（山城国相楽郡）、難波連（河内国難波）、島岐史（河内国）、島史（山城国・摂津国）、狛首（山城国・関東・陸奥）、日置造（全国）、高安下村主（河内国）、黄文連（山城国久世郡）、桑原史（摂津国・山城国・近江国）、高井造（山城国・阿波国）、狛造（山城国・関東・陸奥）、八坂造（山城国愛宕郡八坂郷）、高安漢人（河内国高安郡）、日置造（全国）、鳥井宿祢（畿内）、栄井宿祢（大和国）、吉井宿祢（畿内）、和造（大和国）、日置倉人（大和国）、大狛連（河内国大県郡・若江郡）、島本史（河内国）、田村臣（山城国葛野郡）

『姓氏―その地名・家紋との関係』丹羽基二一九八〇
『朝鮮史』旗田巍 岩波書店一九五一
『韓国史新論』李基白、武田幸男訳 学生社一九七九
『古代朝鮮と日本文化』金達寿 講談社学術文庫一九八六
『日本古代史と朝鮮』金達寿 講談社学術文庫一九八五
『日本の中の朝鮮文化』（一―六）金達寿 講談社文庫一九八三―八八
『朝鮮と古代日本文化』座談会　中公文庫　一九八二
『古代東アジアの民族と国家』李成市 岩波書店一九九八
『青銅の神の足跡』谷川健一 集英社一九八九
『隋の煬帝』宮崎市定 中公文庫二〇〇三
『卑弥呼の正体 虚構の楼閣に立つ邪馬台国』山形明郷 三五館二〇一〇
『倭の正体 見える謎と、見えない事実』姜吉云 三五館二〇一〇
『渡来文化のうねり』李進熙 青丘文化社二〇〇六
『日本の歴史 王権誕生』寺沢薫 講談社二〇〇一
『日本の歴史 大王から天皇へ』熊谷公男 講談社　二〇〇一
『日本の歴史 平城京と木簡の世紀』渡辺晃宏 講談社　二〇〇一
『歴史のなかの人権』上田正昭、明石書店二〇〇六
『三国史記』一、二、三、四巻 金富軾・井上秀雄訳注 東洋文庫 平凡社
『新羅の神々と古代日本』出羽弘明 同成社二〇〇四
『白鳥伝説』谷川健一 集英社一九八六
『高麗神社と高麗郷』高麗澄雄 高麗神社社務所（初版は昭和六年）二〇〇二
『我が村の源流を探る』綾部弘　文芸社　二〇〇六
『図説和光市の歴史』和光市発行
『高麗氏・狛氏考)』http://www17.ocn.ne.jp/~kanada/1234-7-36.html
『倭の五王の謎』www2.wbs.ne.jp/~jpjr/nihonsi-1-4-3.htm
『新編姓氏家系辞書』太田亮（著）、丹羽基二（編）秋田書店一九九一
『新撰姓氏録』氏族一覧　北川和秀
http://homepage1.nifty.com/k-kitagawa/data/shoji.html
『新撰姓氏録』種別氏族一覧目次
http://www.oct-net.ne.jp/~hatahata/syoujirokumokuji.html
『南都楽人狛氏』http://iwarehiko.web.fc2.com/page085.html
『姓氏家系大辞典』太田亮八坂造氏系図 八坂神社社家系図参考
『ある武蔵武士の生活』新井孝重 高麗神社社務所二〇〇七
『日本人の霊魂観と国家神道』滋野佐武郎 文芸社二〇一二
フリー百科事典ウィキペディアの各種関連ＨＰ　その他多数の関連のＨＰ

著者略歴

若松 秀俊 一九四六年福島県生。一九七二年横浜国立大工学系大学院修了後、東京医科歯科大医用器材研究所助手、足利工大助教授、福井大工学部教授を経て、一九九二年より東京医科歯科大医学部教授、同大学大学院教授、二〇一二年より東京医科歯科大名誉教授。その間、沖縄県立看護大学大学院・文京学院大学非常勤講師。専門は生体機能支援システム工学。一九七三年～七五年ドイツ学術交流会奨学生としてエルランゲン・ニュルンベルク大学医学部バイオサイバネティクス研究所研究員、米国オレゴン州立大学、中国首都医科大学、南京航空航天大学、武漢地質大学などの客員教授・研究員。工学博士（東京大学）。

専門著書に「医用電子と生体情報」「医用工学」「救急医療のための機器システム」「新しい大学院教育を探る」「ナースのための遠隔情報管理システム」「バーチャルリアリティにおける力覚表示とその応用」などがある。

専門外のライフワークとして、教育界の偉人のカルシュ博士についての著書「湖畔の夕映え」「忘れ得ぬ偉人」「四ツ手網の記憶」、「縁の環」、「朝霧の瀬」、「Erinnerungen aus dem Viereckigen Tauchnetz」、また、歴史小説に「王家の祠」、「왕가의 사당」「大海の都邑」「祀られた昔日」「古代の移り香」「夢路の倭の影」がある。

麗しの古代秋津洲

2021 年 12 月 10 日　初　版

2023 年 11 月 15 日　第二版

著　者 …… 若松 秀俊

発行者 …… 若松 秀俊

千葉県我孫子市我孫子 4-40-2 7

印刷・製本…株式会社マツモト

福岡県北九州市門司区社ノ木 1-2-1